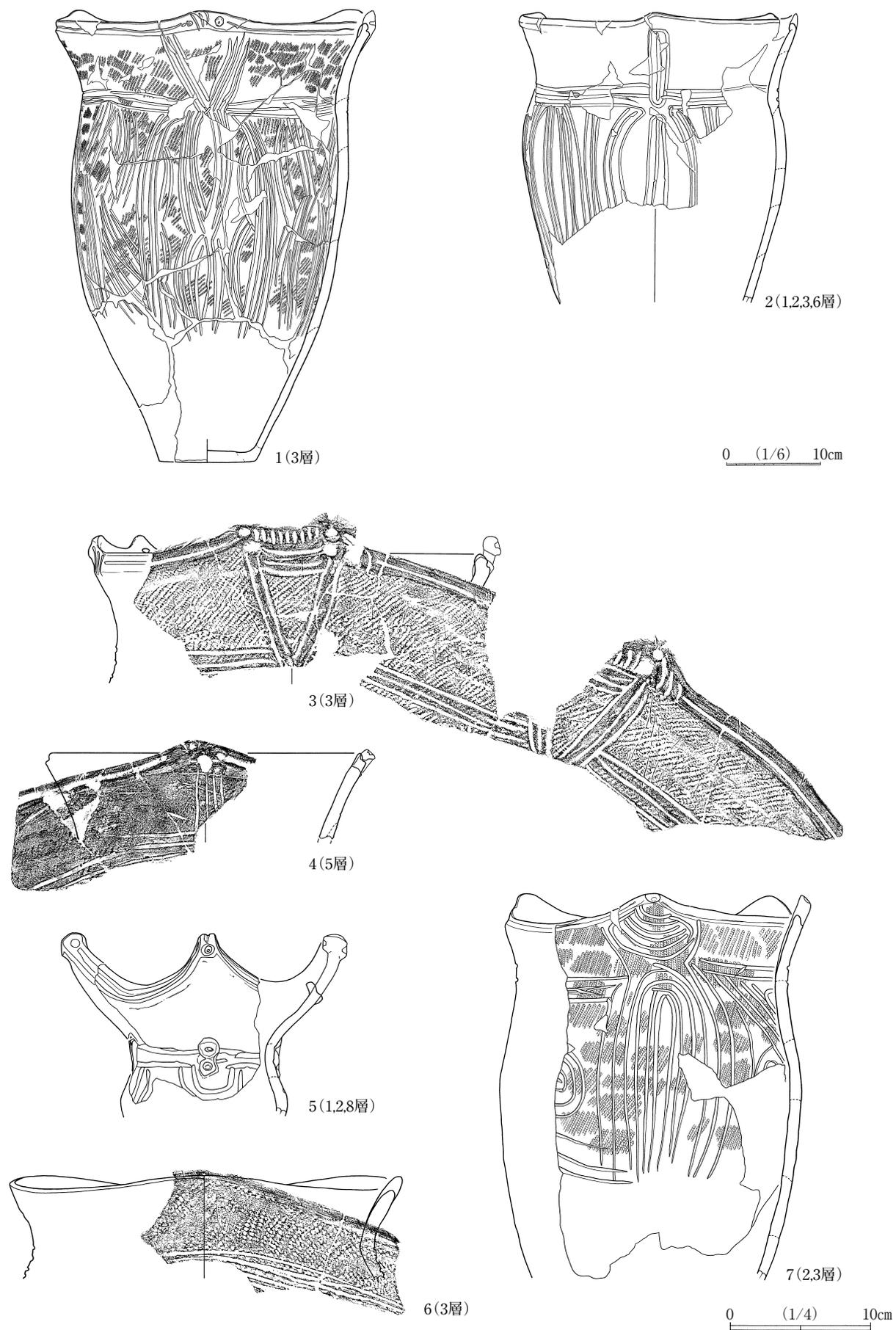
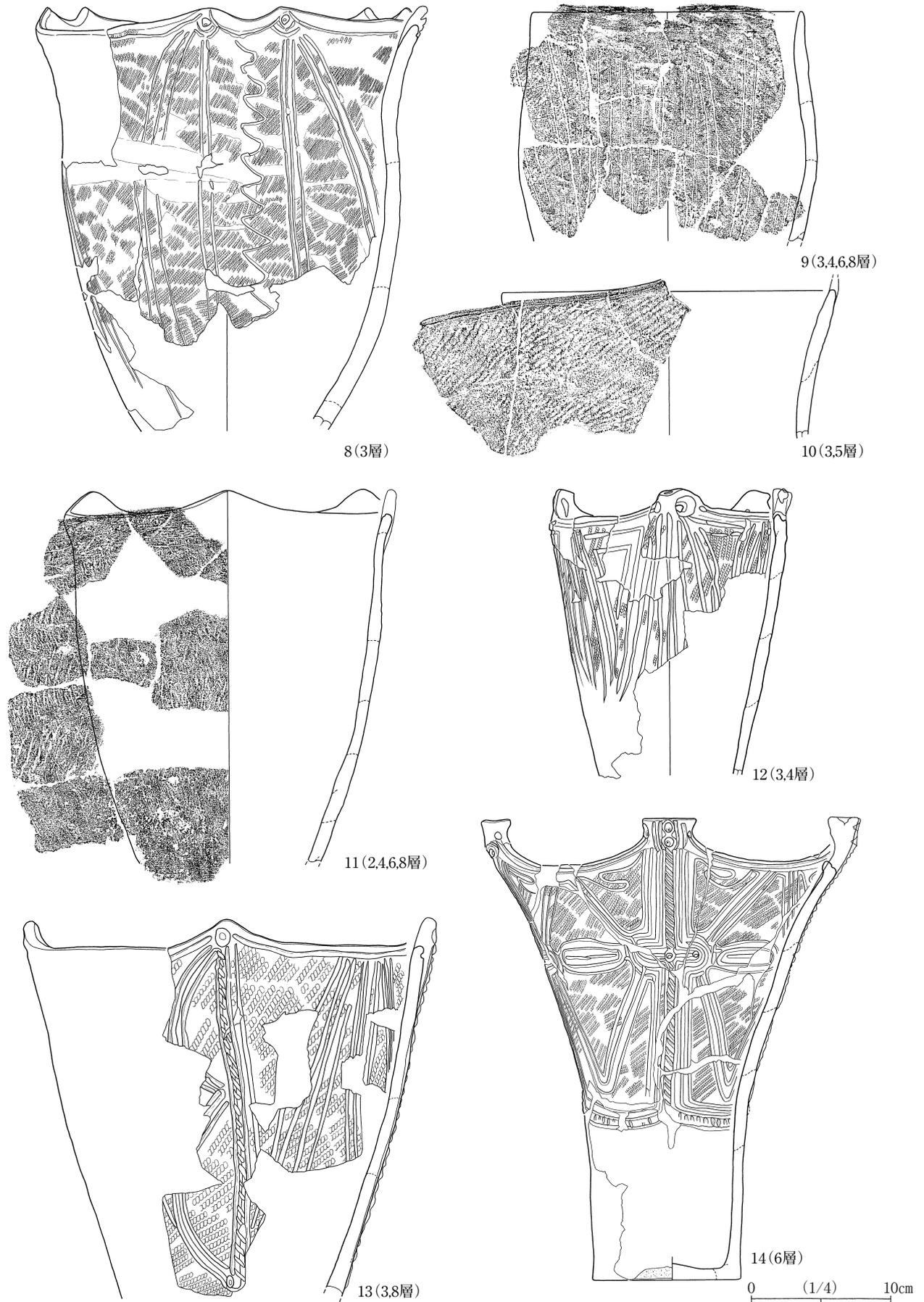


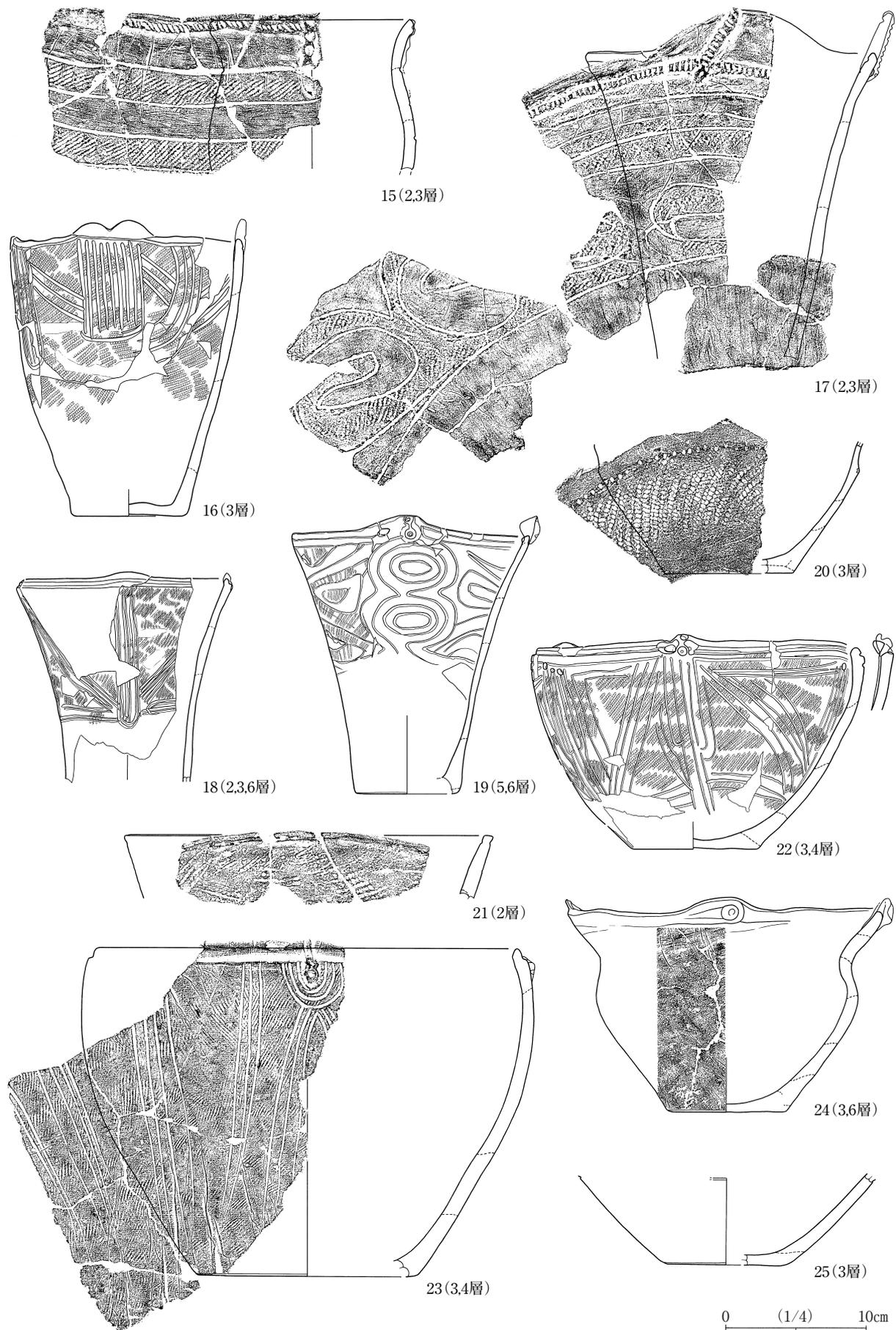
第125图 65号住居跡遺物出土状況



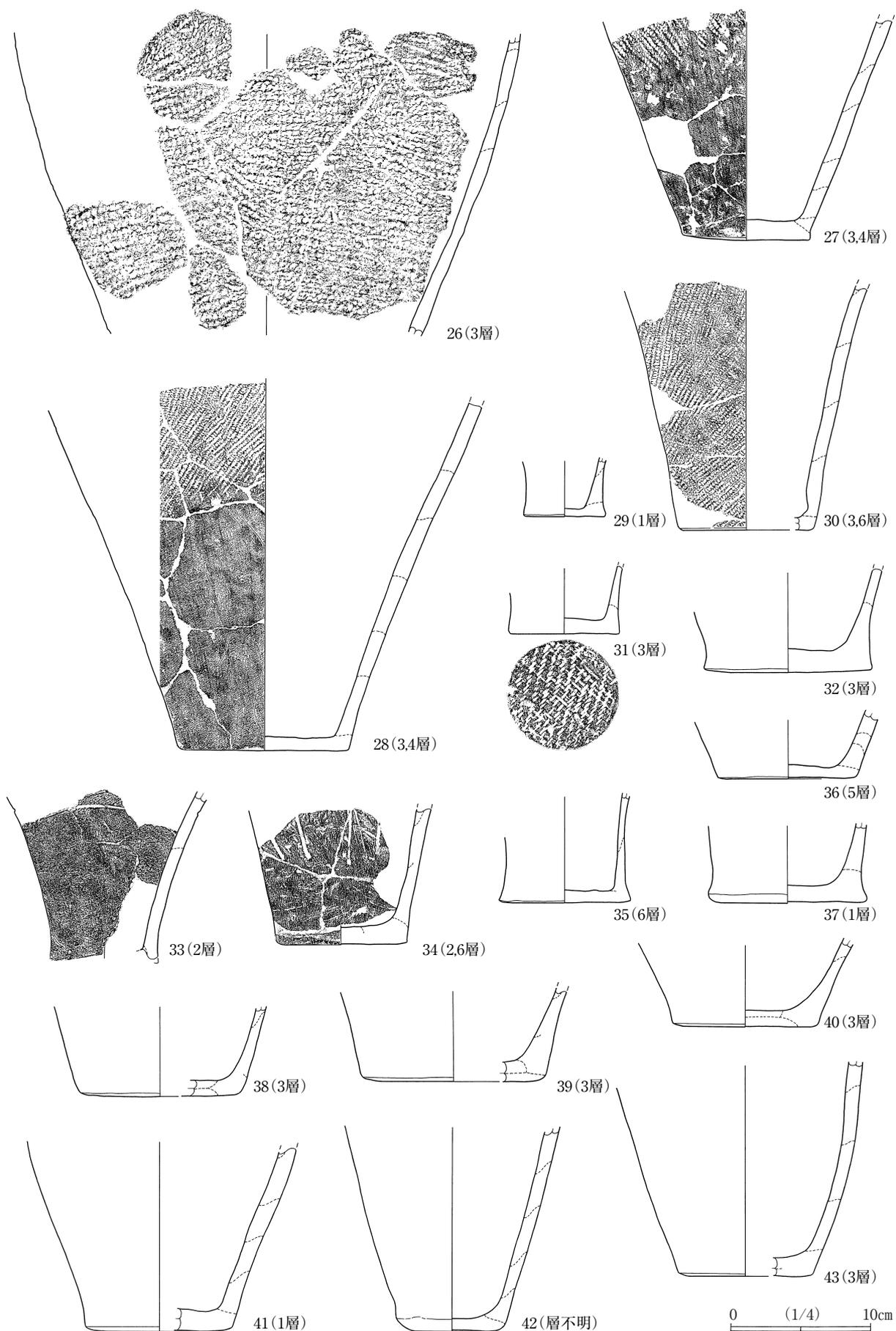
第126図 65号住居跡出土土器 (1)



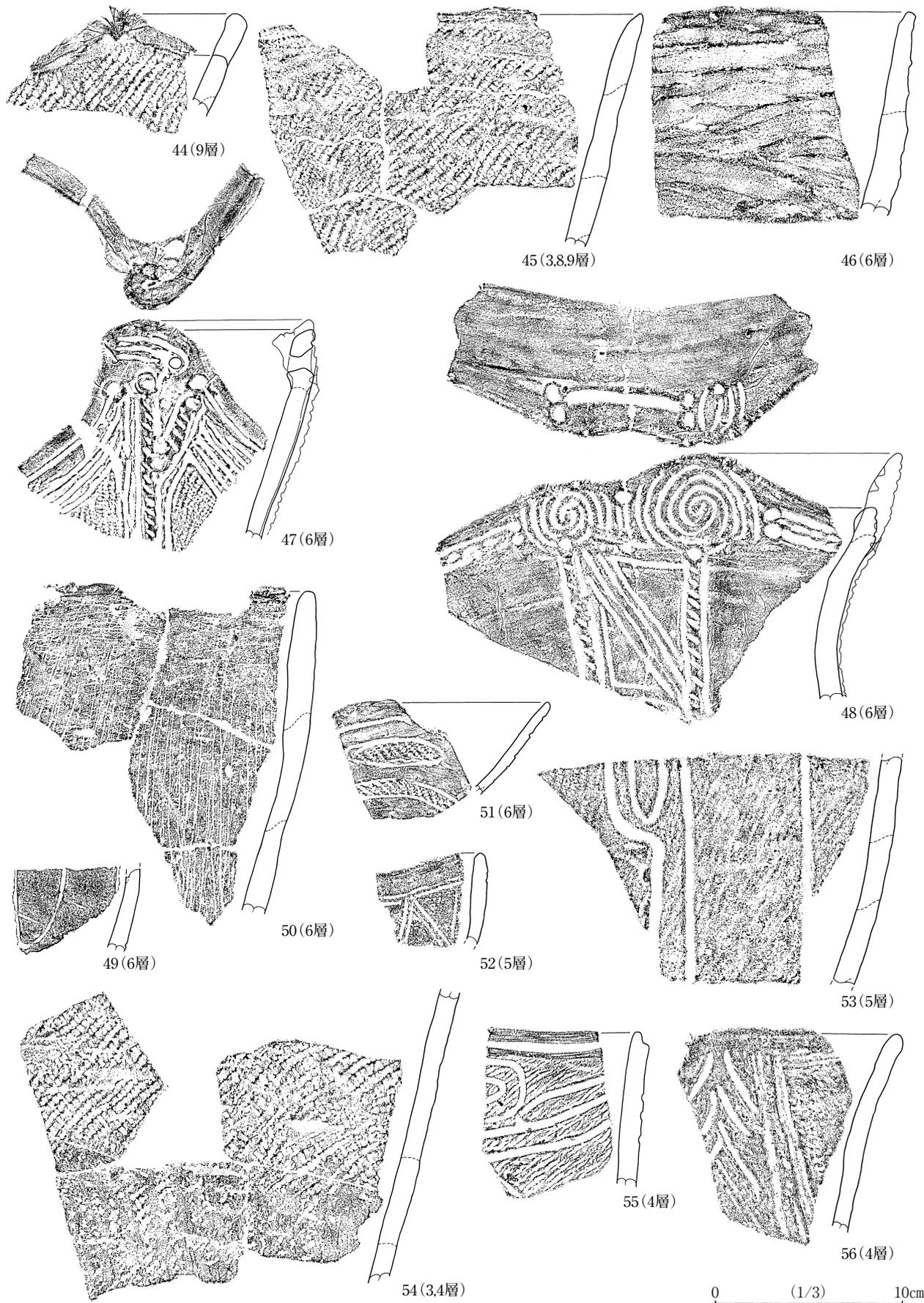
第127図 65号住居跡出土土器 (2)



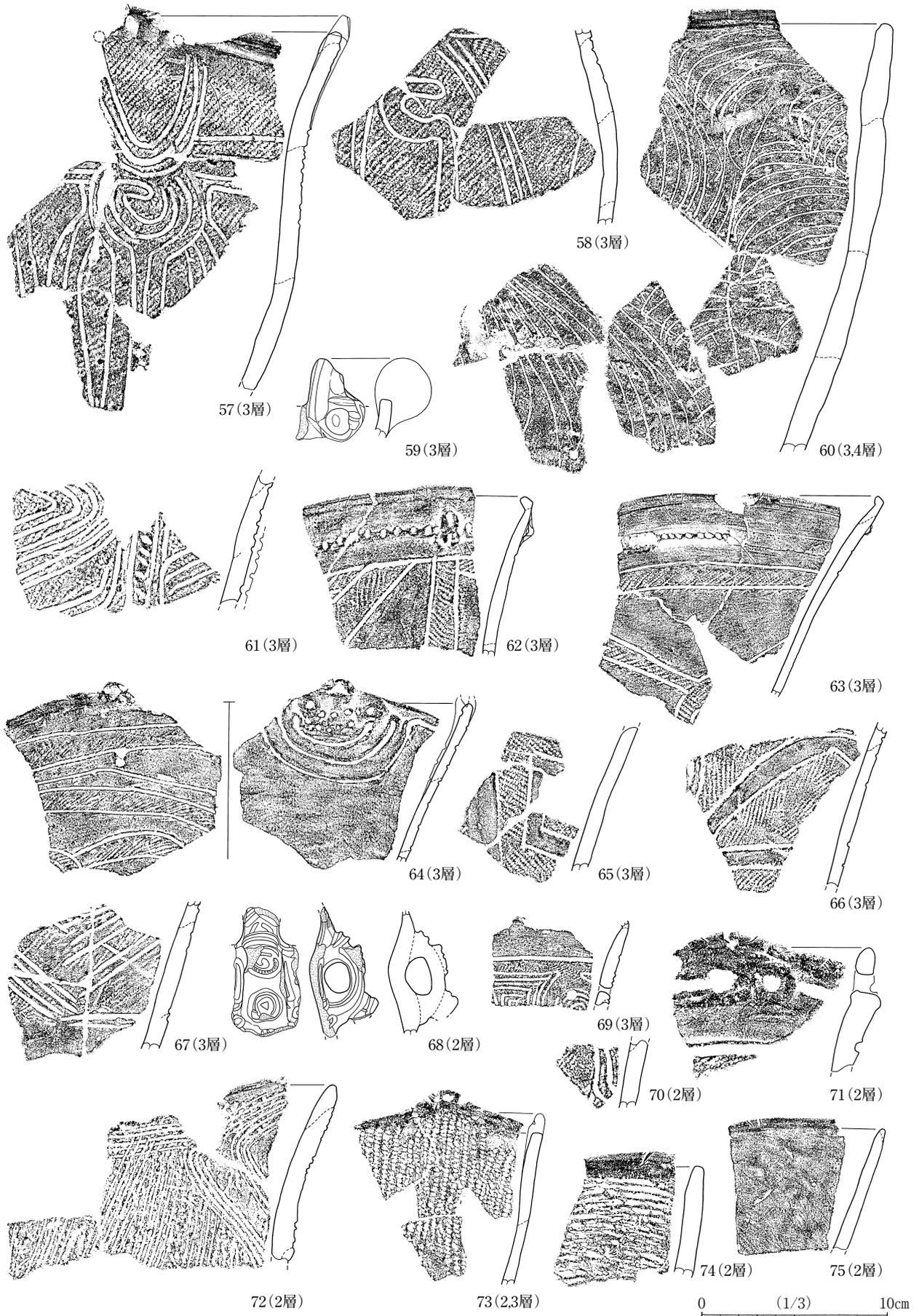
第128図 65号住居跡出土土器 (3)



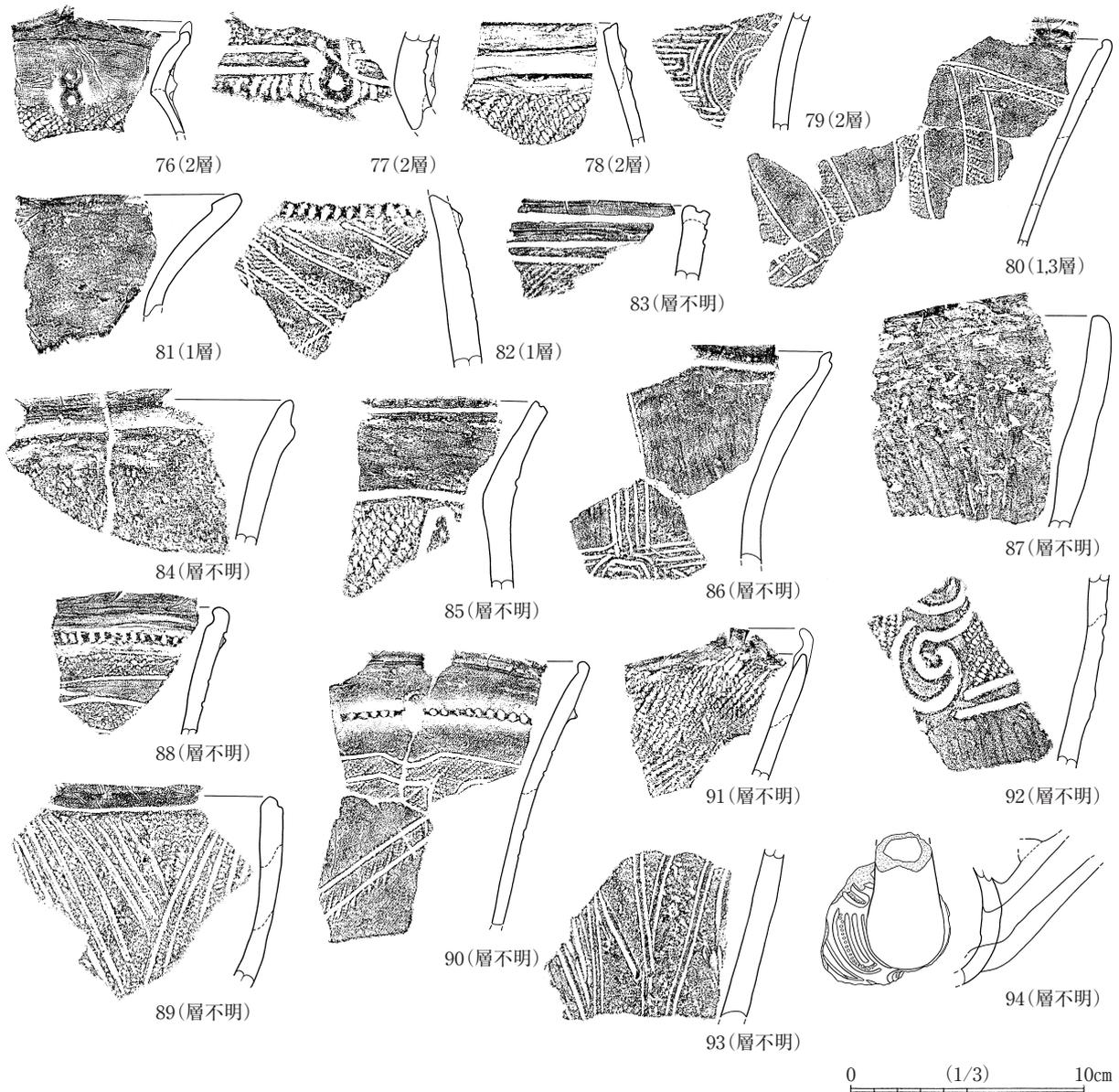
第129図 65号住居跡出土土器 (4)



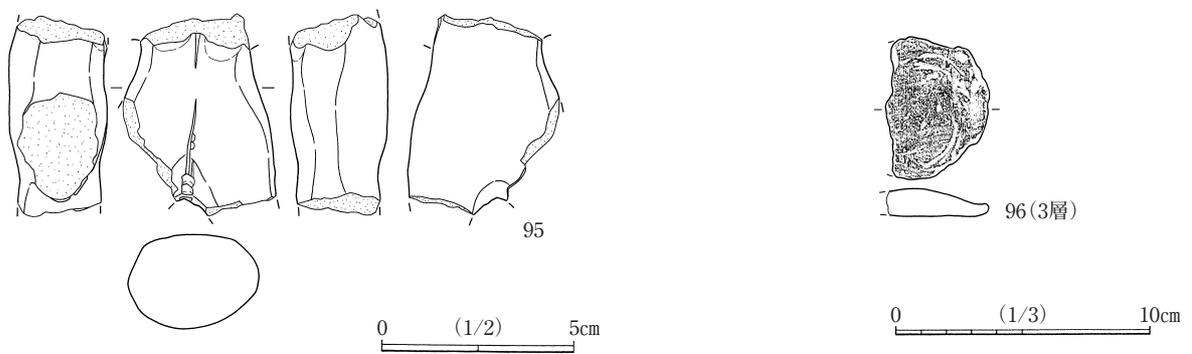
第130图 65号住居跡出土土器 (5)



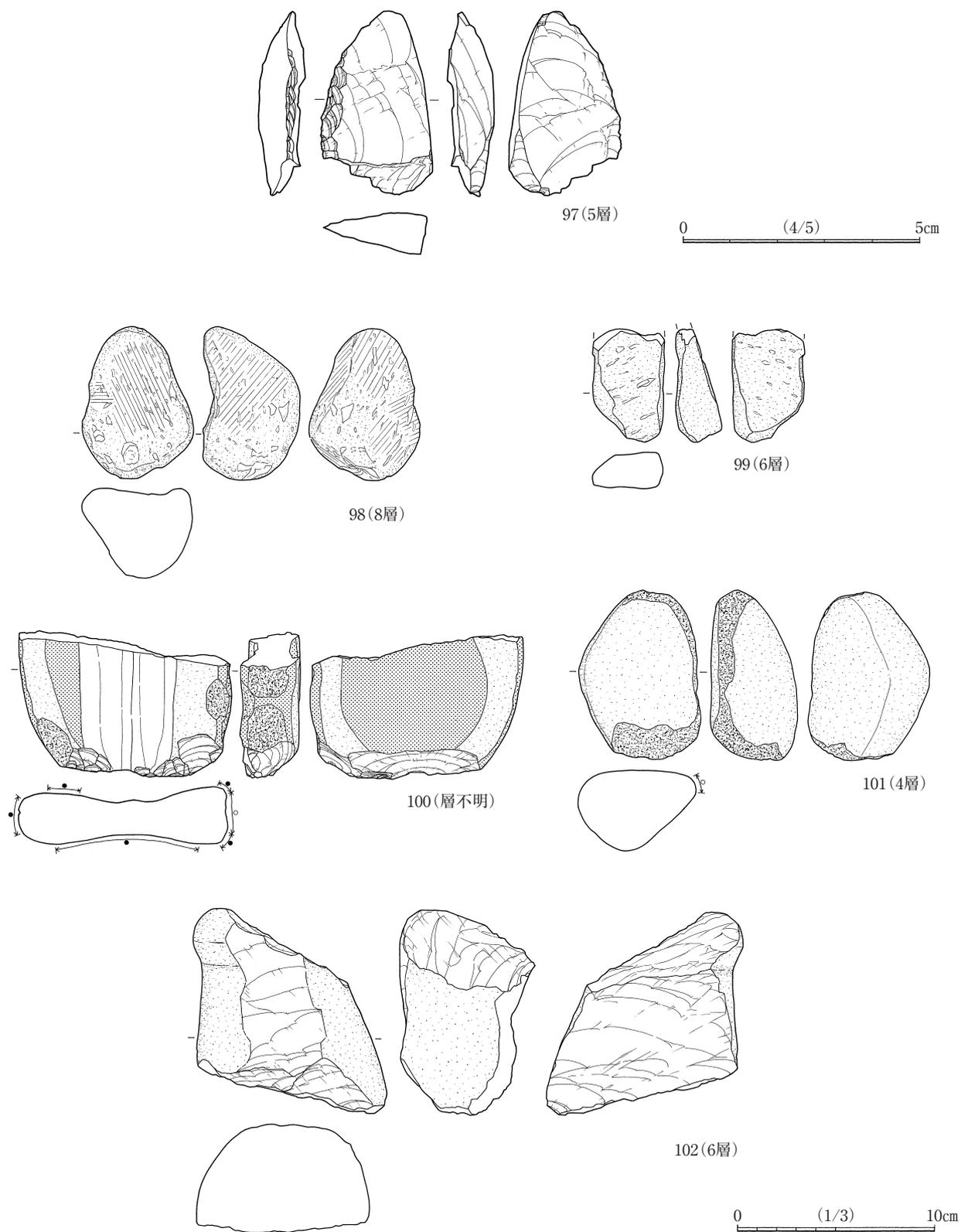
第131图 65号住居跡出土土器 (6)



第132図 65号住居跡出土土器 (7)



第133図 65号住居跡出土土製品



第134図 65号住居跡出土石器

従って土器型式順には必ずしも沿っていない。

1～43は器形復元したもので、1～16は堀之内1式である。1～8・11・15は頸部のくびれから口縁部が外反するもの。5は胴部に対し著しく広がる口縁部を持つ小形の深鉢で、頸部に8字貼付文が配される。11は無節縄文が横位に施されるものであるが、器面は磨滅が著しい。15は胴部に縄文帯と無文帯を横位に巡らせるもので、口縁部から1カ所指頭圧痕のある隆起線を垂下させる。9・10・12～14・16～19は頸部にくびれが無く、口縁が直立するか朝顔形に開くもの。17は大振りなカマボコ型の波頂部に、斜行する隆起線が貼り付けられるもの。19は図の左側のみに縄文が施される。20は胴部に屈曲を持つ浅鉢で、屈曲部に連続刺突が施される。24は胴部が無文の浅鉢である。44～94は破片資料である。46はヘラ状工具による横方向のケズリ調整が施されるもの。48はかなり大形の深鉢口縁で、複頂の波頂部にそれぞれ渦巻き文様を配し、その下に貼り付け隆起線を2本垂下する。60は沈線によって葉脈のような文様を描くもので、全体像は不明。64は堀之内2式の浅鉢の口縁部で、内面の文様がユーモラスである。同一個体がグリッドから出土している（第308図29）。68は注口土器の把手、94は注口部で、64号住居跡出土の把手（第113図57）と同一個体の可能性がある。69・79は64号住居跡出土の深鉢と同一個体である（第115図99）。76は小形の深鉢もしくは壺形土器である。78は内傾する口縁部に二条の微隆起線が配されるもので、壺形を呈するものである。

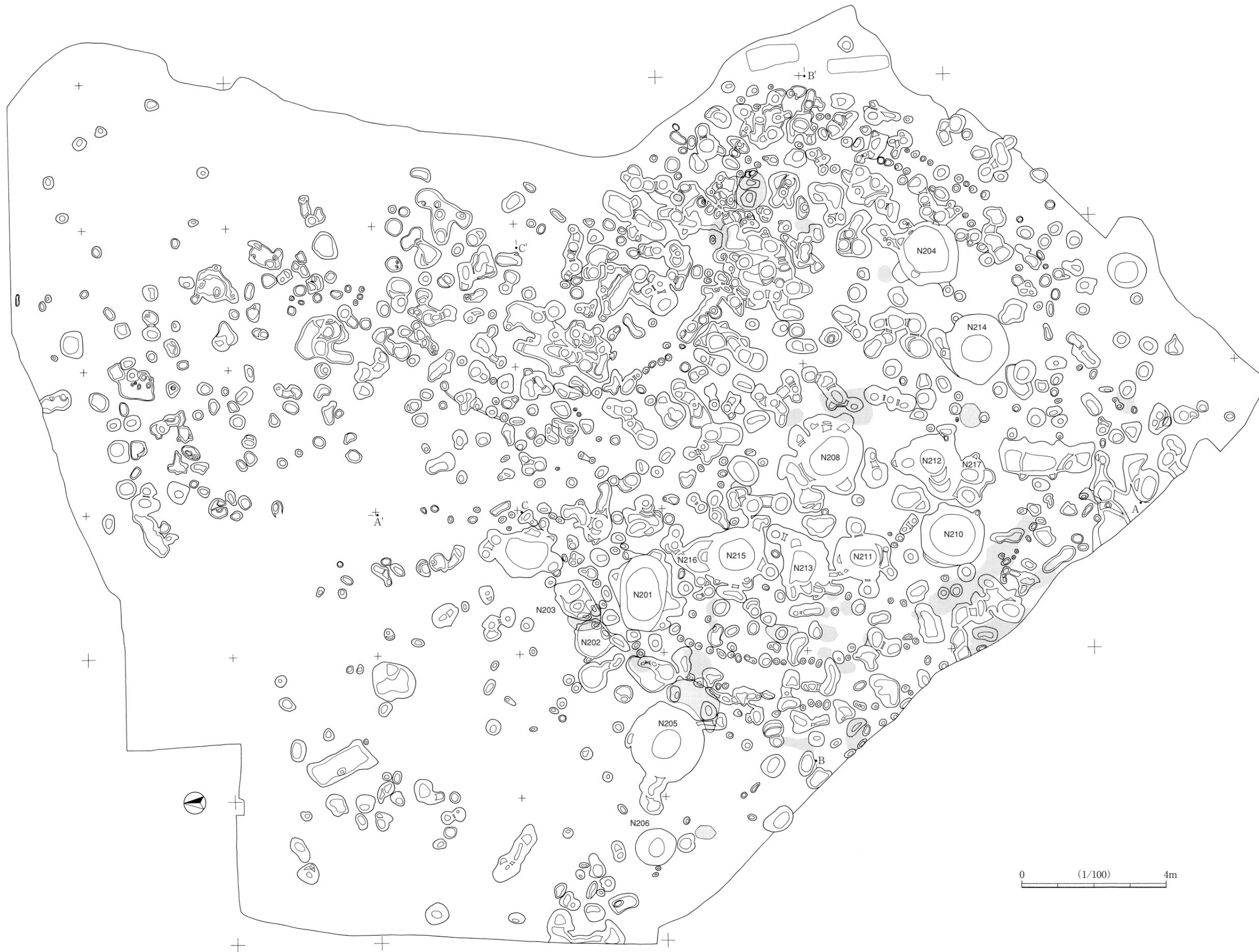
95は土偶胴部である。両脚および胸より上を失う。陰部に二組二対の刺突が施される。シンプルな造形は堀之内式の所産であろう。96は土器底部の周縁に打ち欠き調整が見られるもので、一応円盤とみなした。

土器に比べ石器は数少ない。97は断面三角形の剥片の鋭角を持つ側縁に二次加工を施すもので、製品製作の途中かもしれない。98・99とも表面に研磨痕が観察されるが、特に98は顕著で、鋭利で硬質なものを研磨したと思われる。100は表面に溝状の研磨痕がみられる砥石で、裏面も磨かれて光沢を放っている。側縁側は敲打痕が顕著に残る。102は破損して分かりにくいだが、頭部の成形などから石棒と考えられる。

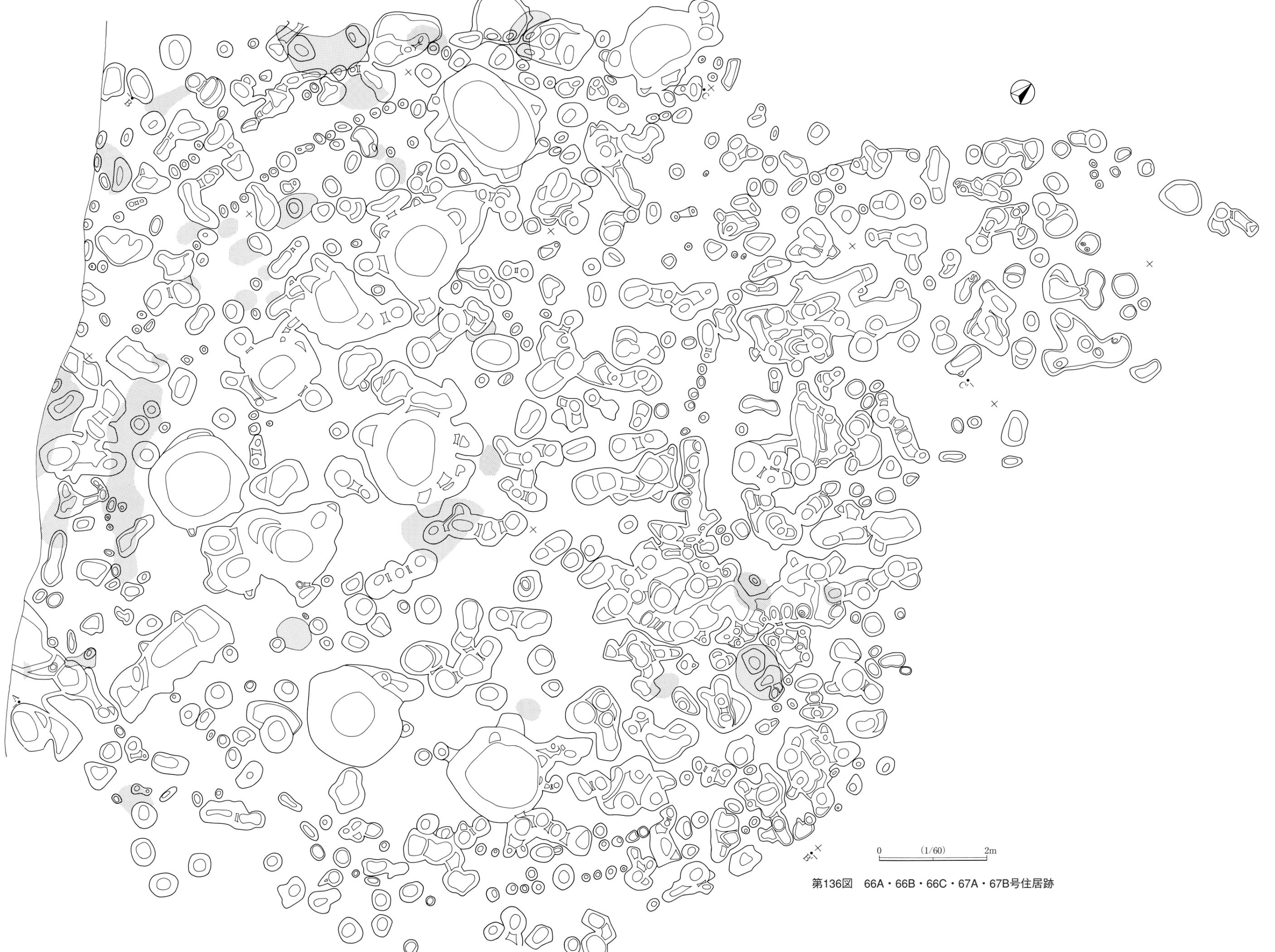
66～68号住居跡（第135～184図、図版6・45～61・97～101・104～108・110～113・151）

この住居跡群は、2次調査時のSS1調査区とされたエリアから検出されたものである。調査が緊急を要していたことや、一部を除いて遺存状況が悪かったことから、小グリッドに沿ったセクションベルトによる遺構の状況把握に主眼が置かれた。その結果、建て替えを伴う大形の住居跡が2カ所検出された。また、早期の炉穴や、後期後葉の遺物を多量に出土する小竪穴状の土坑、晩期中葉～末（弥生初頭）の遺物を包含する地点なども検出された。土坑や焼土など個別に実測が必要なものの以外は、調査区全体で航空写真による図化を行った。遺物はほとんどが、グリッド一括もしくは土坑・ピット一括で取り上げられている。平面分布は一括も含め、かなり詳細な記録やメモが残されている。その一方で垂直分布は不明なものが多く、相対レベルで記載されているものもある（「確認面上〇cm」といった形）。

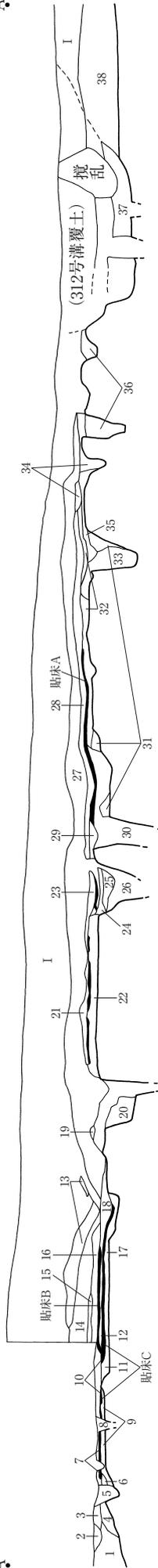
今回の報告にあたっては、大形住居跡についてそれぞれ番号を振り、建て替えられた住居については「A」「B」といったアルファベットで区別することとした。さらに整理作業を進めた結果、もう1カ所住居跡が存在すると考えざるを得なくなったため、さらに番号を付けて対応した。大形住居跡2カ所については、他の住居跡と同縮尺で第136図に示した。



第135图 SS1区全体图



第136图 66A·66B·66C·67A·67B号住居跡



- 1 焼土少量混じる暗褐色土
- 2 黒褐色土
- 3 焼土を混じる黒褐色土
- 4 焼土を少量混じる褐色土
- 5 木根
- 6 焼土
- 7 ローム粒、焼土粒を混じる暗褐色土
- 8 ローム粒、焼土粒を混じる黒褐色土
- 9 ローム粒、焼土粒を少量混じる暗褐色土
- 10 黒色土
- 11 ローム混暗黄褐色土

- 12 ローム粒、焼土粒混暗褐色土
- 13 黄褐色土 (ソフトローム状)
- 14 ローム粒子を若干混入する褐色土
- 15 焼土、ローム粒子を若干混入する黒色土
- 16 焼土、ローム粒子を混入する黒褐色土
- 17 ロームを多く含む黄褐色土
- 18 黒色土
- 19 黄褐色土
- 20 ロームを多く含む黒色土
- 21 黒色土
- 22 ローム、焼土粒子を若干混入する黒色土

- 23 黒色土
- 24 ロームを若干混入する黒色土
- 25 ロームを多く混入する褐色土
- 26 ロームを多く含む黒褐色土
- 27 ローム粒子を若干混入する褐色土
- 28 黒色土
- 29 ロームを多く混入する黒色土
- 30 ローム粒、炭などを含む褐色土
- 31 ローム
- 32 (貼床) ロームブロックを混入する褐色土
- 33 ロームを多く含む褐色土
- 34 若干のローム・焼土を混入する黒褐色土
- 35 ロームを多く含む若干の焼土・炭を混入する褐色土
- 36 ロームを若干混入する褐色土
- 37 ローム粒子を含む褐色土
- 38 黒褐色土

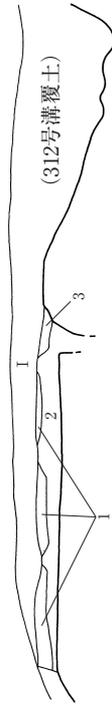
第137図 SS1区セクション



- 1 ローム粒子を混入する褐色土
- 2 黒色土 (ローム・焼土粒子を混入する)
- 3 黒褐色土
- 4 ローム粒子を多量に混入する黒褐色土
- 5 焼土粒、炭粒混入黒褐色土
- 6 ローム粒子混入黒褐色土
- 7 ローム粒子、焼土粒混入暗褐色土
- 8 ローム粒子混入黒褐色土
- 9 ローム粒を多く混入する黒褐色土
- 10 黒色土
- 11 ローム粒、焼土粒を混入する暗褐色土

- 12 褐色土
- 13 ローム層 (黄色土)
- 14 ローム粒、焼土粒を多く混入する黒褐色土
- 15 黒褐色土
- 16 明褐色土
- 17 ローム粒、焼土粒を多く混入する黒褐色土
- 18 焼土、ローム粒を多く含む褐色土
- 19 ローム粒を多く含む褐色土
- 20 焼土・炭を多く含む層
- 21 ローム粒を多量に混入する褐色土
- 22 焼土、ローム粒を含む褐色土

- 23 明褐色土
- 24 焼土粒を含む褐色土



- 1 黄褐色土
- 2 黒褐色土、ローム粒 (ブロック状) を多量に混入する層
- 3 ローム小粒子を若干含入する褐色土

出土遺物については、それぞれの住居跡に対応するように区別することは不可能であったため、全て一括で掲載した。土器の出土分布は第138図に示したが、SS1-64グリッドを中心とした部分に特に遺物が濃密に分布していたため、別に第139図に示した。土製品・石器は第140図に示した。

後期後葉の小竪穴状の土坑は、本来なら第2節で述べるべきところであるが、大形住居との関連が極めて強いと考えられるので、この節で説明することとした。晩期の遺物もここに掲載した。大形住居跡や土坑の終焉時期が確定できないため、関連してくる可能性があると考えたためである。ただし、1次調査で検出されたSN561やE4区晩期遺物包含地点と違って、炉跡やピットなど、明確なまとまりをもって遺構を構築すると思われるものは検出されなかった。

①66A号住居跡

SS1-45・54~56・64~66グリッドに位置する。N208・211~213・215号土坑に切られる。壁は検出されなかったが、柱穴の配置から平面形態はD次形を呈するものと思われる。北東側には出入口施設と考えられる溝状の柱穴列が認められる。規模は、出入口施設を含む主軸7.8m、副軸9.3m程度を測るものと思われる。出入口施設の向きから、主軸方位はN-137°-W程度を測るものと思われる。セクション図A-A'中の貼床Aが、この住居跡に対応するものと思われる。住居範囲内には多数の柱穴が見られるが、建て替えがなされたため、どの柱穴が本遺構に伴うものか捉えることはできなかった。床面中央には長軸1.4mを測る炉跡が見られる。

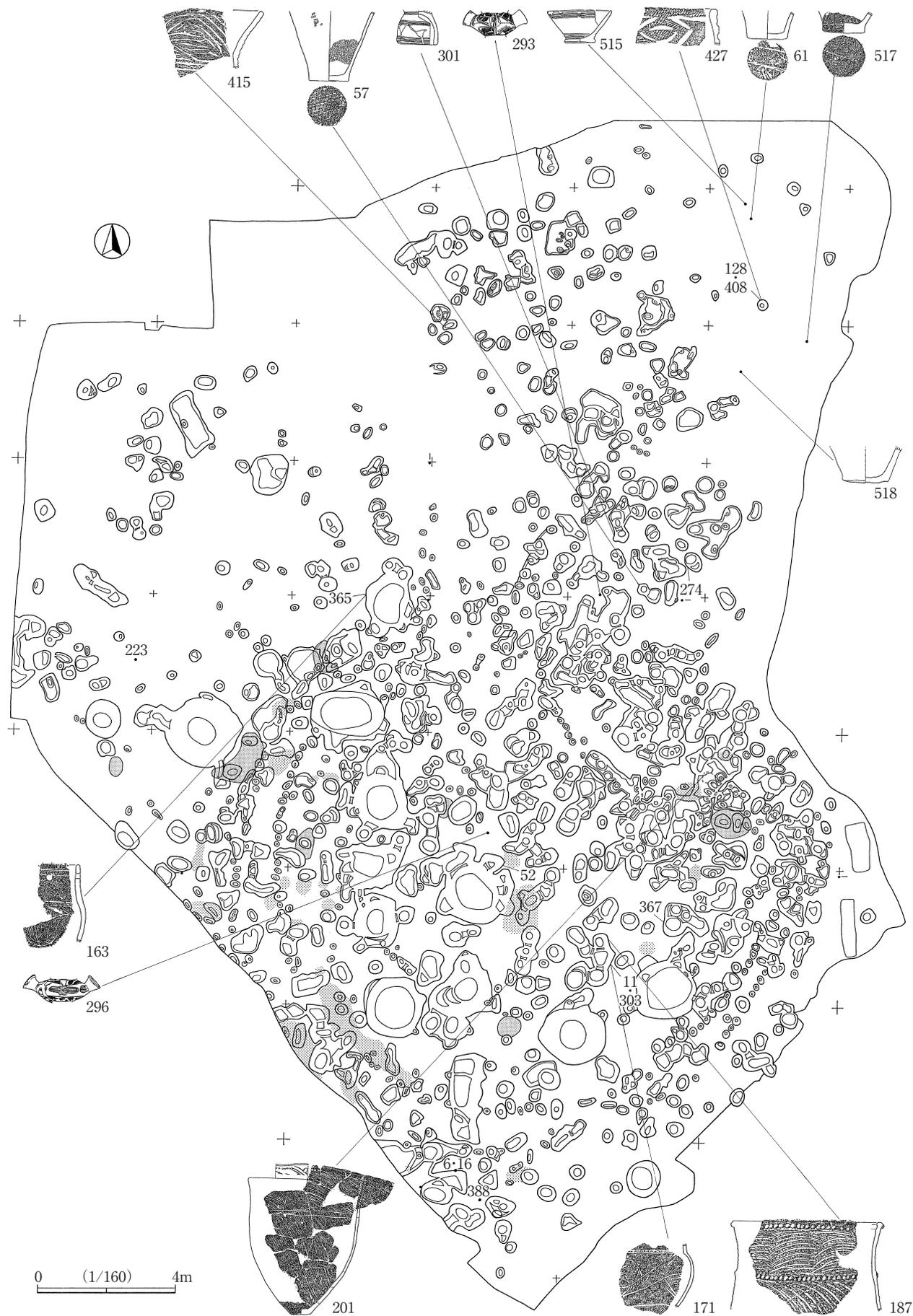
②66B号住居跡

SS1-45・46・54~57・64~67グリッドに位置する。N204・208・211~215号土坑に切られる。壁は検出することができなかったが、柱穴の配置から、平面形態はD字形を呈するものと思われる。北東側には出入口施設と考えられる溝状の柱穴列が認められる。規模は、出入口施設を含む長軸14.0m、短軸12.9m程度を測るものと思われる。主軸方位はN-142°-Wである。セクション図A-A'中の貼床Bが、この住居跡に対応するものと思われる。床面には多数の柱穴痕が見られるため、明確な柱穴の配置を認めることはできないが、壁柱穴が認められたほか、住居中央部には、深さ1mを超える主柱穴が円形に配置されるようである。床面中央には長軸1.4mを測る炉跡が見られるが、66A号住居跡に伴うものと思われる。

③66C号住居跡

SS1-44~47・53~57・63~67・74~77グリッドに位置する。N201・204・208・210~215号土坑に切られる。66B号住居跡とは出入口施設と出入口側の壁を共用する。壁は検出することができなかったが、壁柱穴の配置から、平面形態はD字形を呈するものと思われる。主軸方位は66B号住居跡と同じく、N-142°-Wである。規模は、出入口施設を含む長軸15.3m程度、短軸14.6m程度を測るものと思われる。セクション図A-A'中の貼床Cが、この住居跡に対応するものと思われる。柱穴は壁柱穴のほか、66B号住居跡に認められた主柱穴のやや外側に、主柱穴が円形に配置されるようである。

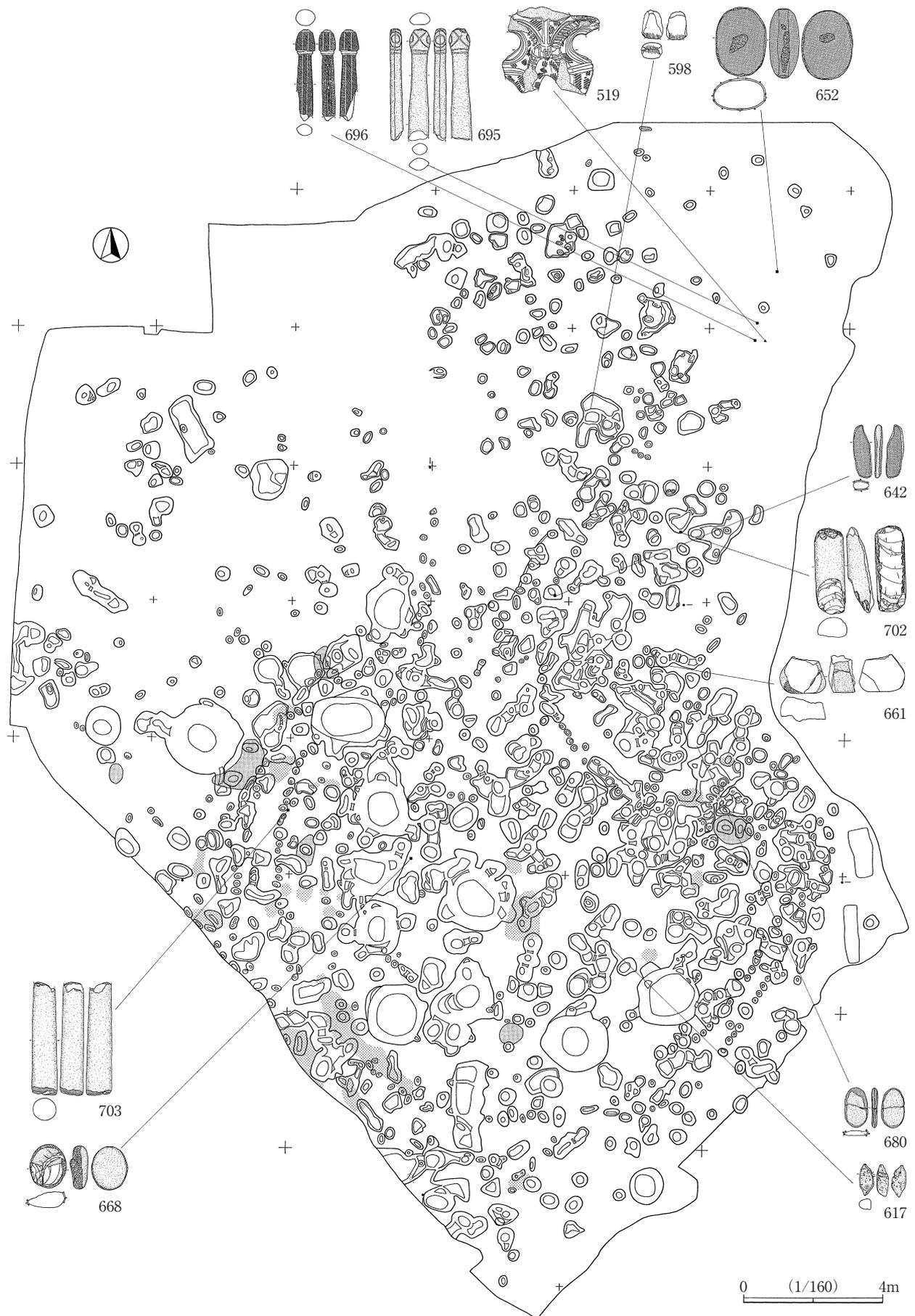
このように柱穴が二重・三重に巡る竪穴住居跡が検出された場合、拡張か縮小かが問題となるが、南北に縦断するセクションを観察する限り、最も上位レベルにある（すなわち、最も新しい）床面Aは、最も小さい66A号に対応している。同じ住居床面でも全面が貼り床になっているとは限らないし、後世の攪乱を受けた可能性ももちろんあるが、ここで検出された床面はそれぞれの柱穴列に対



第138图 SS1区土器出土状况 (1)



第139图 SS1区土器出土状况 (2)



第140图 SS1区土製品・石器出土状況

応していることも事実である。従って、最も下位から検出された床面 C は最も大きい 66C 号に、その上位から検出された床面 B はやや小さい 66B 号に伴うと考えられ、結果として順次縮小していった痕跡と考えられる（第 137 図参照）。建て替えの回数については、三重の柱穴及び 3 枚の貼り床から、少なくとも 2 回行われたことが確実である。

④ 67A・B 号住居跡

SS 1-35~37・45~47・56・57 グリッドに位置する。壁は北西側の一部を除いて検出することができなかったが、壁柱穴と思われる柱穴の配置から住居跡と判断した。柱穴が二重に巡っているため、最低 1 回の建て替えがあったとみなして A・B と分けたが、こちらも 66 号以上に遺存状況が悪いため床面や炉跡なども検出できず、拡張されたのか縮小したのかも不明である。66B・C 号住居跡の出入り口施設と重複しており、切られるものと思われる。住居東側は調査区域外に延びるため、平面形態や規模は不明であるが、円形を呈すると考えた場合、外側の B で径 10.9m 程度、内側の A で径 10.1m 程度を測るものと思われる。貼床らしきものも検出されているが、遺存状況は極めて悪かった。

⑤ 68 号住居跡

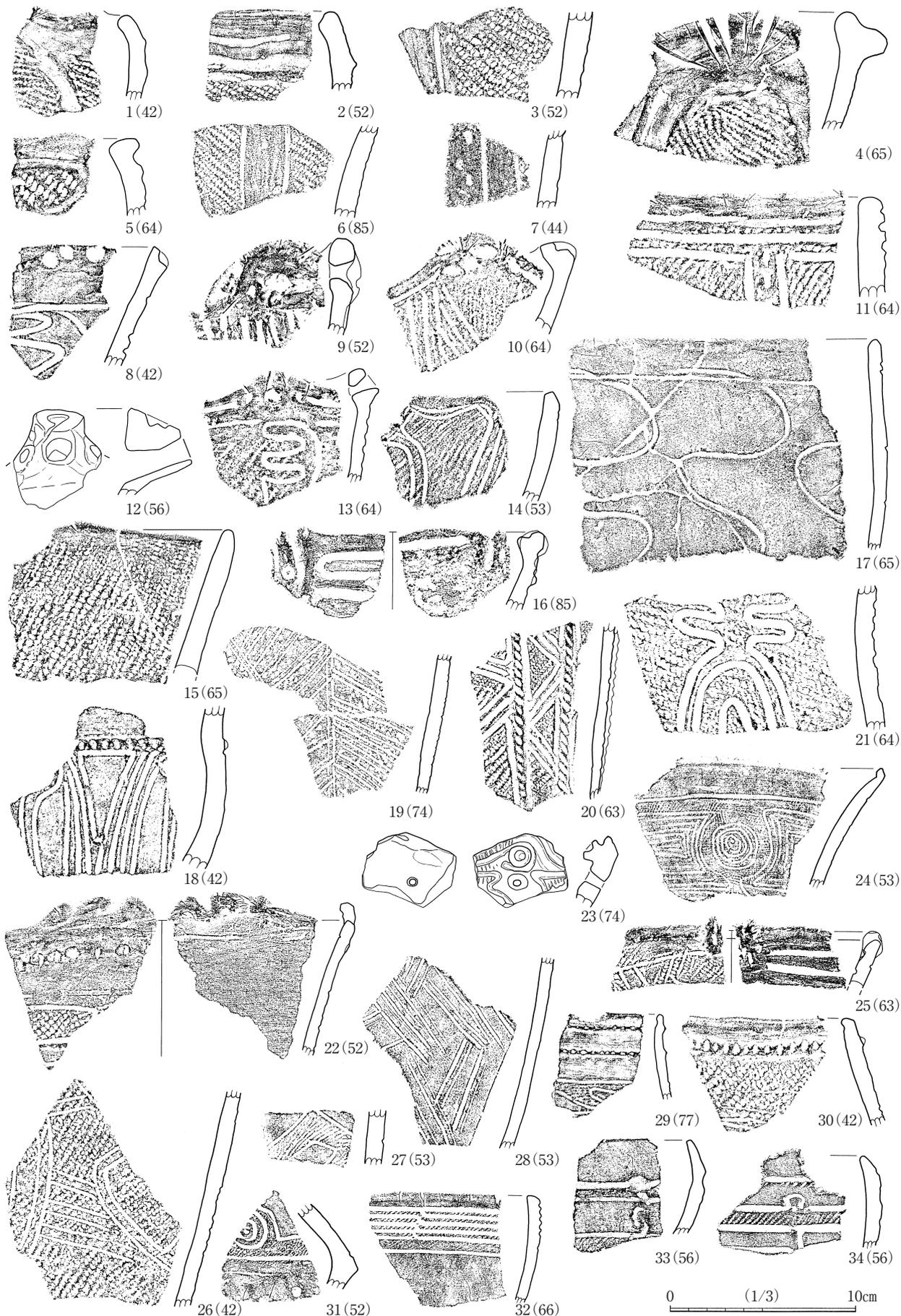
調査区の南西側に構築されたと考えられる住居跡。66B・C 号住居跡より古い段階の床面が検出されたため、もう 1 軒住居跡があるとみなしたものである。セクション図 A-A' で言えば、貼床 C の下に薄い覆土を介してローム面上に観察されるのがそれである。隣接する 5 次調査区から検出された 64 号住居跡の覆土には、加曾利 B 1~B 2 式期の貝層が堆積しており、それとの関係を考慮すべきかもしれない。ただし、床面以外は住居跡を構築すると思われる遺構を探すのは難しく、柱穴についてもそれらしいものは存在するが、この住居跡に帰属すると断定できるものはない。出土遺物についても、確実に伴うと断定できるものはない。

出土遺物

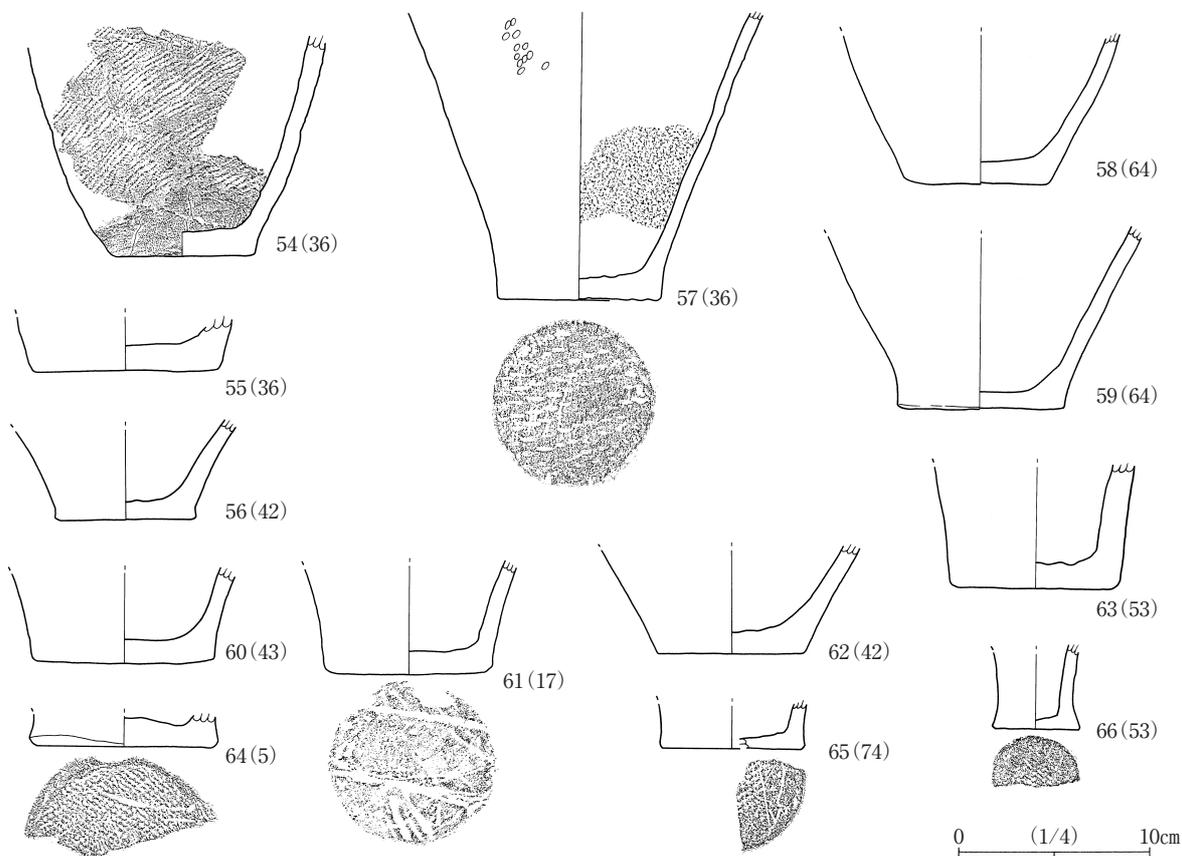
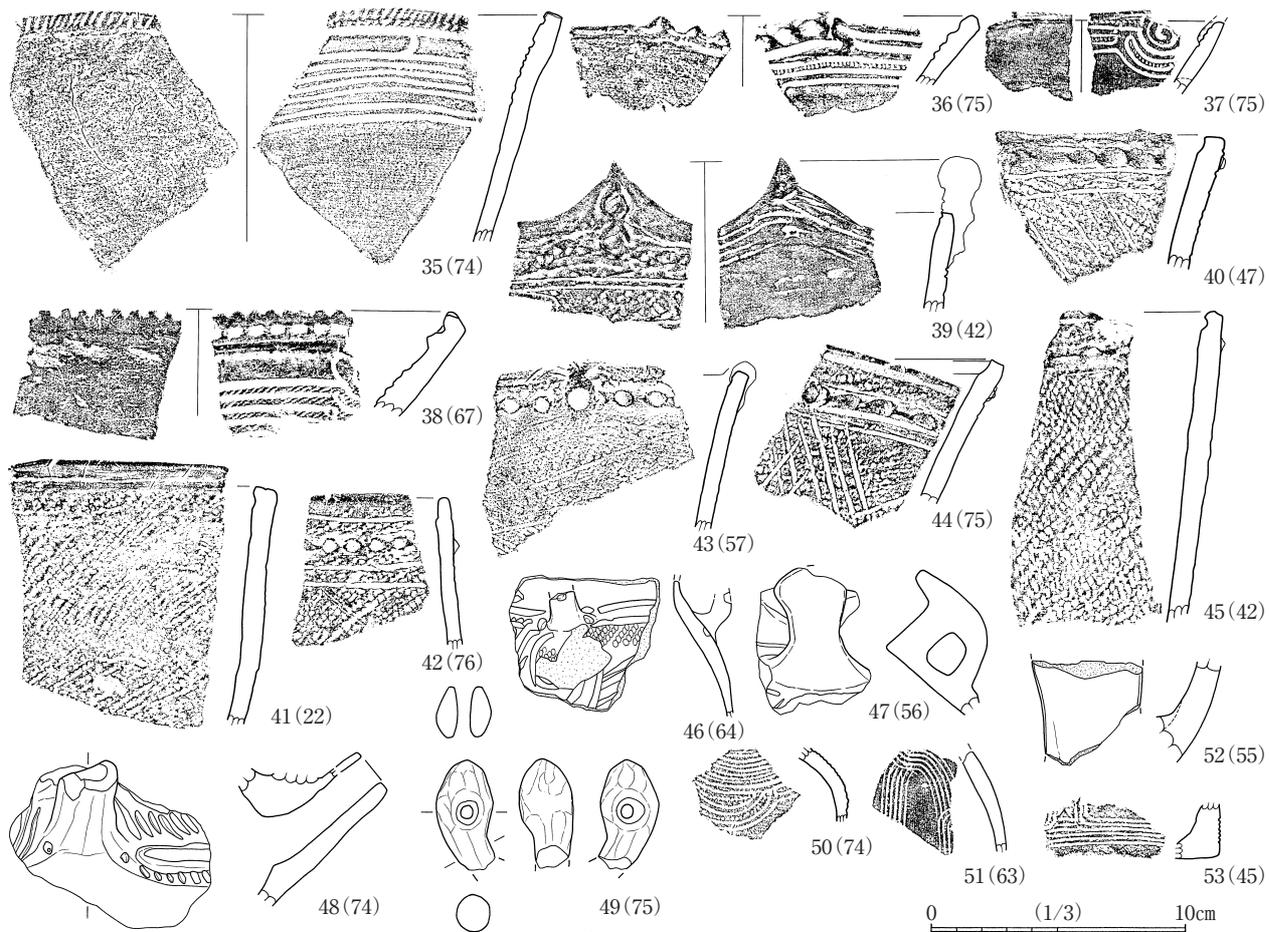
出土遺物は最初に述べた理由により、遺構にとらわれず並べている。なお、早期の遺物も出土しているが、それらは炉穴と併せて第 2 節に掲載した。遺物番号後の () 内には、出土した小グリッド番号及び土坑番号を記している。遺物の中には、グリッド出土と N 土坑から出土したものが接合した例があり、帰属をどちらにするかで迷ったものも多い。最終的に一括投棄に近いと思われるものや、大形破片が主体的に出土している方を優先させた。これらの資料のうちいくつかはすでに公表されており、本報告と異なる出土情報が掲載されているものもあるが、本報告が最終正式報告であると述べるしかない。個別の問題点については後述する。

1~6 は加曾利 E 式、7 は称名寺 2 式である。8~21 は堀之内 1 式で、12 は注口土器である。22~31 は堀之内 2 式、32・34~38 は加曾利 B 1 式である。17 は判断に迷ったが、ここに置いておく。39~46 は堀之内 2 式から加曾利 B 1 式期の粗製土器である。31・46~53 は堀之内 1 式から加曾利 B 1 式の注口土器である。48 は強い熱を受けていた。54~66 は概期の深鉢底部である。これらの土器はいずれも大形住居跡が構築される以前の遺物と考えられる。

67~400 は、大形住居跡に直接伴うか、関連が強いと考えられる資料である。時期で言えば、加曾利 B 2~安行 3 b が該当する。精製深鉢は、①波状口縁、②平口縁、③ソロバン玉形、④瓢形、⑤壺形他、の順に掲載している。67~70 は波状口縁深鉢である。68 のうち N210 号土坑から出土したのは



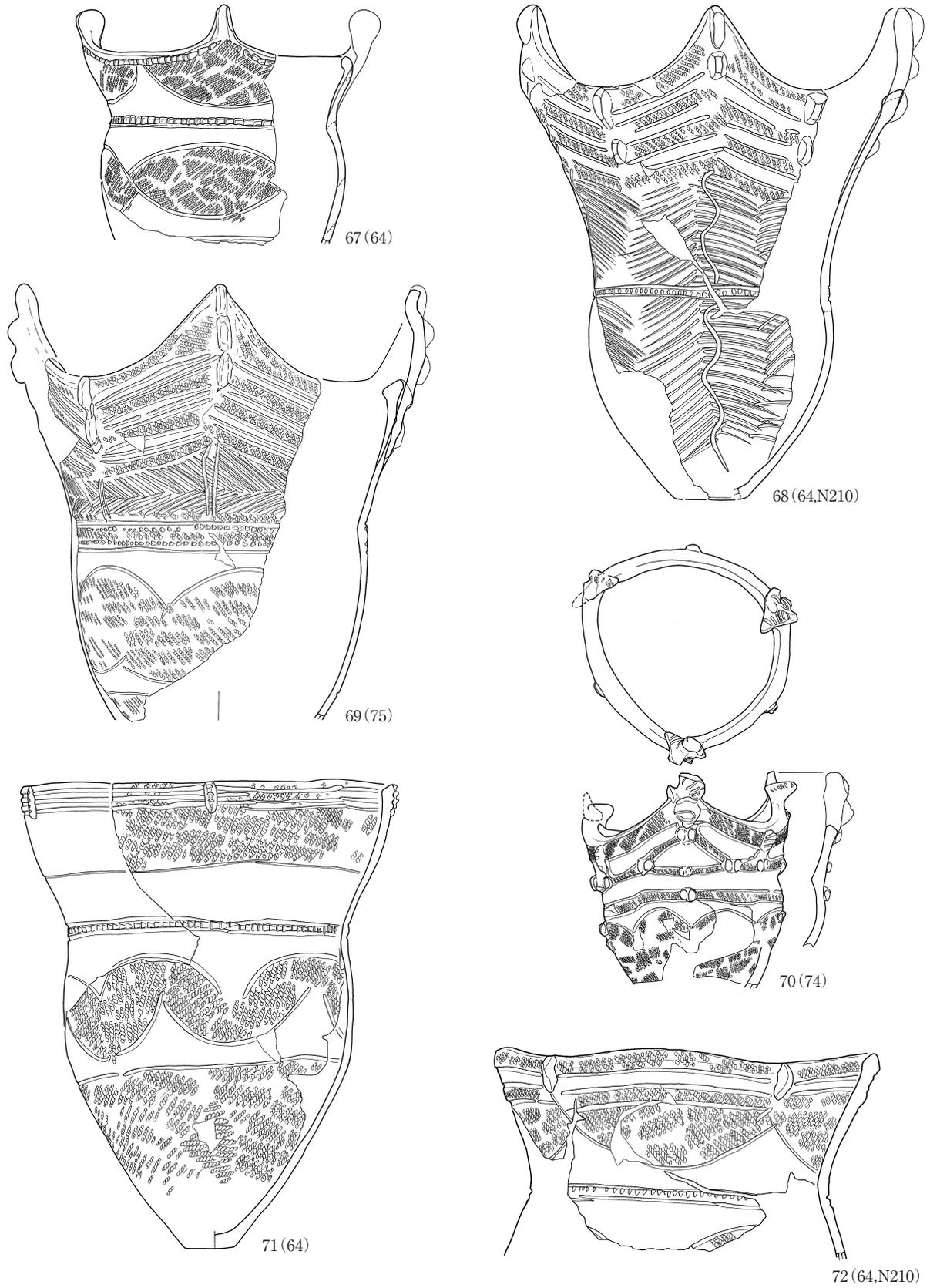
第141图 SS1区出土土器 (1)



第142图 SS1区出土土器 (2)

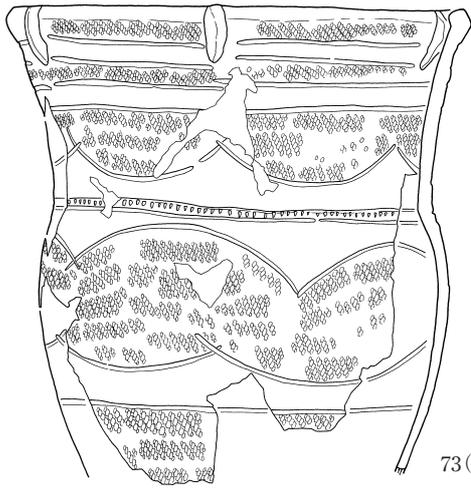
底部に近い部分で、胴部から口縁部はSS1-64グリッド出土である。70はほとんど唯一といって良い晩期前葉の深鉢であるが、残念ながら所在不明である。調査直後に作成されたと思われる実測図を掲載した。71~89は平口縁深鉢である。71は概報に出土状況の写真が掲載された資料で、この土器が大形住居跡の時期を示すものとされている。ただし、一部強い熱を受けており、発泡化していることは注意を要する。口唇部が内そぎ状に削り出され、3本の沈線が巡り、縦位の棒状の瘤が貼り付けられる。72は小波状を呈するもので、口縁部帯縄文と頸部連弧状磨消縄文との間が沈線で区画されるが、向かって右側はその沈線が省略されている。74は胴部のくびれの位置が高く、口縁がやや強めに外反する。76は口縁部が欠損しているが、連弧状磨消縄文が2段形成されているように見える。80は3段の口縁部帯縄文の下にさらに1段の縄文帯が巡る。81は胴部くびれの連続刺突の上側に、斜行沈線が充填された区画が配される。89はN204土坑出土の第187図3と類似する資料で、いわゆる安行式西広型と呼ばれるもの(大塚 1986)。90~105は瓢形土器である。98は口縁部と頸部、胴部くびれ部と胴部最大径部にそれぞれ刺突列が巡らされ、刺突がある瘤が貼り付けられるもの。安行1式でも後出的な要素が強い。106~186は精製深鉢の破片資料である。106~132は波状口縁、133~150は平口縁、151~163はソロバン玉形、162~183は瓢形、184~186は壺形である。107は赤彩土器である。122は69とよく似ているが、胴部くびれに2段の縄文帯が形成され、口縁部帯縄文と対応するように瘤が貼り付けられる。136は口縁部刺突列が3列である。140は帯縄文と無文帯との間の区画沈線がない。浅鉢かもしれない。158は胴部が屈曲するようにくびれ部に向かう形状を呈するもので、屈曲を境にいわゆる遮光器文が配される。熱を受けており遺存状況は悪い。161は赤彩土器であるが、ほとんど剥落している。163は小形の深鉢で、形は崩れているが瓢形とみなした。胴部に半截竹管による交互入り組み連弧文のモチーフが施される。184は壺形もしくは注口土器で、7次調査区貝層出土土器と接合した。胎土が他の土器とは異なり、東北地方に由来する搬入品とみられる。

187~227は粗製土器の器形復元資料である。187~191は貼付紐線文、192~200は連続刺突、201・202は沈線区画が口縁部と頸部にそれぞれ施されるもので、203~206は条線のみのものである。187はいわゆる遠部第三類型の範疇でとらえられる大形深鉢であるが、破壊後に強い熱を受けている。189以下の土器は、条線が先に施文され、紐線文もしくは刺突が後に施される。縄文はほとんど施されない。196は頸部の区画に縄文が施される。201は口縁の一部に刺突が観察される。胴部中位に2本一組の横位沈線が巡らされ、口縁からは同じく2本一組の縦位沈線が垂下されるが、いずれも条線間の磨消は行われぬ。202は同様の沈線が配されるが、こちらは沈線間の磨消を行う。204は胴部に最大径をもち口縁部がすぼまる、瓢形に類する形状の深鉢で、胴部くびれを境に羽状沈線を横位に2段配する。205は胴部くびれの無文帯をはさんで口縁側と胴部側に斜行条線を施す。これはSS5区出土土器と接合した。228~285は各種粗製土器の破片資料である。228~231は横位沈線もしくは紐線文によるもので、231は壺形を呈すると思われる。232・233は格子状沈線、234は格子状条線とでも言うべきものである。235~241は縄文地文のもので、紐線文や条線が組み合わされるものも含めている。これらは少数派で、後期中葉を主体とする。242~257は縄文が施されないもので、紐線文と条線が組み合わされる。257は半截竹管による刺突であるが、口唇部の成形法は紐線文の技法によっている。これらは後期後葉を主体とし、一部晩期前葉まで含まれる。258~265は連続刺突が口縁部と頸部に施されるもので、縦位条線を基本とする。267は胴部中位及び口縁部間に2本一組の沈線を配するもので、沈

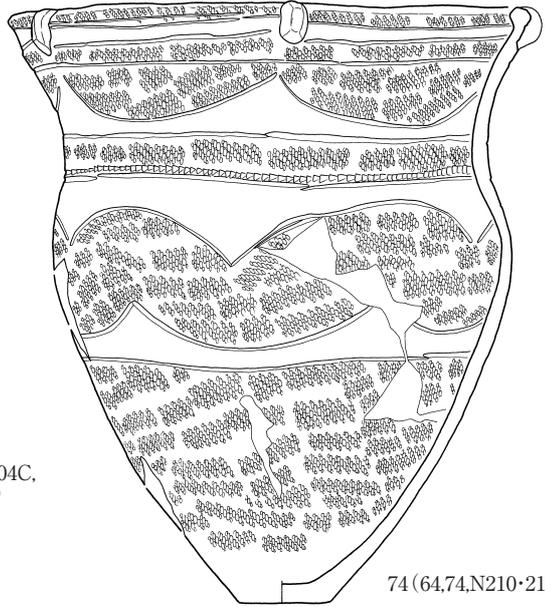


0 (1/4) 10cm

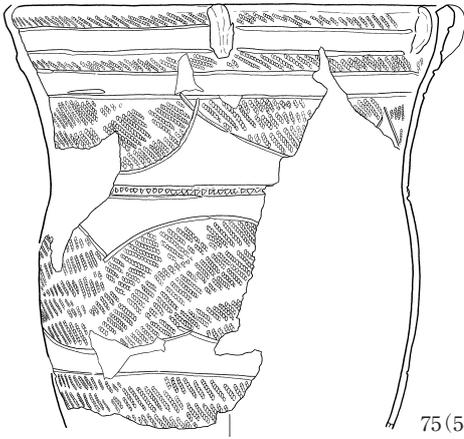
第143图 SS1区出土土器 (3)



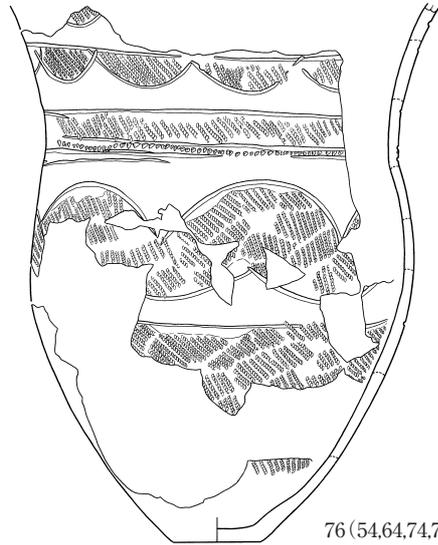
73 (54.64.75.N204C, N210,N217)



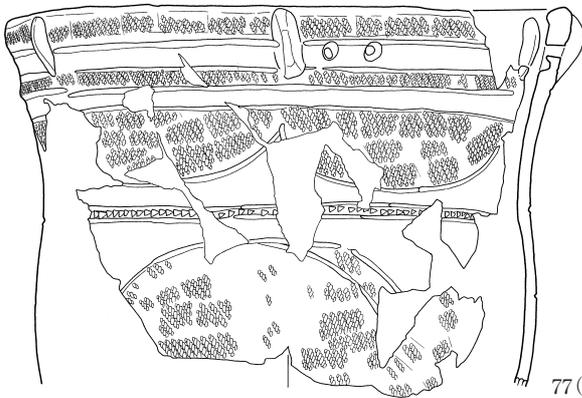
74 (64.74.N210-211-213)



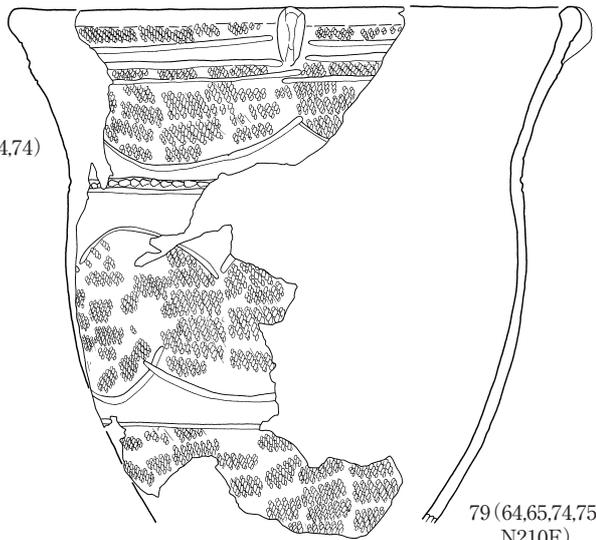
75 (54.N213)



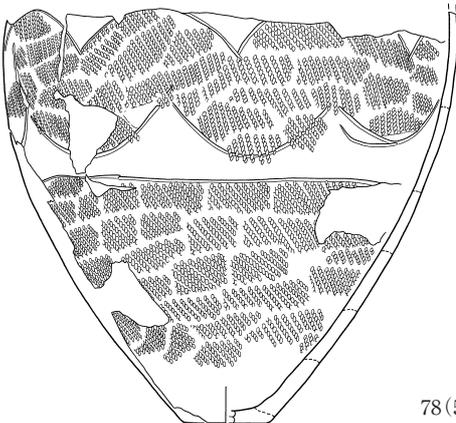
76 (54.64.74.75.N219)



77 (54.74)



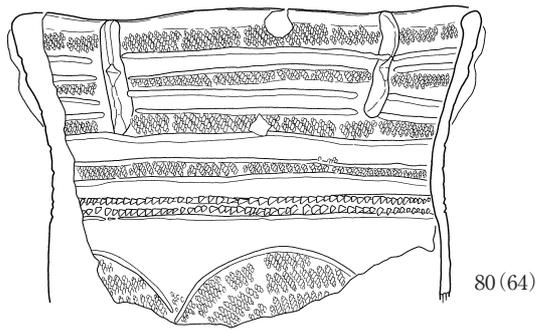
79 (64.65.74.75 N210E)



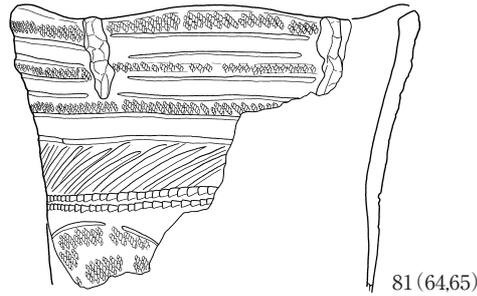
78 (54.64.74.N213)

0 (1/4) 10cm

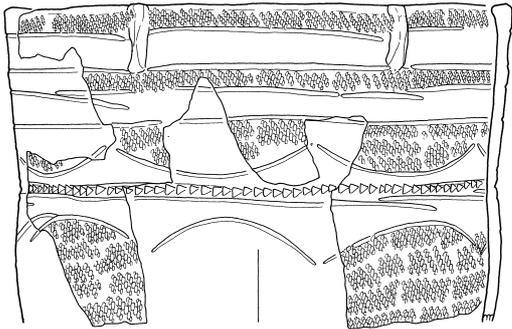
第144图 SS1区出土土器 (4)



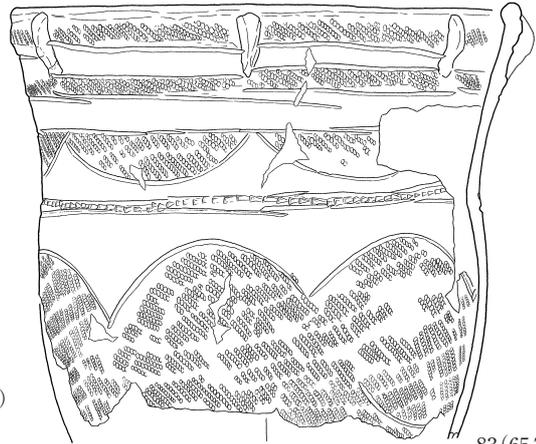
80 (64)



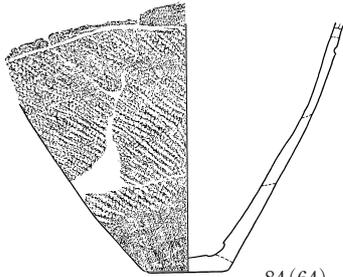
81 (64.65)



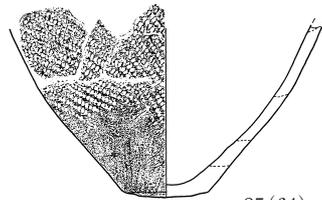
82 (64.N204·215)



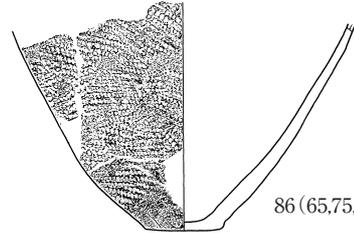
83 (65.74)



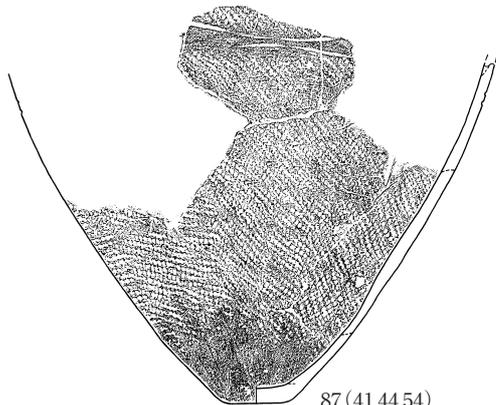
84 (64)



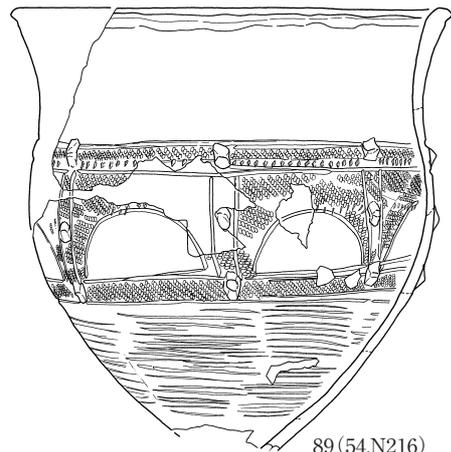
85 (64)



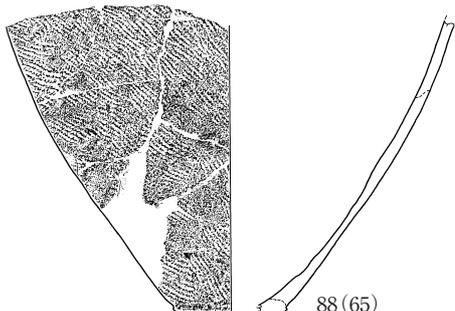
86 (65.75.N204C)



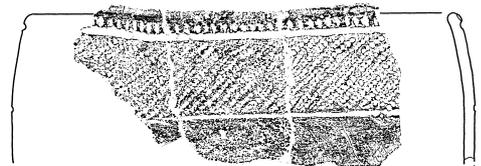
87 (41.44.54)



89 (54.N216)



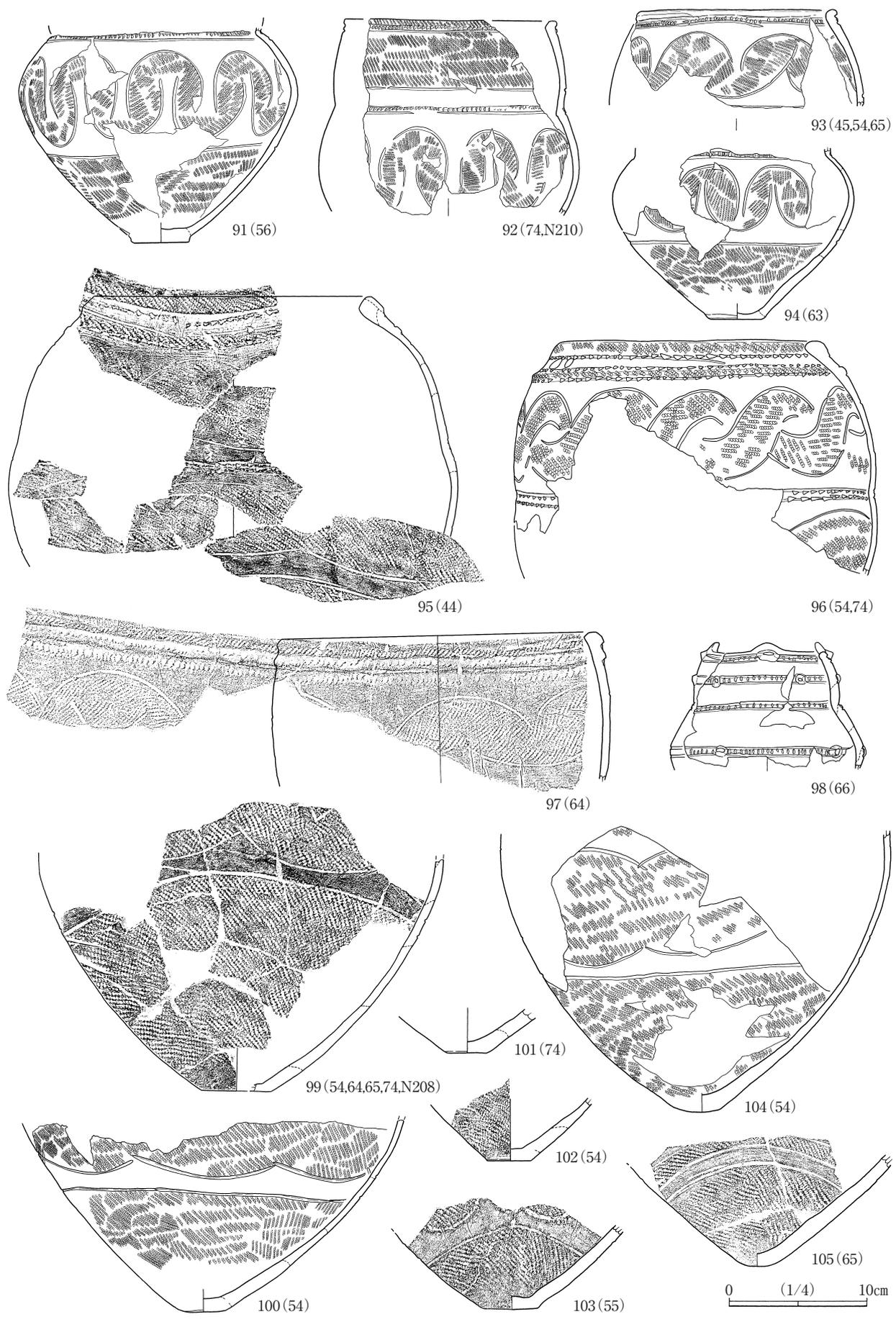
88 (65)



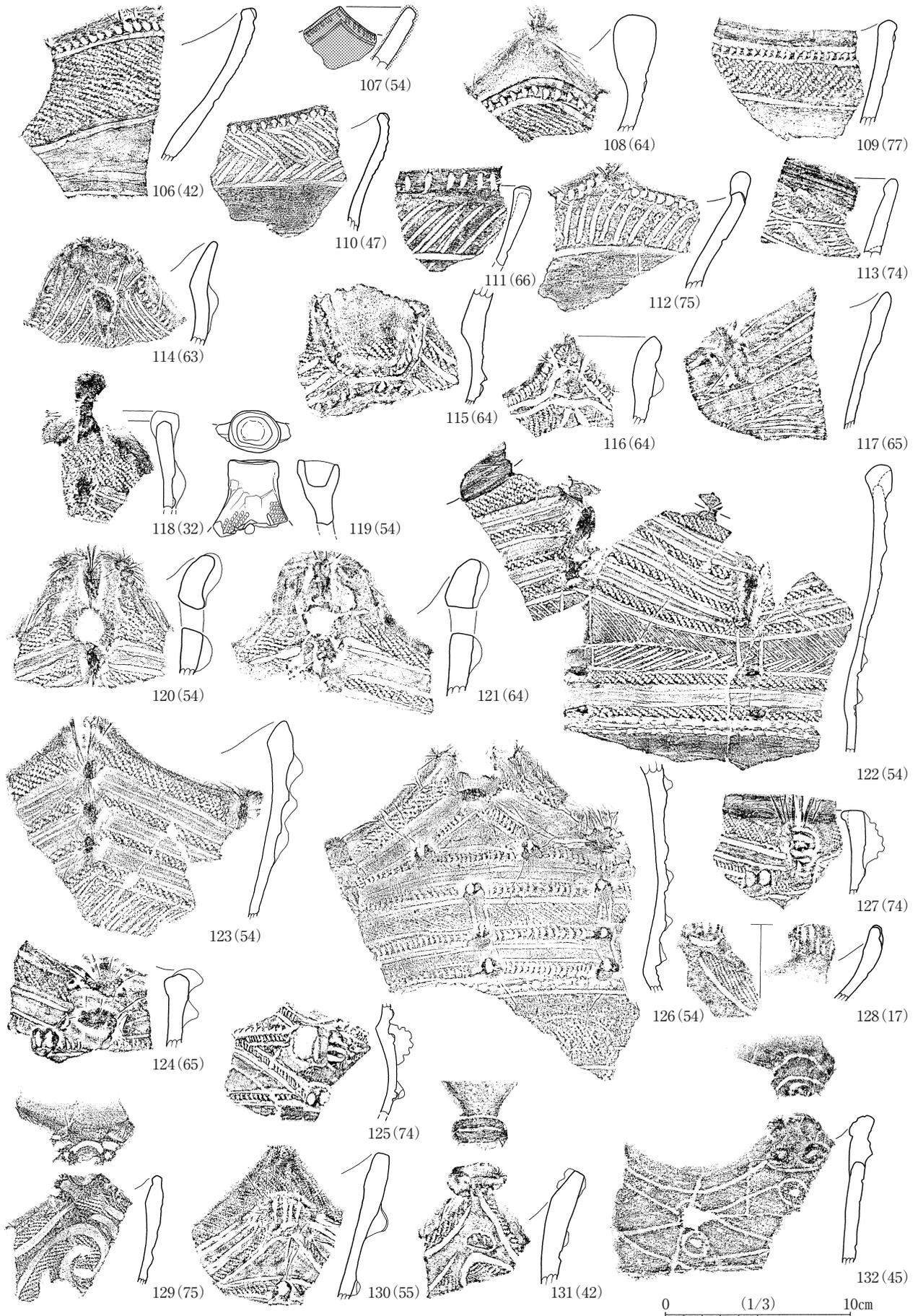
90 (56)

0 (1/4) 10cm

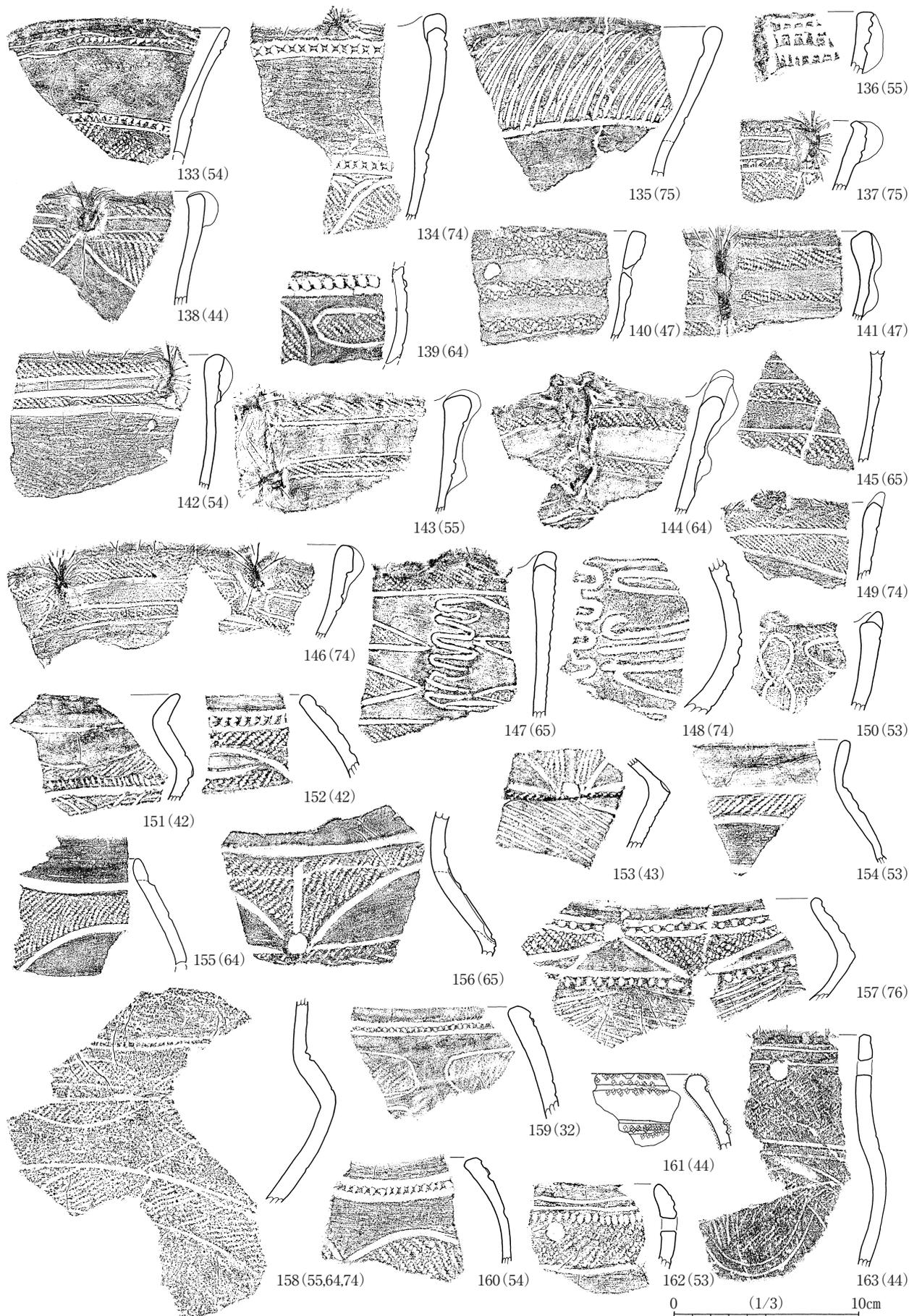
第145图 SS1出土土器 (5)



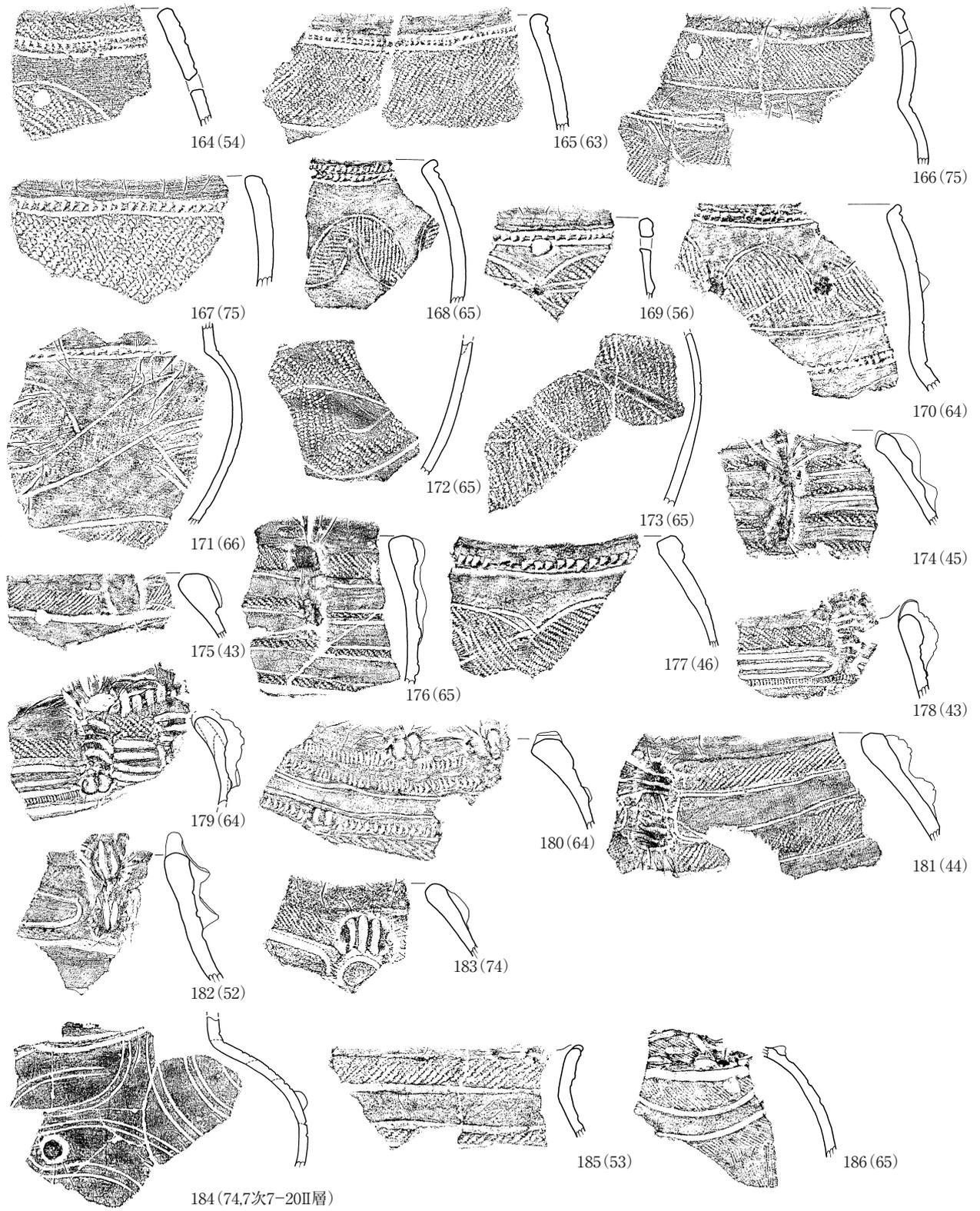
第146图 SS1区出土土器 (6)



第147图 SS1区出土土器 (7)

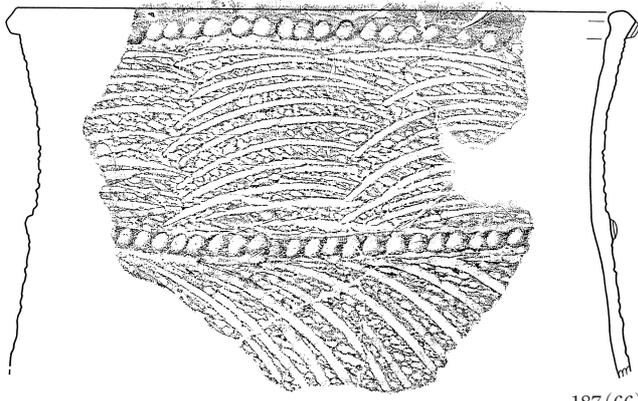


第148图 SS1区出土土器 (8)

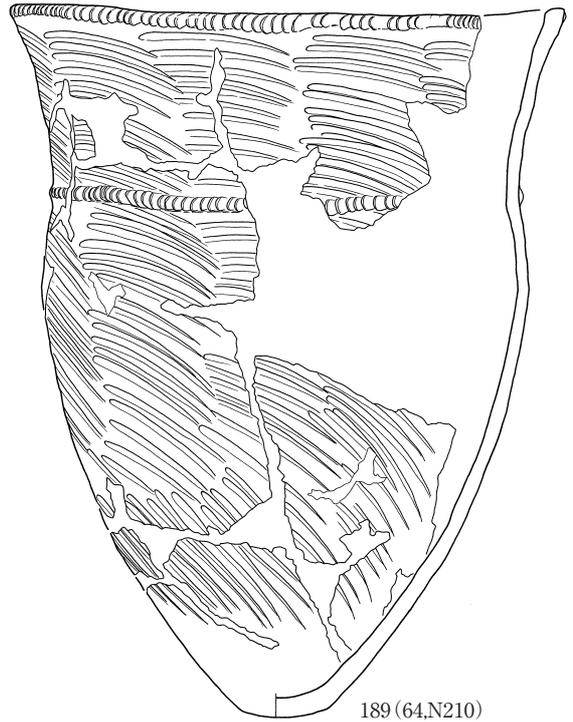


0 (1/3) 10cm

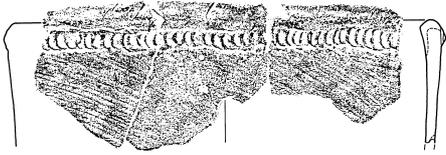
第149图 SS1区出土土器 (9)



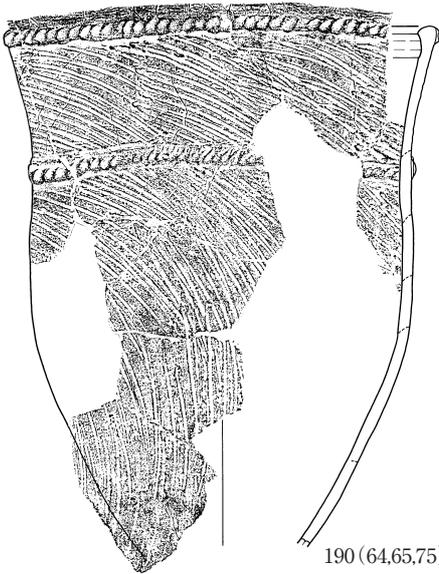
187 (66)



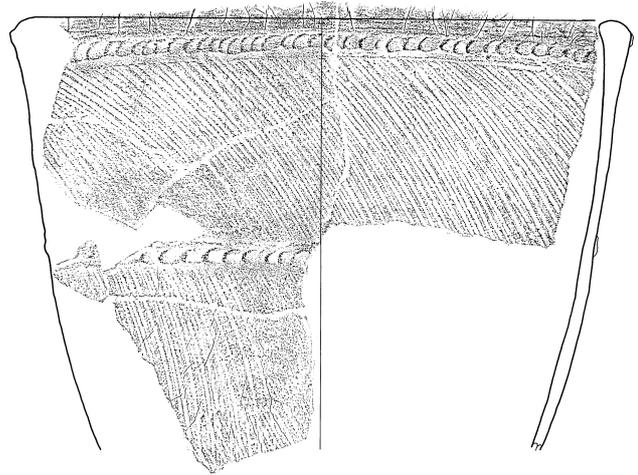
189 (64.N210)



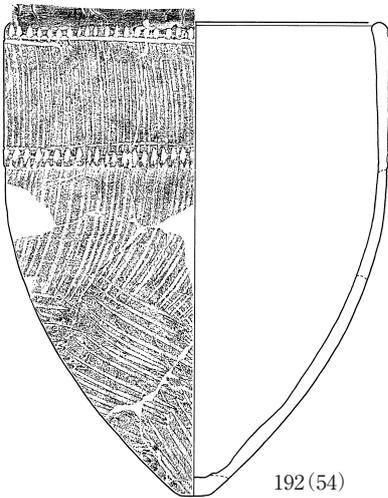
188 (54)



190 (64.65.75)



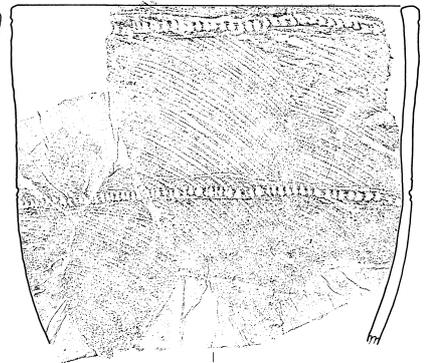
191 (64.74.N214)



192 (54)



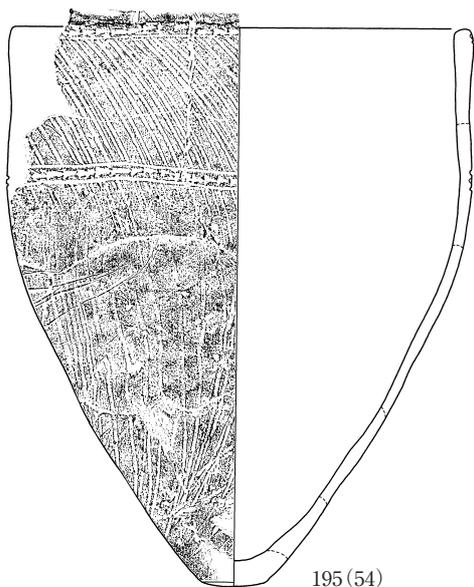
193 (54.N215)



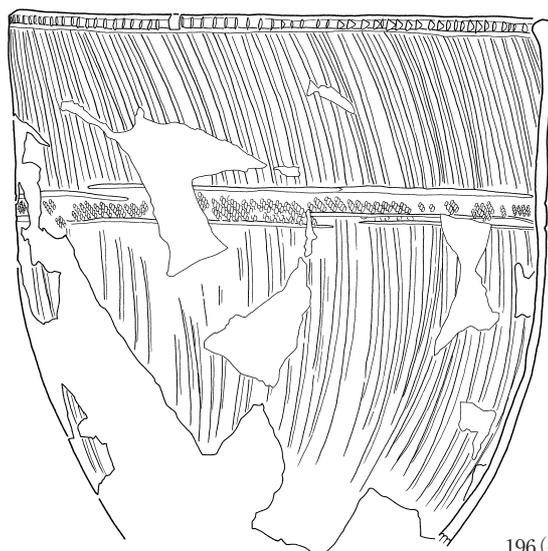
194 (53.54)

0 (1/4) 10cm

第150图 SS1区出土土器 (10)



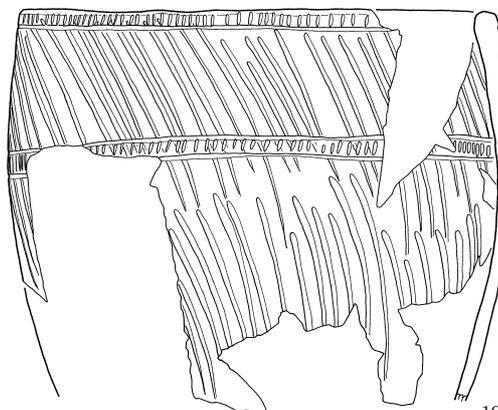
195 (54)



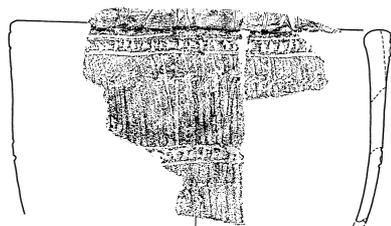
196 (64,74)



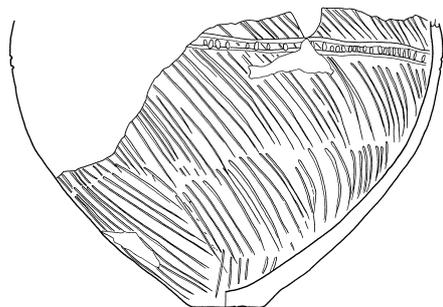
197 (54,64,65,N211)



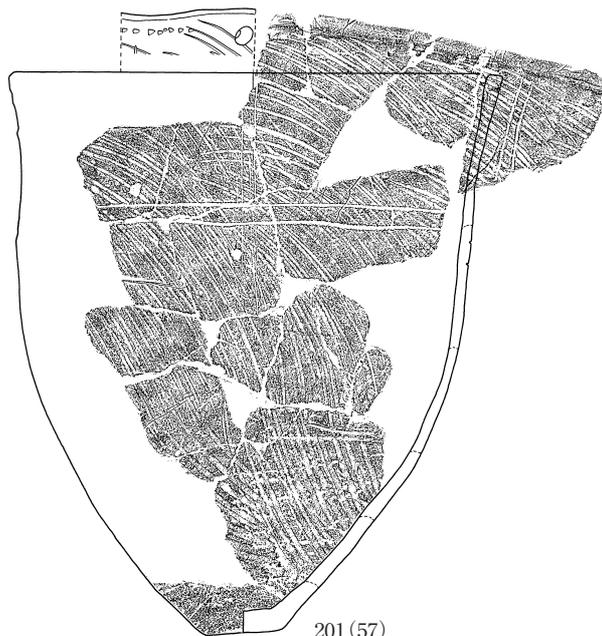
198 (44,54,64,65,74,N201)



199 (54,74)



200 (64)

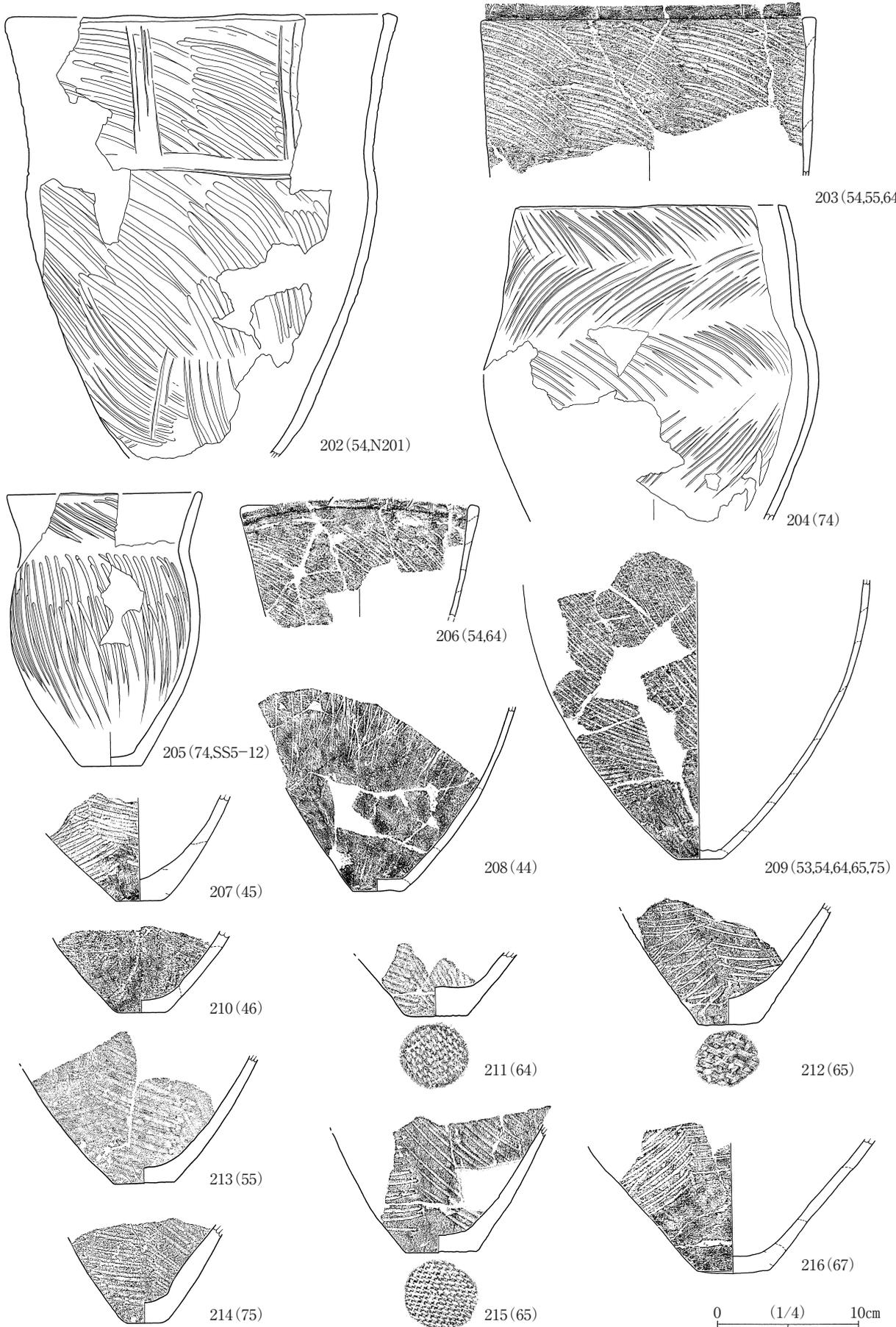


201 (57)

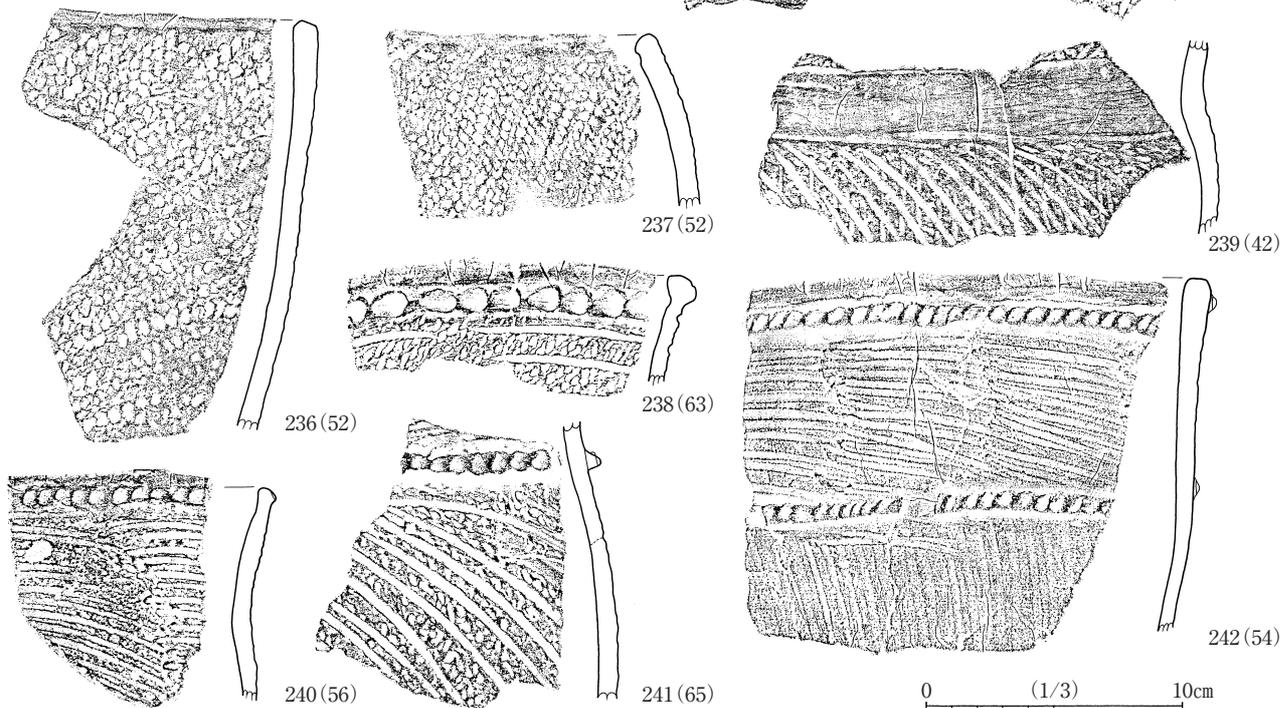
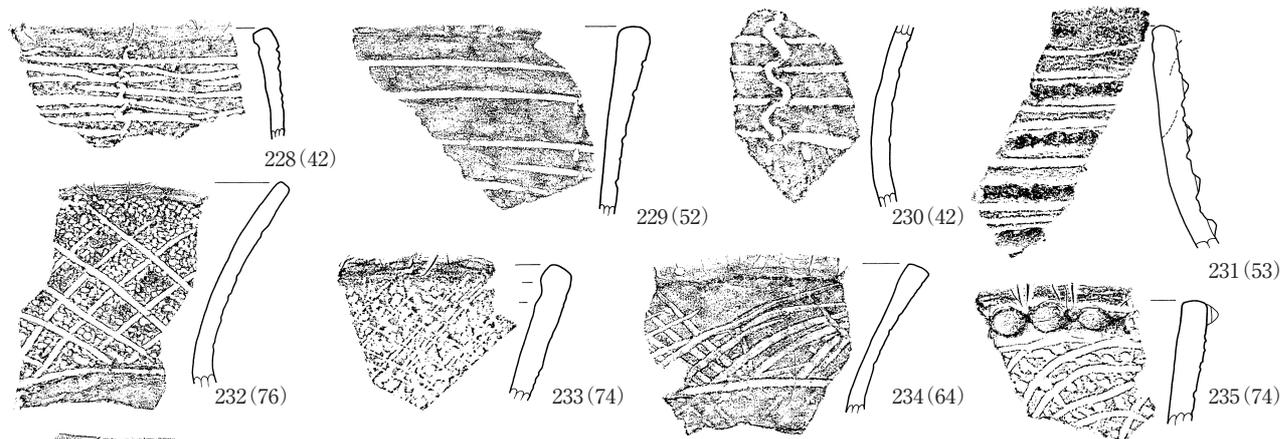
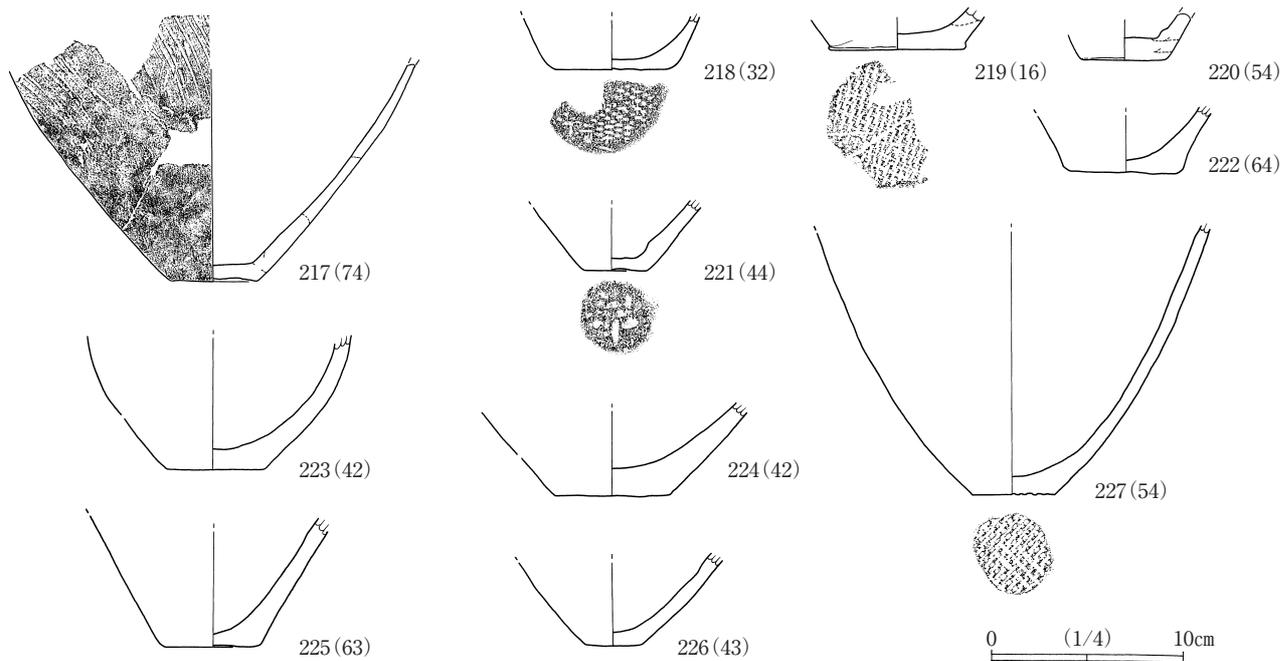


0 (1/4) 10cm

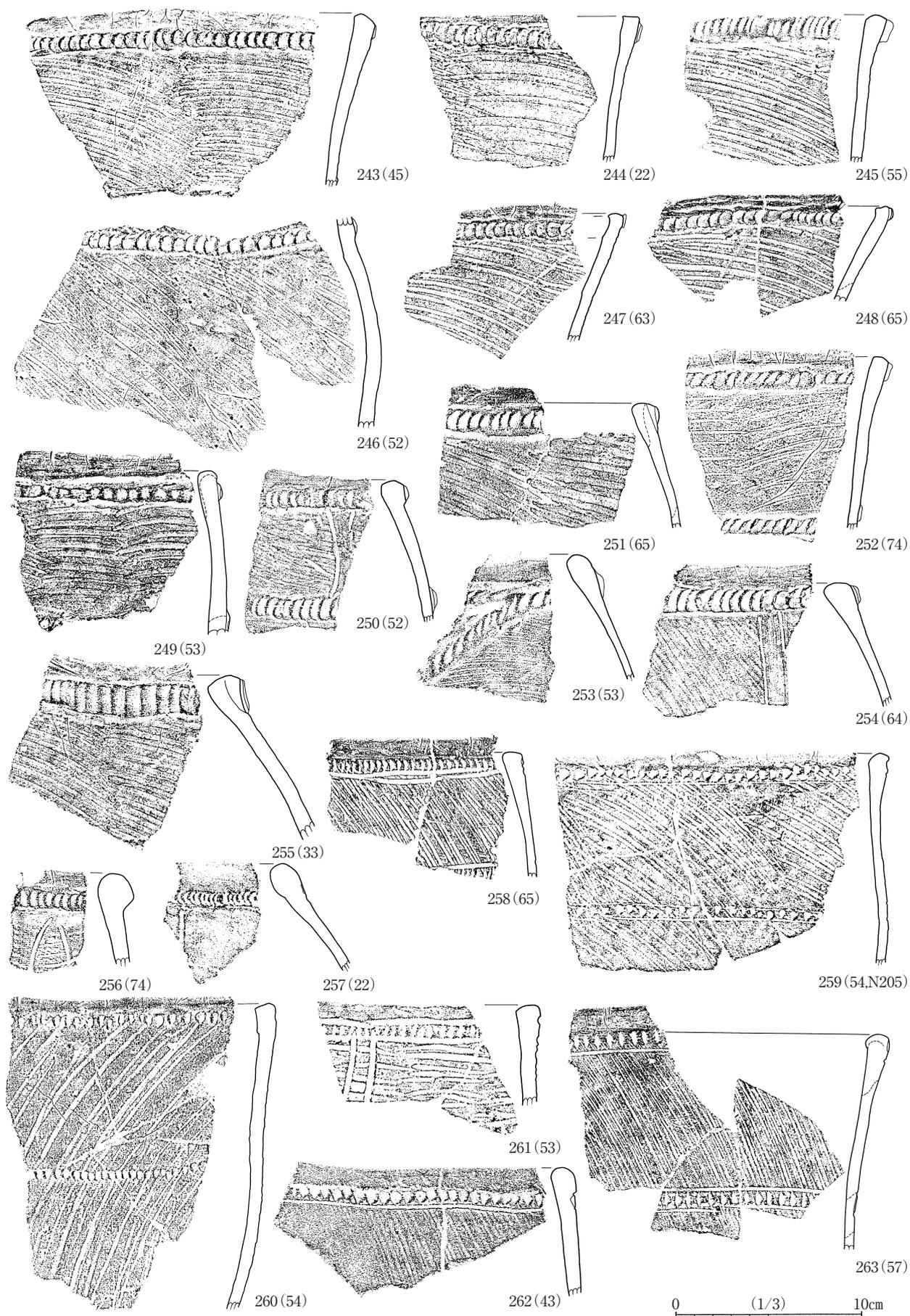
第151图 SS1区出土土器 (11)



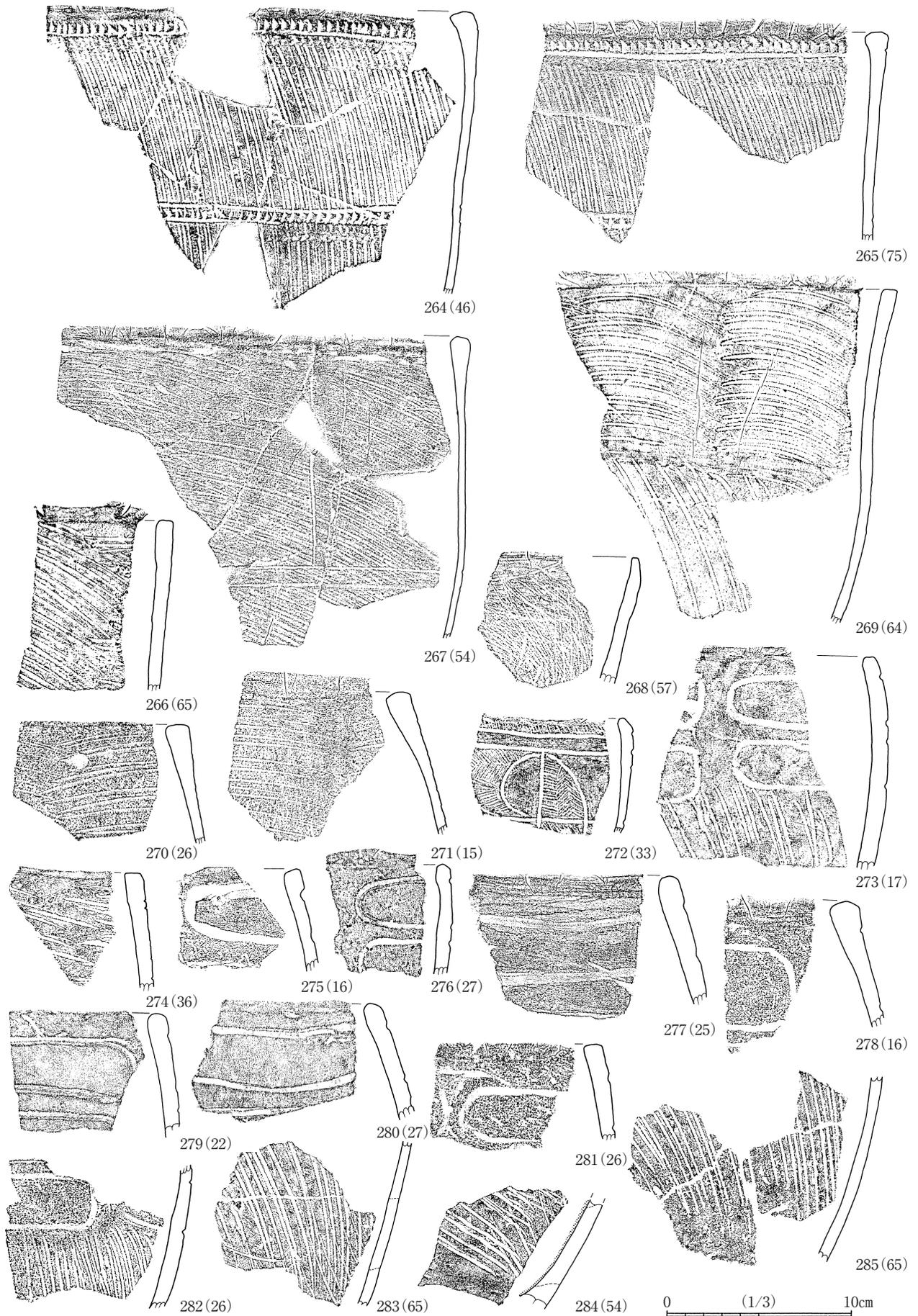
第152图 SS1区出土土器 (12)



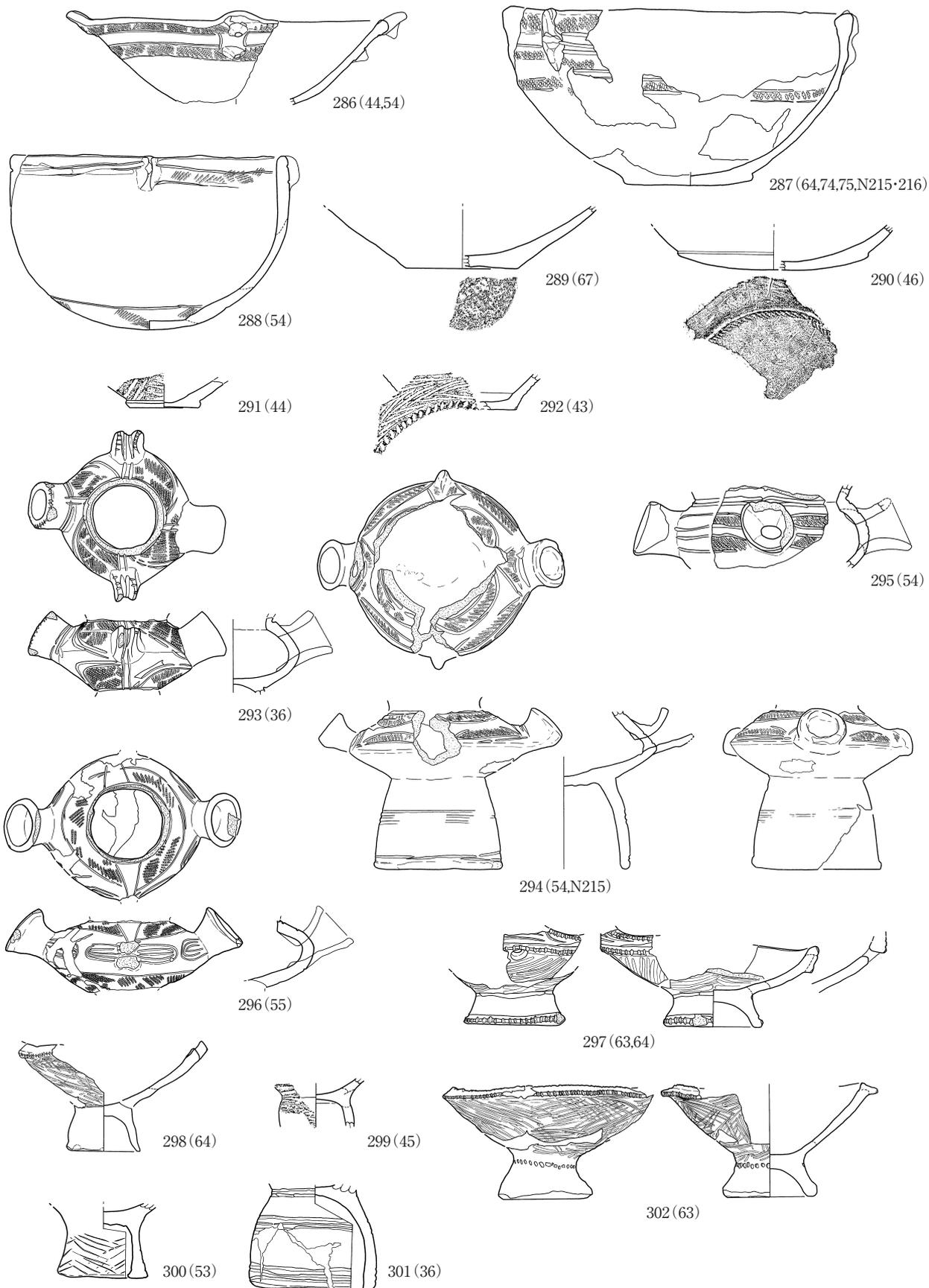
第153图 SS1区出土土器 (13)



第154图 SS1区出土土器 (14)

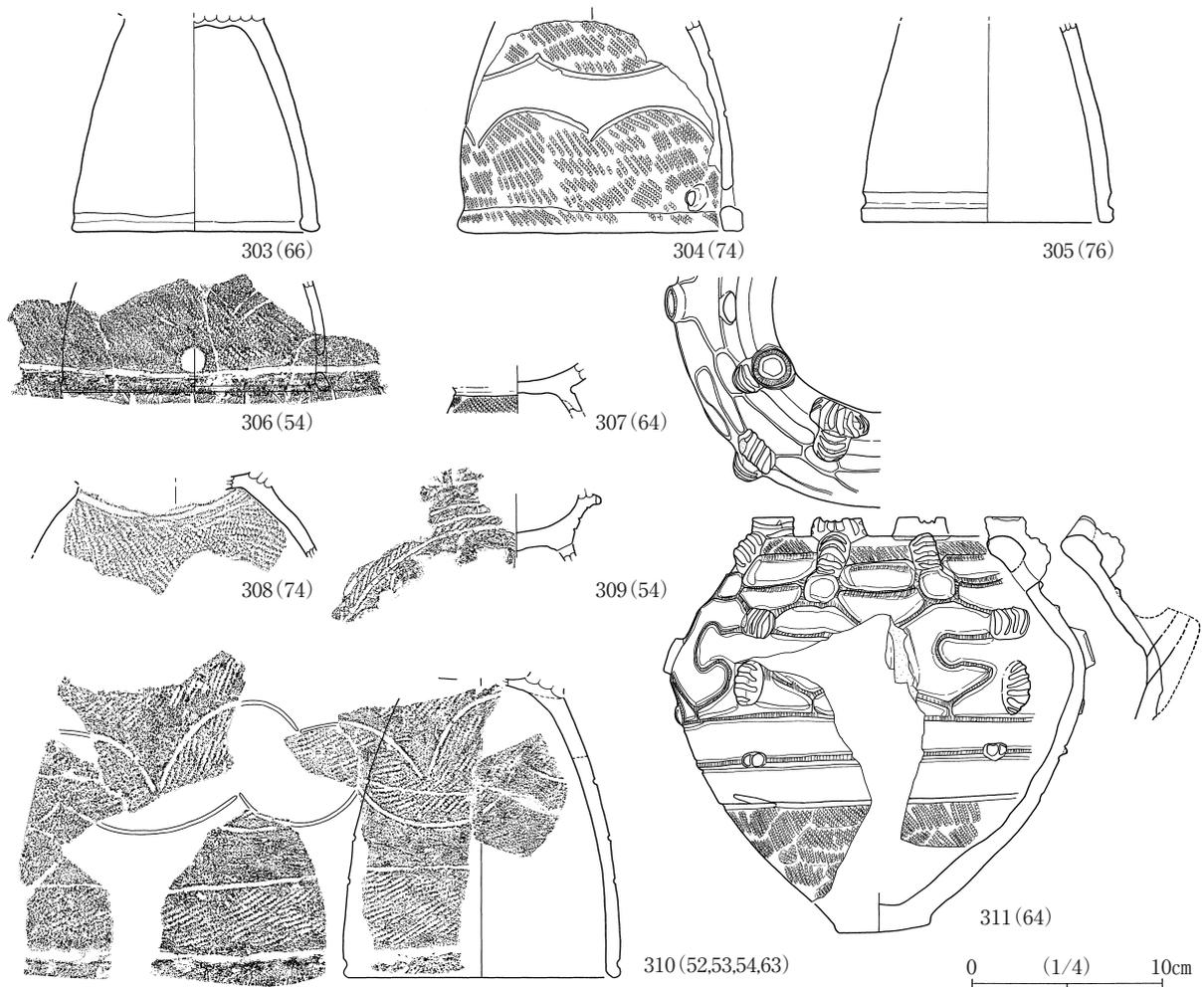


第155图 SS1区出土土器 (15)



0 (1/4) 10cm

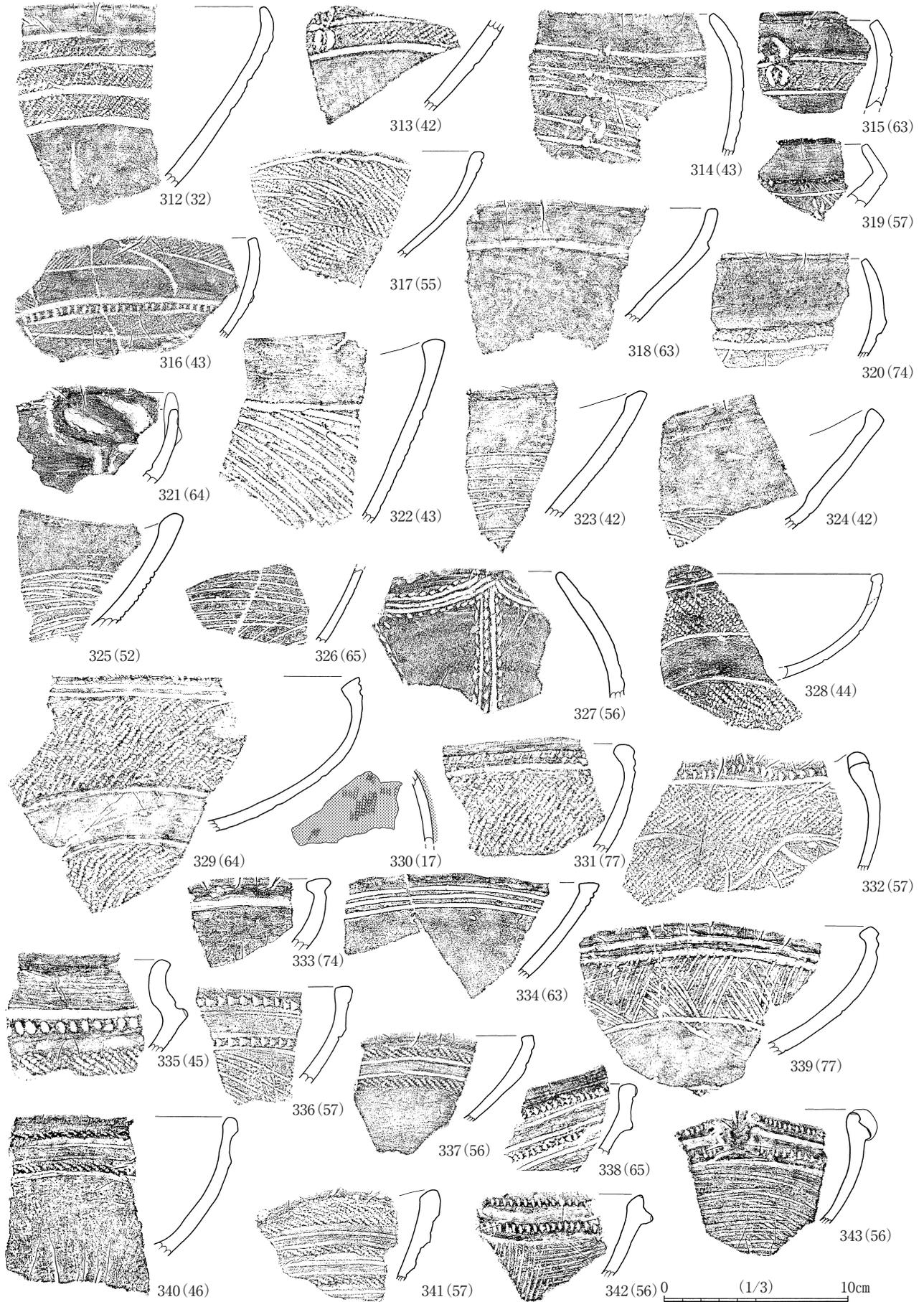
第156图 SS1区出土土器 (16)



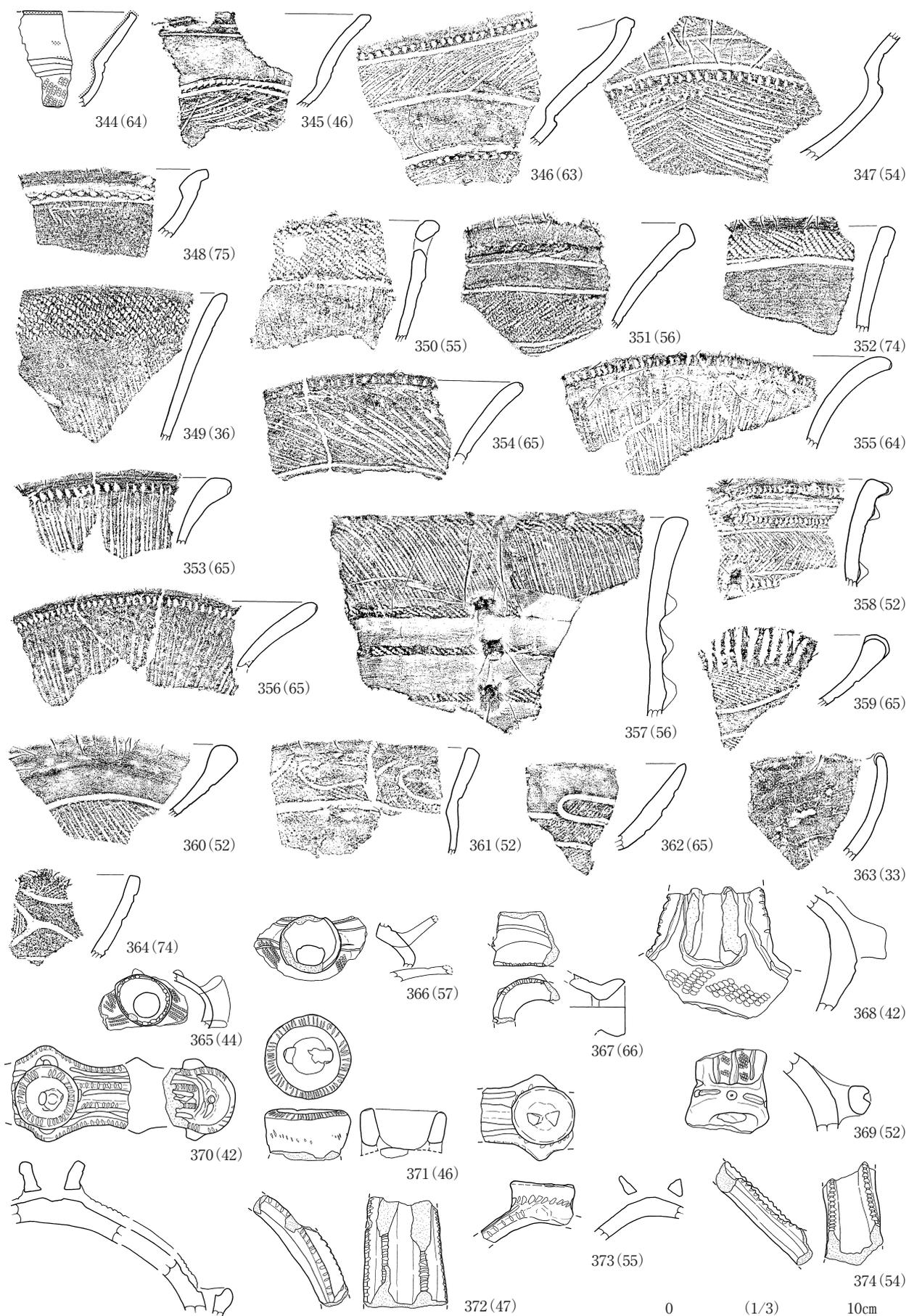
第157図 SS1区出土土器 (17)

線間は磨消していない。266・268・269・274は条線のみのももの。以上の資料は後期後葉を主体とする。270・271は条線のみで、口縁部が内傾し口唇部が肥厚する。272は沈線区画+細密沈線のもの。273・275～282は杵状文が配されるもので、273・282は胴部に縦位の条線が施される。以上は晩期前葉に当たる。283～285は胴部破片で、284は内面に赤彩が施される。

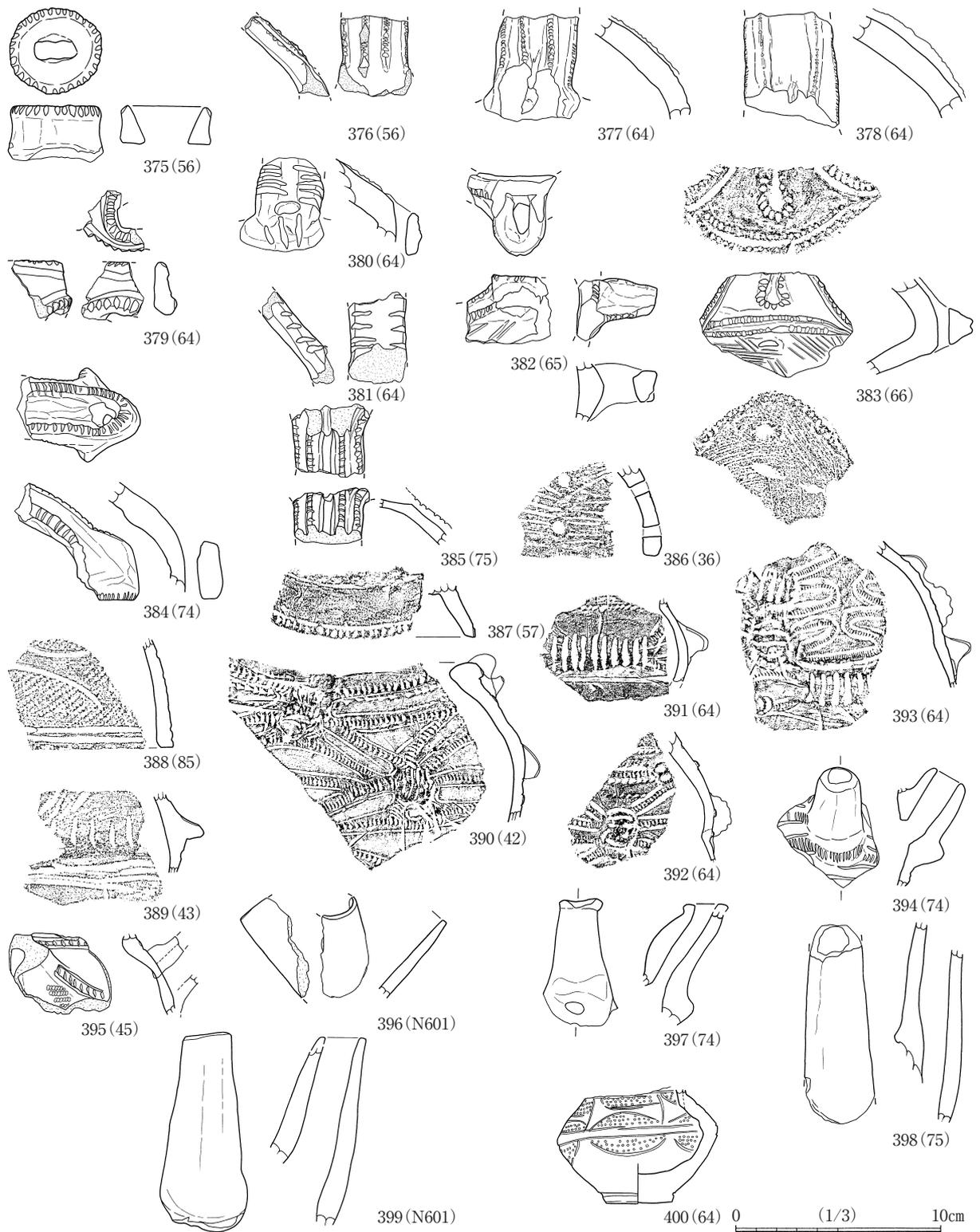
286～400は浅鉢、異形台付土器、釣手土器、注口土器などである。286～292は浅鉢、293～310は台付土器で、293～296は異形台付土器、297・298・302は台付浅鉢もしくは釣手土器である。294の異形台付土器は台部を中心に強く熱を受けている。311は注口土器で、注口部を欠損するが遺存状況はよい。これらはいずれも後期後葉を中心とする。312～400は破片資料である。312～326は後期中葉を中心とする浅鉢である。327は文様など晩期を想起させるが、胎土や調整などが後期のものであると判断されたため、ここに掲載した。328～341は後期後葉を中心とする。磨消縄文を主体とした浅鉢は時期判定が難しいが、口唇の断面形状などを手がかりとした。330は赤彩が施される。332は櫛掛け状磨消縄文に類似する。342～358は台付浅鉢もしくは釣手土器である。344は内面に赤彩が施される。349・350は口唇直下に幅広の縄文帯を巡らせるもので、350は若干肥厚する。351は口縁がかなり強く外反するため浅鉢としたが、波状口縁の深鉢の可能性もある。359・361・362・364は晩期に属する浅鉢である。365～367は異形台付土器である。368～385は釣手土器で全て別個体と考えられる。386～388は台部、389～399は注口土器である。395は熱を強く受けている。396・399はN601という名称の遺構から出土したことになるが、この遺構は図面上では確認できず、実体は不明である。注口



第158图 SS1区出土土器 (18)

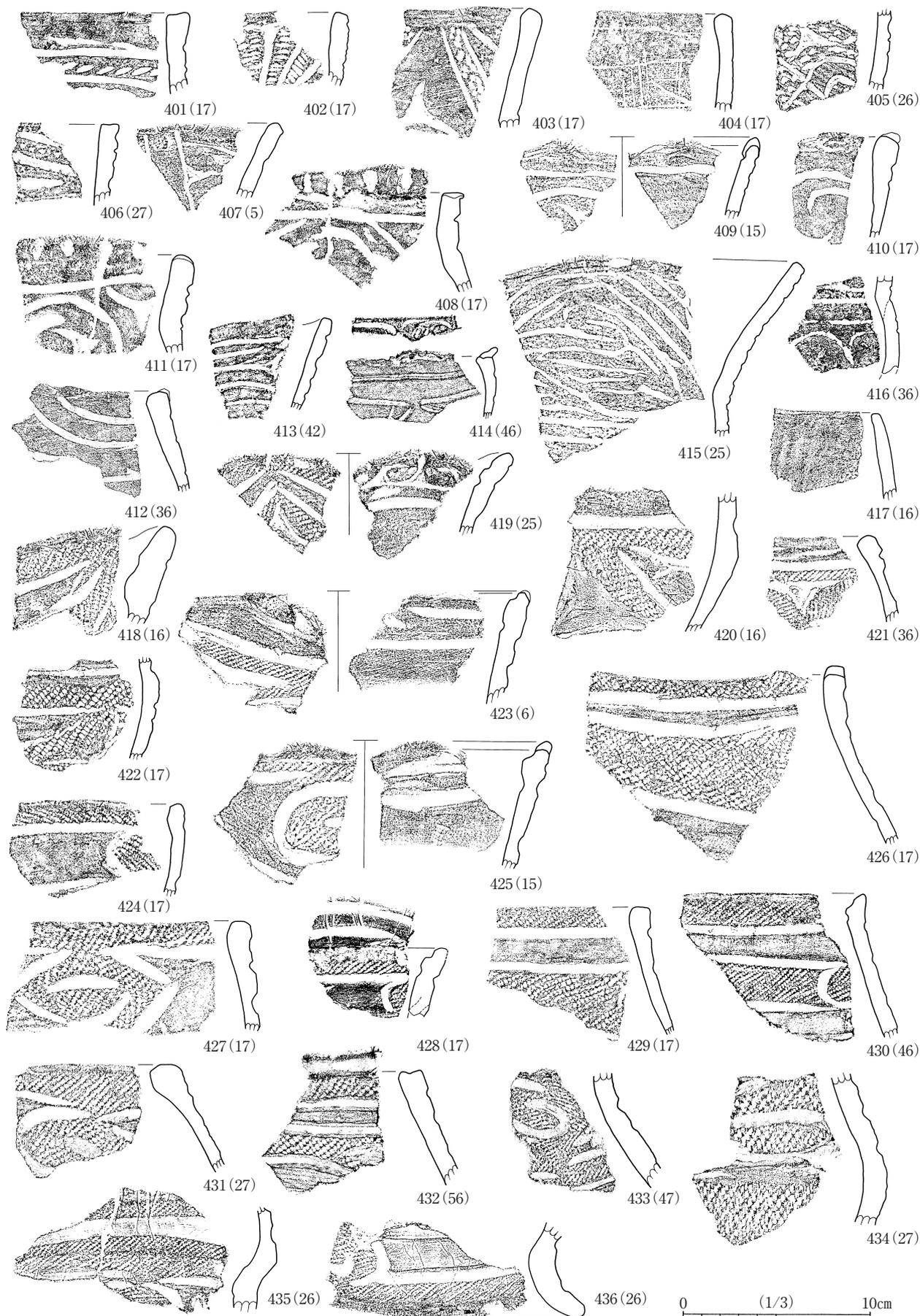


第159图 SS1区出土土器 (19)

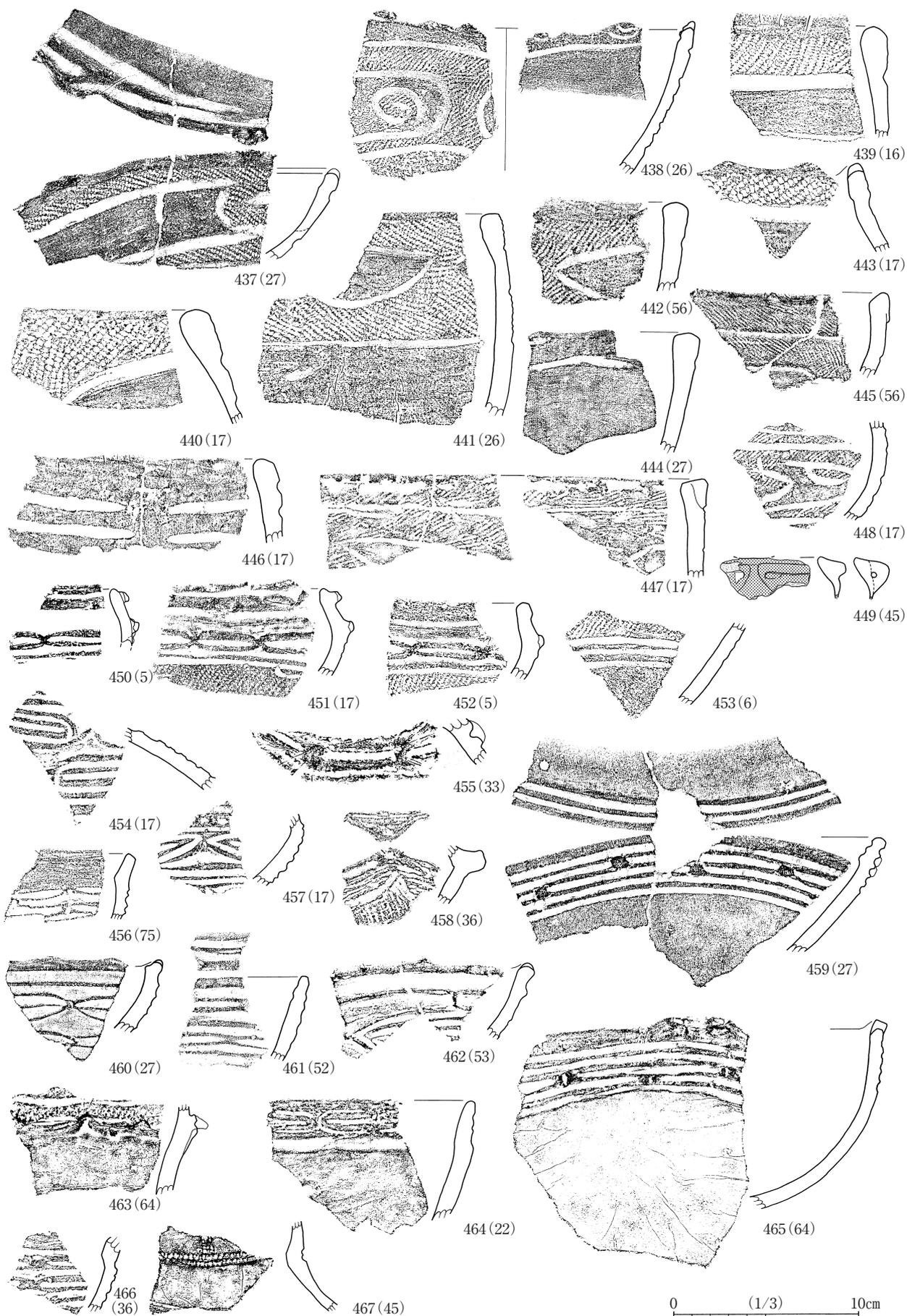


第160図 SS1区出土土器 (20)

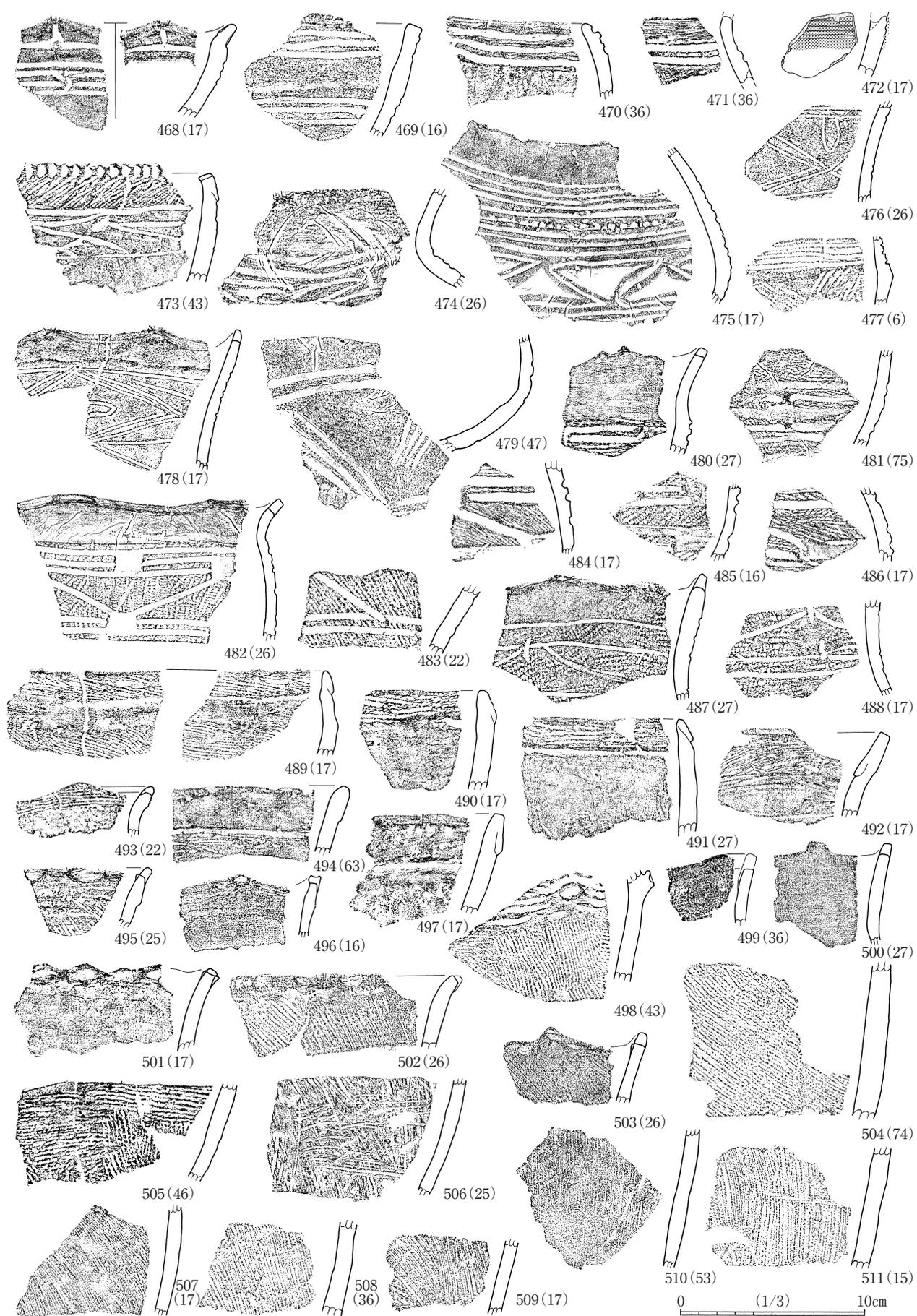
部に関しては、後期前葉のものも含まれている可能性がある。400は小形の壺形土器で、胴部がソロバン玉形を呈し、屈曲した部分に沿うように2本一組の沈線が巡る。沈線をはさんで刺突が充填された遮光器文が配され、さらにその上側に弧状の沈線に区画された充填刺突が配される。円形刺突には赤彩がわずかに残る。



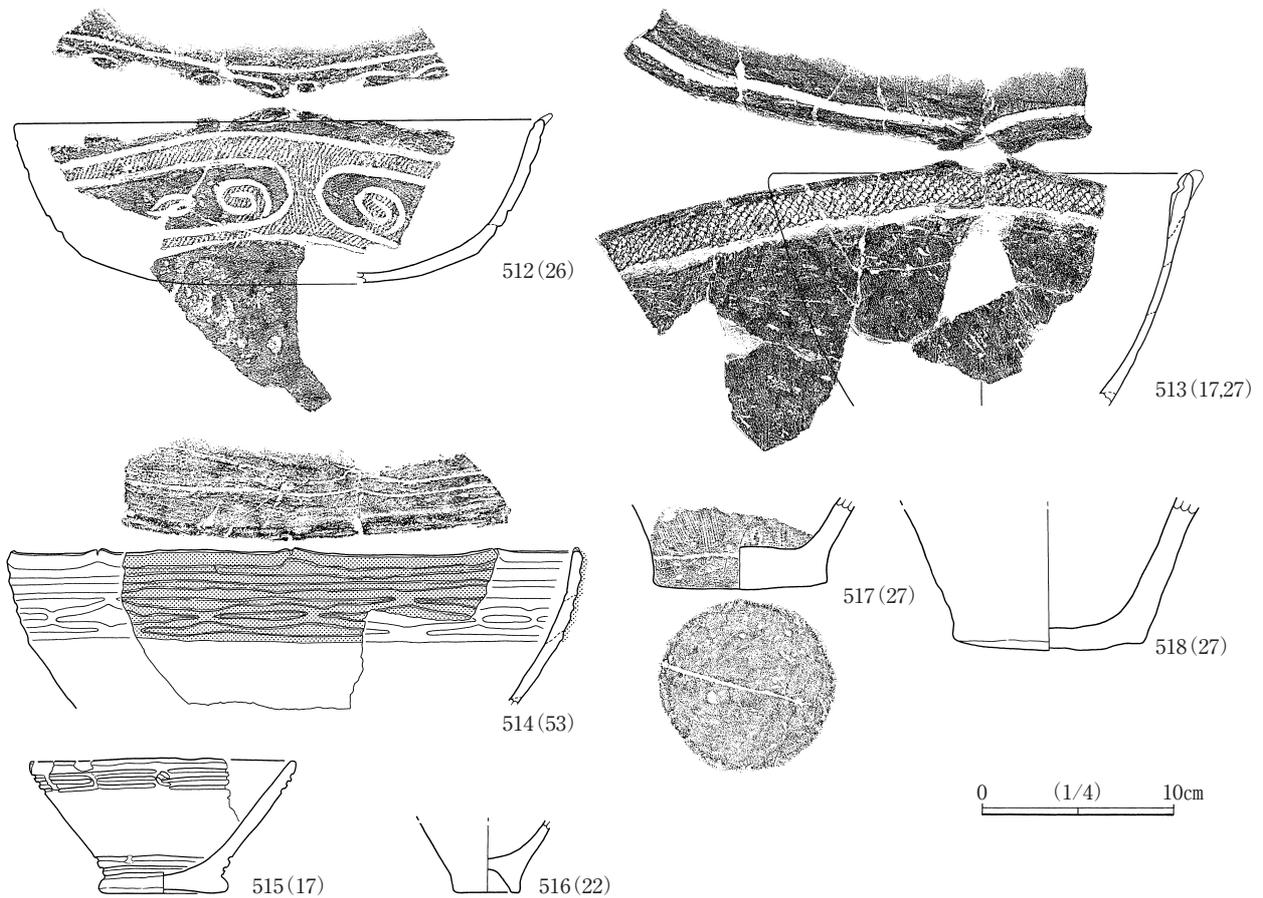
第161图 SS1区出土土器 (21)



第162图 SS1区出土土器 (22)



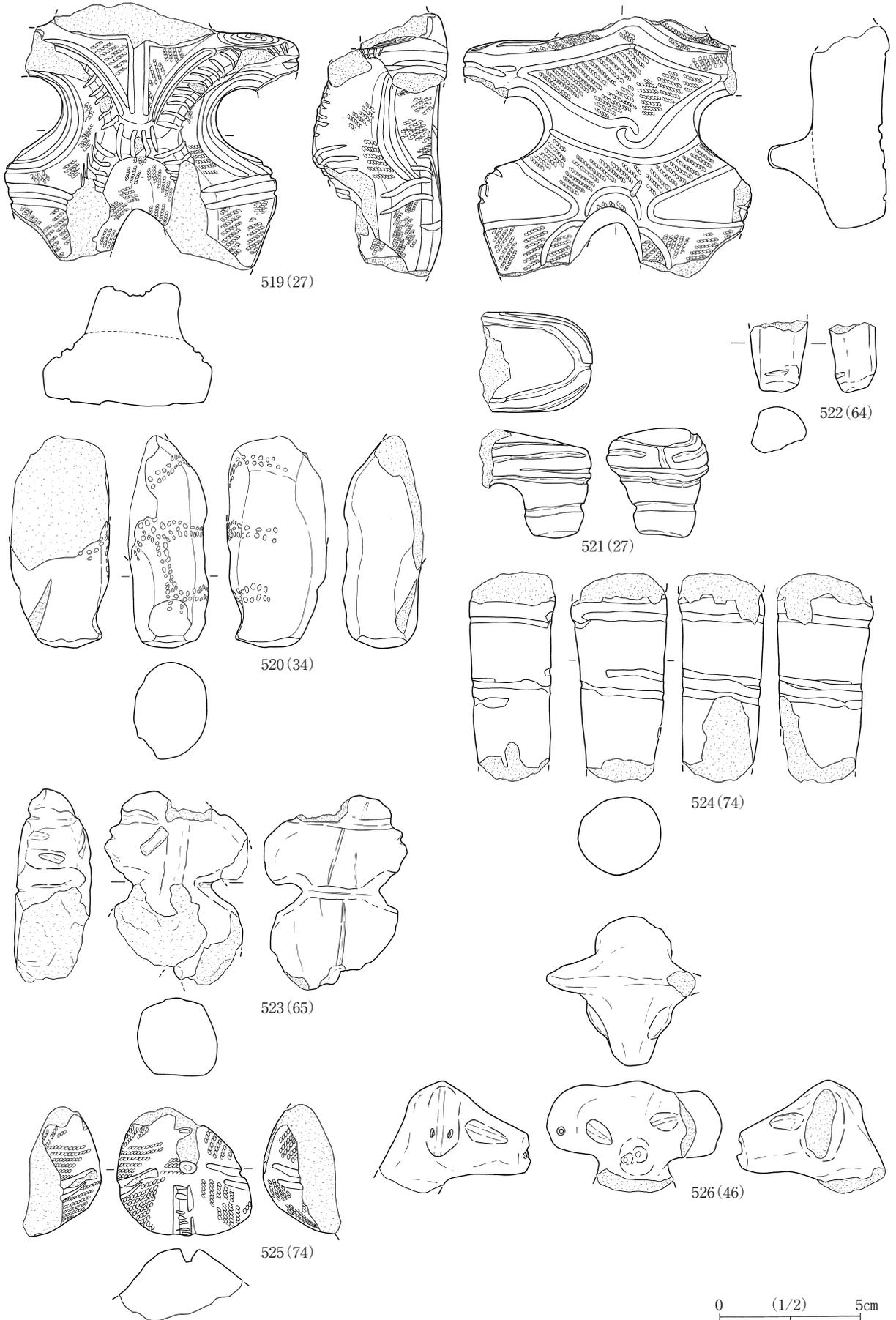
第163图 SS1区出土土器 (23)



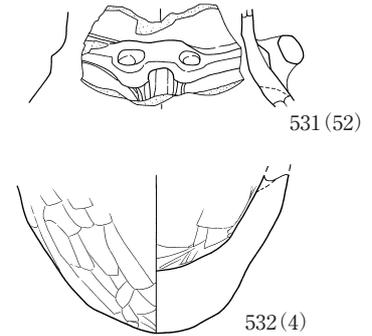
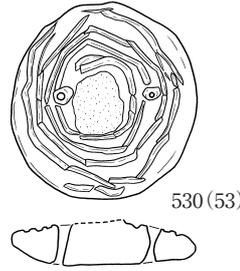
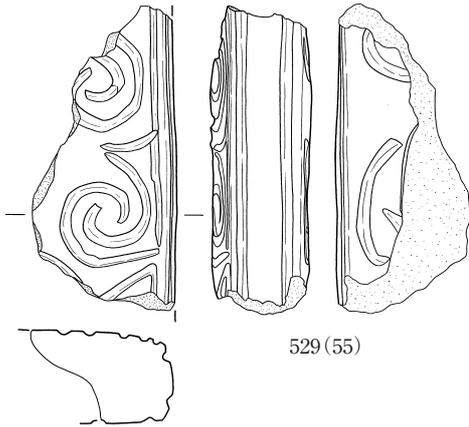
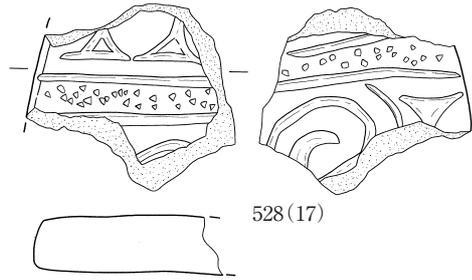
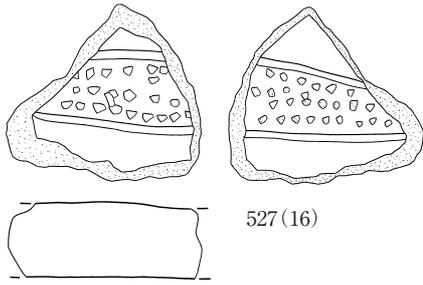
第164図 SS1区出土土器 (24)

401～518は晩期中葉～後葉（弥生初頭）を中心とするもので、調査区の北東部からより多く出土している。401～417は安行3c・3d式であるが、数は少ない。418～447・512・513は前浦直前（前浦Ⅰ）～前浦（前浦Ⅱ）式で、数では前浦（前浦Ⅱ）が多くを占める。435と436、438と512はそれぞれ同一である。448・450～453は大洞C2式である。454～511・514～518は晩期後葉に相当するもの。454～462は大洞A式に相当する。463～466は荒海1式、468～479は荒海2式、480～488は荒海4式に相当するもので、特に459と465の浅鉢は、新旧関係を示していると思われる。477は胴部が屈曲し、上側に横位沈線、下側に撚糸文が施される。487・488はかなりラフな感じであるが、482がベースになっているとみられる。489～511は晩期後葉（弥生初頭）の粗製土器である。撚糸地文と条痕地文のものがああり、それぞれ荒海2式と荒海4式に相当すると考えられる。口縁部を肥厚させる技法は、撚糸地文の土器に多く見られる。493と496は壺形土器である。514は浮線文の浅鉢で、文様帯部分に赤彩が施されるほか、内面に2条の沈線が施される。515は荒海2式の小形浅鉢である。516はかなり底上げされている小形の土器である。517は縦位の条痕が施されるもので、518も無文であるが同時期のものであろう。いずれも晩期末～弥生初頭と考えられる。

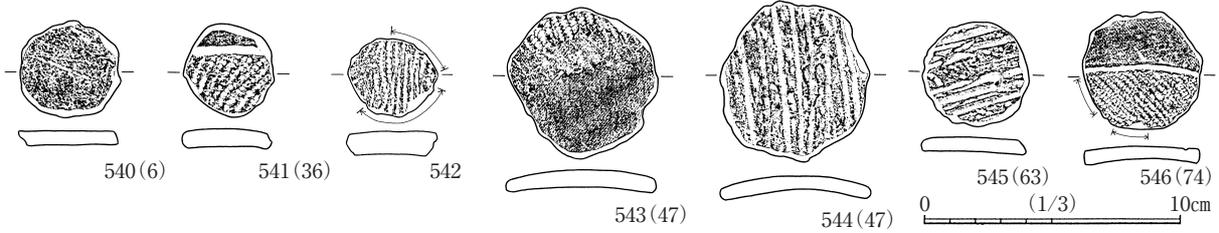
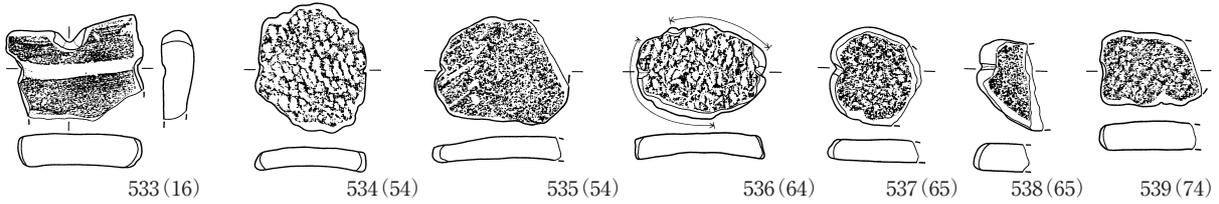
519～546は土製品である。519は晩期安行式期のミミズク土偶である。石棒出土位置付近から検出された（図版6）。包含層出土であるが、遺構内であった可能性も高い。単節RL縄文を施した後、沈線を描く。前面は平行する沈線を描き、沈線間を磨消す。背面も磨消を多用し、入組文が描かれる。肩には沈線で渦巻きを描く。520は山形土偶の左側脚部である。細かい刺突で文様を描く。521は晩期土偶の肩～腕部である。赤彩が残る。522は腕部である。赤彩が残る。523は粘土塊状の土偶であ



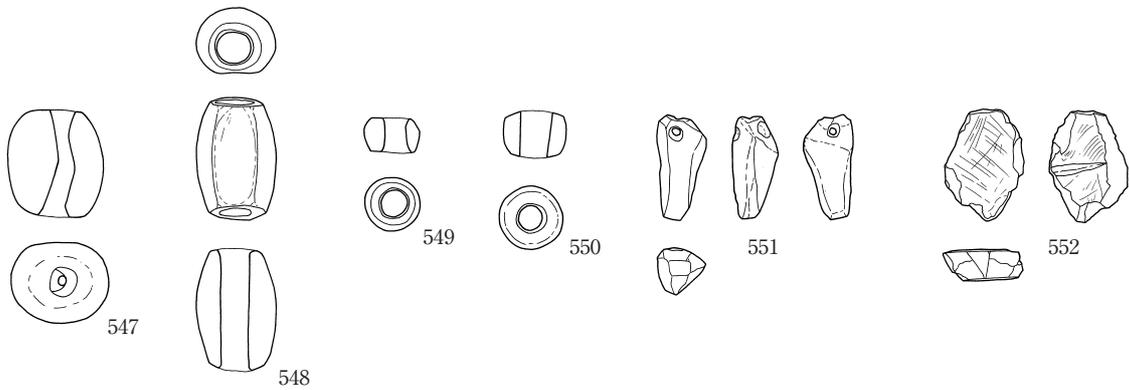
第165図 SS1区出土土製品 (1)



0 (1/2) 5cm

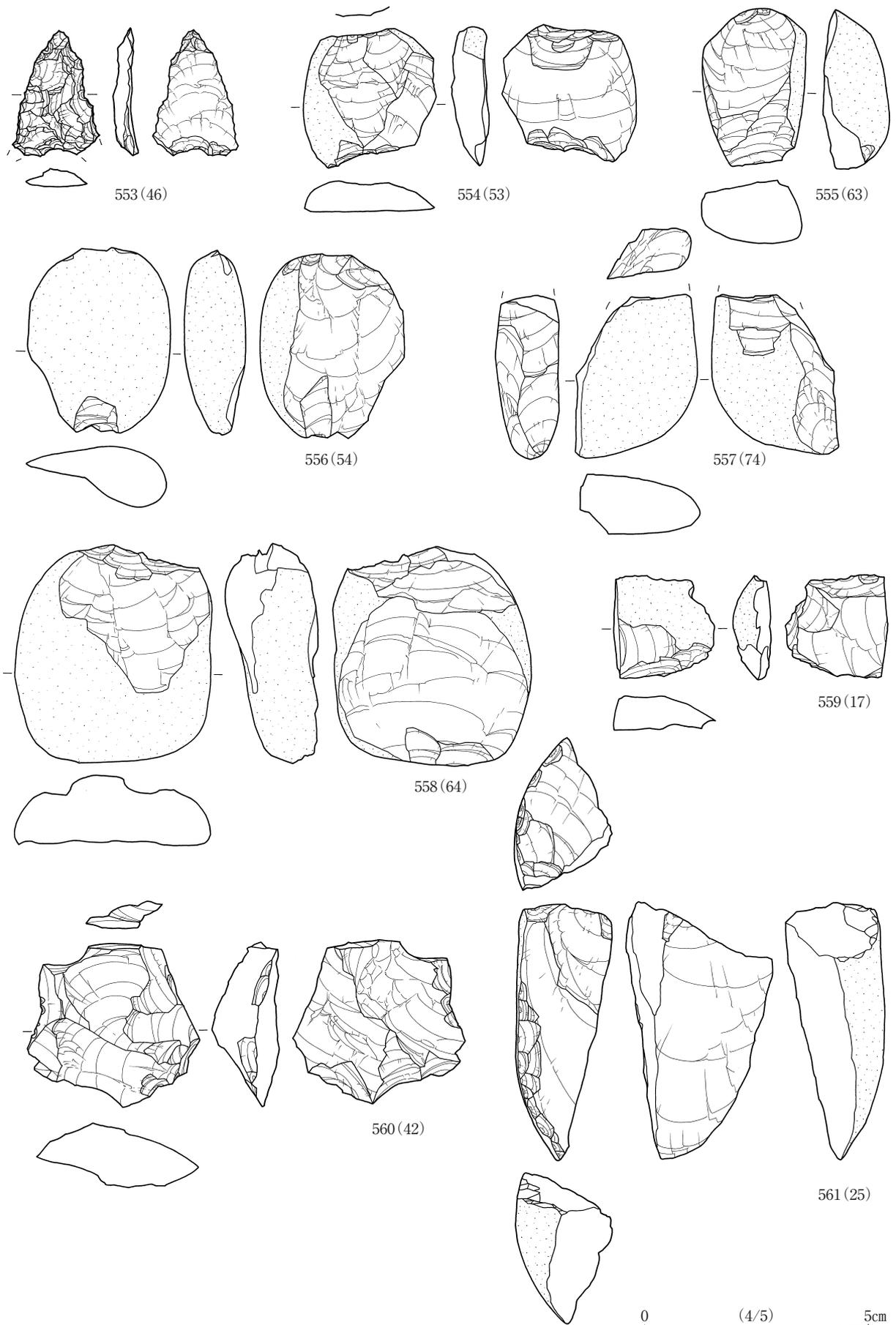


0 (1/3) 10cm



0 (2/3) 5cm

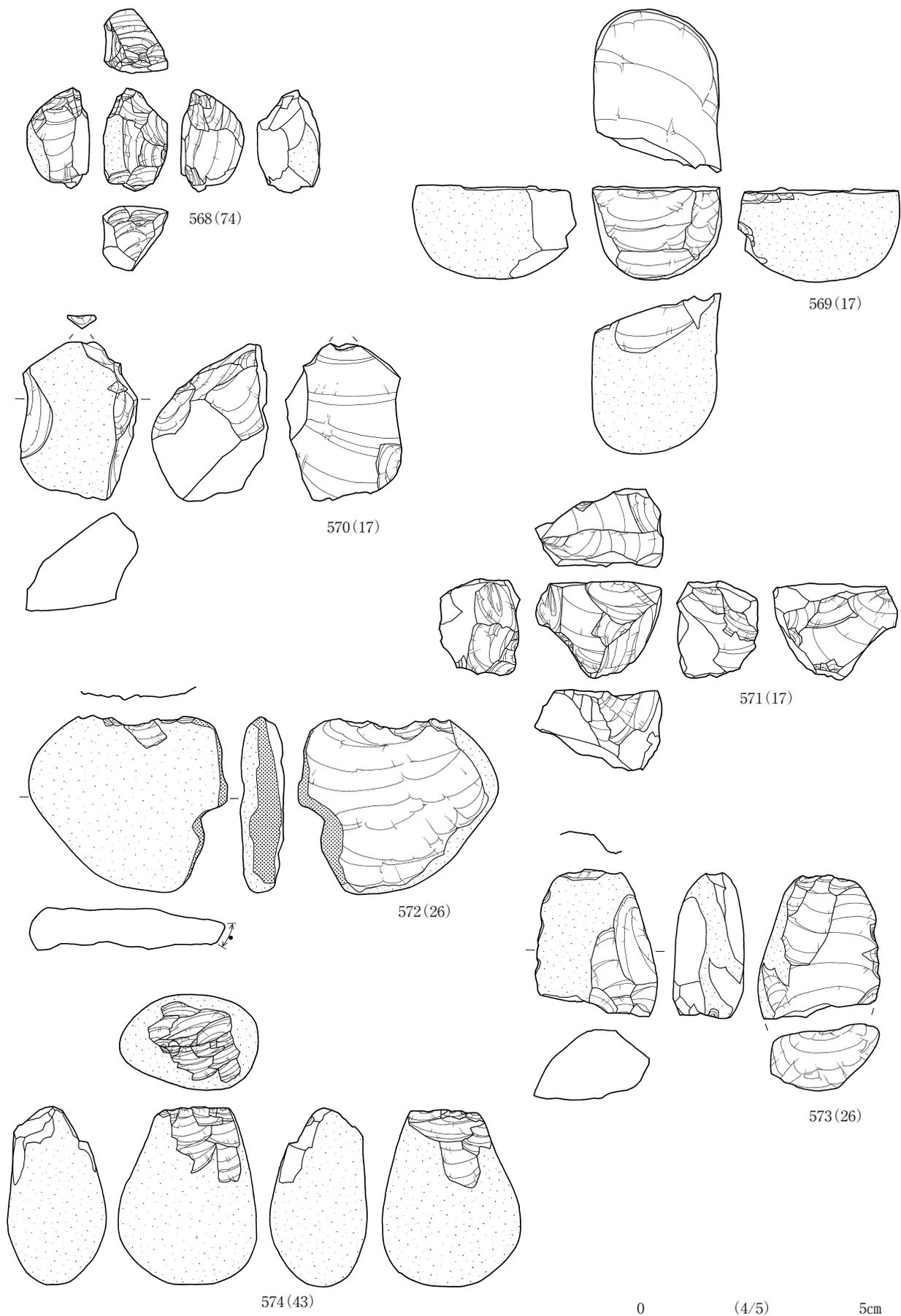
第166図 SS1区出土土製品 (2)・石製玉類



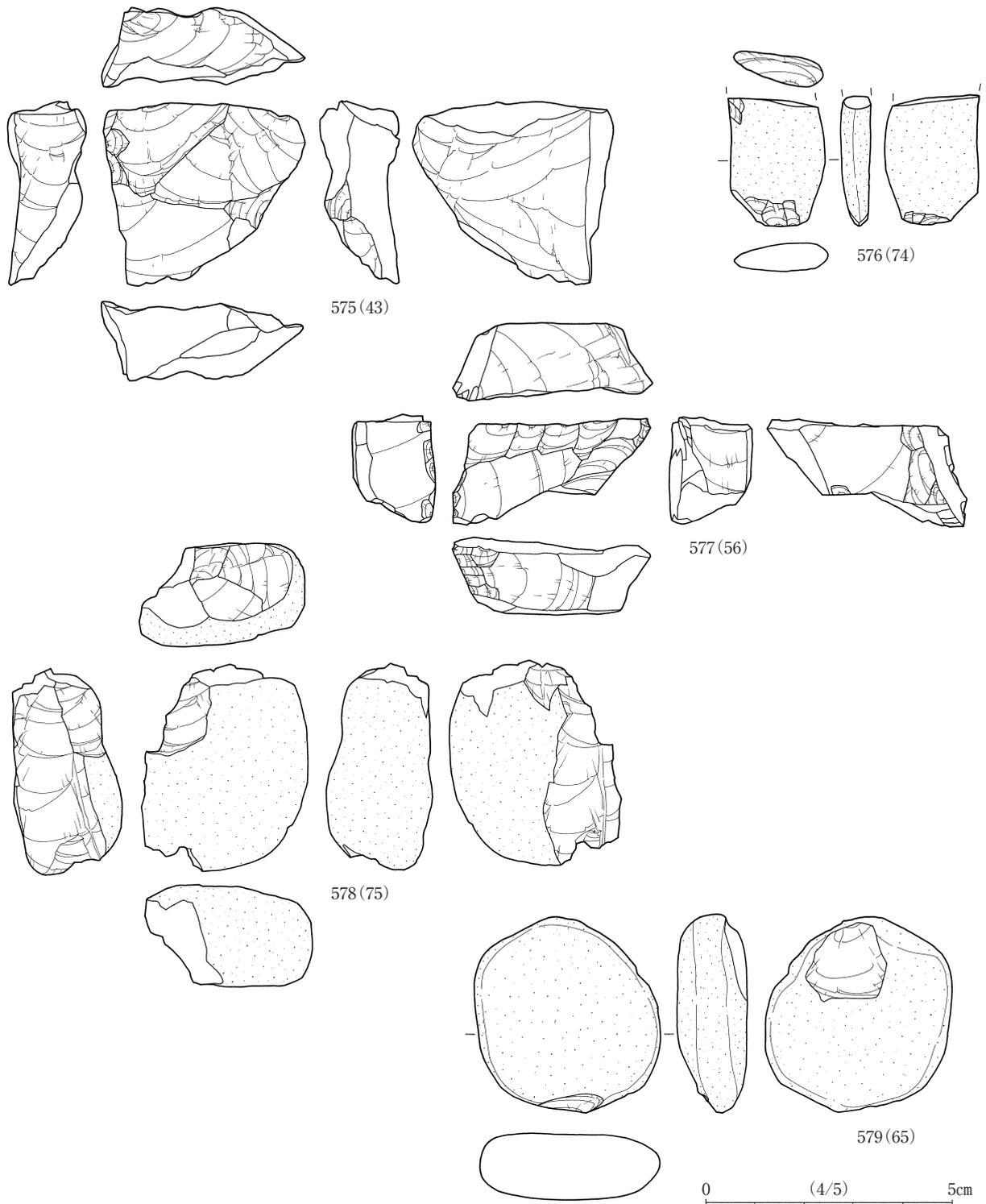
第167图 SS1区出土石器 (1)



第168图 SS1区出土石器 (2)

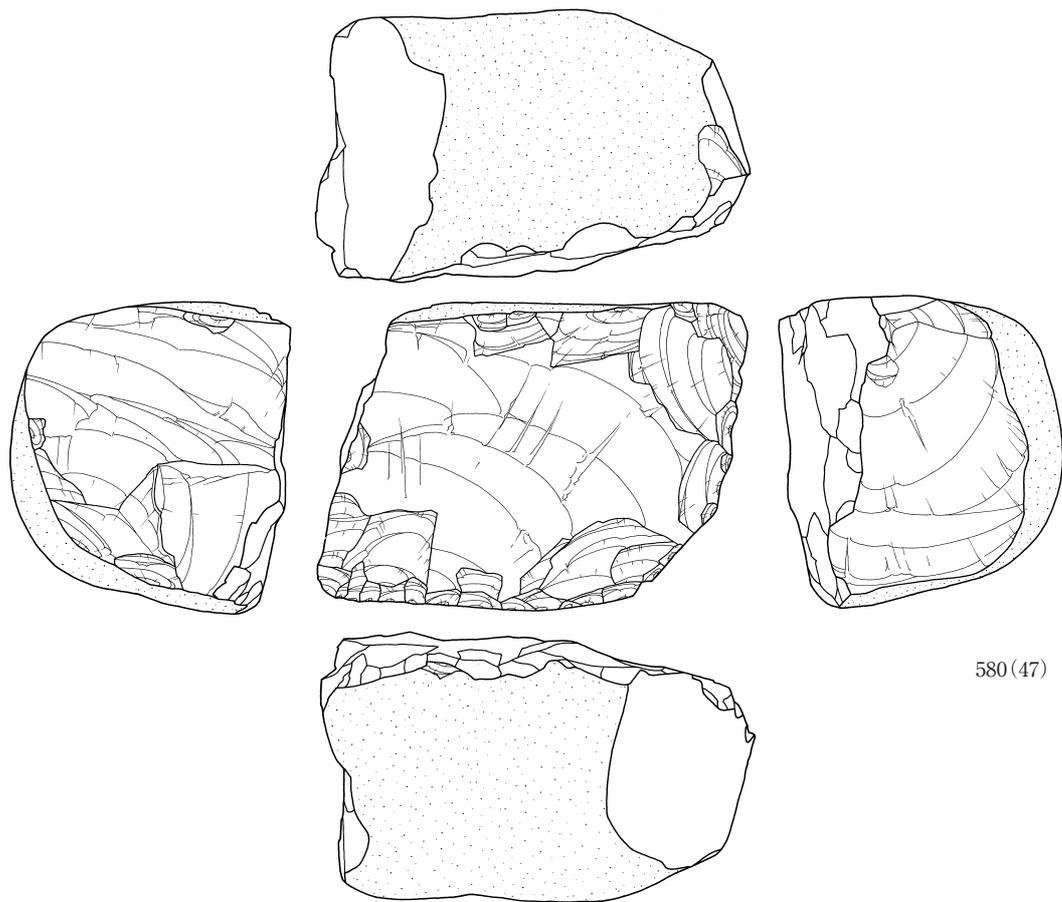


第169图 SS1区出土石器 (3)

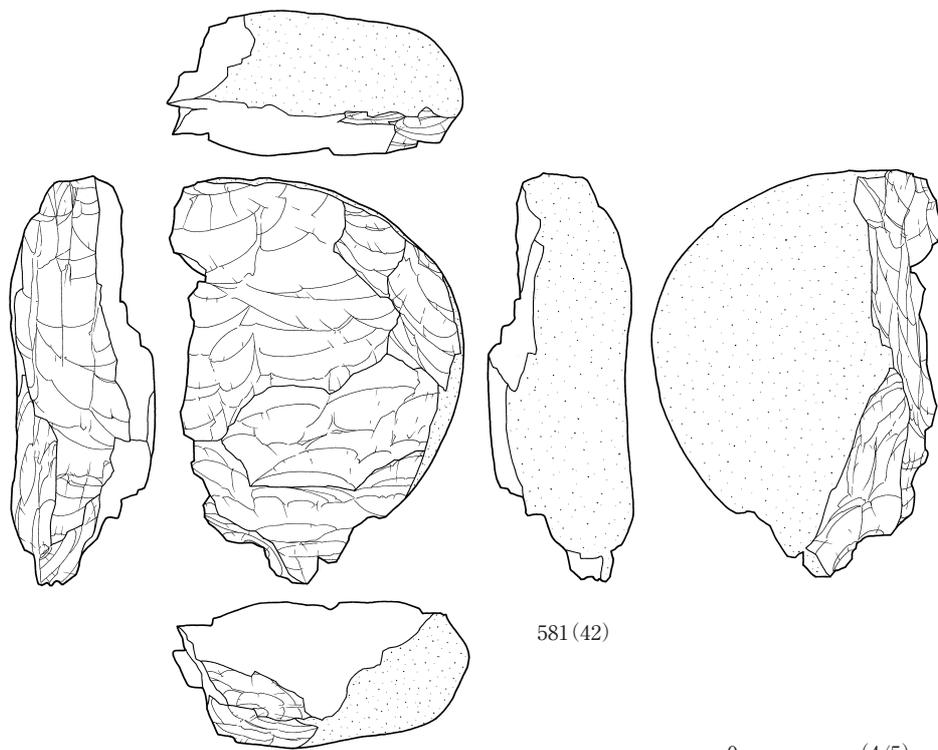


第170図 SS1区出土石器 (4)

る。山形土偶の時期であろう。腰を鋭く抉り沈線が廻る。首部にも沈線を廻らせる。細部の造形はない。524は山形土偶の脚部である。沈線を数本廻らせる。両端部を欠損している。525は山形土偶の後頭部と考えられる。顔面部を欠損している。526は動物形土製品で、イヌもしくはオオカミとみられる。耳とおもわれる部位の表現が大げさであり、藤岡神社遺跡（栃木県下都賀郡藤岡町）のイヌ形土製品とはかなり異なるものである。後頭部の形状は土偶のそれに近い。左耳は欠損しており、右耳には小さい穿孔がみられる。527～529は晩期の土版である。527と528は沈線区画に刺突を充填するとい



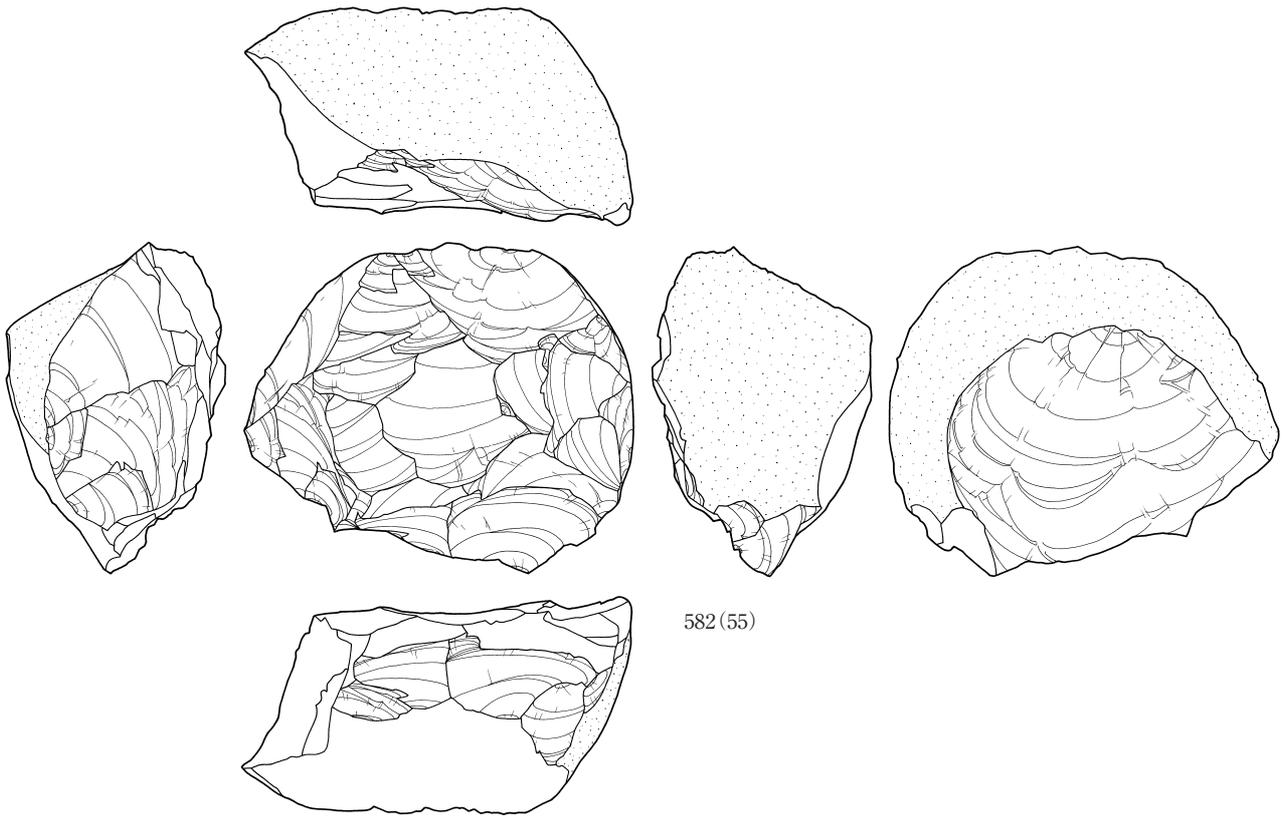
580(47)



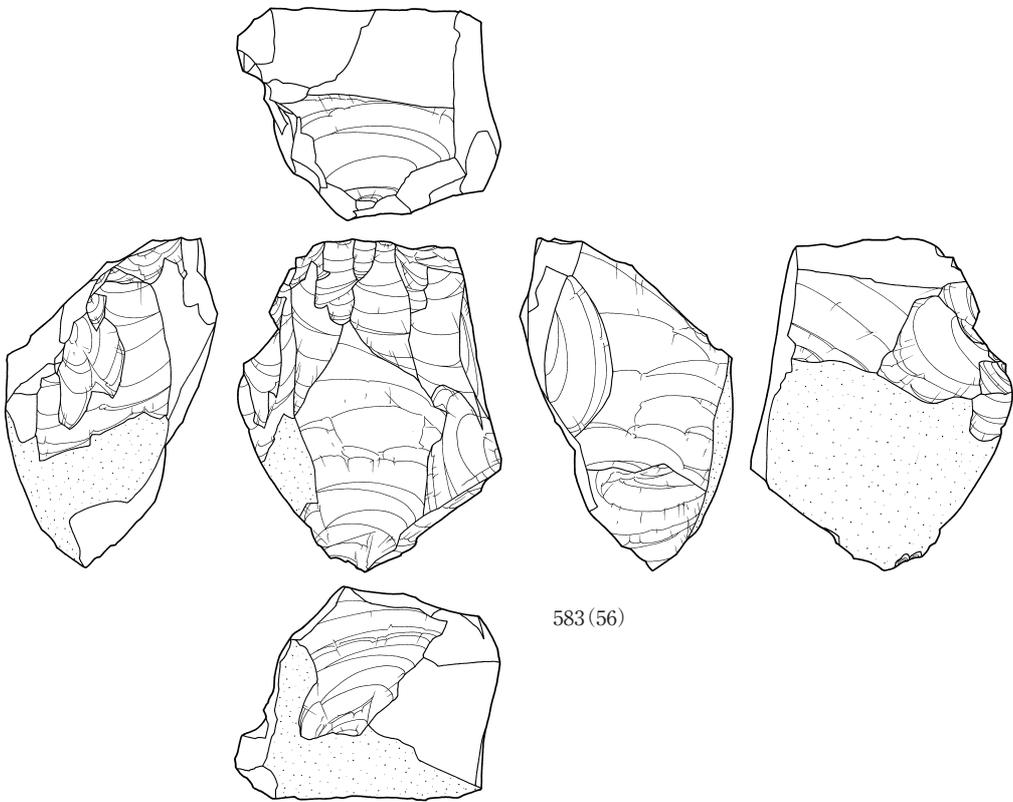
581(42)

0 (4/5) 5cm

第171图 SS1区出土石器 (5)



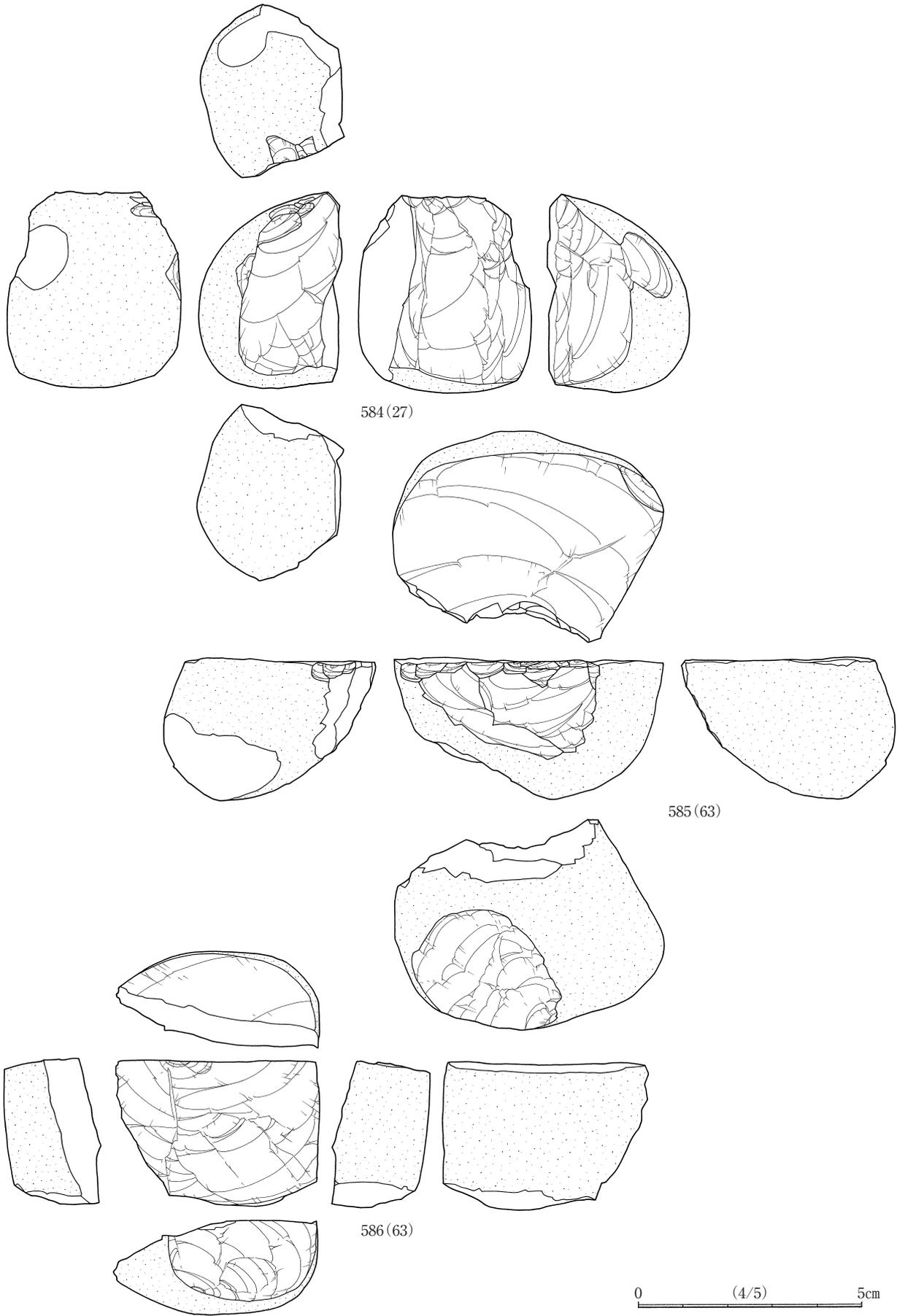
582(55)



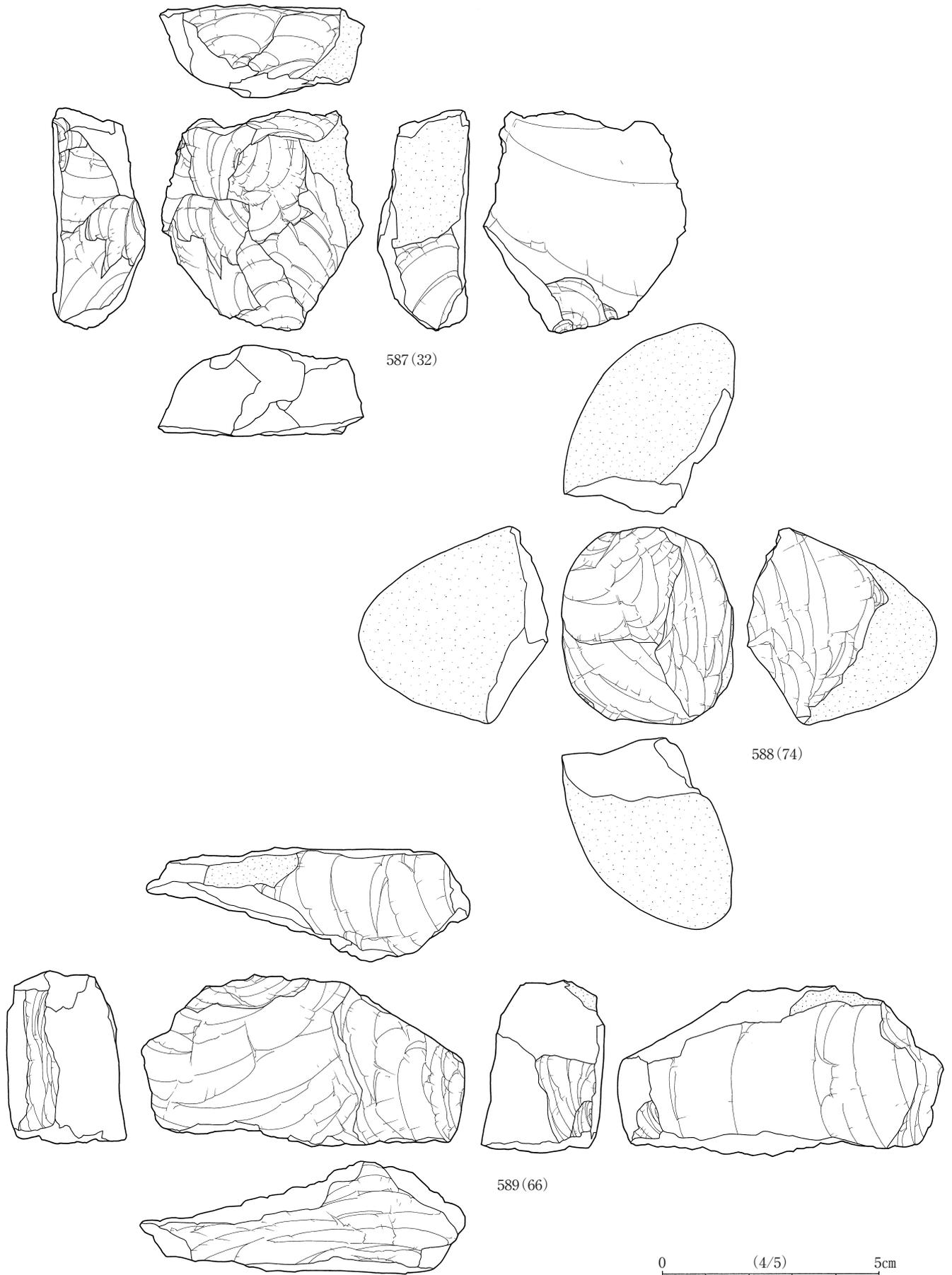
583(56)

0 (4/5) 5cm

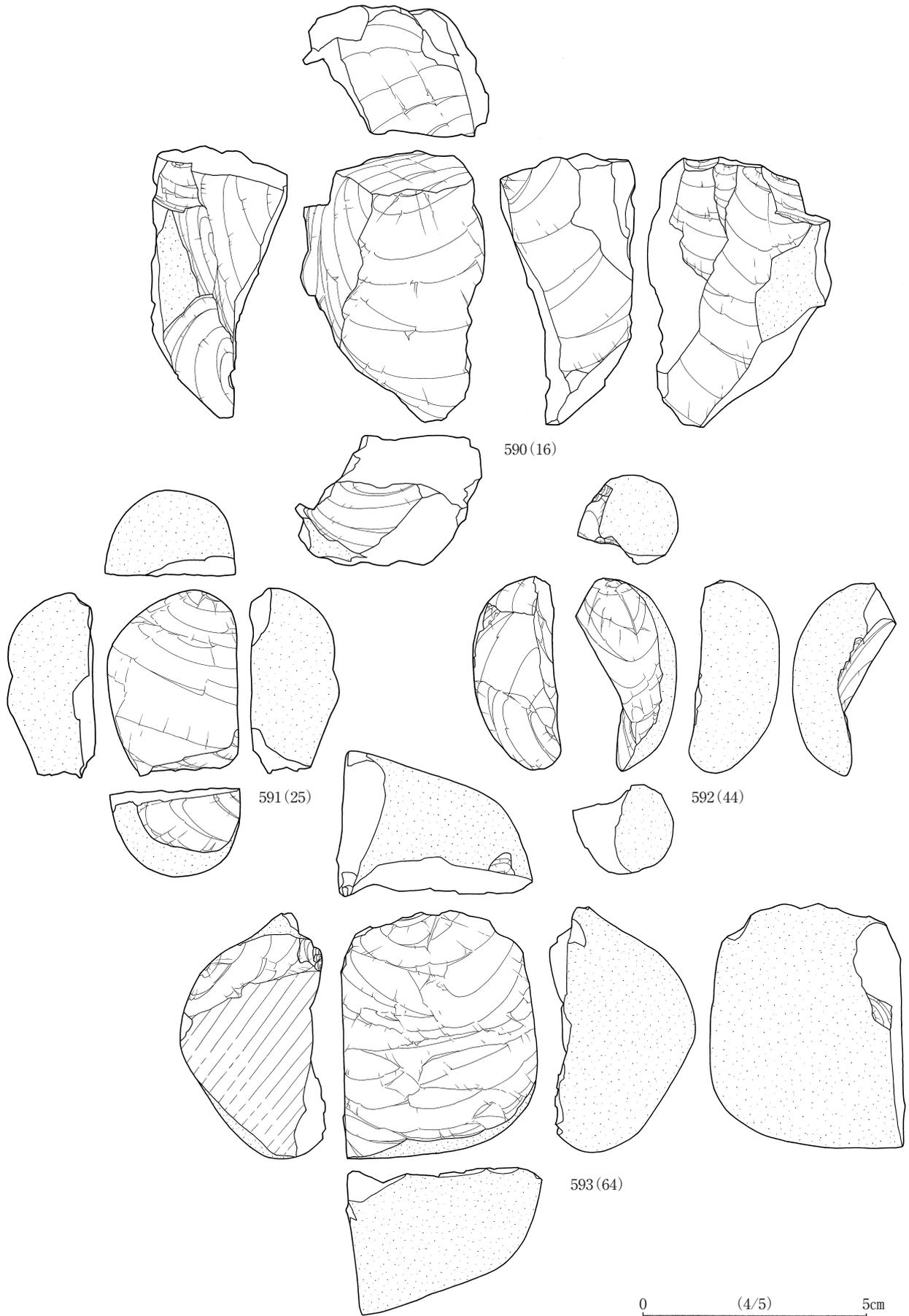
第172图 SS1区出土石器 (6)



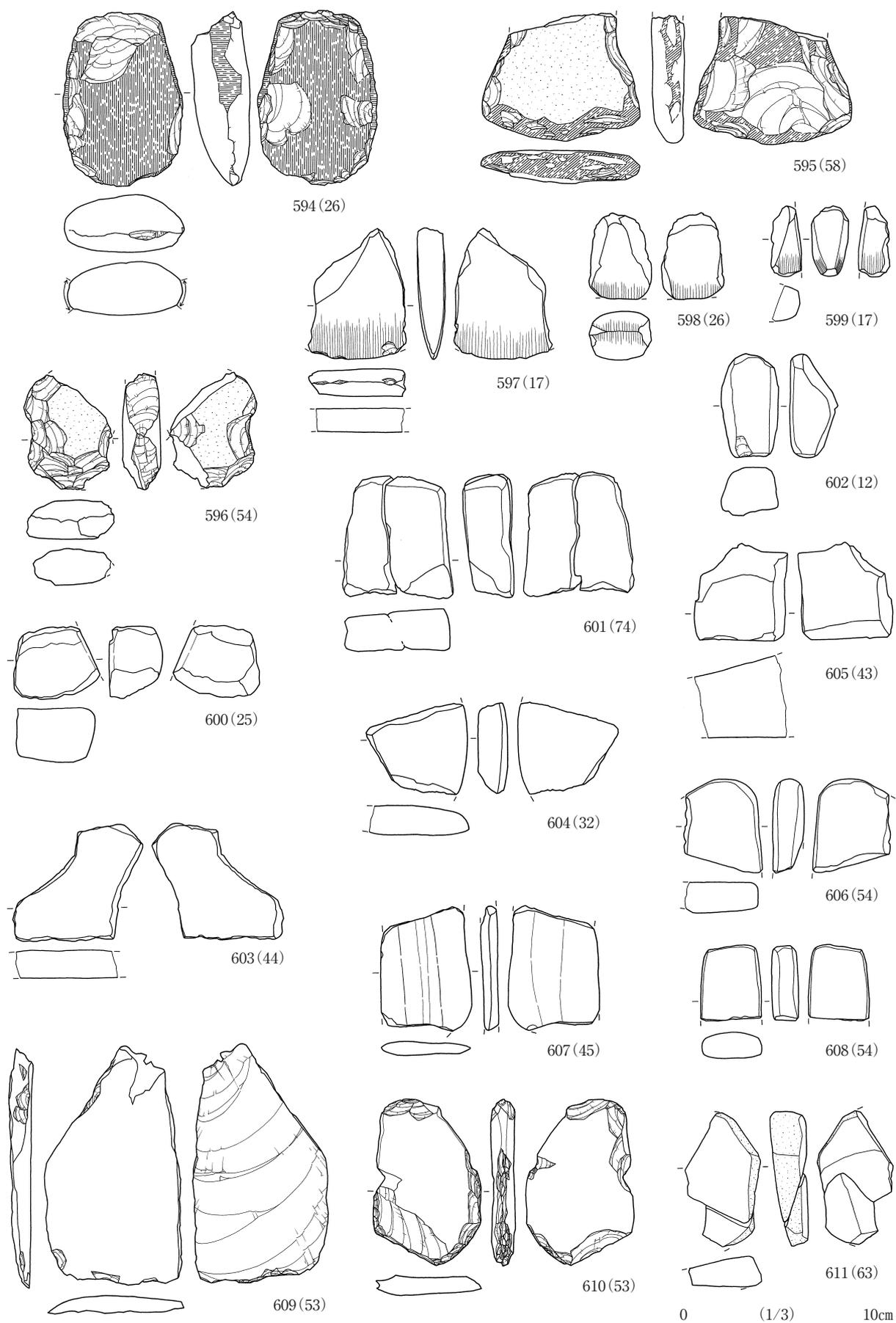
第173图 SS1区出土石器 (7)



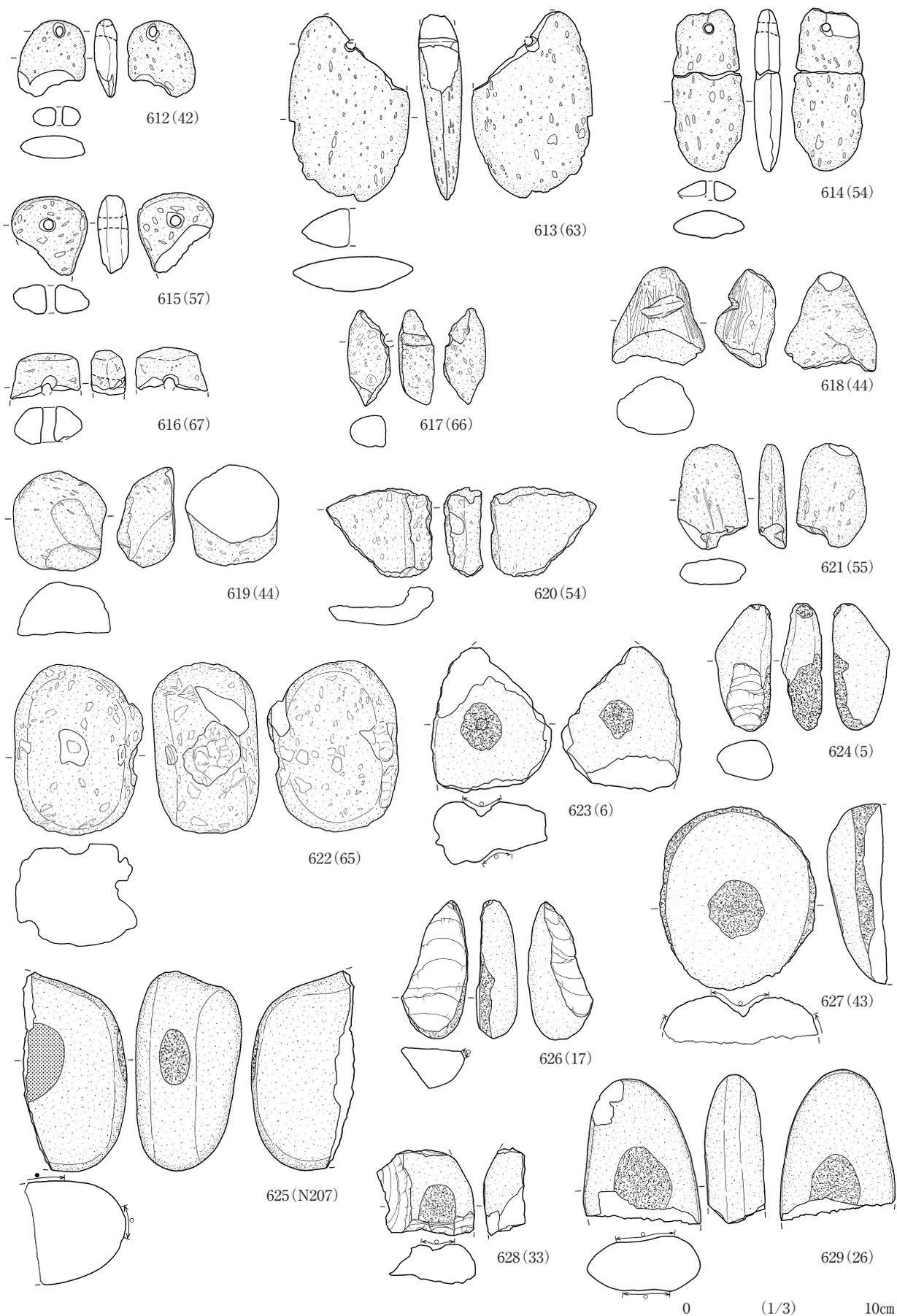
第174图 SS1区出土石器 (8)



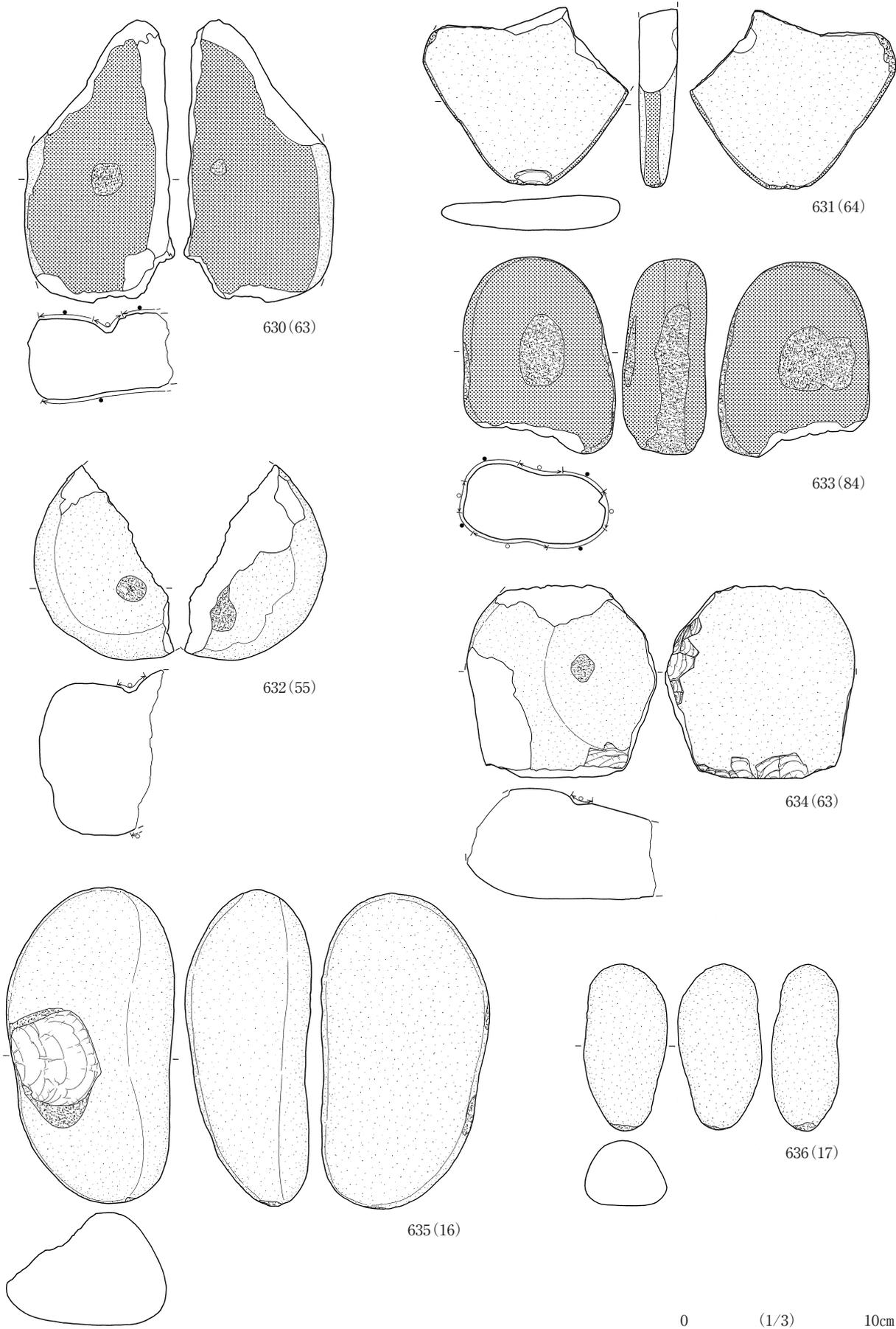
第175图 SS1区出土石器 (9)



第176图 SS1区出土石器 (10)

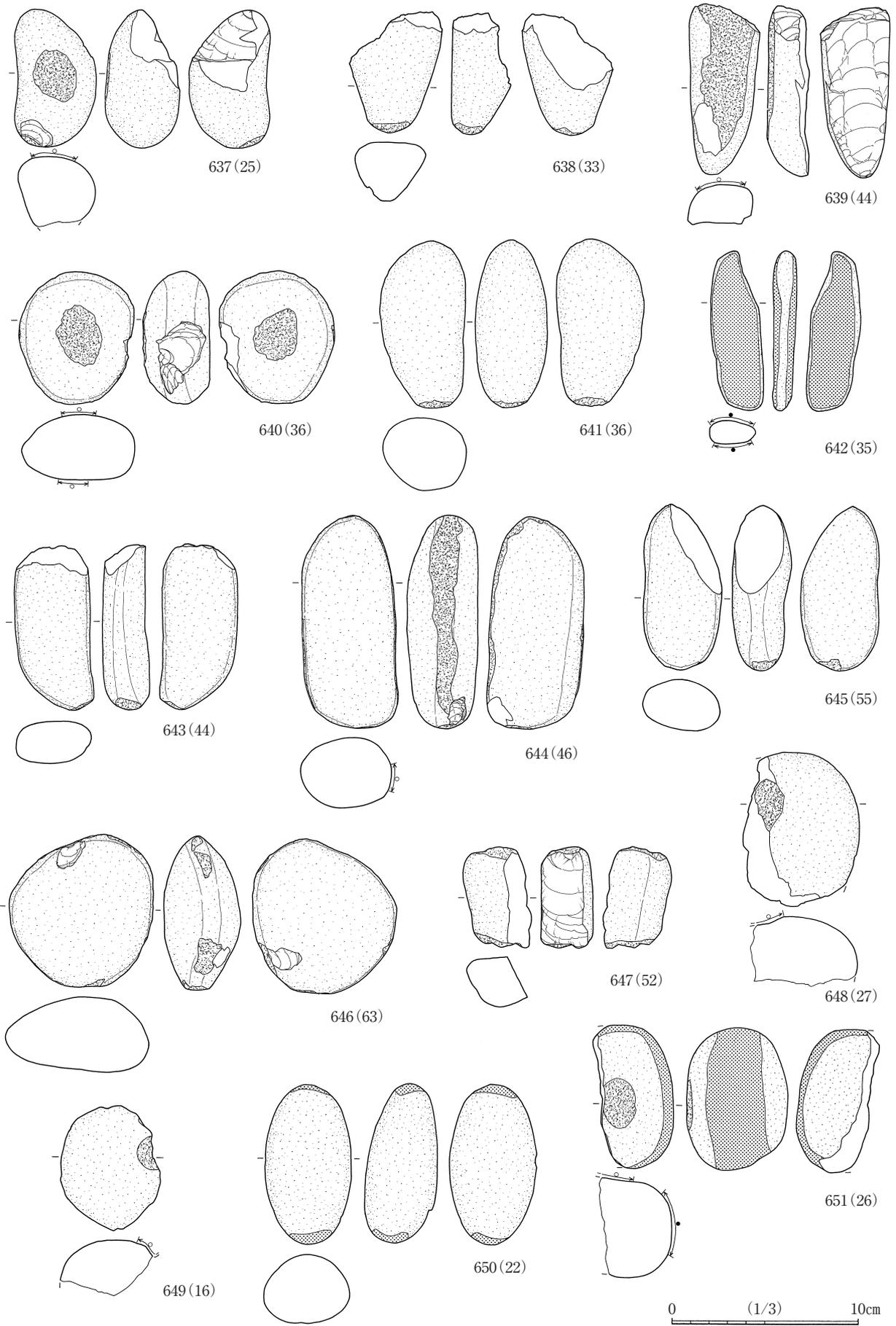


第177图 SS1区出土石器 (11)

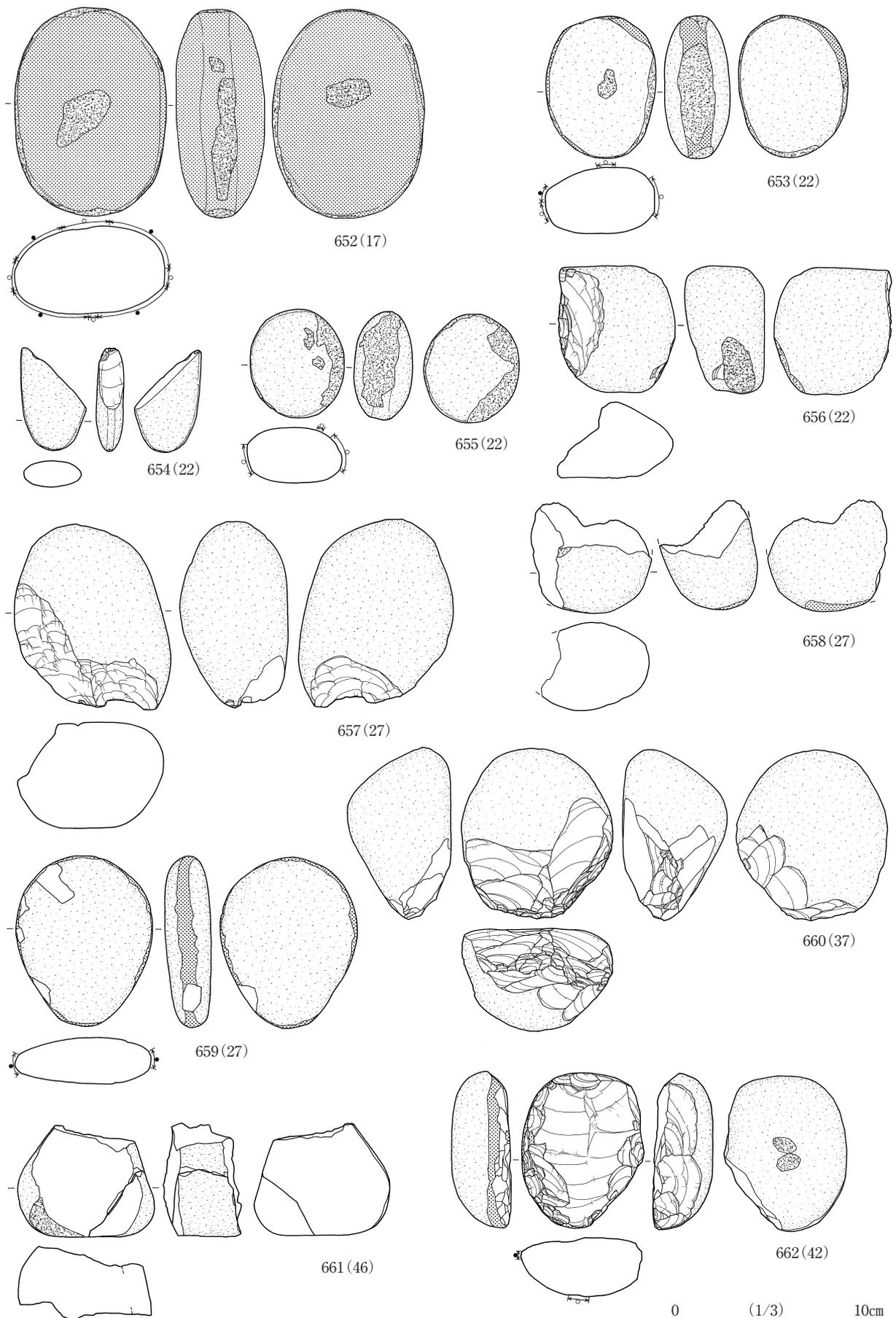


0 (1/3) 10cm

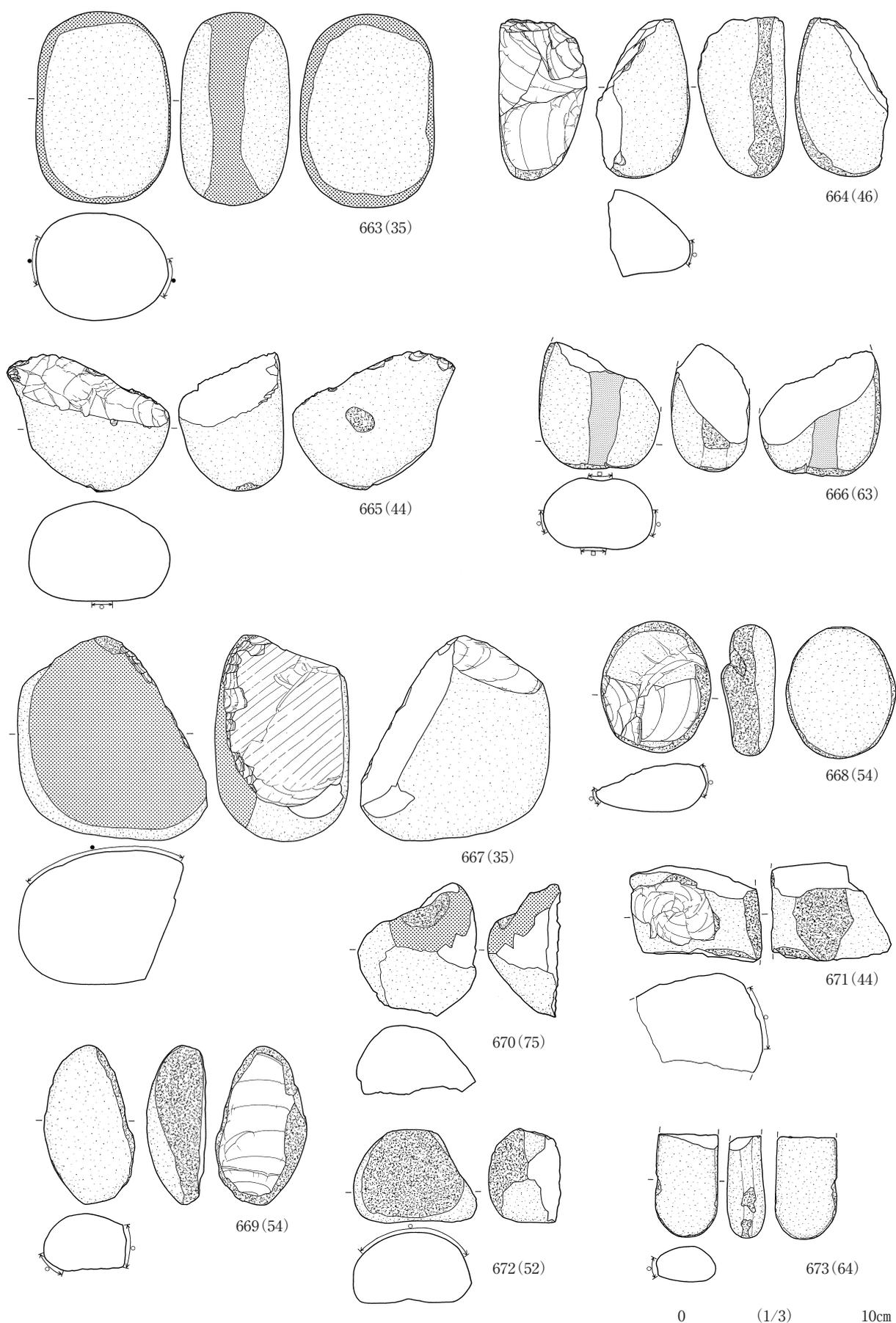
第178图 SS1区出土石器 (12)



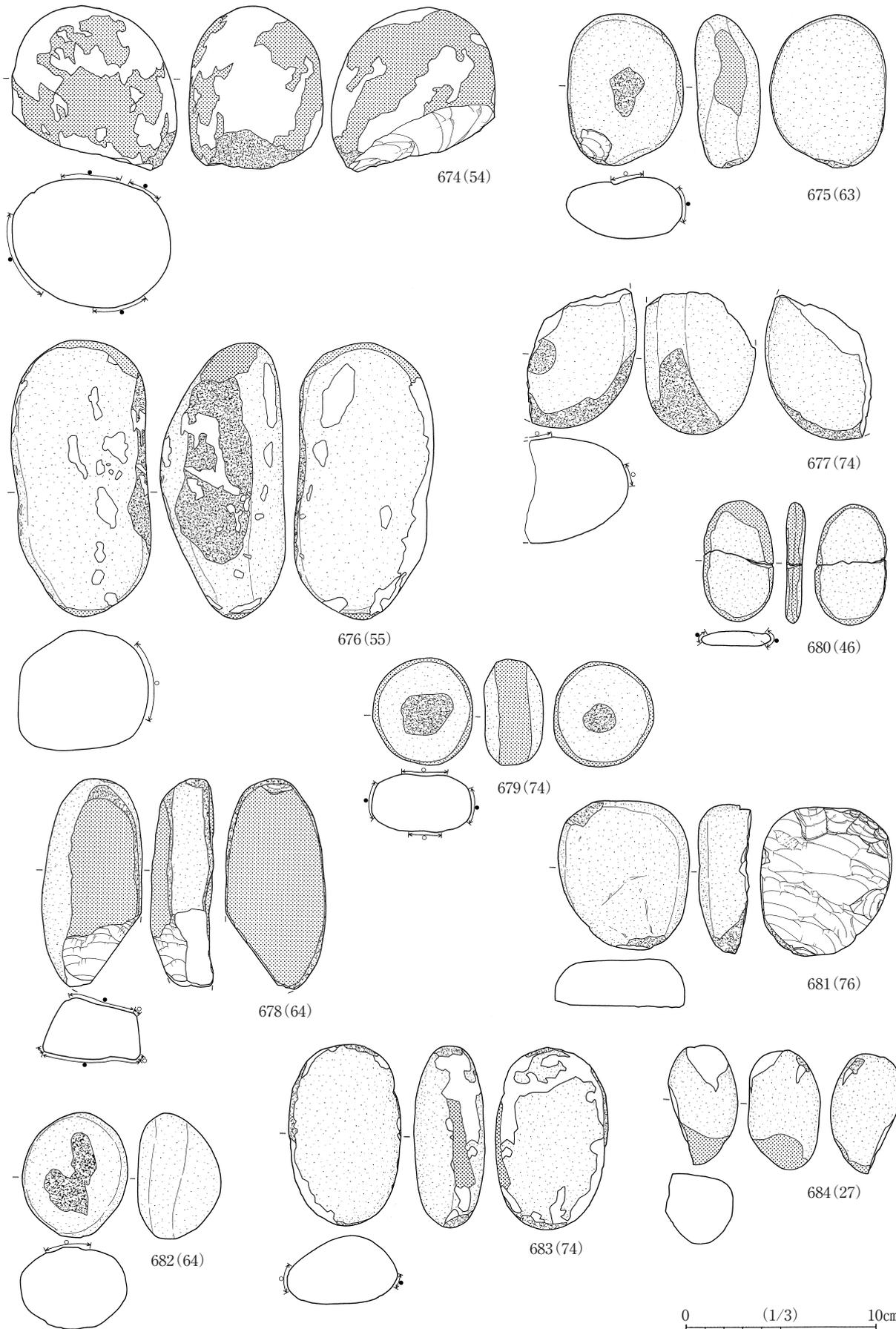
第179图 SS1区出土石器 (13)



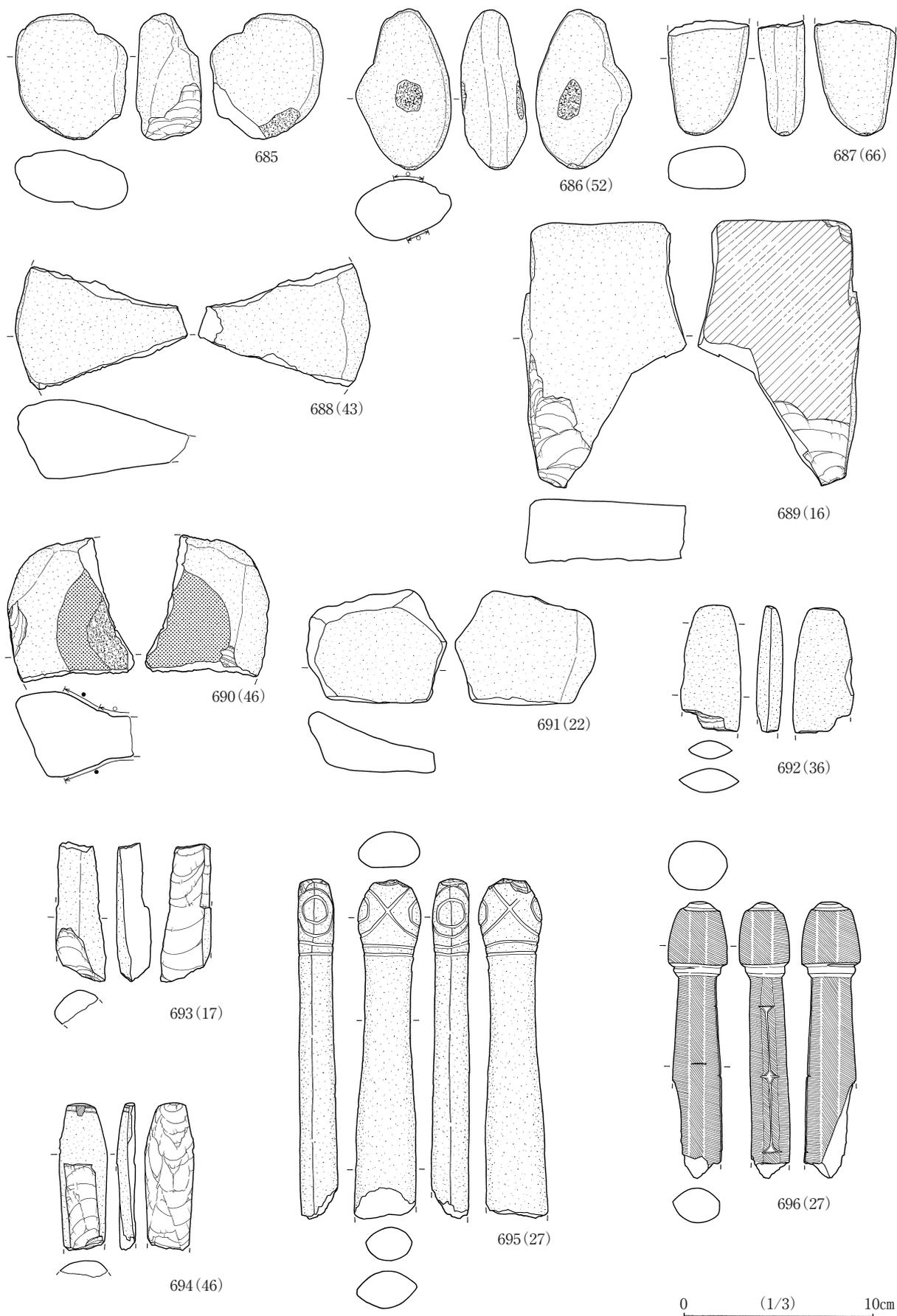
第180图 SS1区出土石器 (14)



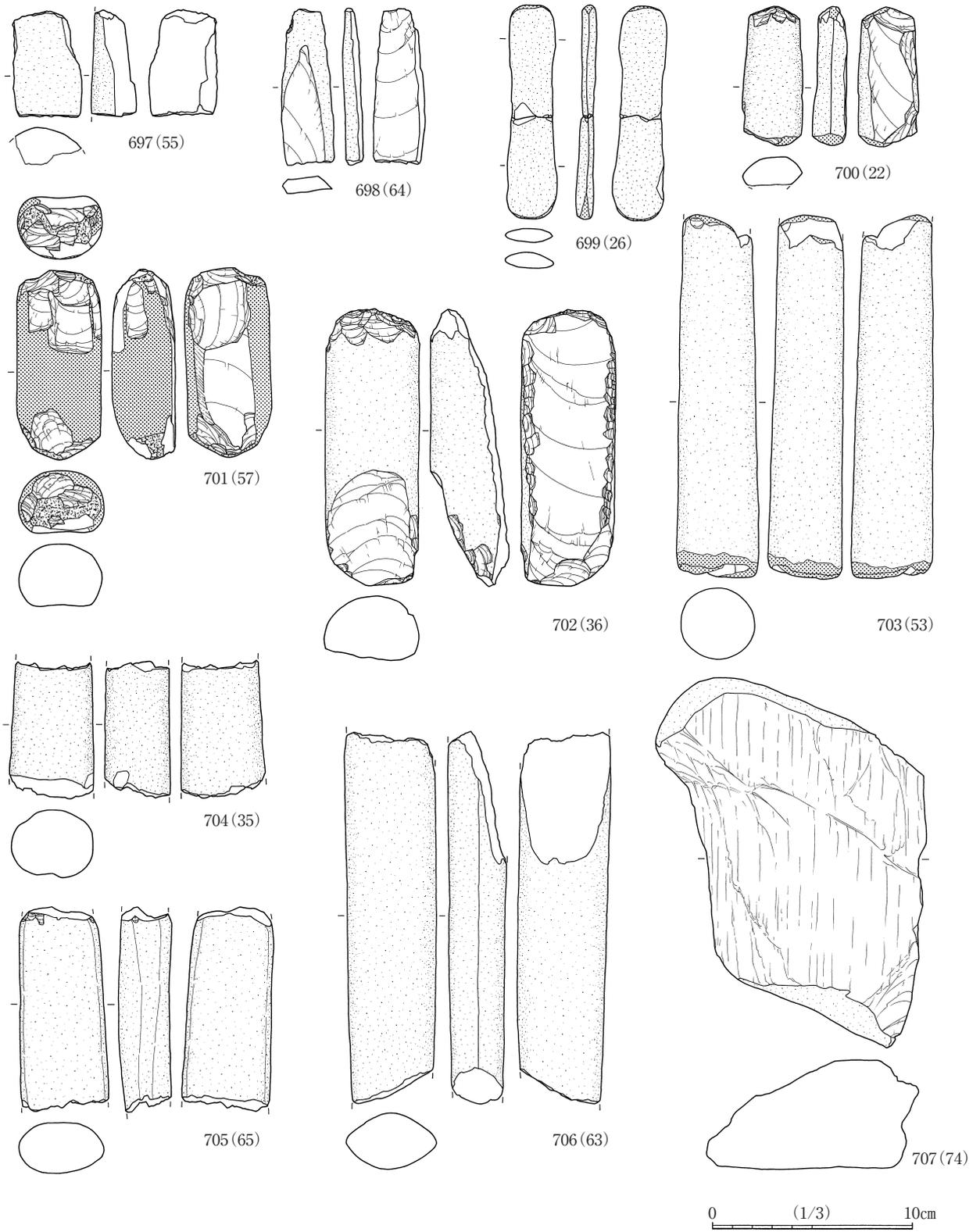
第181图 SS1区出土石器 (15)



第182图 SS1区出土石器 (16)



第183图 SS1区出土石器 (17)



第184图 SS1区出土石器 (18)

う共通点があり、同一個体の可能性もある。528は三叉文が施される。529は沈線で渦巻状の入組文を施す。530は蓋状土製品である。沈線を施した後、2カ所に穿孔する。中央部分に鈕が剥落したと思われる痕跡がみられる。他の土製品と比べても決して丁寧な作りではない。533～539は土器片錘、540～546は土製円盤である。

547～552は石製玉類である。547は滑石製、548は翡翠製の管玉である。549・550は翡翠製の丸玉である。今回報告分のなかでは滑石製品が80%（20点中16点）と多く、翡翠製品4点のうち、67・68号住居跡において3点出土している。

551は滑石製の勾玉である。横断面は三角形に近い。角が残り磨きも粗いため定型の勾玉を目指した未製品とみられる。552は滑石の原石である。平板状であるが両面に研磨痕が観察され、形状は勾玉を造りだす意図がみてとれる。

553～707は出土した石器である。出土量は極めて多かった。553～593は剥片石器である。定型的な製品はほとんどなく、加工痕のある剥片や石核類が多数を占める。554～559は両極剥片・石核、560～567・576は二次加工痕のある剥片である。594～599は石斧類、600～611・631は砥石類、612～622は軽石製品、624～629・633・635～656・658・659・661～687は磨石類である。623・630～632・634・688～691は石皿である。692～706は石剣である。全体が分かるものは少なく、破片が多い。695・696の石剣は519の土偶と共に出土し、祭祀の痕跡を窺わせる。701～703などは破断面にも敲打や研磨痕が観察され、2次的に利用されたことが分かる。707は一応石棒としたが、石皿かもしれない。

SS1区から検出された土坑について

SS1調査区からは、後期後葉に構築されたやや大形の土坑が12基検出された。いずれも直径2～3m、深さは1～2.5m程度の円筒形で、66～67号住居跡と前後して作られたとみられる。いくつかの土坑からは、完形に近い土器が投棄されたような状況で出土した。特にN204土坑から出土した土器は、概報（米田 1980）によっていち早く研究者に知られるところとなり、安行1式の良い一括資料として広く引用されている。

なお、これらの土坑については小竪穴という呼び方もあるが、こうした遺構の性格について十分検討されないまま、都合の良い言葉を援用するのは適切でないと考えられるので、ここでは最大公約数的ではあるが土坑という名称を用いる。また、調査時N番号を付した遺構の中には、明らかにこれらの土坑とは範疇が異なるもの、大形住居跡の柱穴と考えた方がいいものもある。本来なら別項目にすべきであろうが、土坑と切り合っているものが多く、土坑と大形住居跡との新旧関係を窺うのに適した資料が出土したものもあるので、この項で扱う。

N201号土坑（第185・186図、図版8・60・61・63・111）

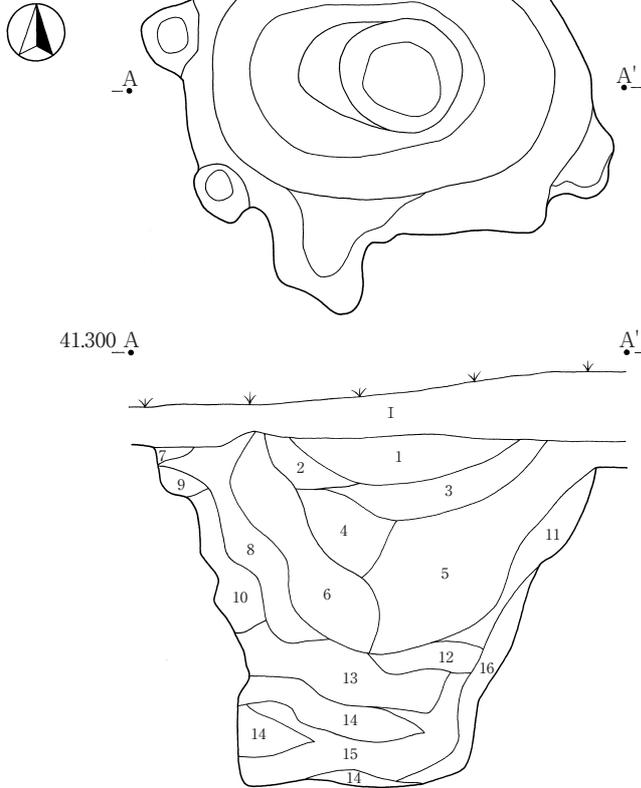
SS1-44グリッドに位置する。66B号住居跡を切って構築される。平面形態は長楕円形を呈する。規模は3.40×2.58m、遺構確認面から底面までの深さは1.74mを測る。

出土遺物は安行1式を中心とするが、粗製土器が多数を占めていた。12は胴部に櫛掛け状の磨消縄文を配するが、縄文の幅が狭い。17は口縁部・胴部の横位のキザミが、沈線による枠から甚だしく外れているもので、工具痕跡も鮮明に残る。

N202号土坑（第190・193図、図版60）

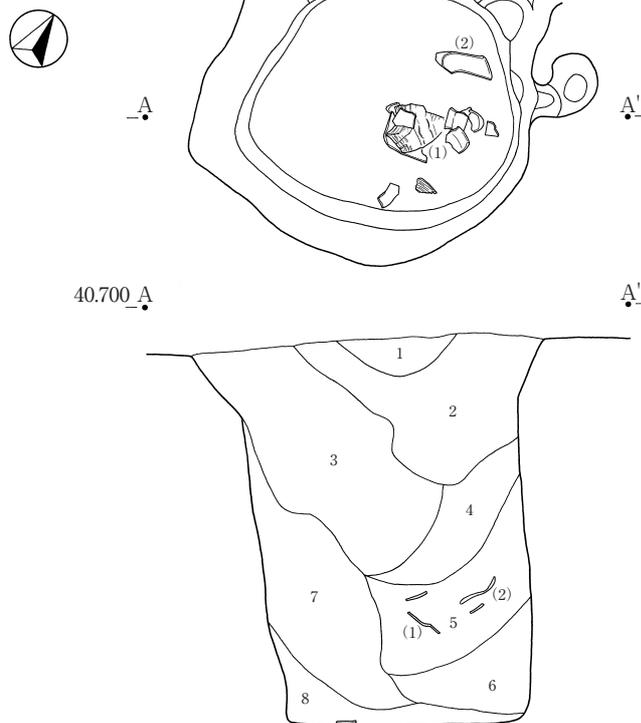
SS1-43・44グリッドに位置する。66C号住居跡の壁柱穴に重なるように検出されるが、新旧関

N201号土坑

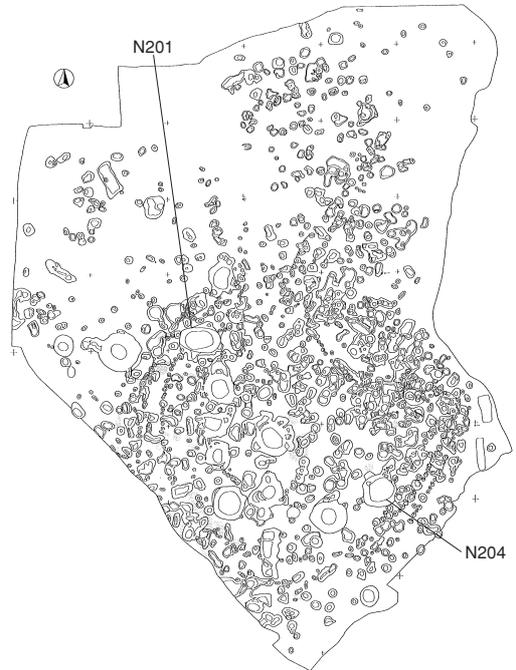


- N201
- 1 褐色土層
 - 2 暗褐色土層
 - 3 黒褐色土層
 - 4 褐色土層 ローム粒・炭化粒を若干含む
 - 5 暗褐色土層 ローム粒・炭化粒を多く含む
 - 6 褐色土層 ロームブロックを含む
 - 7 焼土層
 - 8 暗褐色土層 ローム粒をブロック状に含む
 - 9 暗褐色土層
 - 10 褐色土層 ローム粒を多く含む
 - 11 黒褐色土層 ローム粒・炭化粒を含む
 - 12 黒褐色土層 ローム粒を含む
 - 13 暗褐色土層 ローム粒を多く含む
 - 14 黒褐色土層 ローム粒を含む
 - 15 灰黒色土層 ローム粒を含む
 - 16 黒褐色土層 ローム粒・炭化粒を含む

N204号土坑

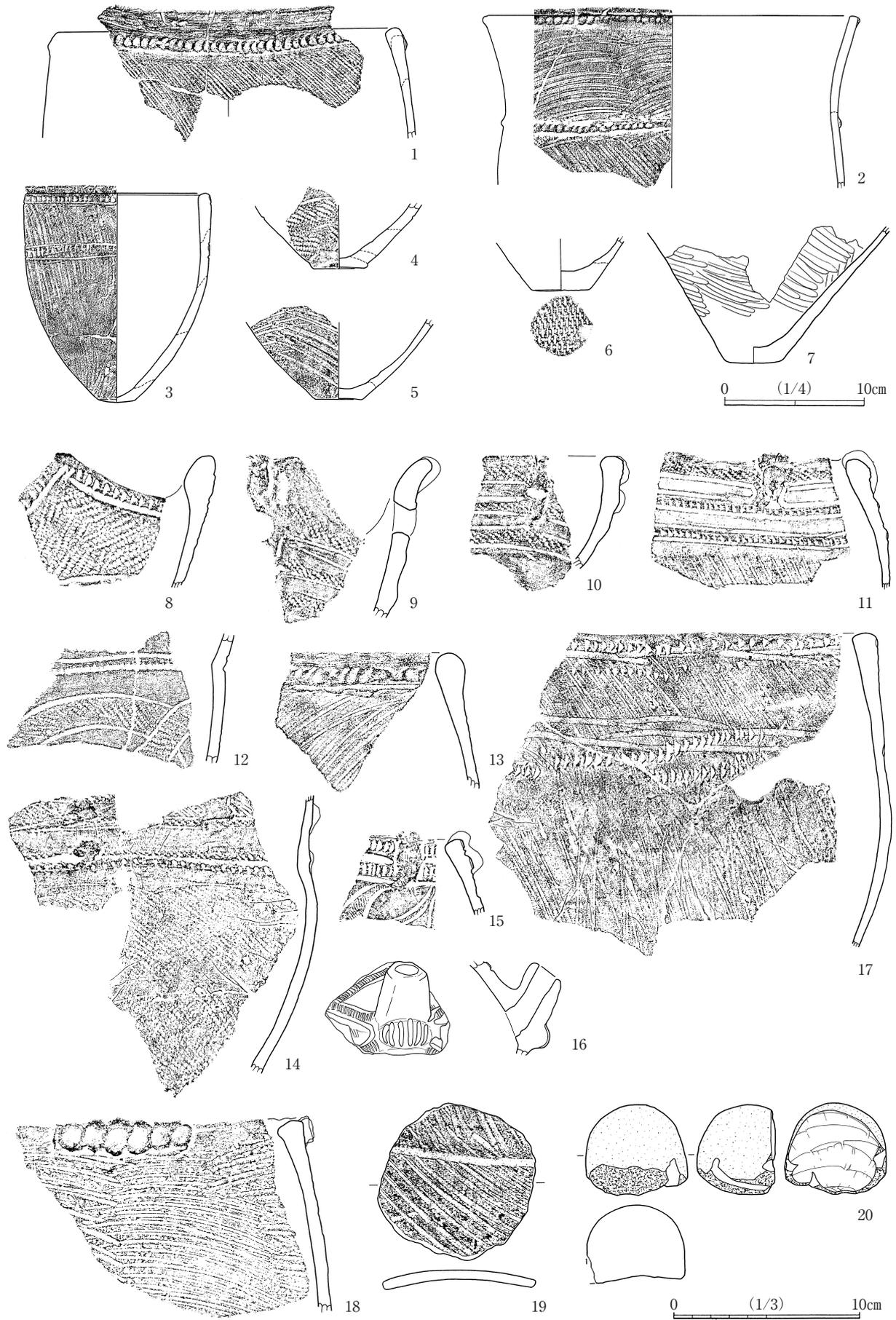


- N204
- 1 ローム層
 - 2 黒褐色土層 焼土粒・ローム粒・炭化粒を含む
 - 3 暗褐色土層 ロームブロック・ローム粒・炭化粒を含む
 - 4 暗褐色土層 ローム粒・炭化粒を含む
 - 5 黒褐色土層 ローム粒を含む
 - 6 暗灰褐色土層 ロームブロックを若干含む
 - 7 褐色土層 ロームブロックを含む
 - 8 砂質黒灰色土層

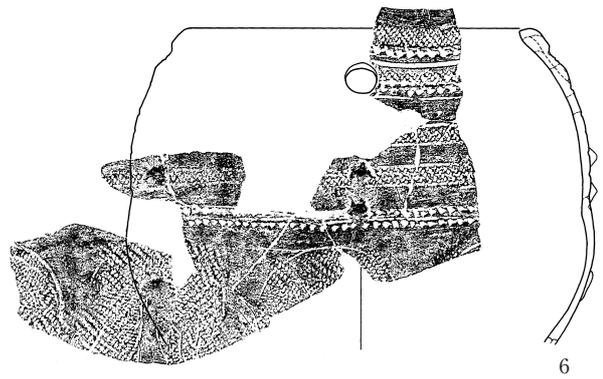
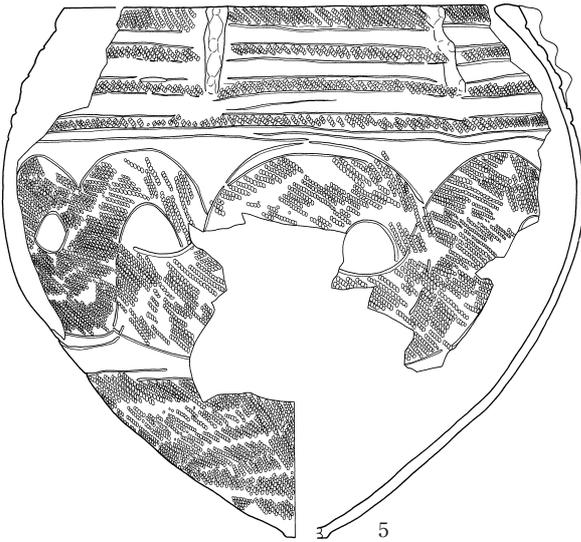
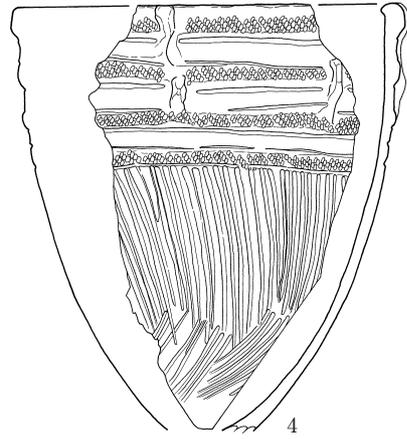
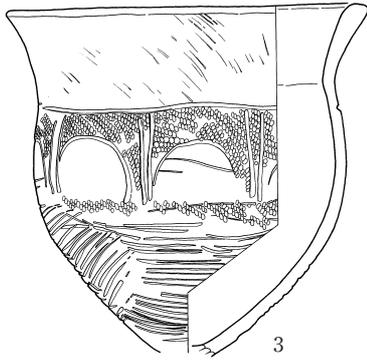
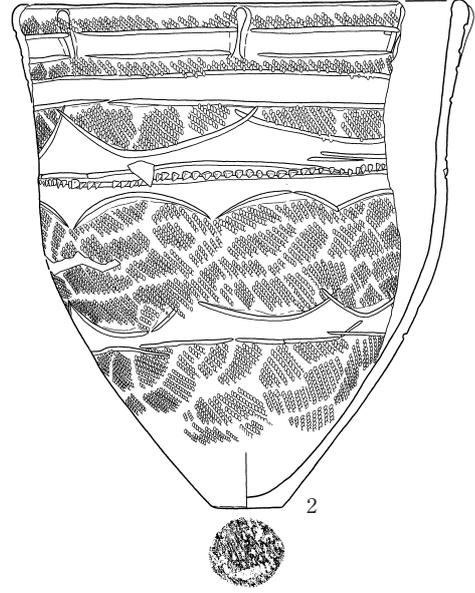
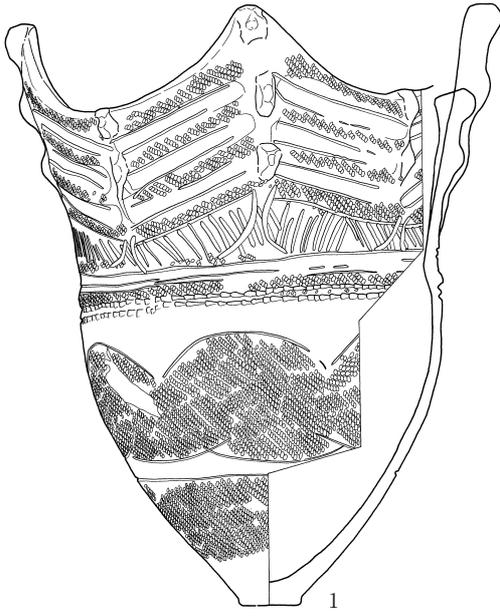


0 (1/40) 1m

第185図 SS1区N201・N204号土坑

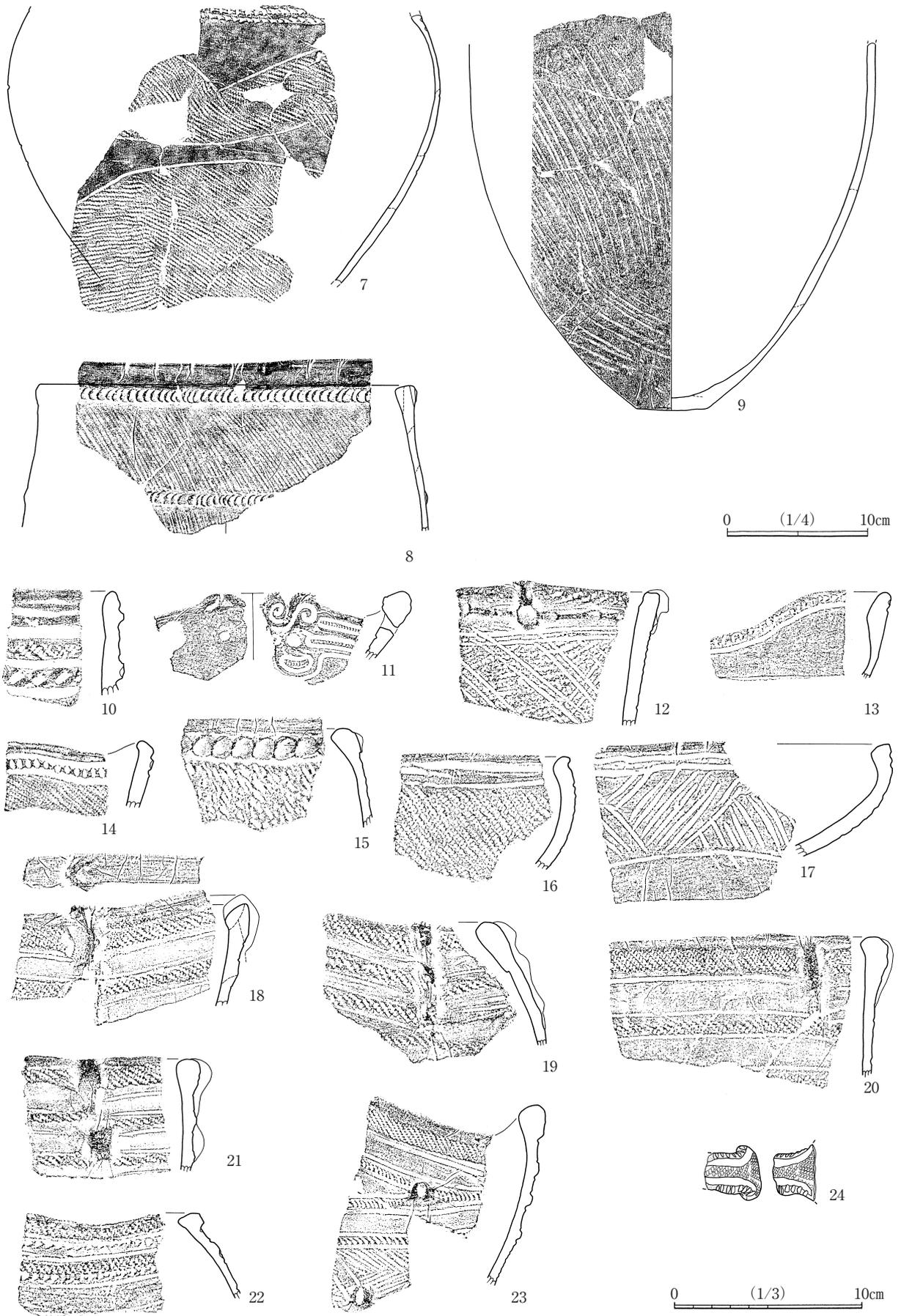


第186图 SS1区N201号土坑出土遗物

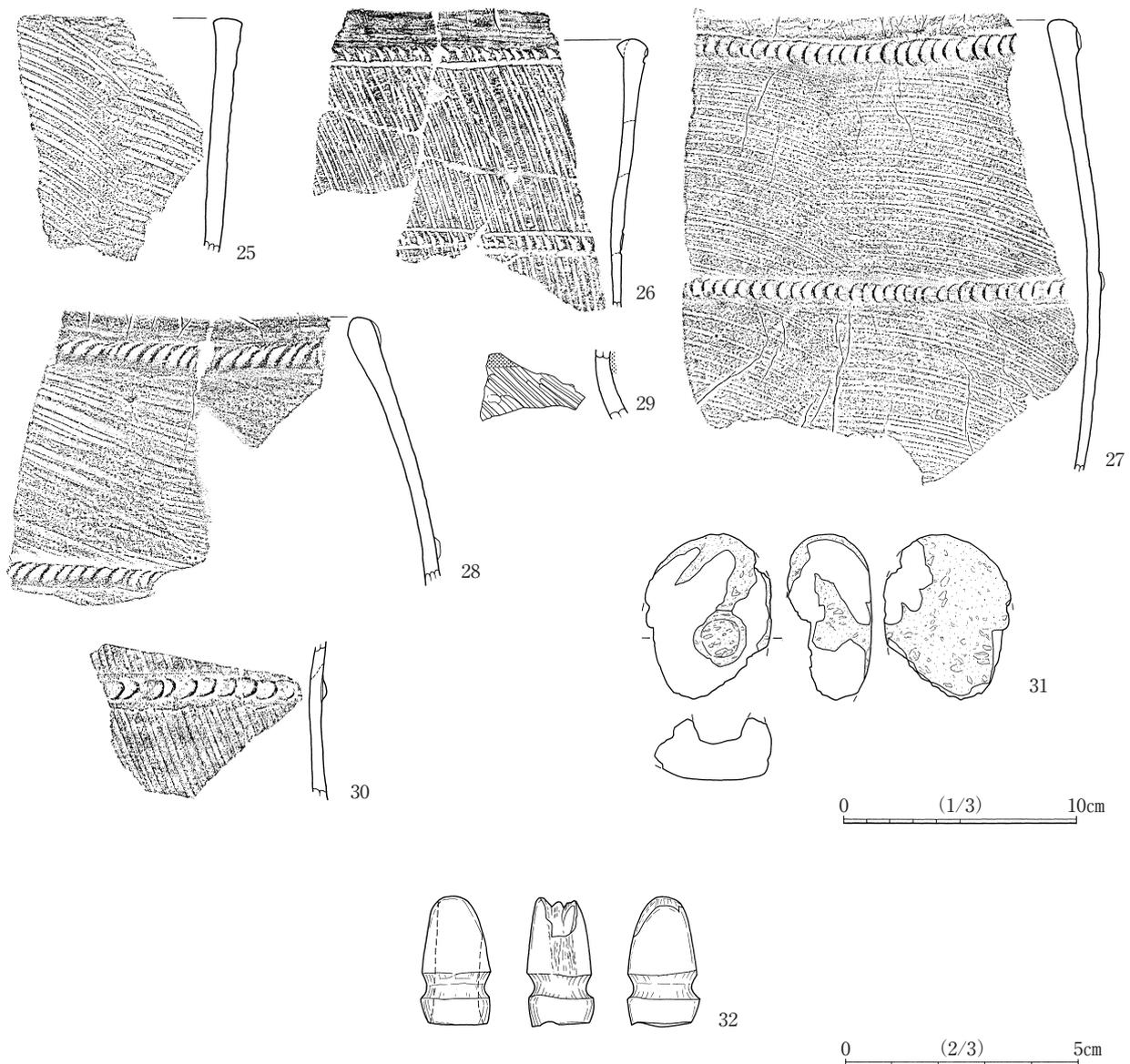


0 (1/4) 10cm

第187图 SS1区N204号土坑出土遗物 (1)



第188图 SS1区N204号土坑出土遗物 (2)



第189図 SS1区N204号土坑出土遺物 (3)

係は不明。平面形態は円形を呈する。規模は径1.06×1.04m、遺構確認面から底面までの深さは0.44mを測る。

遺物は少なく、釣手土器が目立つ程度である。

N203号土坑 (第190・193図、図版60・61)

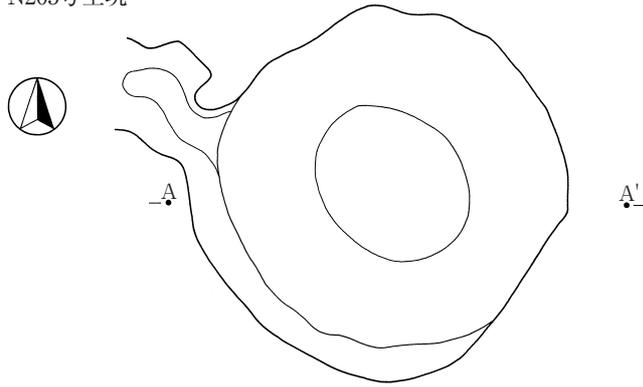
SS1-44グリッドに位置する。66C号住居跡の壁柱穴に重なるように検出されるが、新旧関係は不明。平面形態は不整円形とでも言うべきものである。規模は径1.38×0.91m、遺構確認面から底面までの深さは0.20mを測る。この土坑は他の土坑とは規模・形状が大きく異なる。66号住居跡に伴うものと考えられるが、性格は不明。

遺物は少なく、図示したものがほとんど全てである。

N204号土坑 (第185・187~189図、図版8・60~63・106)

SS1-66グリッドに位置する。66B号住居跡を切って構築される。平面形態は円形を呈する。規模は径2.71m、遺構確認面から底面までの深さは2.04mを測る。

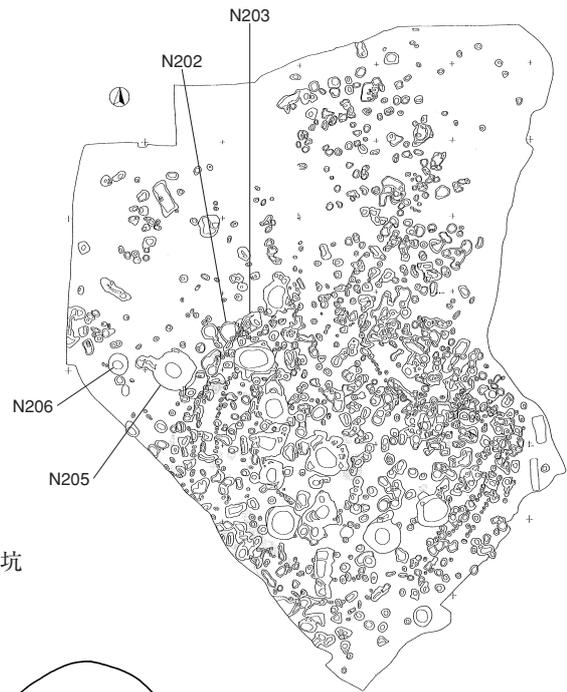
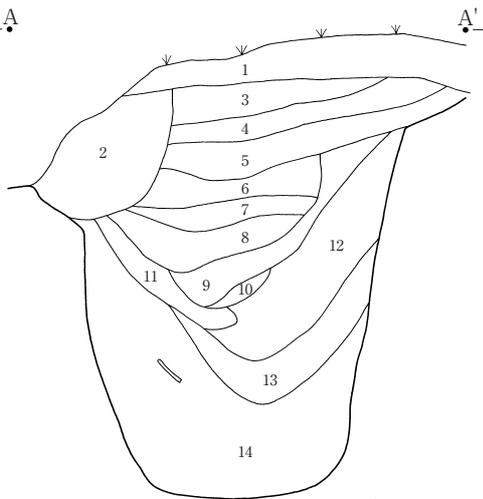
N205号土坑



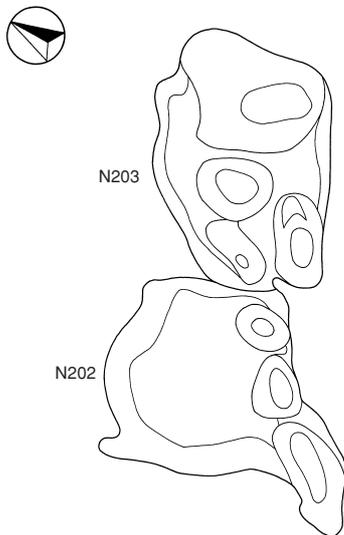
N205

- 1 表土層
- 2 黒褐色土層 しまり弱い
- 3 暗褐色土層
- 4 黒褐色土層 骨を含む
- 5 褐色土層
- 6 褐色土層 ロームを含む
- 7 暗褐色土層
- 8 褐色土層
- 9 暗褐色土層
- 10 暗褐色土層 骨を含む
- 11 ローム質土層
- 12 褐色土層
- 13 暗褐色土層
- 14 黒褐色土層

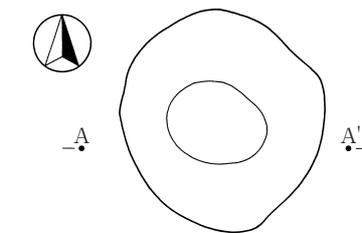
41.100_A



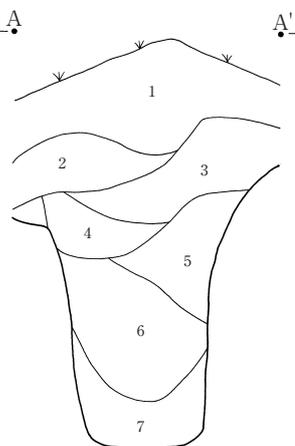
N202・203号土坑



N206号土坑



40.900_A

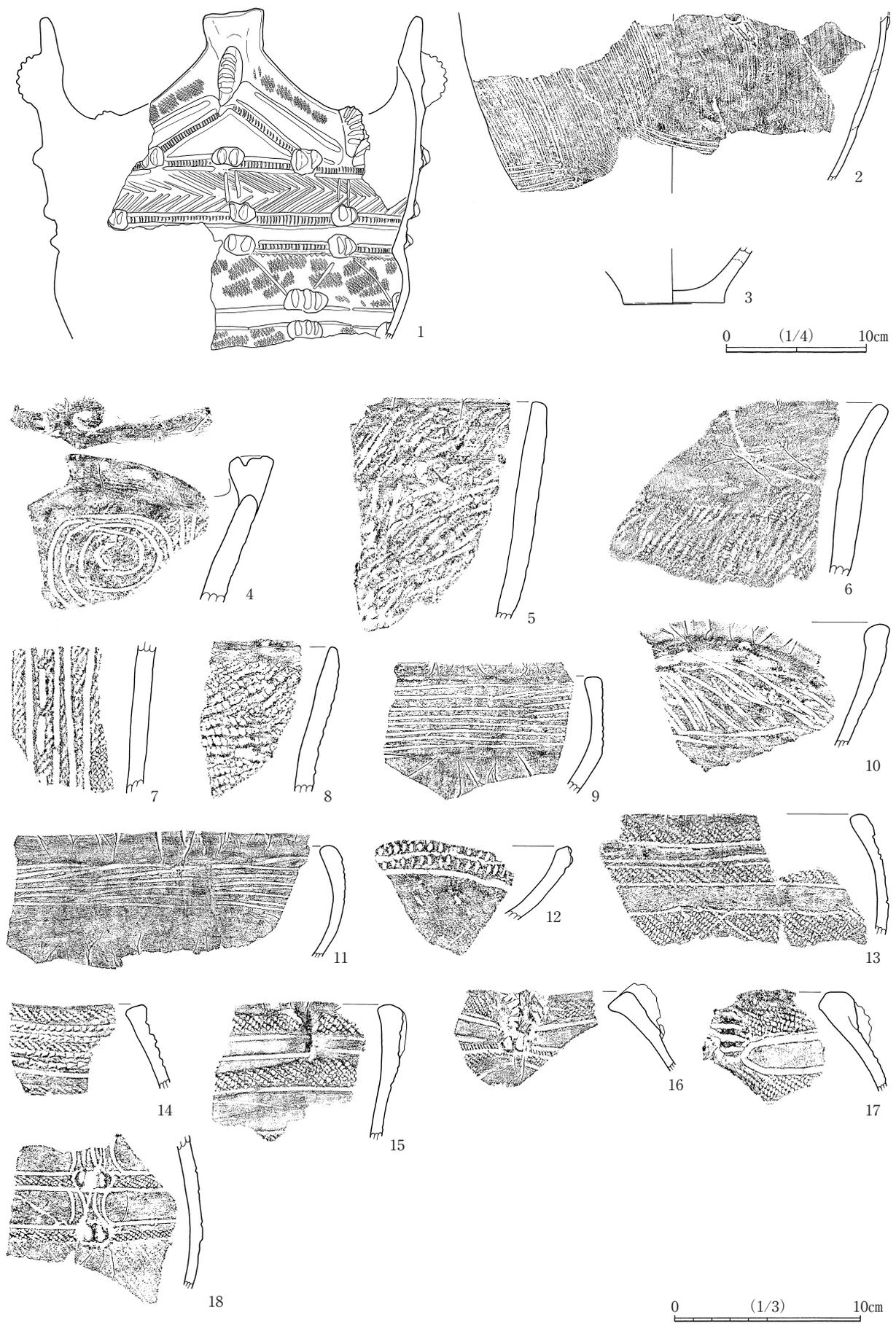


N206

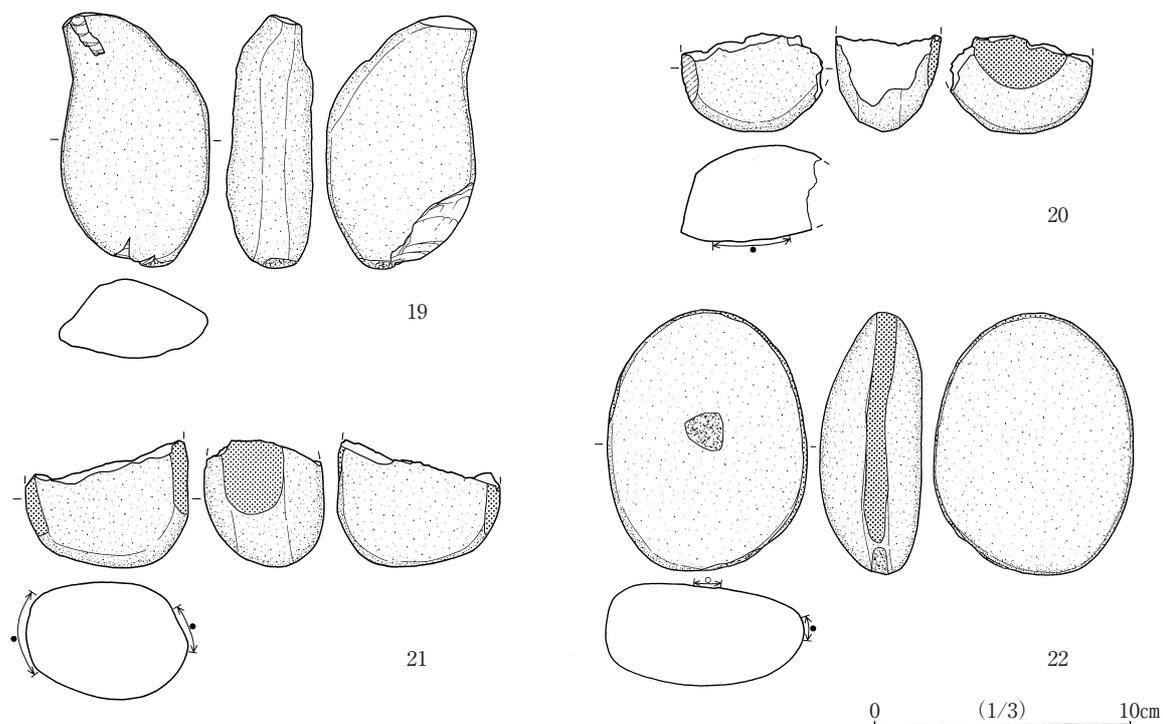
- 1 表土層
- 2 褐色土層 ローム粒を若干含む
- 3 褐色土層
- 4 褐色土層 ローム粒を多く含む
- 5 黒褐色土層
- 6 黒色土層
- 7 黒褐色土層

0 (1/40) 1m

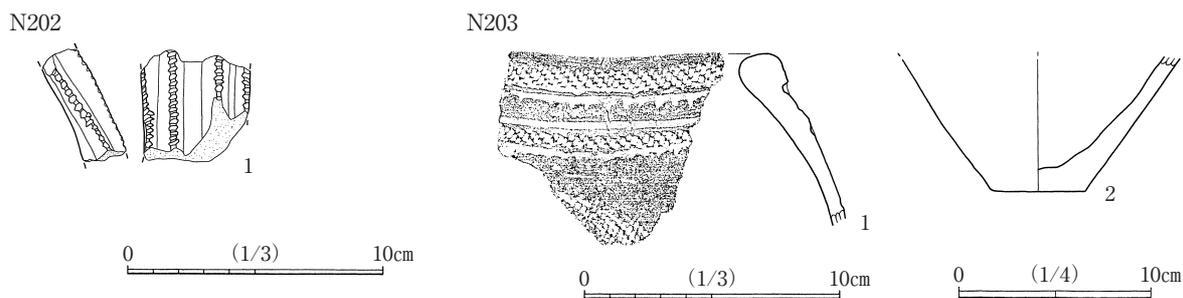
第190図 SS1区N202・N203・N205・N206号土坑



第191图 SS1区N205号土坑出土遗物 (1)



第192図 SS1区N205号土坑出土遺物 (2)



第193図 SS1区N202・N203号土坑出土遺物

出土遺物は多い。1～5は概報に掲載されたもので、土坑の底に近い5層から集中して出土した。ただし、遺物番号は振られておらず、現場図面中の文様などから同定した。それ以外に器形が復元できたのが6～9である。6は瓢形で、貼り付け瘤と穿孔が縦位に配される。9は上部の破損部附近は無文帯となっている。24は釣手土器の釣手に付けられる飾り把手である。29は斜行条線が施される深鉢胴部で、無文帯に赤彩が施される。31は軽石製品で、表面に人為的と考えられる円形のくぼみがみられるが、目的や用途は不明。32は鹿角製の弭形角製品で、内外面に黒色物質が付着する。

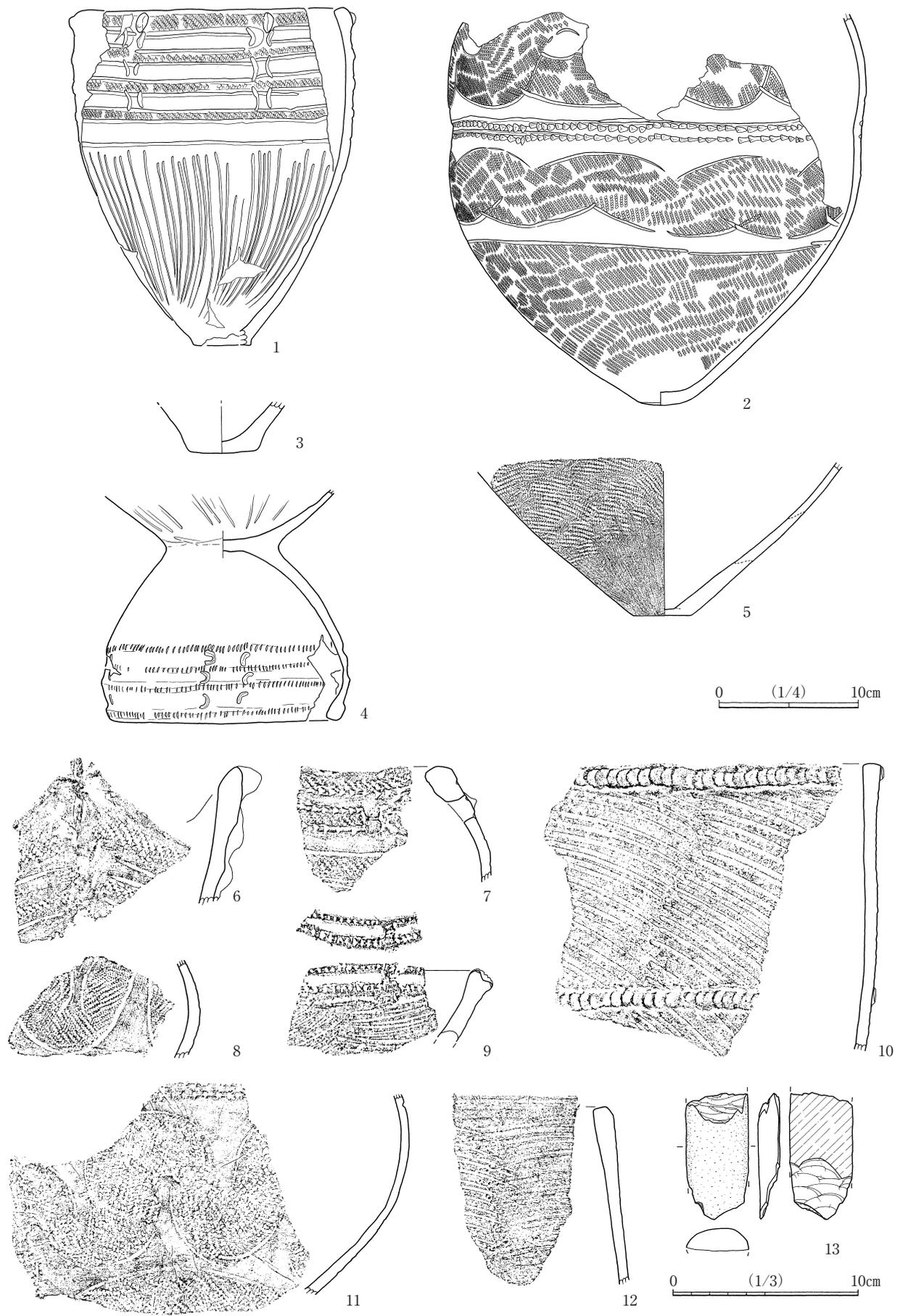
N205号土坑 (第190～192図、図版8・62・64・111)

SS1-43・53グリッドに位置する。66C号住居跡の若干外側に構築される。平面形態は円形を呈する。規模は径2.96m、遺構確認面から底面までの深さは1.93mを測る。

遺物の主体は、安行2式である。1は器形復元個体で、SS1区全体含めても良好なものである。9と11は口縁部に平行沈線が巡らされる浅鉢で、口縁形状が異なる。12は口唇に沿って2列の連続刺突が配される浅鉢で、釣手土器かもしれない。石器は磨石類がほとんどである。

N206号土坑 (第190・194図、図版8・62・64)

SS1-42グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径1.76m程度、遺構確認面か



第194图 SS1区N206号土坑出土遗物

ら底面までの深さは1.26mを測る。

遺物は少ないが、安行1式の良好な土器が出土した。1は平口縁の浅鉢で、帯縄文に通常貼り付けられる縦長の瘤は極めて小さく、代わりに半裁竹管による双弧状の刺突が無文帯に配される。胴部上半と下半は、沈線1本で分割される。4は台付浅鉢で、帯縄文ではなく連続刺突が巡る。双弧状の刺突は、1の平口縁深鉢と共通するモチーフである。9は台付浅鉢もしくは釣手土器である。13は石剣の破片である。

N208・N209号土坑（第195・196図、図版8・62・64・66）

N208号土坑はSS1-55・65グリッドに位置し、66A号住居跡を切って構築される。平面形態は楕円形を呈し、規模は2.96×2.33m程度、遺構確認面から底面までの深さは2.13mを測る。N209号土坑はN208の北西側に接し、規模は0.66×0.80m、深さは0.93mを測る。66A号住居跡の貼床に覆われており、N208より古いと考えられる。N209は形状・規模とも他の土坑とは異なり、66号いずれかの住居跡の柱穴の可能性が強い。おそらく66号住居跡廃絶後に、N208が構築されたものであろう。

遺物はほとんどがN208出土である。1はいわゆる安行式西広型で、口唇部に沈線で区画されたキザミが巡る。胴部くびれに4列の連続刺突にはさまれた帯縄文が巡り、下側にアーチ状の磨消縄文が配される。アーチを区切る縦位の沈線上に、刺突のある瘤が貼り付けられる。3は大形の粗製深鉢胴部であるが、流れ込みの可能性が強い。11は口縁が一直線に開き、縄文帯が口縁に沿って巡る。安行1式の台付浅鉢であろうか。14は土偶頭部とみられるが、裏面の成形から考えて土器の把手の一部である可能性も高い。15は有孔円盤形土製品である。沈線を施した後、4カ所穿孔する。裏面は磨かれている。孔周辺に使用痕は認められない。

N210号土坑（第198・199図、図版8・62・66）

SS1-64・74グリッドに位置する。66B号住居跡を切って構築される。平面形態は円形を呈する。規模は径2.77m、遺構確認面から底面までの深さは1.10mを測る。

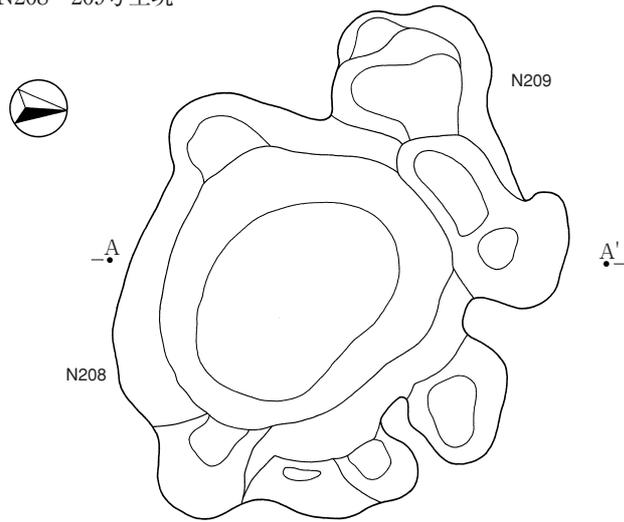
器形復元の出来る土器が3点出土した。そのうち2点はやや大形の粗製土器であった。2は胴部やや上位にくびれを持ち、口縁から底部にかけて条線を施した後、くびれ部に沈線で区画された幅の狭い無文帯を巡らせる。3はよく似た器形であるが、口縁部と胴部くびれにキザミを巡らせる。条線は口縁側が横位多列、胴部側が縦位で、口縁側が先、胴部側が後であることが分かる。

N211号土坑（第198・200図、図版8・62・65・66）

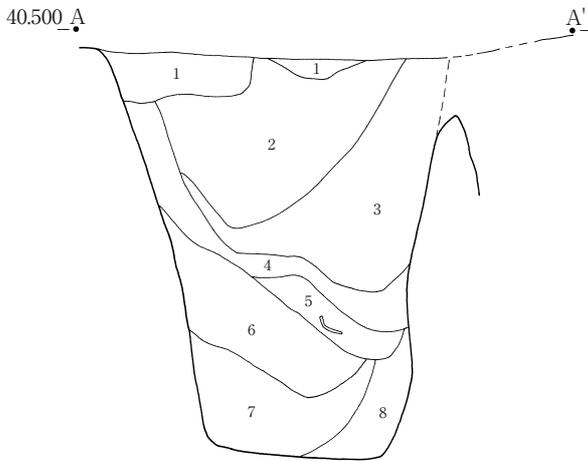
SS1-64グリッドに位置する。覆土は66A号住居跡の貼床に覆われている。平面形態は楕円形を呈する。規模は2.33×2.08m、遺構確認面から底面までの深さは1.19mを測る。なお、この土坑をふさぐように貼り床が構築されているのが観察される。

ここも器形復元の出来る土器が多く出土した。1～3はいずれも平口縁深鉢である。2は口縁部帯縄文が安定し、J字状に曲がった縦長瘤が貼り付けられる。3は口縁部帯縄文と直下の連弧状の磨消縄文の間が無文帯ではなく沈線となり、胴部くびれの連続刺突は帯縄文を伴う。胴部下半の入り組み連弧文は上下の振幅が大きい。4は浅鉢で、口縁部は幅広な帯縄文に2条の太沈線を施す。貼り付け縦長瘤は2と同様J字状に曲がっている。5は横位の羽状沈線文が配される深鉢で、一見粗製土器風であるが、帯縄文をもつ大波状口縁深鉢になる可能性もある。施文順序がよく分かる資料である。6は縄文地紋の粗製土器であるが、流れ込みの可能性が強い。

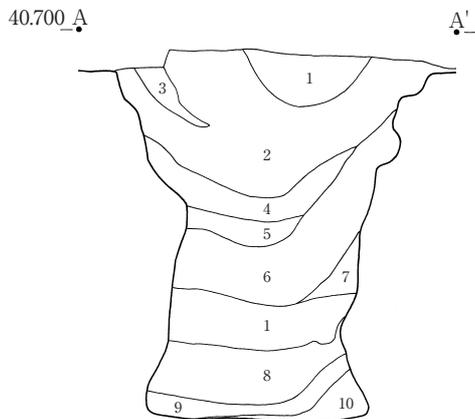
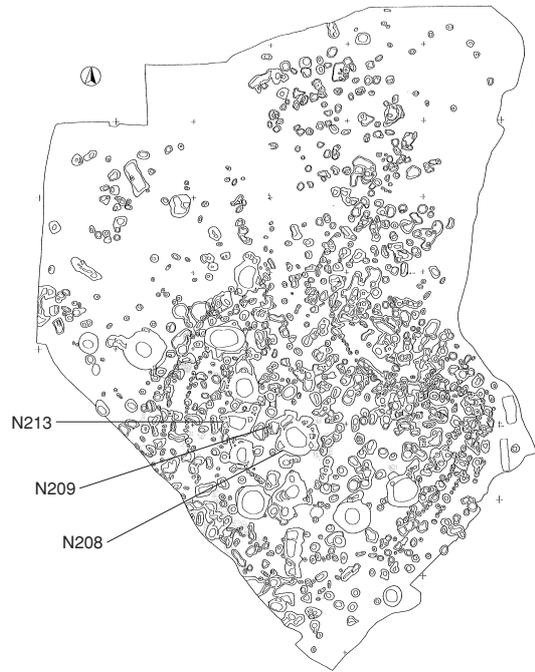
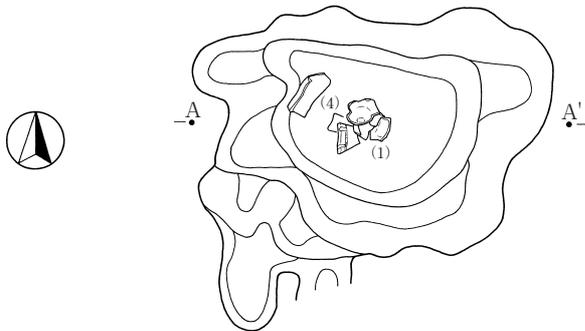
N208・209号土坑



- N208
- 1 褐色土層 ローム粒を含む
 - 2 ロームブロック層
 - 3 黒褐色土層 ロームブロックを多く含む
 - 4 褐色土層 ローム粒を含む
 - 5 黒色土層
 - 6 暗褐色土層 ロームブロックを若干含む
 - 7 黒色土層
 - 8 暗褐色土層 ロームブロックを若干含む



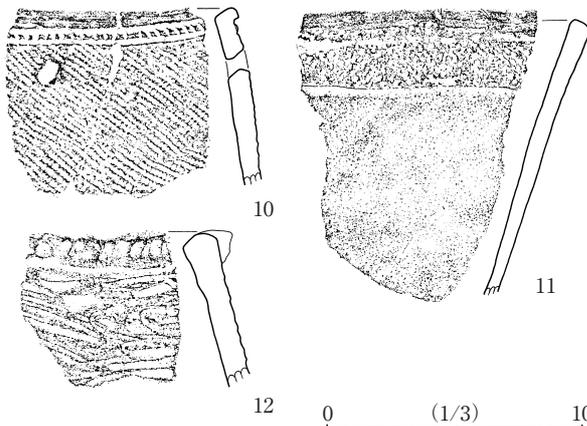
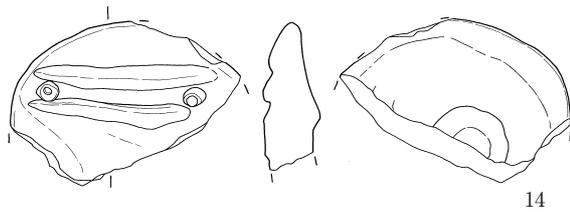
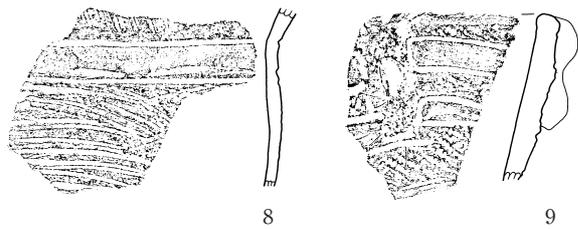
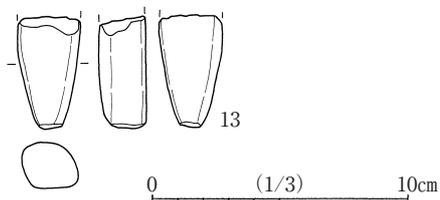
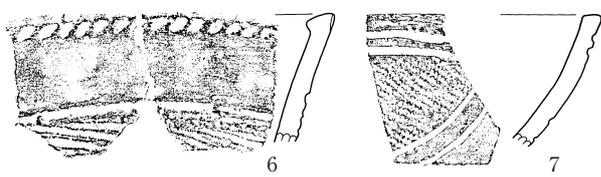
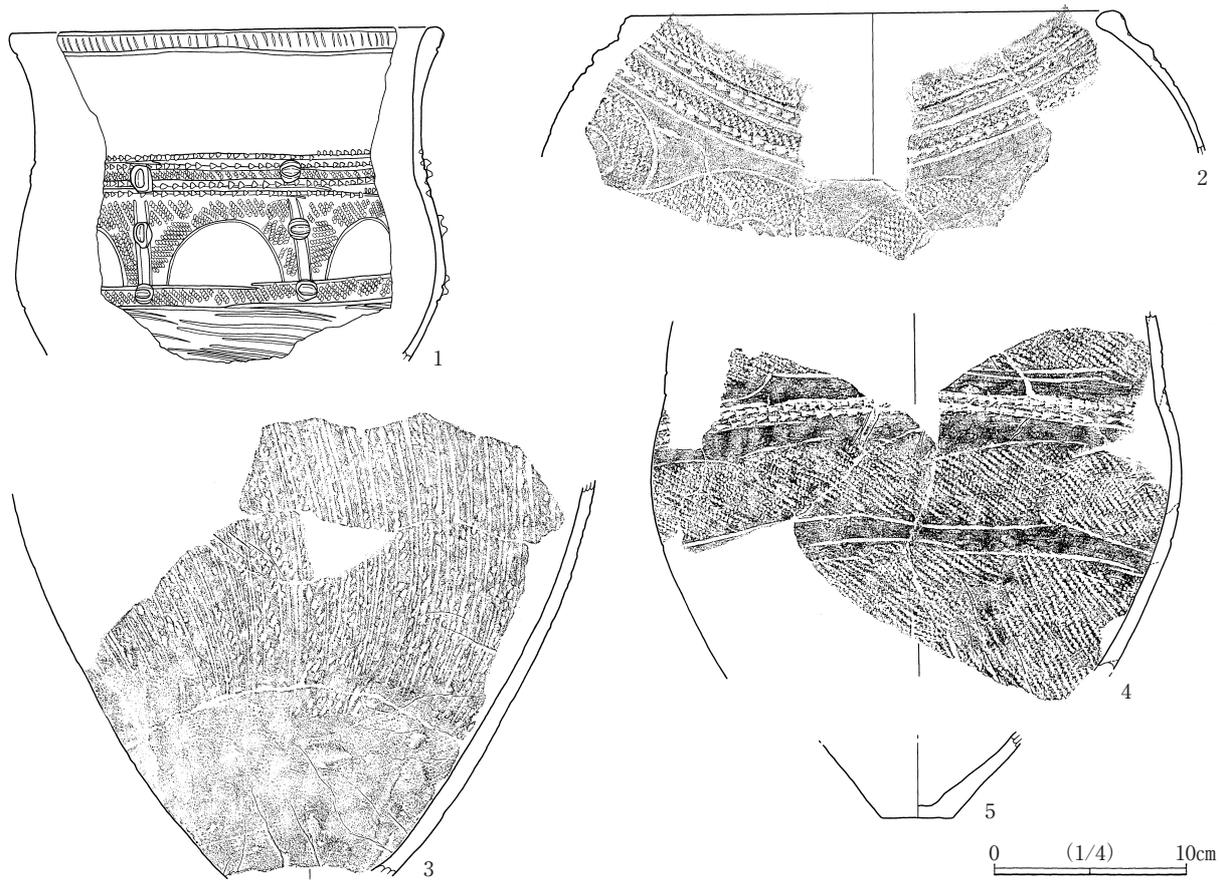
N213号土坑



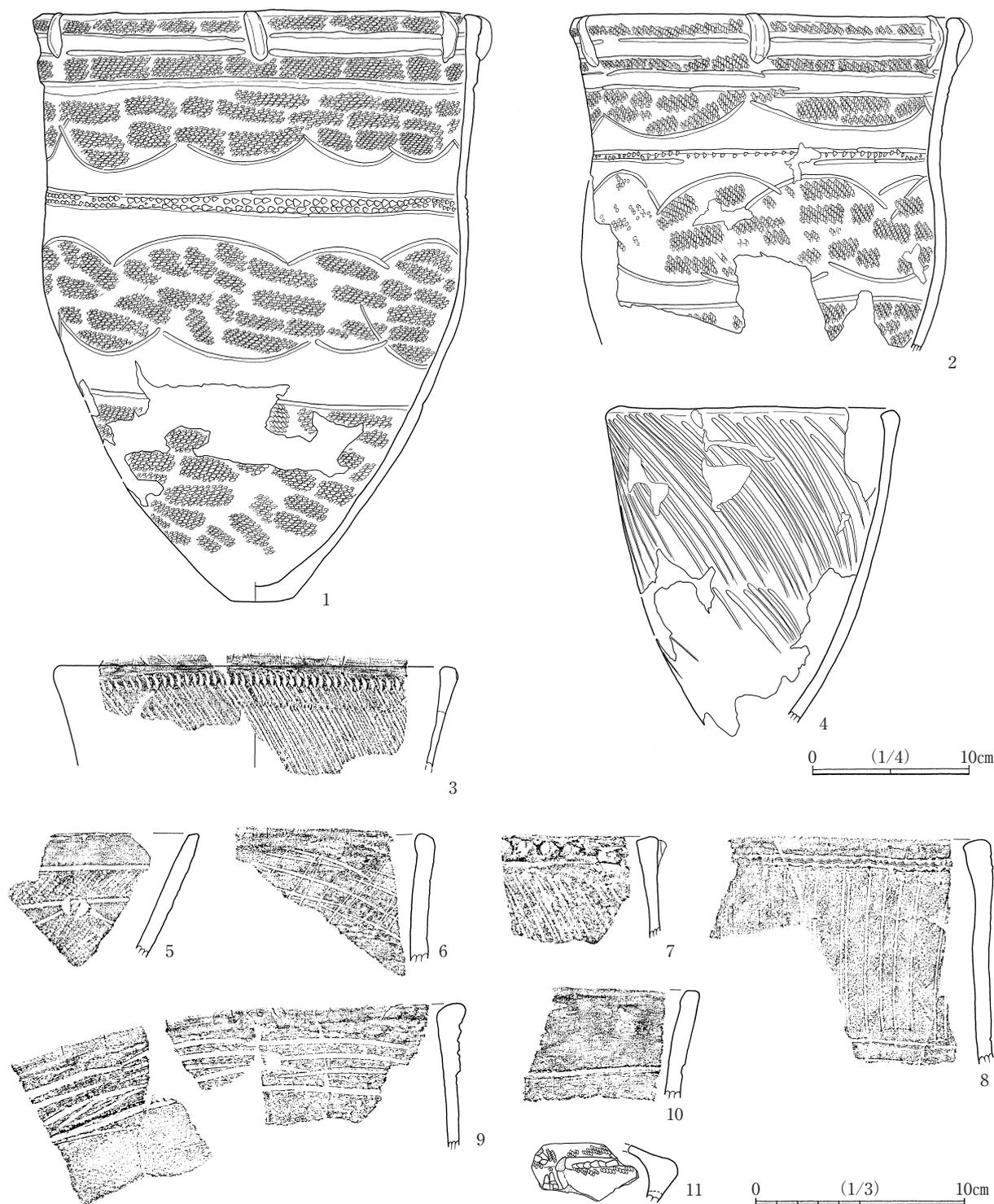
- N213
- 1 ローム層
 - 2 黒褐色土層 ローム粒・焼土粒・炭化粒を含む
 - 3 黒褐色土層 ロームブロック・炭化粒を多量に含む
 - 4 褐色土層 ローム粒・ロームブロックを含む
 - 5 暗褐色土層 炭化物を多量に含む
 - 6 褐色土層 ロームブロックを含む
 - 7 褐色土層 灰黒色土を含む
 - 8 灰黒色土層 ローム粒を含む
 - 9 灰黒色土層
 - 10 灰黒色土層 茶褐色土を若干含む

0 (1/40) 1m

第195図 SS1区N208・N209・N213号土坑



第196图 SS1区N208·N209号土坑出土遗物

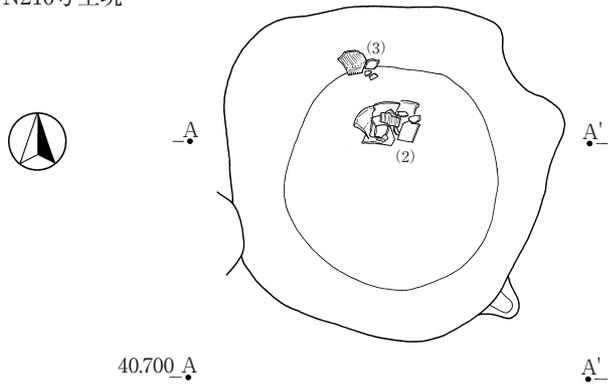


第197図 SS1区N213号土坑出土遺物

N212・N217号土坑（第198・201図、図版9・65・66）

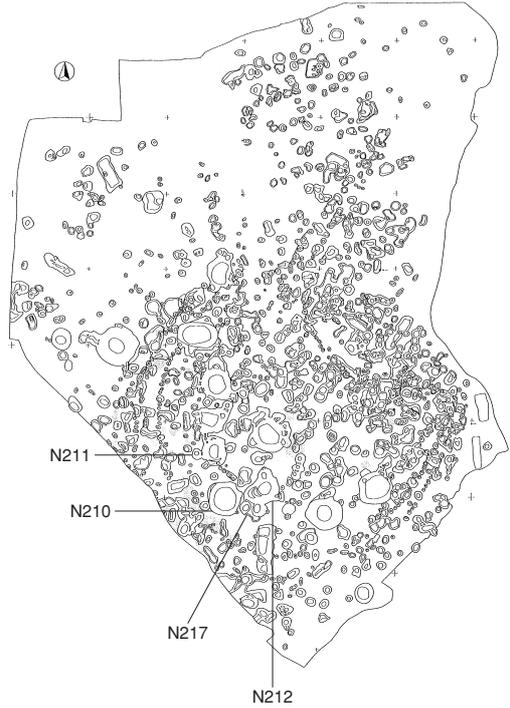
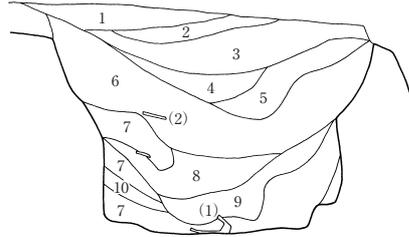
SS1-65グリッドに位置する。N212は楕円形の平面形態を呈する。規模は、2.70×2.02mを測る。底面には段差が認められ、遺構確認面から底面までの深さは、それぞれ0.84m・1.21mを測る。N217はN212の南西側に接し、2基のピットを囲むような不整形形を呈する。規模は1.56×0.92m、深さは1.02mを測る。直接の切り合い関係は不明であるが、N217は本来66Bか66C号住居跡の柱穴であった可能性が強く、住居廃絶後にN212が構築されたと考えられる。

N210号土坑

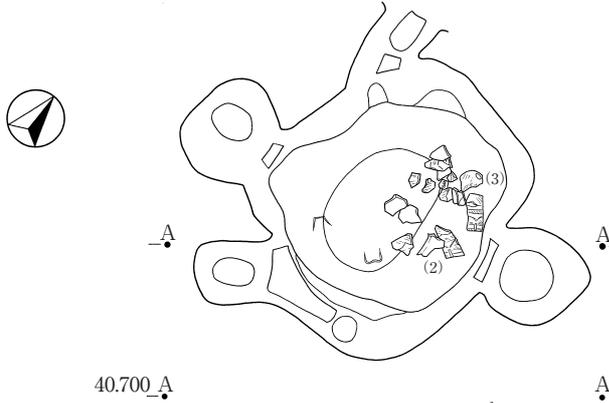


N210

- 1 褐色土層 ローム粒・炭化粒を含む
- 2 褐色土層 ロームを多量に含み、炭化粒を少量含む
- 3 明褐色土層 ローム粒・炭化粒を含む
- 4 黒褐色土層 ローム粒を含む
- 5 ローム層
- 6 褐色土層 ロームブロックを含む
- 7 ロームブロック層
- 8 黒色土層 ロームブロック・炭化粒を含む
- 9 黒灰色土層
- 10 黒灰色土層



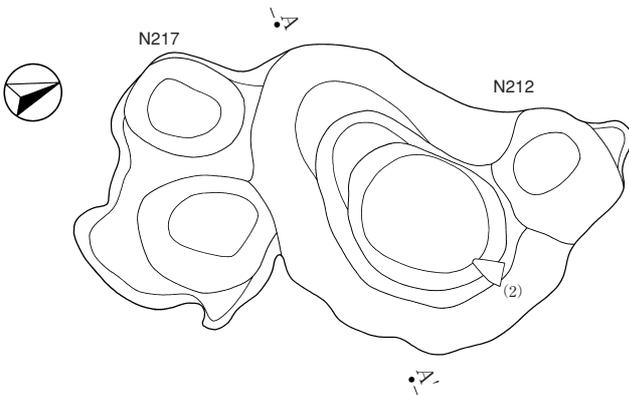
N211号土坑



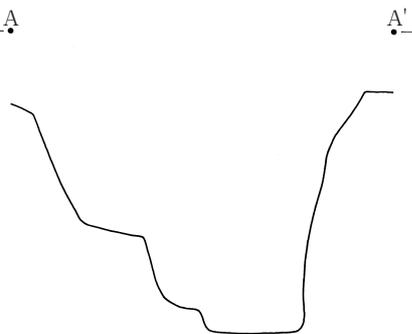
N211

- 1 褐色土層 ロームを若干含む (貼り床)
- 2 ローム層
- 3 褐色土層 ロームブロックを含む
- 4 黒褐色土層 ローム粒・炭化粒を含む
- 5 ローム層
- 6 明褐色土層 ロームを含む
- 7 褐色土層 焼土粒・ローム粒を含む
- 8 灰色土層
- 9 ロームブロック層 (貼り床)

N212・217号土坑

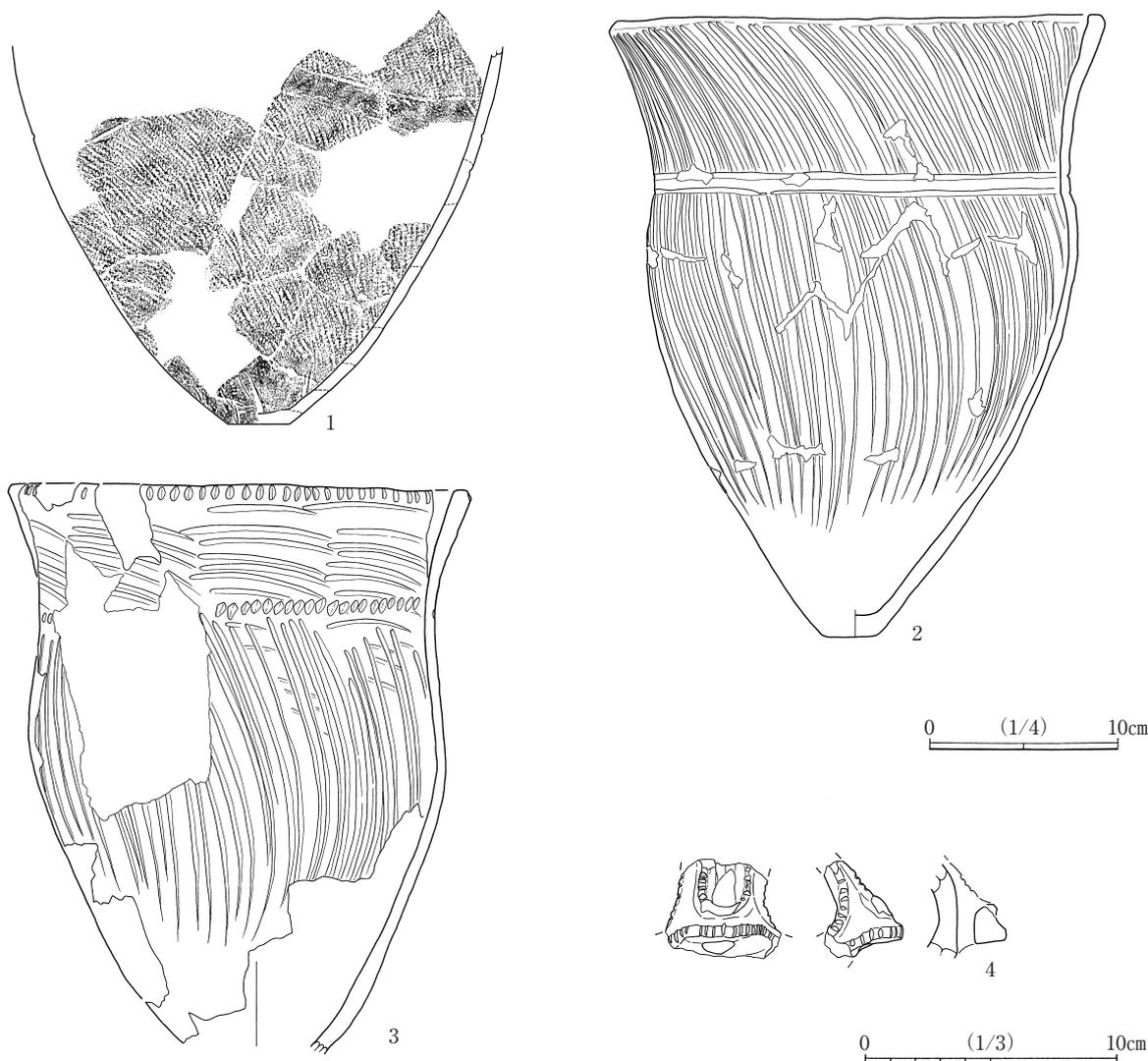


40.700



0 (1/40) 1m

第198図 SS1区N210・N211・N212・N217号土坑



第199図 SS1区N210号土坑出土遺物

遺物は双方の土坑から出土したものを併せて掲載した。1はN217から出土したもので、加曾利B3式の瓢形土器である。遺構群の初現を示す資料といえる。7は釣手にも見えるが、性格は不明である。

N213号土坑（第195・197図、図版9・65・66）

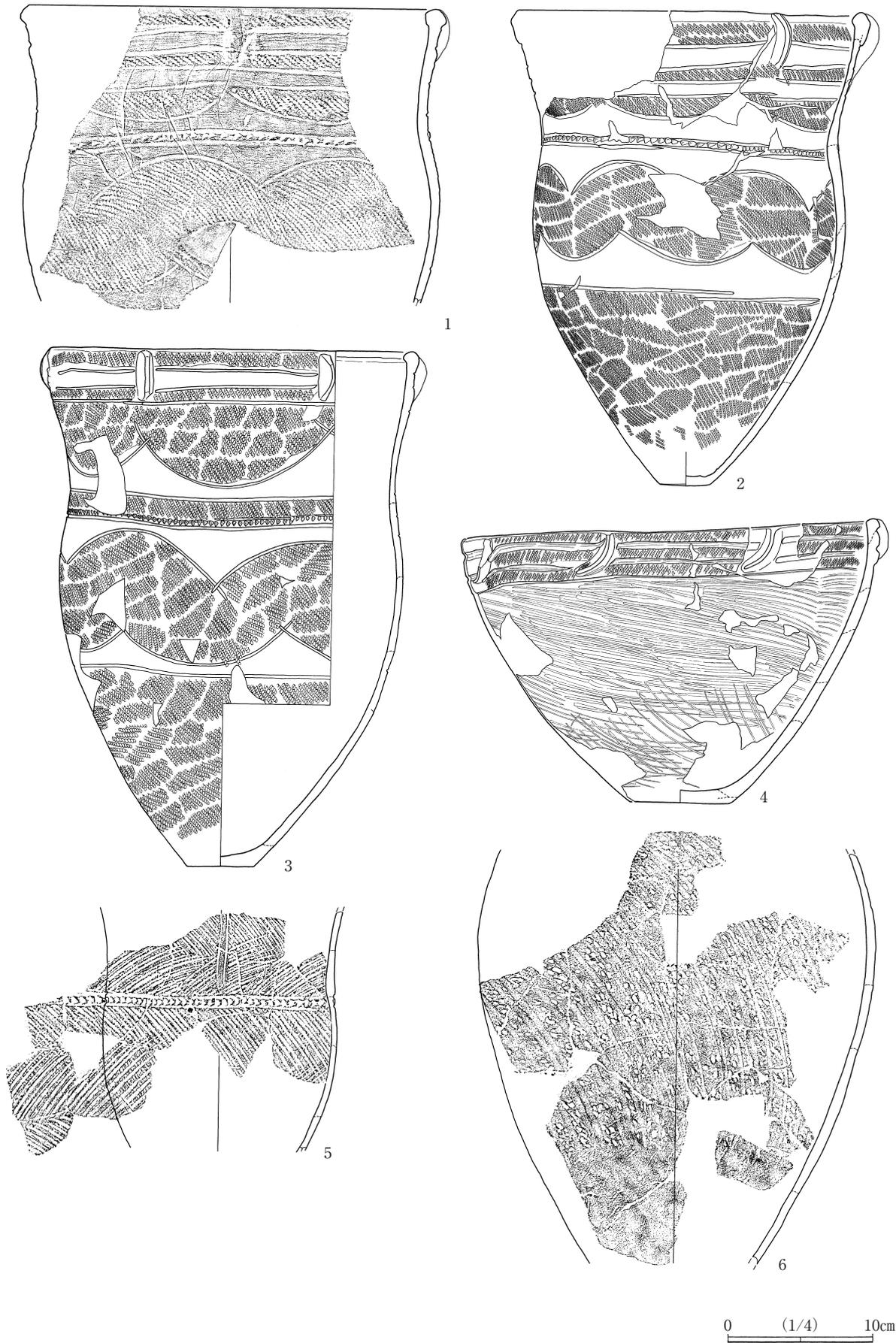
SS1-54・64グリッドに位置する。66A号住居跡を切って構築される。平面形態は楕円形を呈する。規模は2.39×2.02m、遺構確認面から底面までの深さは1.29mを測る。

安行1式の良好な資料が出土している。1は2段目の帯縄文とその下の連弧状の磨消縄文帯との間が、太沈線で区画される。胴部はくびれが小さく、入り組み連弧文もかなり平板で口縁部の貼り付け瘤と対応しない。4は口縁部から底部に向けて斜行条線が施される。一部継ぎ足した部分もある。8は口縁部に半截竹管の押し引き沈線が巡る。9は肥厚させた口縁部に横走る沈線を配したもの。

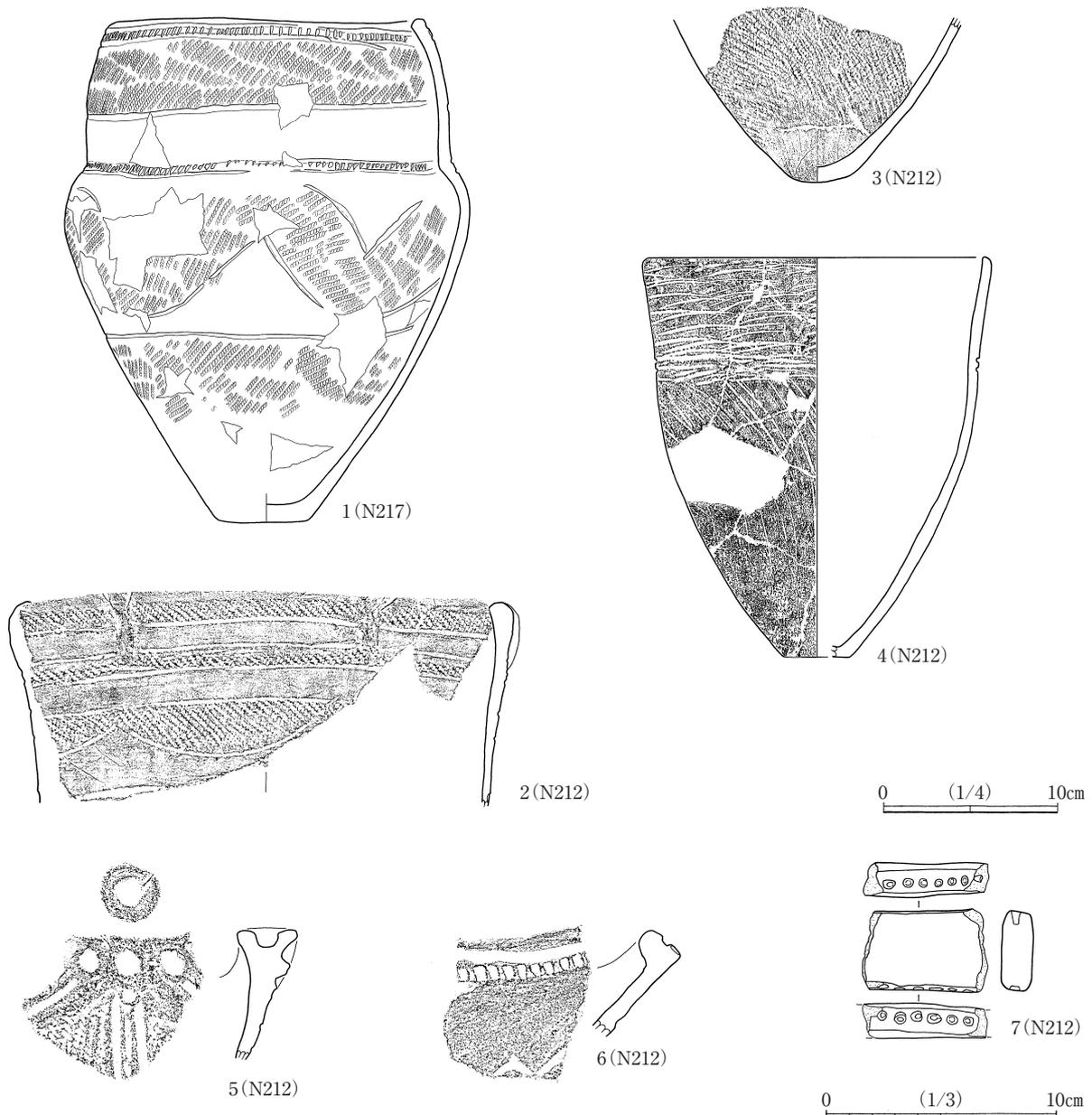
N214号土坑（第202～204図、図版9・65～68・112）

SS1-75・76グリッドに位置する。66B号住居跡を切って構築される。平面形態は円形を呈する。規模は径2.74m、遺構確認面から底面までの深さは2.08mを測る。

遺物は良好な資料が多数出土した。特に1・2・11は坑底付近から一括で出土した。1、2は大波



第200图 SS1区N211号土坑出土遗物



第201図 SS1区N212・N217号土坑出土土器

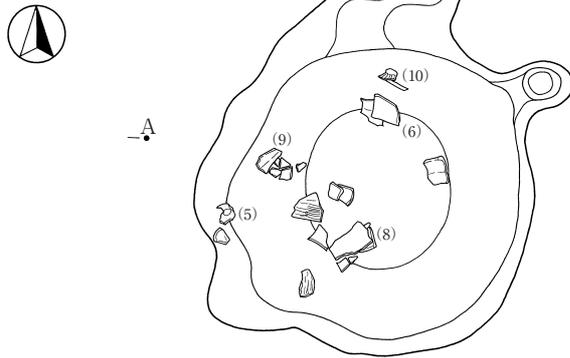
状口縁深鉢で、極めて類似している。ただし1は、口縁部帯縄文と胴部くびれの上に斜行沈線を充填するのに対し、2は羽状沈線を充填する。9は大形の粗製土器で、胎土が粗い。10はヘラ状の工具で粗いケズリ状の調整を施すもの。所々に半裁竹管による刺突が観察される。12は偏岩系の石の破片で、石棒の破片の可能性もある。

N215・N216号土坑（第202・205図、図版9・67・68・108・113）

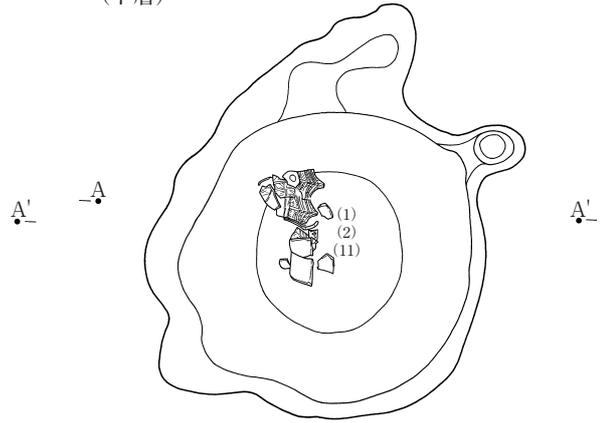
SS1-54グリッドに位置する。66A号住居跡を切って構築される。N215は円形の平面形態を呈する。規模は径2.39m、遺構確認面から底面までの深さは2.10mを測る。N216はN215の北側に接し、N215に切られる。残存規模は1.05×0.93m、深さは0.73mである。これも66Bか66C号住居跡の柱穴であろう。

遺物はほとんどN215から出土した。瓢形の深鉢が多い。1は完形に近い姿で出土した。胴部くびれと口縁部帯縄文の間に上向きの連弧状磨消縄文が配される。7は石剣の破片である。

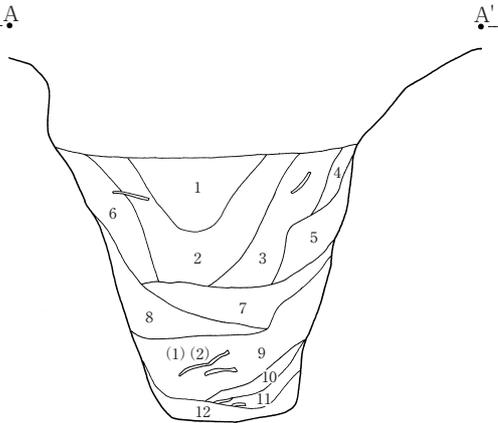
N214号土坑 (上層)



(下層)



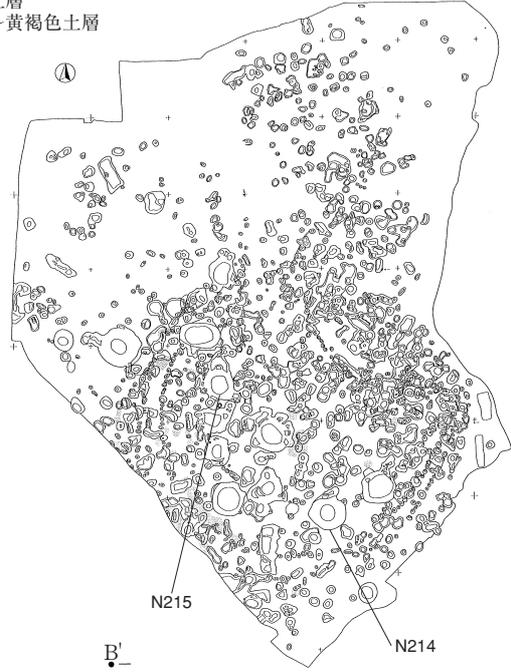
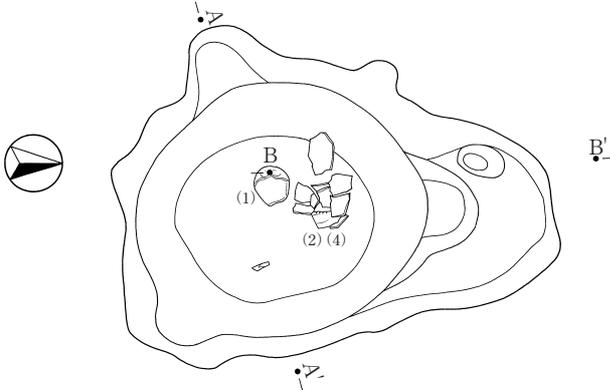
40.500_A



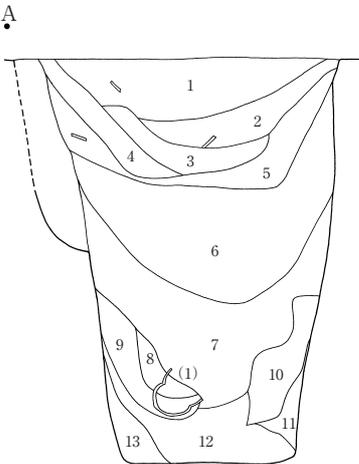
N214

- 1 褐色土層 ローム粒・炭化粒を若干含む
- 2 褐色土層 ロームブロックを多量に含む
- 3 褐色土層 ローム粒を含む
- 4 褐色土層 ロームブロックを含む
- 5 褐色土層 ローム粒を多量に含む
- 6 褐色土層 ロームブロックを多く含む
- 7 黒褐色土層 ロームブロックを若干含む
- 8 暗褐色土層 ローム粒を若干含む
- 9 褐色土層 ローム粒を多量に含む
- 10 ロームブロック層
- 11 黒灰色土層
- 12 茶褐色～黄褐色土層

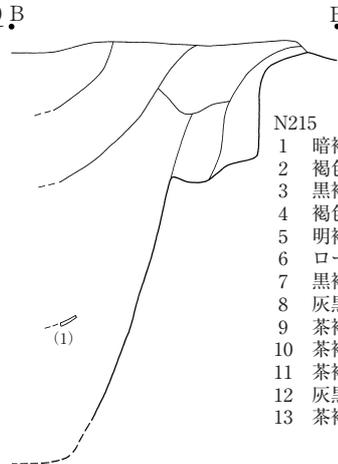
N215号土坑



40.700_A



A' 40.700_B

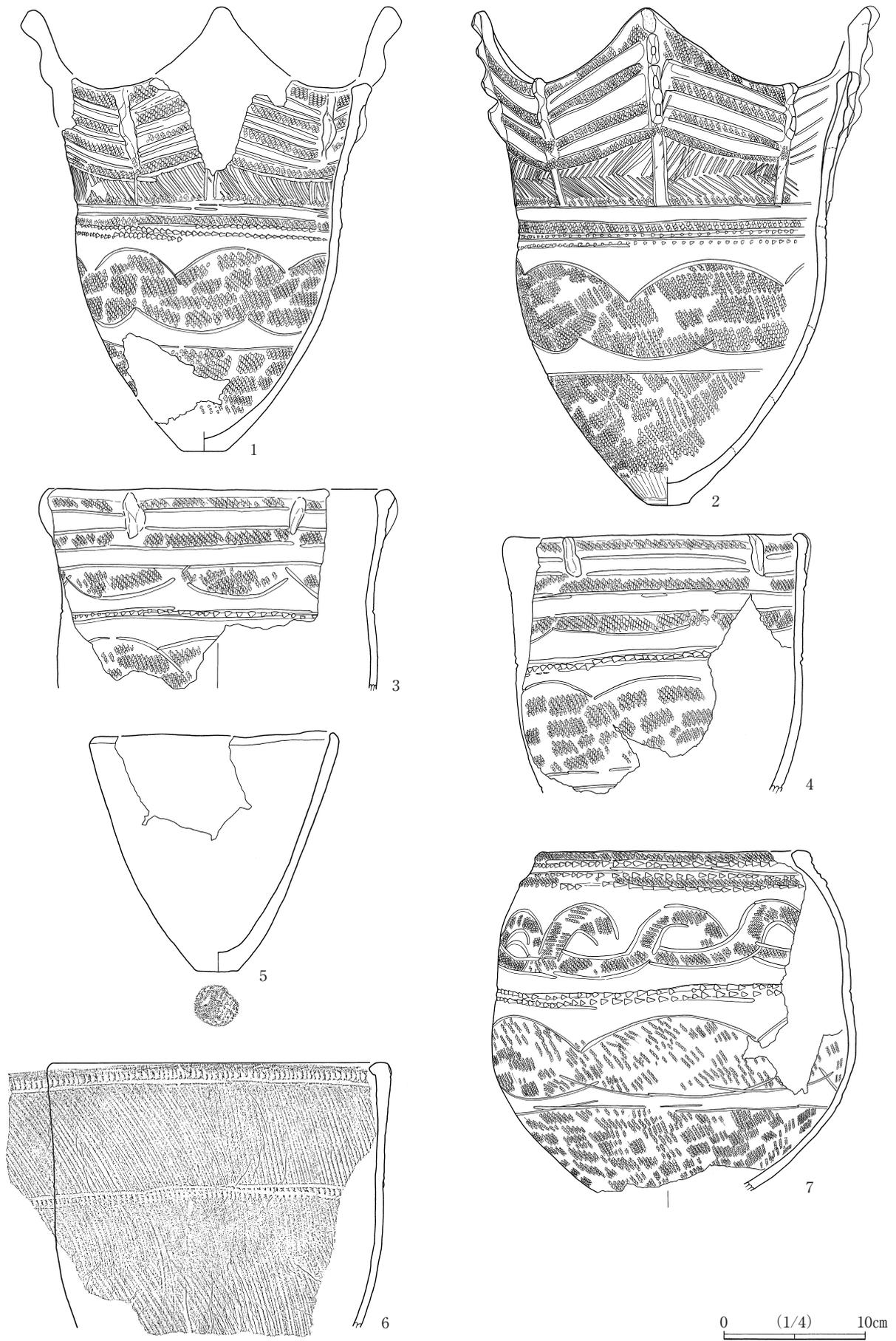


N215

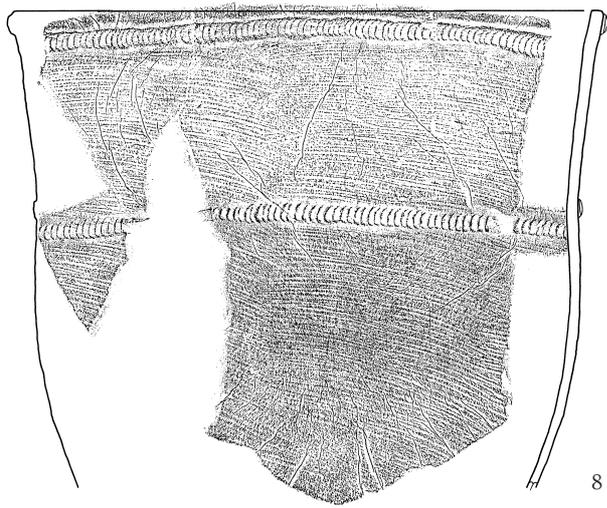
- 1 暗褐色土層 ローム焼土粒 (径2mm~2cm) を含む
- 2 褐色土層
- 3 黒褐色土層 ローム粒 (径5mm) を含む
- 4 褐色土層 ロームブロックを含む褐色土
- 5 明褐色土層 ローム粒を含む
- 6 ロームブロック層
- 7 黒褐色土層 ローム粒・灰黒色土・炭化粒を含む
- 8 灰黒色土層
- 9 茶褐色土層 焼土粒を含む
- 10 茶褐色土層 焼土粒を含む
- 11 茶褐色土層 灰色土を含む
- 12 灰黒色土層
- 13 茶褐色土層 焼土粒を含む

0 (1/40) 1m

第202図 SS1区N214・N215・N216号土坑



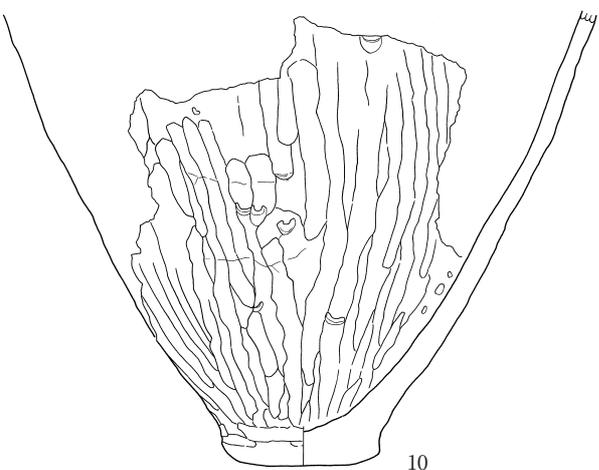
第203图 SS1区N214号土坑出土遗物 (1)



8

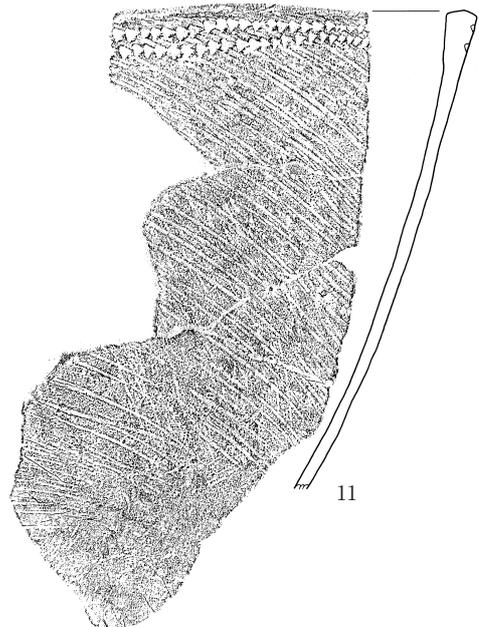


9

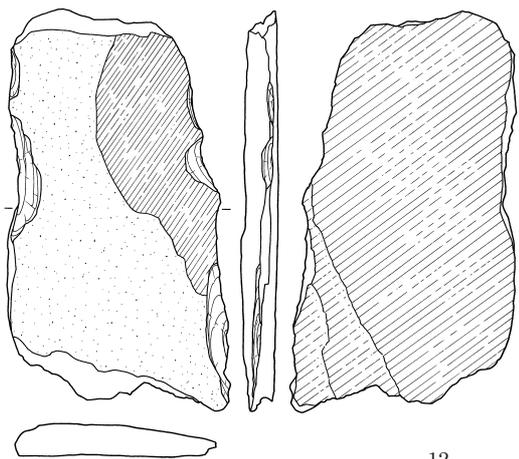


10

0 (1/4) 10cm



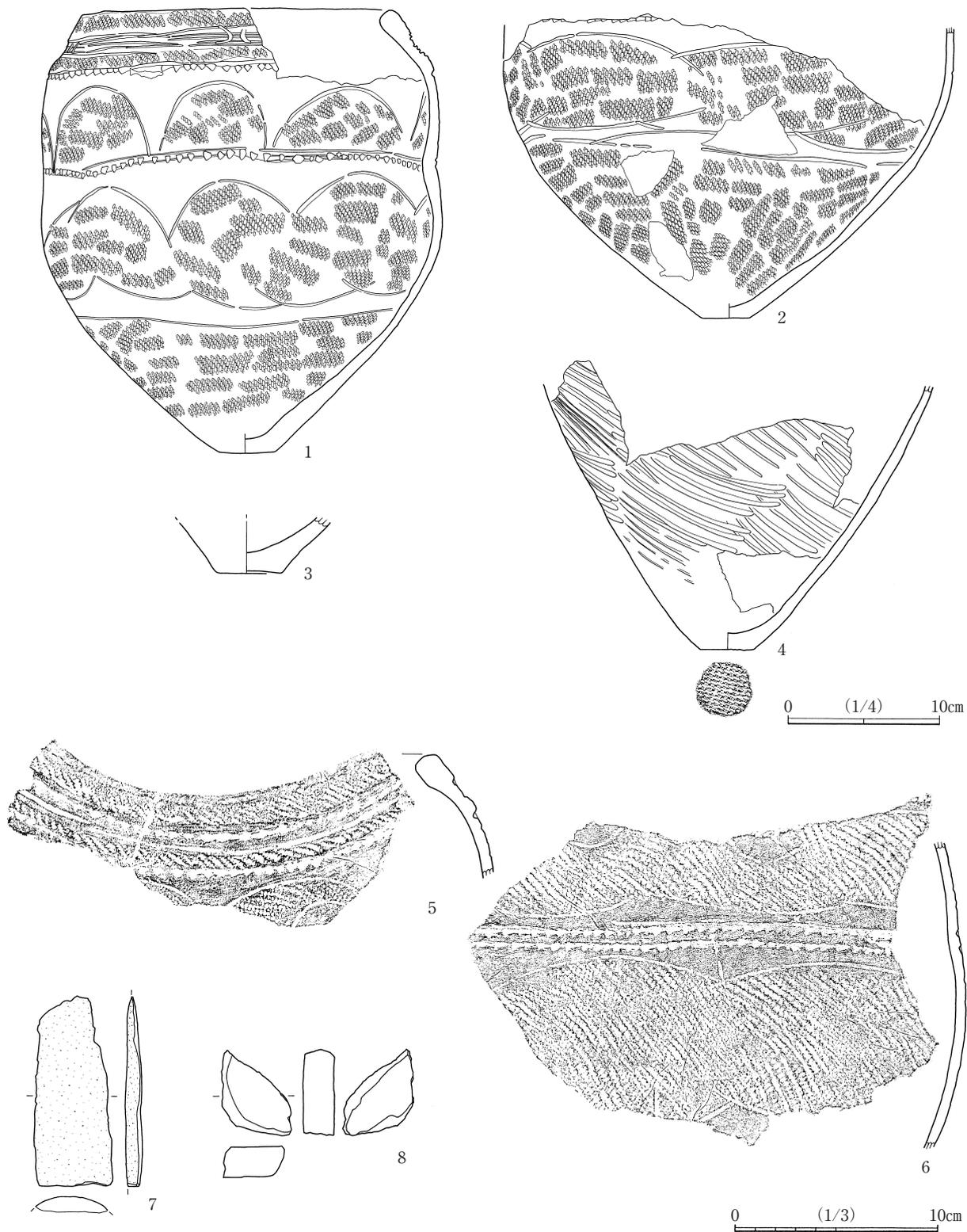
11



12

0 (1/3) 10cm

第204图 SS1区N214号土坑出土遗物 (2)



第205图 SS1区N215号土坑出土遺物

第2節 竪穴住居跡以外の遺構

竪穴住居跡以外では、炉穴3基、陥穴6基、土坑42基（SS1区を除く）、地点貝層3地点、晩期遺物包含地点1カ所、溝状遺構1条が検出されている。このうち溝状遺構（300号溝）は4次調査区で検出されたもので、晩期の貝層直下から検出された。当初はこの項で報告する予定であったが、覆土の貝層から出土した遺物や動物遺存体等の分類・分析が時間的に間に合わないこと、そうした成果なしに遺構の平面図のみを掲載しても無意味と考えられたので、全てをまとめてシリーズⅢで報告することとした。全体図（第206図）には当然記載してあるが、個別の図面は今回掲載していないことをあらかじめお断りしておく。

1 炉穴

2次調査区SS1-44・53・54・63グリッドに位置する。詳細は不明であるが、調査時の所見では6基の炉穴が確認されたという。そのうちN220～222とされた焼土を伴う土坑が記録に残されているので、それぞれ炉穴として扱う。

1号炉穴（第207図）

2次調査区SS1-53グリッドに位置する。67・68号住居跡に切られる。平面形態は長楕円形を呈するものと思われる。規模は短軸1.11m、遺構確認面から底面までの深さは0.40mを測る。底面の火床部には焼土が0.1m堆積する。主軸方位はN-25°-Eである。

2号炉穴（第207・208図、図版67）

2次調査区SS1-54グリッドに位置する。67・68号住居跡に切られる。平面形態は長楕円形を呈するものと思われる。規模は短軸1.46m、遺構確認面から底面までの深さは0.61mを測る。底面の火床部には焼土が0.27m堆積する。主軸方位はN-79°-Wである。

表裏に貝殻条痕が施される深鉢口縁部が2点出土した。

3号炉穴（第207・209図、図版67）

2次調査区SS1-53グリッドに位置する。後世のピット状遺構に切られる。平面形態は長楕円形を呈するものと思われる。規模は3.30×1.30m程度、遺構確認面から底面までの深さは0.30m程度を測る。

表裏に貝殻条痕が施される深鉢胴部が2点出土した。

これらの炉穴が集中するSS1-44・53・54・63グリッドからは、早期後半の条痕文期の土器がまとまって出土した。炉穴に関する資料と考えられるので、ここに掲載した（第210図、図版67）。

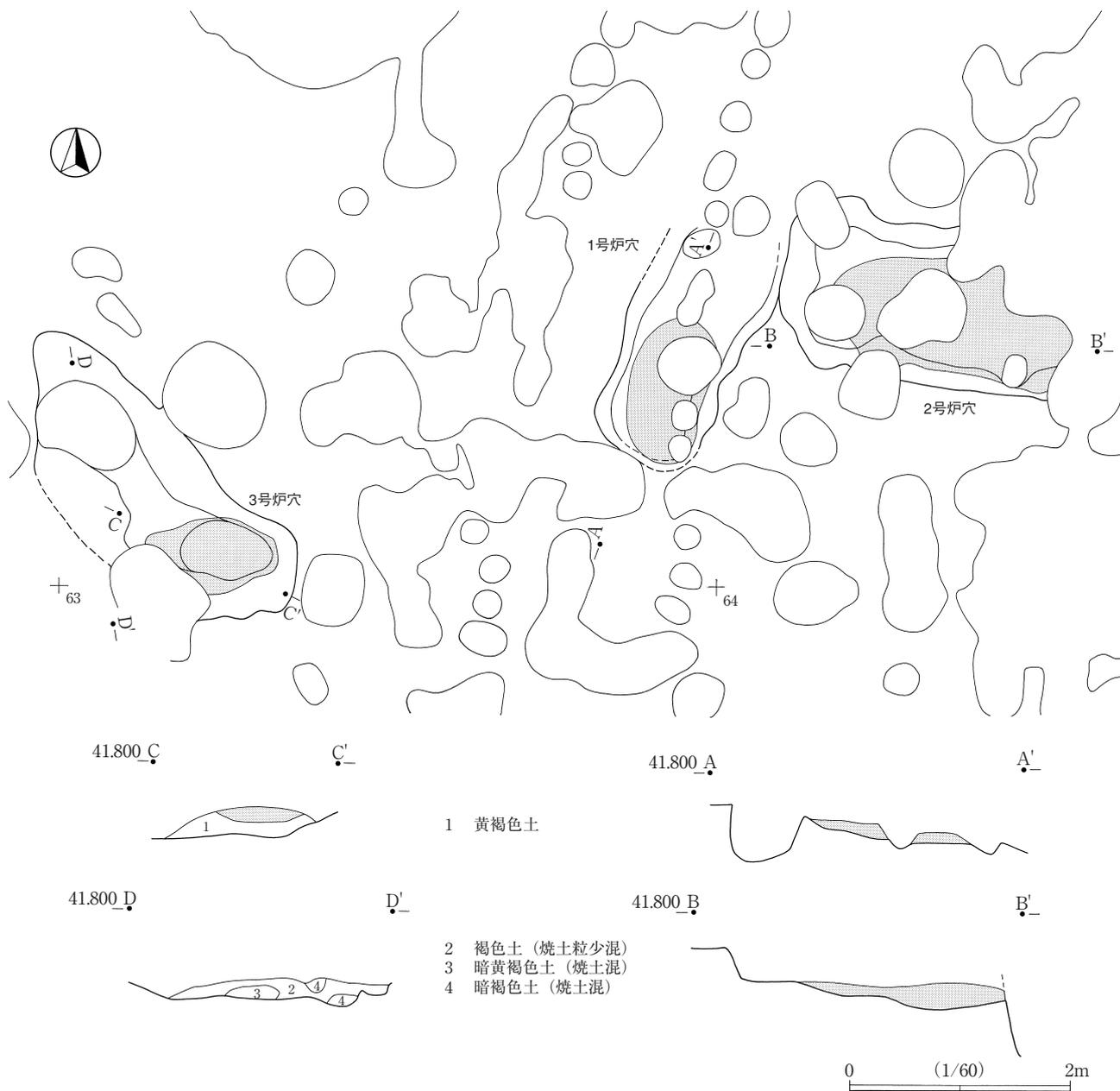
1～4は沈線による幾何学的な区画と棒状工具による充填、交点の円形刺突など鶴ヶ島台式の特徴を示している。5・7・10～14は、文様が連続刺突のみで構成され、茅山下層式に相当する。18は貝殻条痕ではなく擦痕とでも言うべきナデ状の調整がなされるもので、他の資料とは時期が異なると思われる。中央に穿孔が見られるが、円盤への加工を意図したものかもしれない。

2 陥穴

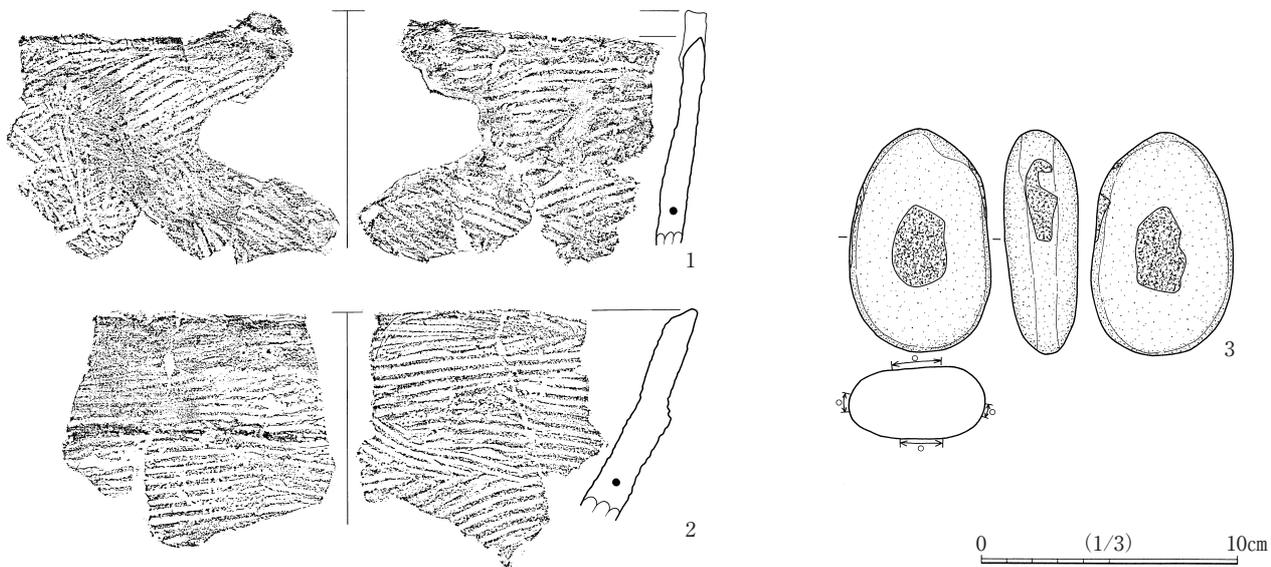
遺構は3次調査区・4次調査区からの検出で、遺跡西側の南北に入り込む谷の谷頭部に位置する。合計6基が検出された。

1号陥穴（第211図、図版7）

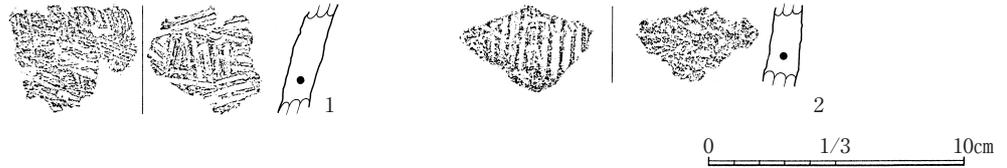
3次調査区S1-96グリッドに位置する。平面形態は長楕円形を呈する。規模は2.58×0.64m、遺構



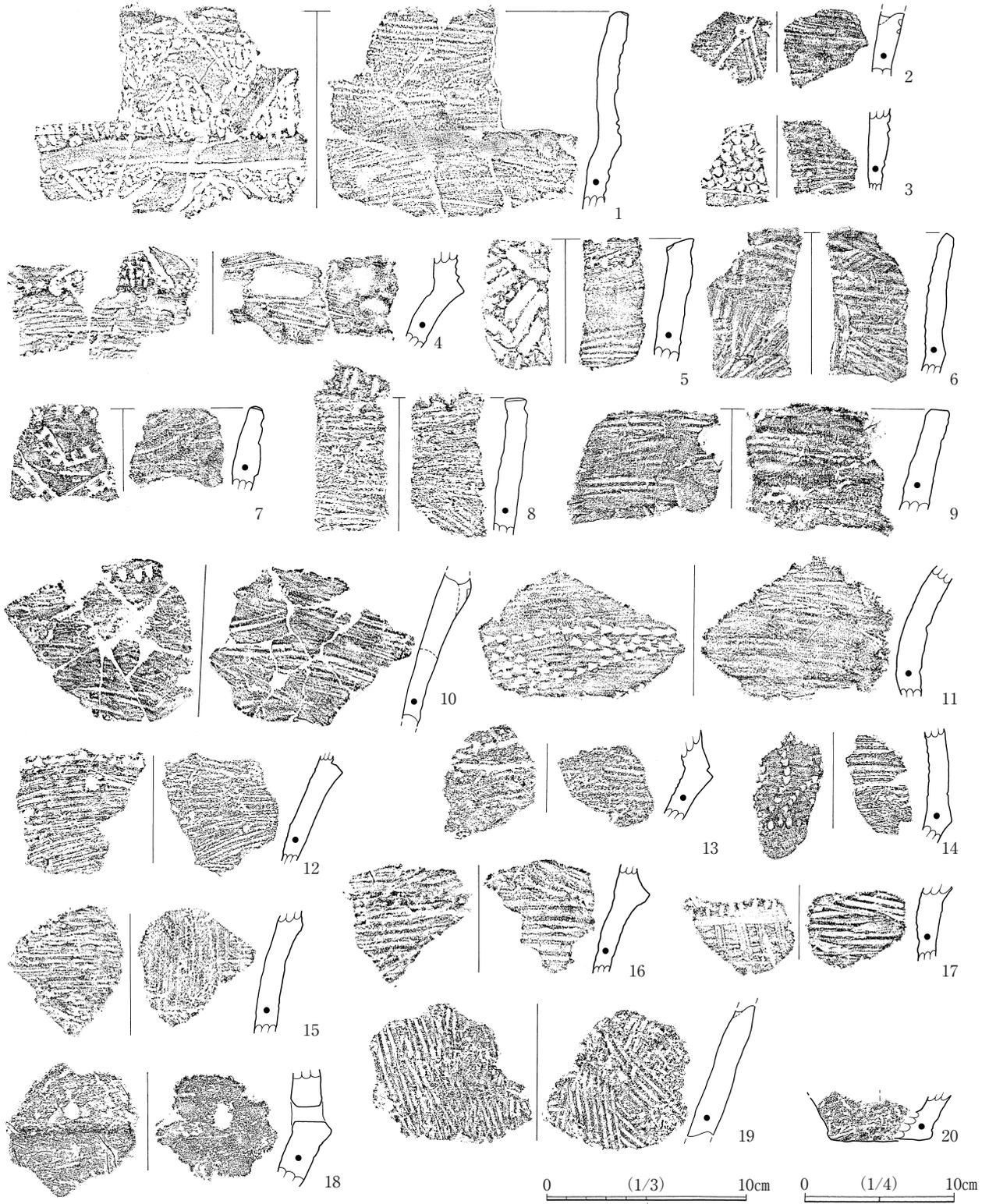
第207图 SS1区検出炉穴



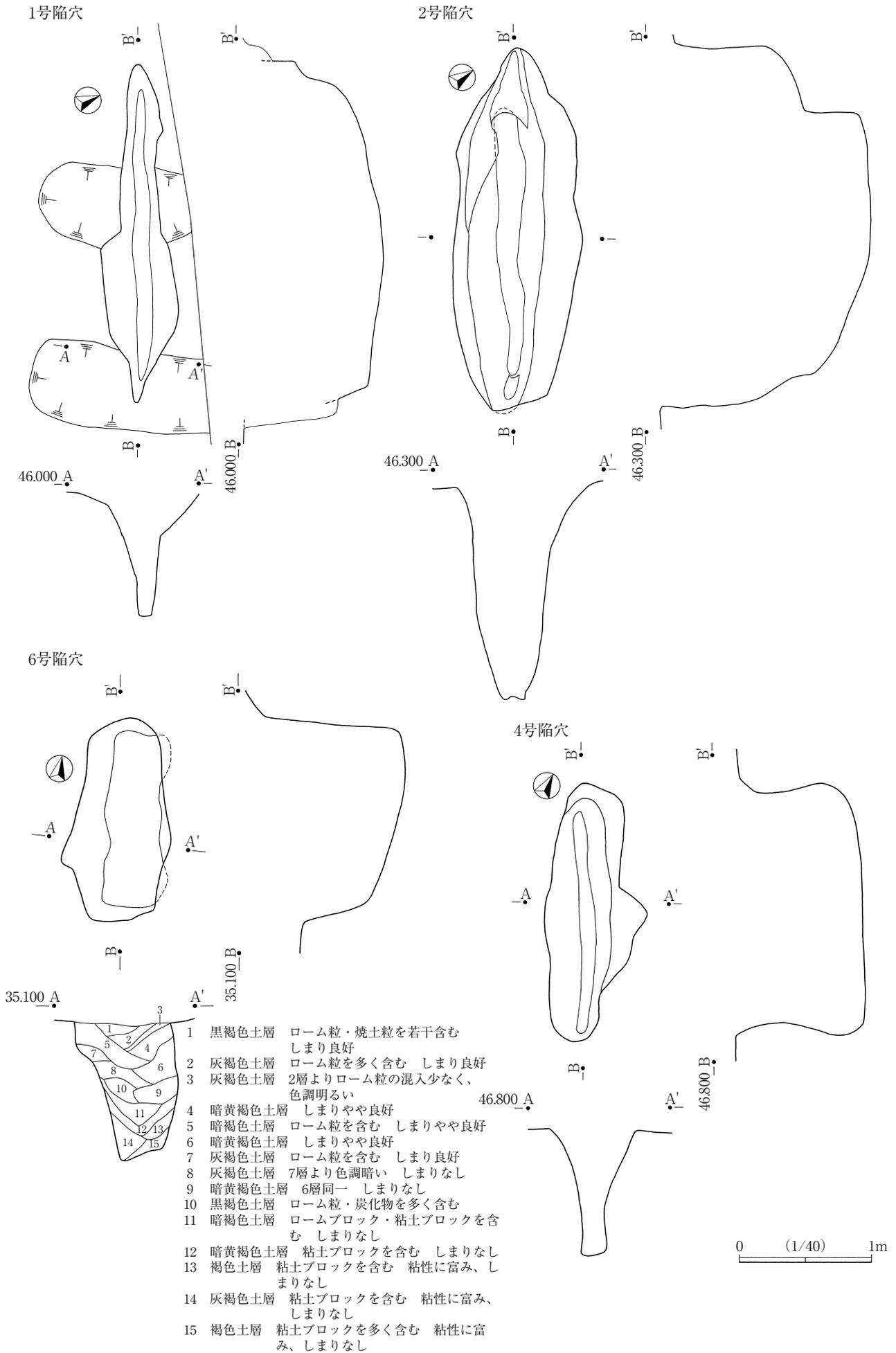
第208图 2号炉穴出土遺物



第209图 3号炉穴出土遺物

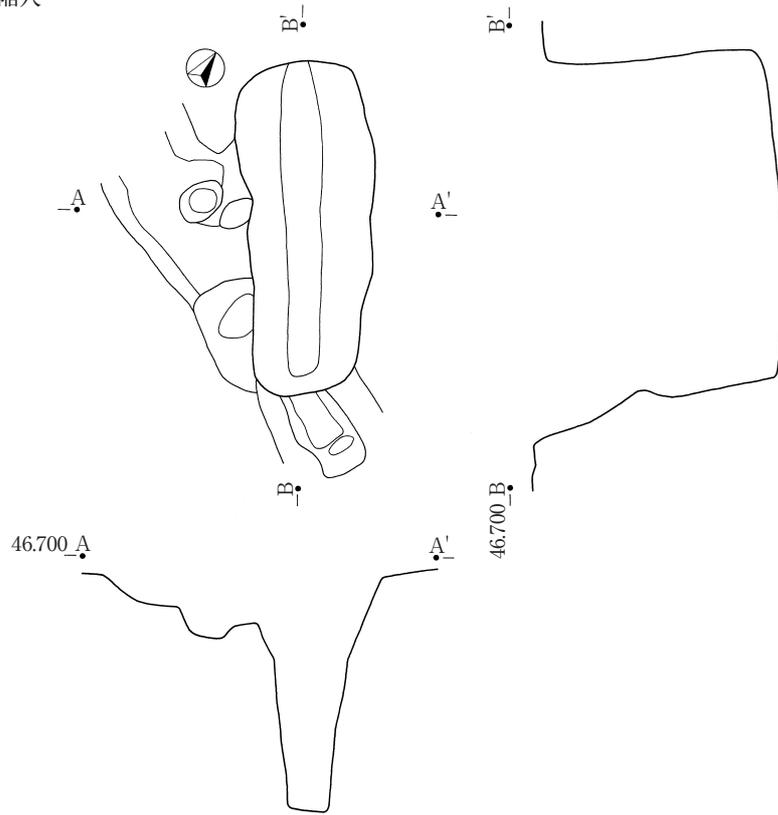


第210图 SS1区出土早期遺物

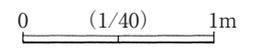
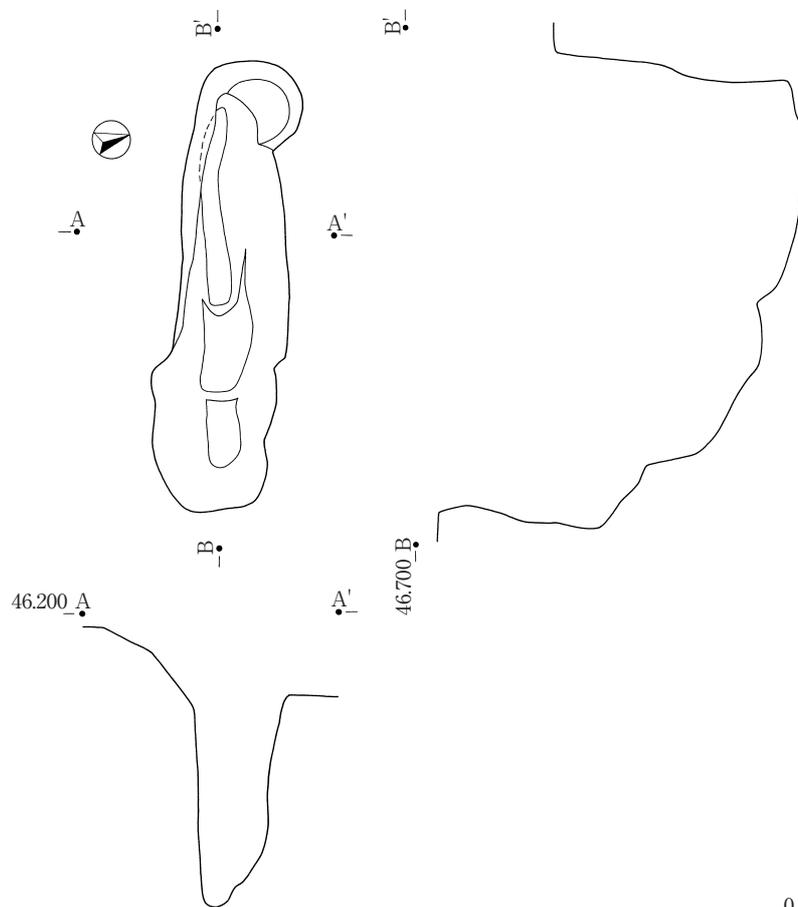


第211図 陥穴 (1)

3号陷穴



5号陷穴



第212图 陷穴 (2)

確認面から床面までの深さは1.06mを測る。床面はほぼ平坦である。主軸方位はN-73°-Wである。

2号陥穴（第211図、図版7）

3次調査区S3-15グリッドに位置する。平面形態は長楕円形を呈する。規模は1.76×0.64m、遺構確認面から床面までの深さは1.62mを測る。床面には長軸方向に2段階の掘り込みが認められた。主軸方位はN-57°-Wである。

3号陥穴（第212図、図版7）

3次調査区S3-40グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は2.72×0.98m、遺構確認面から床面までの深さは1.42mを測る。床面はほぼ平坦である。主軸方位はN-32°-Wである。

4号陥穴（第211図、図版8）

3次調査区S4-32グリッドに位置する。平面形態は長楕円形を呈する。規模は1.85×0.50m、遺構確認面から床面までの深さは1.02mを測る。主軸方位はN-42°-Wである。

5号陥穴（第212図、図版7）

3次調査区S4-63グリッドに位置し、745号土坑と重複する。平面形態は長楕円形を呈する。規模は2.32×0.64m、遺構確認面から床面までの深さは1.94mを測る。床面は西側斜面方向にわずかに傾斜し、床面中央付近で段差が認められた。主軸方位はN-74°-Wである。

6号陥穴（第211図）

4次調査区S6-54グリッドに位置する。貝層下から検出された遺構である。平面形態は隅丸長方形を呈する。規模は1.57×0.76m、遺構確認面から底面までの深さは1.24mを測る。底面は北側向かって傾斜する。主軸方位はN-3°-Wである。

3 土坑

土坑は2次調査区SS1区と7次調査区から多数検出された。そのうち2次調査区SS1区検出分はすでに掲載したので、ここでは7次調査区検出分を中心に扱う。

7次調査区からは大小多数の土坑・ピットが検出されたが、貝層や包含層中に掘り込まれたものは、一部の例外を除いて図に反映させることはできなかった。ここで報告する分は、最終確認面に掘り込まれたものにすぎず、全体のごく一部にすぎない。また、調査時遺構番号が付されなかった土坑も数多い。整理にあたってはそうしたもののうち、人為的に構築された可能性があるものは、なるべく掲載するよう努めた。

701号土坑（第213・217図、図版9・69）

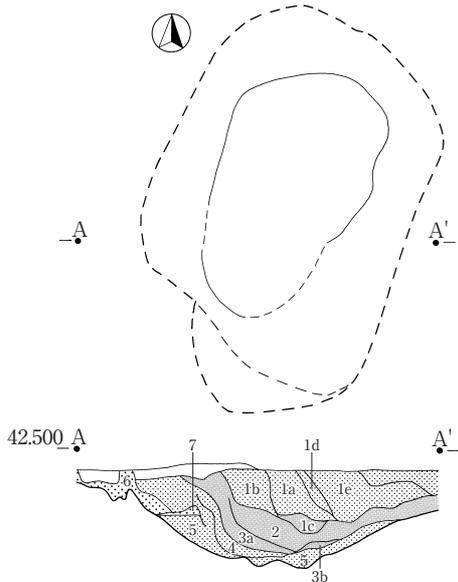
7次調査区2-16・21グリッドに位置する。明確な掘り込み面を捉えることが出来ないため、正確な規模は不明であるが、平面形態は長楕円形を呈し、主軸方位はN-16°-E程度。規模は2.13×1.38m、遺構確認面から底面までの深さは0.38mを測るものと思われる。覆土は純貝層と混土貝層によって構成される。

土器は中期末から後期後葉まで及ぶが、主体となるのは後期後葉と考えられる。15は無文の深鉢底部直上で、堀之内式であろう。16は土偶の腕部。腕先の形状は外反しない。

702号土坑（第213図）

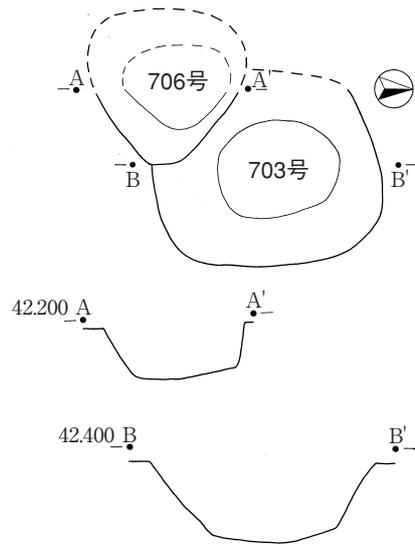
7次調査区2-21グリッドに位置する。包含層中に掘り込まれており、覆土はほとんど貝層であっ

701号土坑

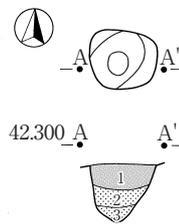


- 1a 混土貝層 ハマグリを主体とし、シオフキ・アサリを含む
土の混入多い
- 1b 混土貝層
- 1c 純貝層 ハマグリを主体とする
- 1d 混土貝層 1a層に比べ、イボキサゴを多く含む
- 1e 混土貝層 ハマグリを主体とし、土の混入も多い
- 2 純貝層 イボキサゴを主体とし、ハマグリも多く含む
- 3a 純貝層 シオフキを主体とし、ハマグリも含む
- 3b 純貝層 シオフキを多く含む
- 4 混灰貝層 イボキサゴを主体とする 灰の密集部分あり
- 5 混土貝層 ハマグリを主体とし、イボキサゴも若干含む
土の混入少ない
- 6 暗褐色土層 破碎貝を多く含む
- 7 混貝土層 破碎貝が水平に堆積する

703・706号土坑

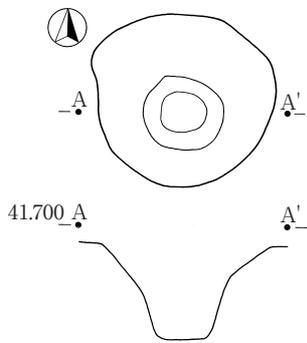


702号土坑

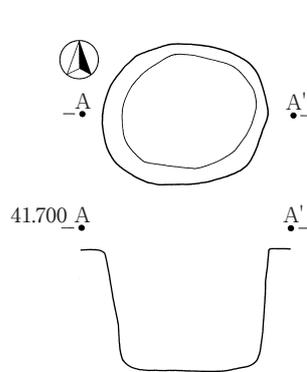


- 1 純貝層 ハマグリ主体 キサゴ破片含む
- 2 混土貝層
- 3 混貝土層 暗褐色土

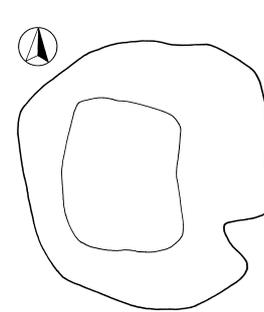
721号土坑



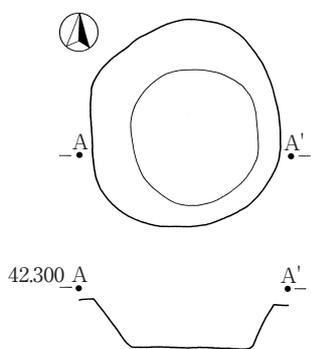
722号土坑



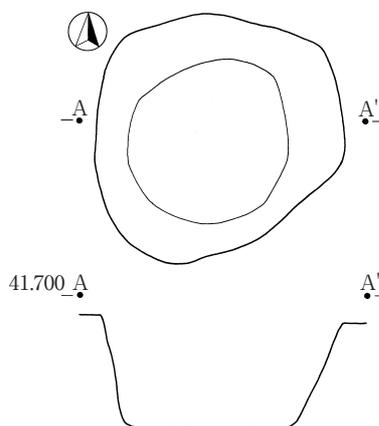
723号土坑



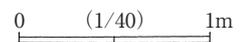
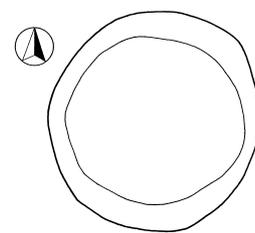
713号土坑



714号土坑



730号土坑



第213図 土坑 (1)

た。平面形態は円形を呈する。規模は0.38×0.32mを測る。

遺物は出土しなかった。

703号土坑（第213・217図、図版69）

7次調査区2-22グリッドに位置し、706号土坑に切られる。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.2×1.1m、遺構確認面から底面までの深さは0.48mを測る。

土器は後期前葉と中葉に分かれるが、主体となる時期は後期前葉と考えられる。

704号土坑（第214・217・218図、図版9・69）

7次調査区5-04・09グリッドに位置する。平面形態は長楕円形を呈する。主軸方位はほぼ真北を示す。規模は2.26×1.32m、深さ0.28mを測る。覆土は純貝層と混貝土層によって構成される。

遺物はやや多く、中期末から後期前葉に至る。主体は後期前葉であろう。8～13は同一個体である。15は脚付きの石皿で、裏面には工具による加工痕を顕著に残す。16・17はツノガイ類を利用した管状垂飾品である。

705号土坑（第214図、図版9）

7次調査区5-09グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.0m、遺構確認面から底面までの深さは0.89mを測る。覆土は純貝層と混土貝層によって構成される。

遺物は出土しなかった。

706号土坑（第213・219図、図版70）

7次調査区2-22・23グリッドに位置し、703号土坑を切って構築される。平面形態は楕円形を呈する。規模は径0.7m、遺構確認面から底面までの深さは0.28mを測る。

後期中葉から後葉の土器が出土している。いずれも小破片である。4は耳飾で、全体的に歪んだ形状を呈し、中心に穿孔する。

708号土坑（第219図、図版70）

この土坑は現場の図面に記載がなく、内容は一切不明である。注記があった遺物を掲載した。後期前葉から後葉の遺物が出土している。

708号土坑（第214・219図、図版10・70）

7次調査区5-04グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.0m、遺構確認面から底面までの深さは0.56mを測る。覆土中にはキサゴを主体とする混貝土層を含む。

図示できたのは1点のみである。堀之内1式の波状口縁深鉢である。

709号土坑（第219図）

現場の図面に記載がなく、内容は一切不明である。ベッコウイモガイの殻頭部を利用する垂飾品が出土している。

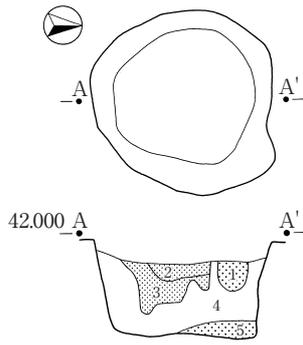
710号土坑（第219・220図、図版70）

現場の図面に記載がなく、内容は一切不明である。土器は小破片が多く、中期末から後期前葉の遺物が出土している。また、ツノガイ類製垂飾品・タカラガイ・赤彩オオノガイも出土している。

711号土坑（第215・220図、図版10・70）

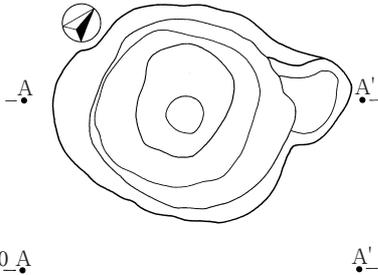
7次調査区7-05・10グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.35×1.03m、遺構確認面から底面までの深さは1.24mを測る。やや小さい掘り込みが1基切り合っているが、この土

708号土坑



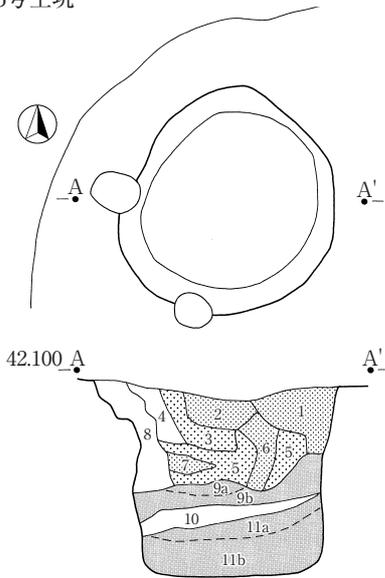
- 1 混貝土層 暗褐色土を主体とする 粒子粗く、しまりなし
- 2 混土貝層 イボキサゴを主体とし、小型ハマグリを含む 土の混入は3層より多い
- 3 混土貝層 イボキサゴを主体とする
- 4 暗黄褐色土層 ハードロームブロック（径1~2cm）を少量含む 粒子粗く、しまりなし
- 5 混貝土層 4層に比べて暗い暗黄褐色土を主体とする

718号土坑



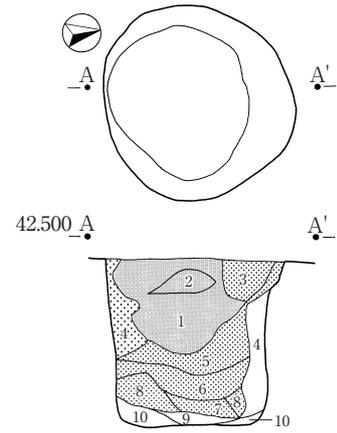
- 1 混土貝層 ハマグリ主体
- 2 混貝土層 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 暗黄褐色土 粒子細かい
- 5 ロームブロック
- 6 暗黄褐色土 3より粒子粗い、粘性しまりなし、ローム崩壊土
- 7 ロームブロック
- 8 暗黄褐色土 粒子細かい、粘性しまりなし
- 9 灰褐色土層 ローム粒1cm大混入、粒子細かい、粘性あり
- 10 灰褐色土層 ローム粒1cm混入、粒子細かい、粘性あり、魚骨多含
- 11 ロームブロック
- 12 灰褐色土層 粘土含む、ローム粒子、黒色土壌混入、粘性あり
- 13 赤褐色土層 鉄分を含む層、粘性あり

715号土坑



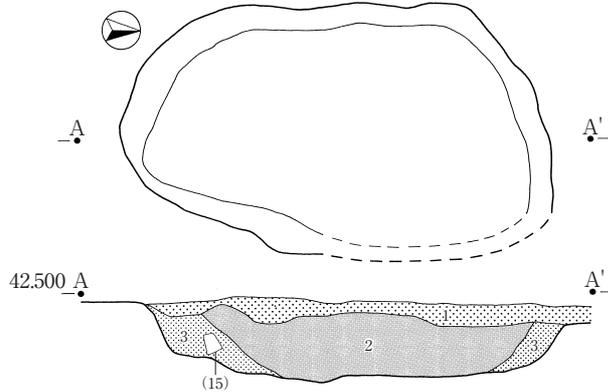
- 1 混貝土層 暗茶褐色土・ロームブロックを含む
- 2 混土貝層 破碎・破片貝に暗褐色土を含む
- 3 混貝土層 暗褐色土を主体とする 粘性・しまりなし
- 4 暗黄褐色土層 粘性・しまりなし
- 5 混貝土層 暗褐色土を主体とする
- 6 混土貝層 遺存状態の悪いハマグリ・イボキサゴを主体とし、灰褐色土を含む
- 7 キサゴ混土貝層
- 8 黄褐色土層 ローム崩壊土
- 9a 純貝層 小型ハマグリを主体とする
- 9b 純貝層 イボキサゴを主体とする
- 10 黒褐色土層 粘性・しまりなし
- 11a 純貝層 中型ハマグリを主体とする
- 11b 純貝層 イボキサゴを主体とする

705号土坑



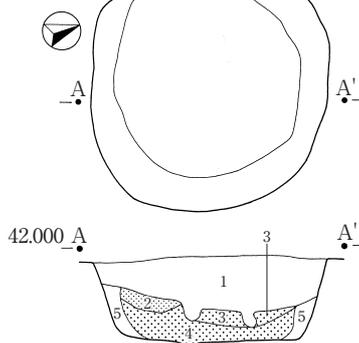
- 1 純貝層 イボキサゴを主体とし、小型ハマグリを含む
- 2 純貝層 小型ハマグリを主体とし、マテガイの集中部が1ヶ所見られる
- 3 混土貝層 小型ハマグリを主体とし、アサリ・シオフキ・イボキサゴをわずかに含む
- 4 混貝土層 暗黄褐色土を主体とする
- 5 混土貝層 小型ハマグリ・アカニシを主体とし、やや土を多く含む
- 6 混土貝層~純貝層 小型ハマグリを主体とする
- 7 混土貝層 中~大型ハマグリ・イボキサゴを主体とする
- 8 混土貝層 イボキサゴを主体とし、小~中型ハマグリ・マガキを含む
- 9 暗褐~黒褐色土層 粒子粗く、しまりなし
- 10 暗黄褐色土層 ローム漸移層

704号土坑

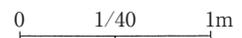


- 704号
- 1 混貝土層
- 2 純貝層 小型ハマグリ・シオフキを主体とし、アサリをわずかに含む
- 3 混土貝層 イボキサゴを主体とし、ハマグリを含む

717号土坑



- 717号
- 1 暗褐色土層 ローム粒（径2~5mm）を含む
- 2 混土貝層
- 3 混貝土層 やや貝を多く含む
- 4 混貝土層 黒褐色土を主体とし、炭化物も多く含む
- 5 暗黄褐色土層 ローム崩壊土



第214図 土坑 (2)

坑との関係は不明。

土器は小破片が多い。中期末から後期初頭に相当する。

712号土坑（第220図、図版70）

現場の図面に記載がなく、内容は一切不明である。土器は後期初頭を中心とする。5は把手で、やはり後期初頭であろう。

713号土坑（第213・220図、図版10・70）

7次調査区2-11グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.0m、遺構確認面から底面までの深さは0.27mを測る。

出土土器は後期中葉を中心とする。

714号土坑（第213・220図、図版10・70）

7次調査区1-15グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径1.30m、遺構確認面から底面までの深さは0.59mを測る。

出土土器は中期末から後期初頭で、中期末が主体といえる。7・8は同一個体で、遺構の時期を示すものと思われる。

715号土坑（第214・221図、図版70）

7次調査区5-07グリッドに位置し、604号住居跡と重複して構築される。平面形態は円形を呈する。規模は径1.1m、遺構確認面から底面までの深さは1.02mを測る。覆土中層以下にはハマグリとキサゴの純貝層が交互に堆積する。

土器は小破片のみである。中期末を中心とする。

716号土坑（第221図、図版71）

現場の図面に記載がなく、内容は一切不明である。土器は後期後葉を中心とする。1は波状口縁の直下に縦長の瘤が貼り付けられるもので、曾谷式であろう。

717号土坑（第214・221図、図版10・71）

7次調査区5-04グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.3m、遺構確認面から底面までの深さは0.41mを測る。覆土下層には混土貝層が堆積する。

土器は中期末から後期初頭を中心とする。9は左側縁腹面側に加工痕が観察される。

718号土坑（第214・222図、図版10・71）

7次調査区2-24グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.0m、遺構確認面から底面までの深さは2.51mを測る。覆土上層には貝層が堆積する。7層以下は粘性が強く、8・10層には魚骨・獣骨が多く含まれる。

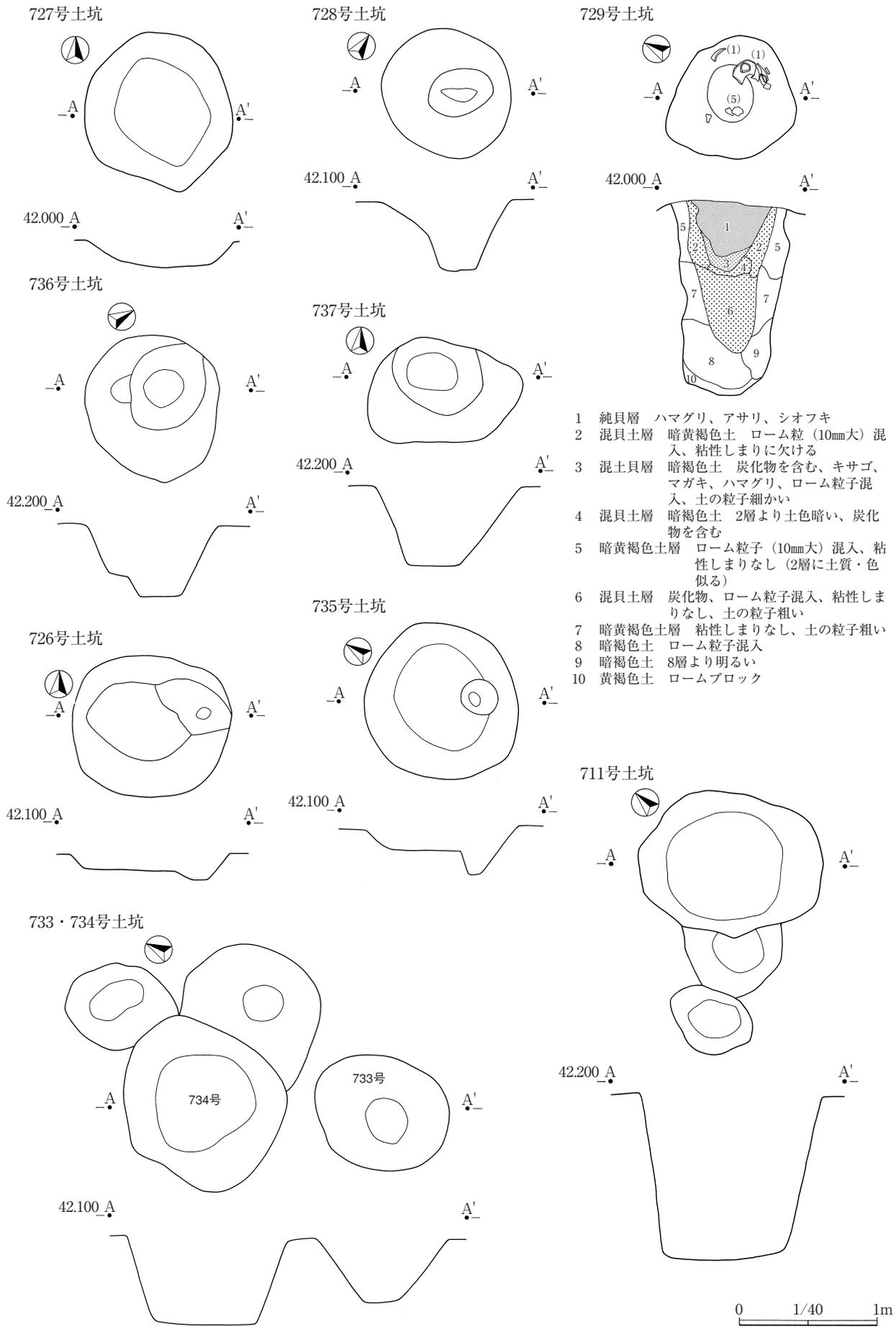
土器は後期初頭から前葉に属する。中心となるのは堀之内1式である。

721号土坑（第213図）

7次調査区2-02グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径0.90m、遺構確認面から底面までの深さは0.61mを測る。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中段から緩やかに広がる。

722号土坑（第213図）

7次調査区2-02グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は0.86×0.74m、遺構確認面から底面までの深さは0.66mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。



第215図 土坑 (3)

723号土坑（第213図）

7次調査区2-17グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径1.42×1.28mを測る。レベルの記載が無く、遺構確認面から底面までの深さは不明である。

724号土坑（第216図）

7次調査区3-23グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.25m、遺構確認面から底面までの深さは0.80mを測る。壁はやや開くように立ち上がる。

725号土坑（第216図）

7次調査区3-20グリッドに位置する。浅い皿状の土坑の隅に柱穴状のピットが構築される。全体の平面形態は楕円形を呈し、規模は1.22×0.80m、遺構確認面から底面までの深さは0.26m、ピット部分は円形を呈し規模0.5×0.5m、深さ0.75mを測る。

726号土坑（第215図）

7次調査区4-17グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.18×1.04m、遺構確認面から底面までの深さは0.20mを測る。浅い皿状であるが、底面は平坦である。

727号土坑（第215図）

7次調査区4-18グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径1.08m、遺構確認面から底面までの深さは0.19mを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

728号土坑（第215図）

7次調査区4-19グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は0.94×0.94m、遺構確認面から底面までの深さは0.50mを測る。すり鉢状であるが、中央部は柱穴状を呈する。

729号土坑（第215・222図、図版10・71）

7次調査区4-13グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.0×0.89m、遺構確認面から底面までの深さは1.38mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土中には純貝層と混貝土層が堆積し、貝層最下部からは第222図1が出土している。1層の純貝層からはイヌの頭蓋骨と四肢骨が出土している。調査時には貝層とともに散乱骨として採取されているが、すべて同一個体由来のものと考えられ、埋葬された可能性が高い。詳細については、第3節に7号埋葬犬として記載する。

遺物の出土状況は、SS1区の土坑群とよく似た状況である。1の精製深鉢は口縁部を欠損するが、それ以外はほぼそのまま出土した。入り組み連弧文は上下の振幅がやや大きい。

730号土坑（第213図）

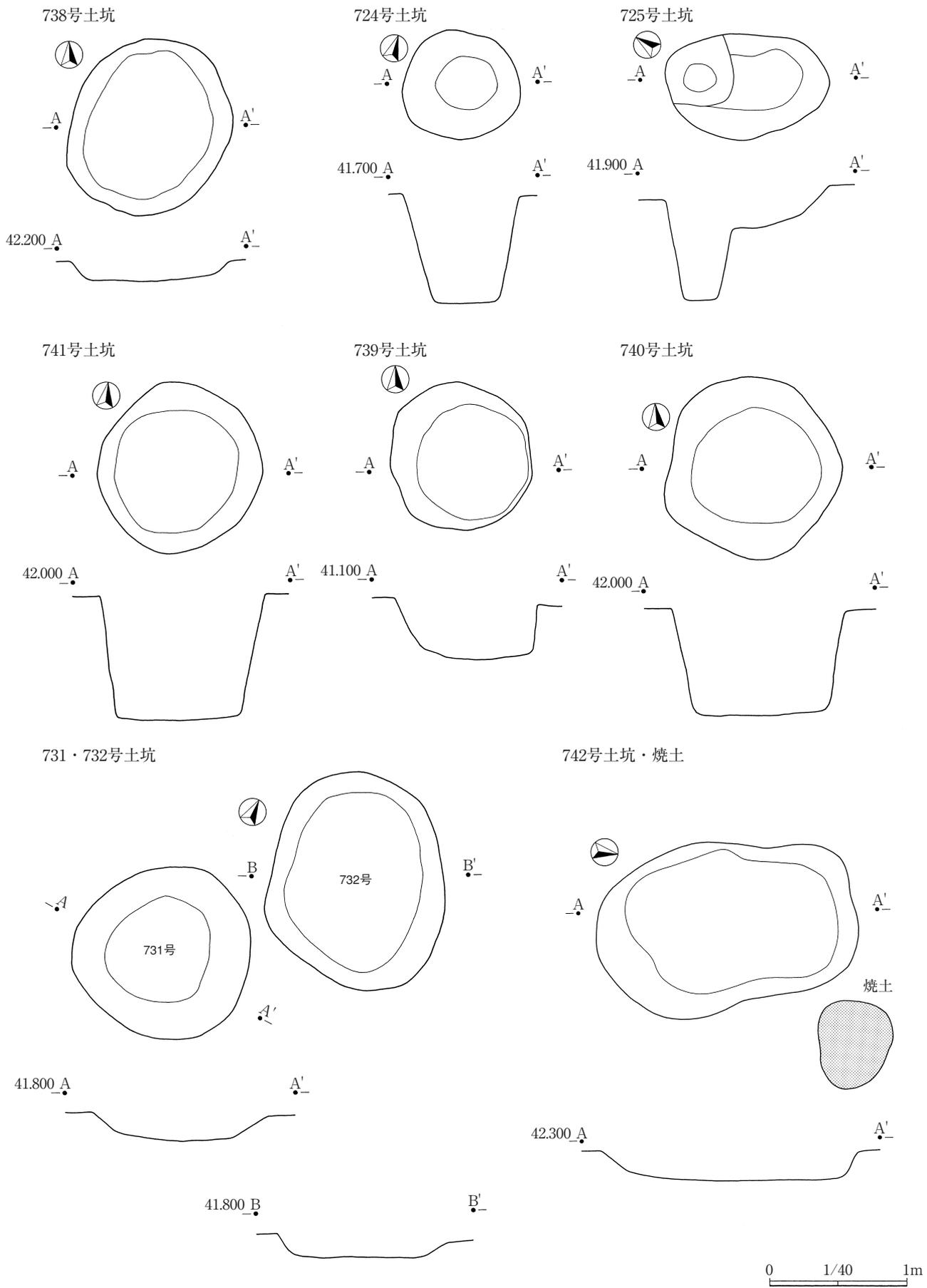
7次調査区5-08グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.10mを測る。レベルの記載が無く、遺構確認面から底面までの深さは不明である。

731号土坑（第216図）

7次調査区6-03グリッドに位置する。732号土坑に隣接する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.28m、遺構確認面から底面までの深さは0.20mを測る。壁は広がるようにして立ち上がる。

732号土坑（第216図）

7次調査区6-02グリッドに位置する。731号土坑に隣接する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.63×1.33m、遺構確認面から底面までの深さは0.18mを測る。壁はやや広がるようにして立ち上がる。



第216图 土坑 (4)

733号土坑（第215図）

7次調査区7-02グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.30×1.23m、遺構確認面から底面までの深さは0.67mを測る。壁は開くようにして立ち上がる。

734号土坑（第215図）

7次調査区7-02グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は1.28×1.20m、遺構確認面から底面までの深さは0.64mを測る。壁は立ち気味で、底面は平坦である。やや小さい掘り込みが2基切り合っているが、この土坑との関係は不明。

735号土坑（第215図）

7次調査区7-07グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は1.15×1.12m、遺構確認面から底面までの深さは0.18mを測る。浅い皿状であるが、底面は平坦である。

736号土坑（第215図）

7次調査区7-04グリッドに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は1.08×0.98m、遺構確認面から底面までの深さは0.53mを測る。すり鉢状であるが、最深部は柱穴状を呈する。

737号土坑（第215図）

7次調査区7-09・10グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.16×0.84m、遺構確認面から底面までの深さは0.59mを測る。すり鉢状であるが、最深部は柱穴状を呈する。

738号土坑（第216図）

7次調査区7-13・14グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈する。規模は1.33×1.15m、遺構確認面から底面までの深さは0.16mを測る。浅い皿状であるが、底面は平坦である。

739号土坑（第216図）

7次南東側調査区中央西寄りに位置する。740号土坑に隣接する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.20m、遺構確認面から底面までの深さは0.90mを測る。底面はほぼ平坦である。壁はわずかに開くように立ち上がる。

740号土坑（第216図）

7次南東側調査区中央西寄りに位置する。739号土坑に隣接する。平面形態は楕円形を呈する。規模は径1.30m、遺構確認面から底面までの深さは0.80mを測る。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

741号土坑（第216図）

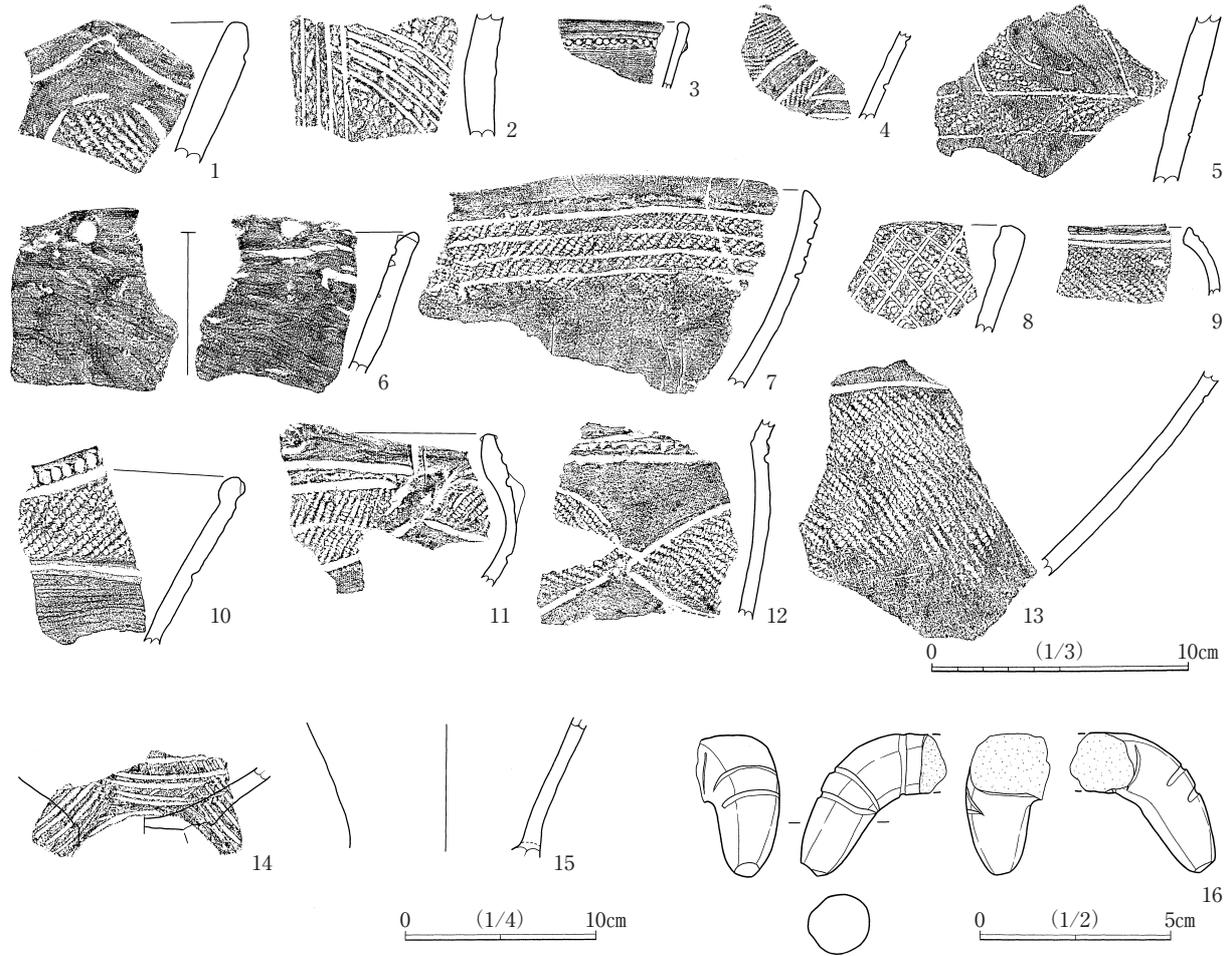
7次南東側調査区中央東寄りに位置する。平面形態は円形を呈する。規模は径1.08m、遺構確認面から底面までの深さは0.48mを測る。底面はほぼ平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

742号土坑（第216・222図、図版71）

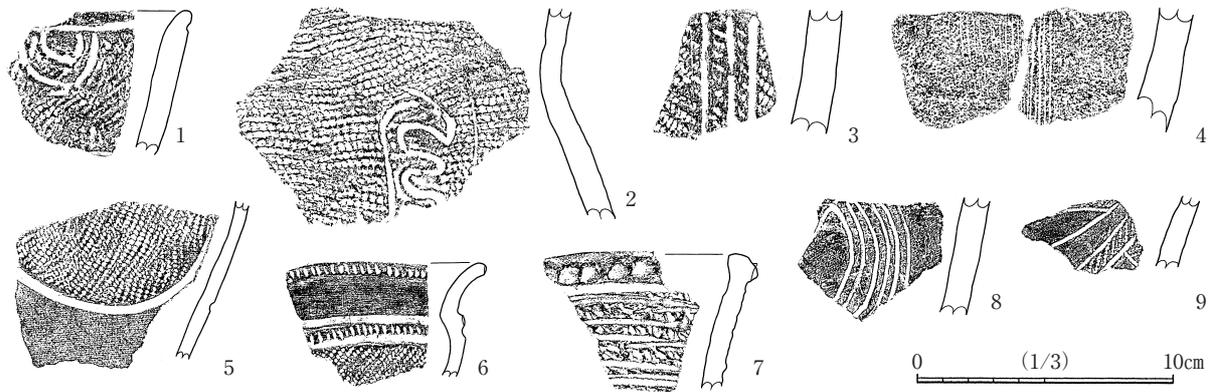
2次調査区SS5-24グリッドに位置する。すぐ東側に焼土の堆積が見られるが、共伴するものかどうかは不明。平面形態は長楕円形を呈する。主軸方位はN-18°-Wである。規模は1.88×1.20m、遺構確認面から底面までの深さは0.22mを測る。壁はやや開くように立ち上がる。

遺物は少なく、加曾利B式の粗製深鉢片が出土したのみである。

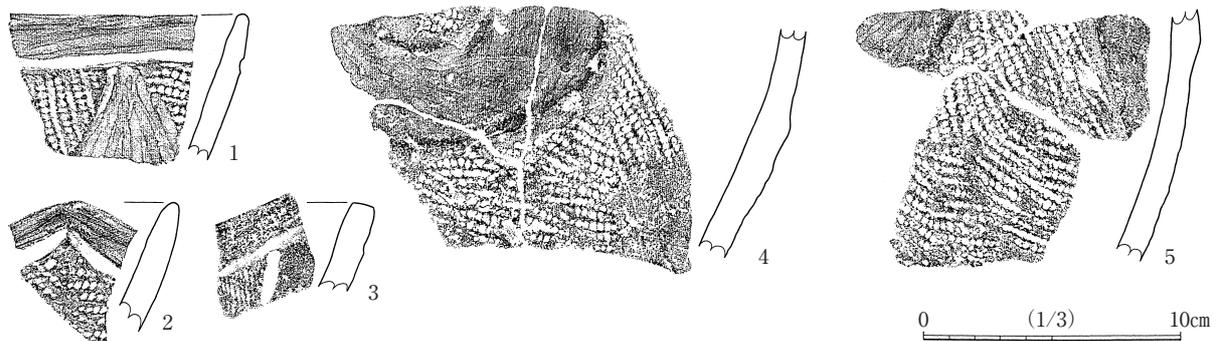
701号土坑



703号土坑

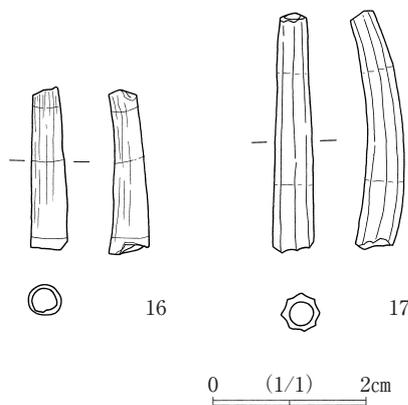
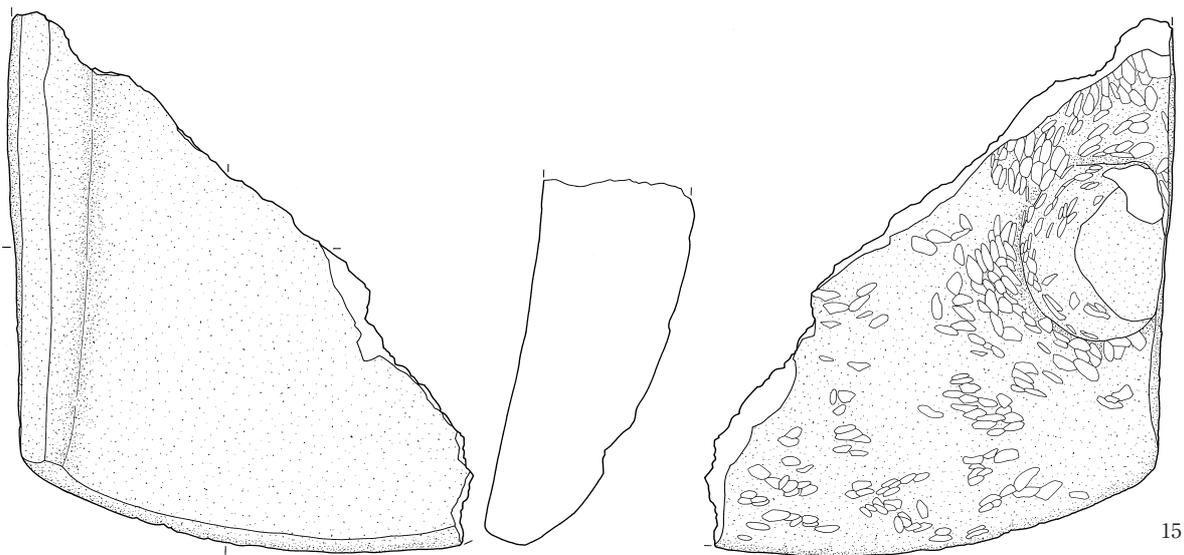
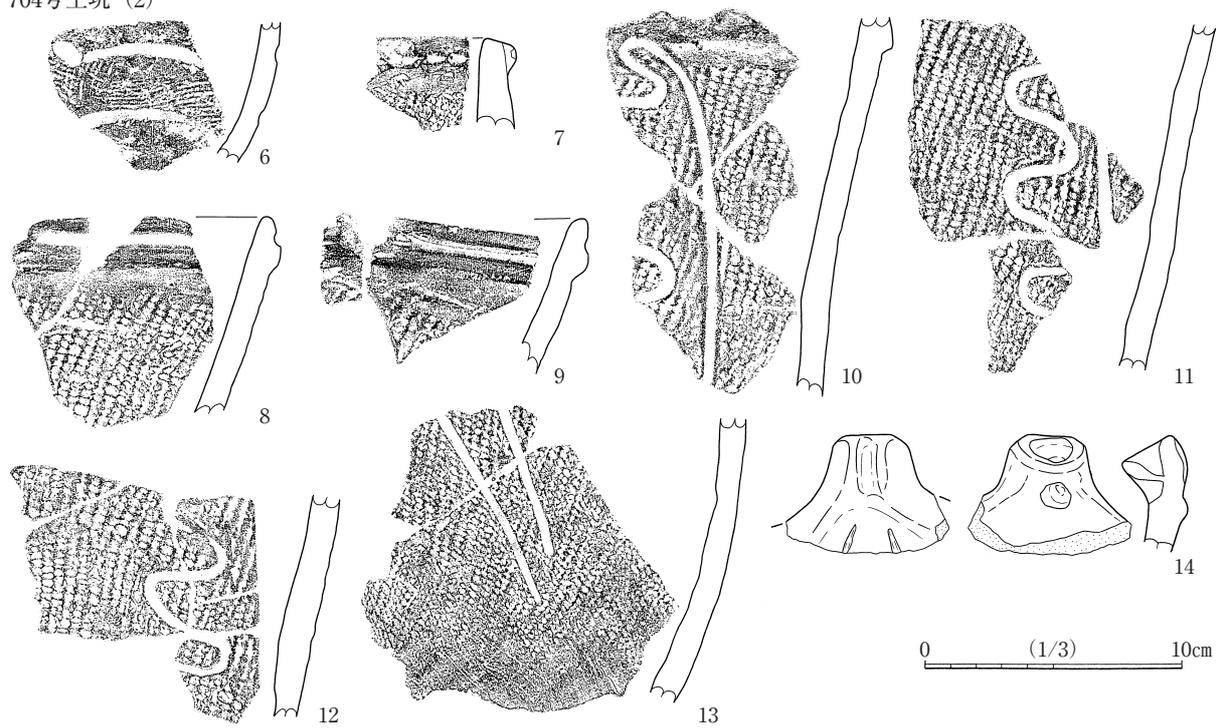


704号土坑 (1)



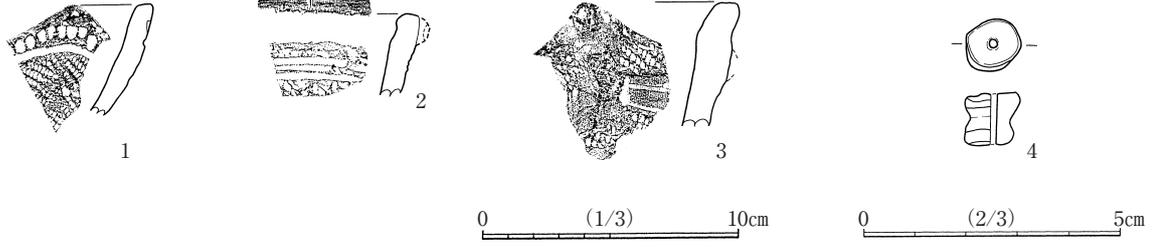
第217图 土坑出土遺物 (1)

704号土坑 (2)

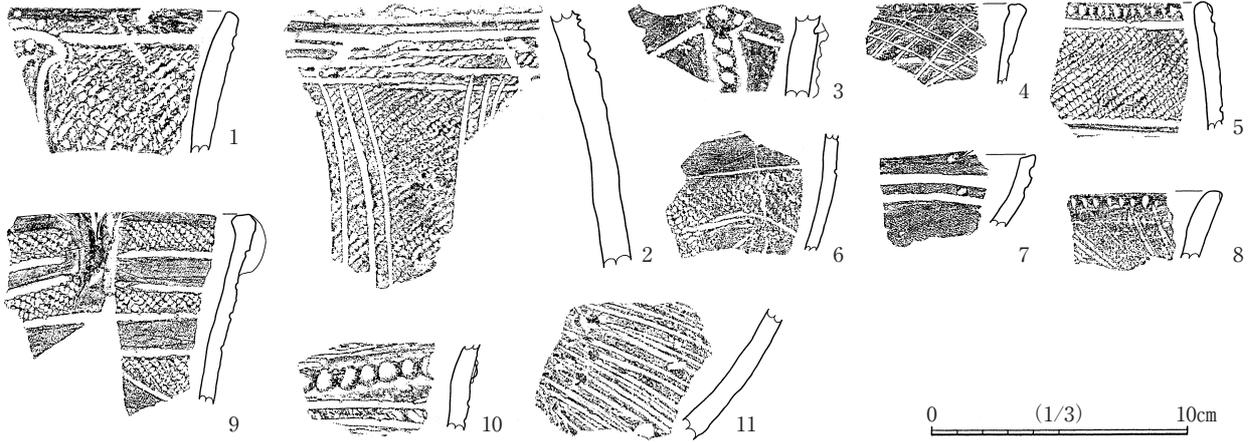


第218图 土坑出土遺物 (2)

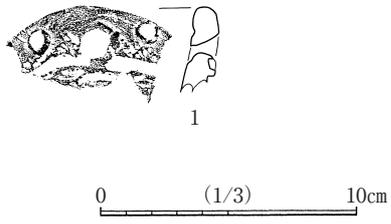
706号土坑



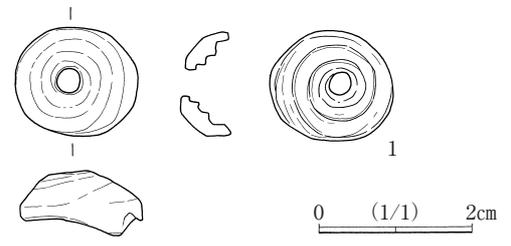
707号土坑



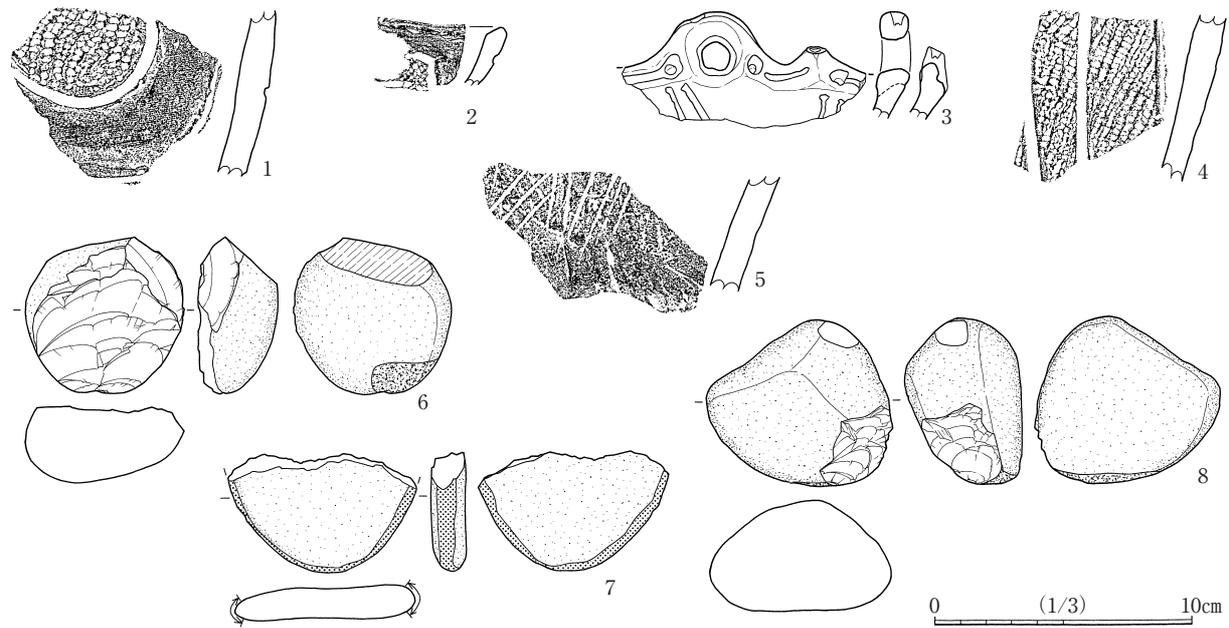
708号土坑



709号土坑

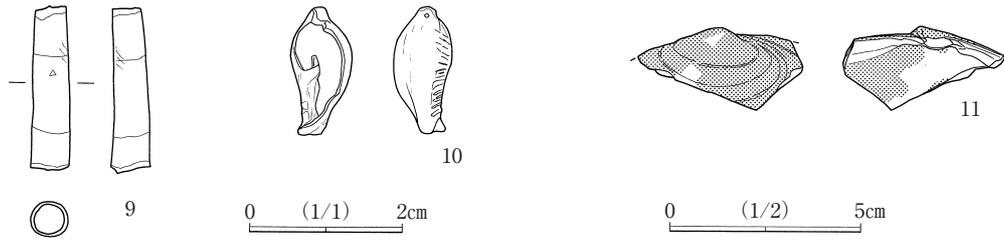


710号土坑 (1)

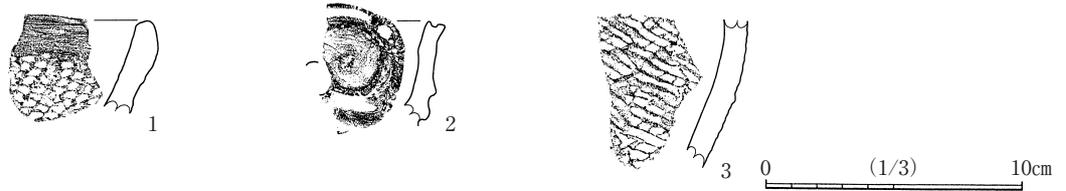


第219图 土坑出土遺物 (3)

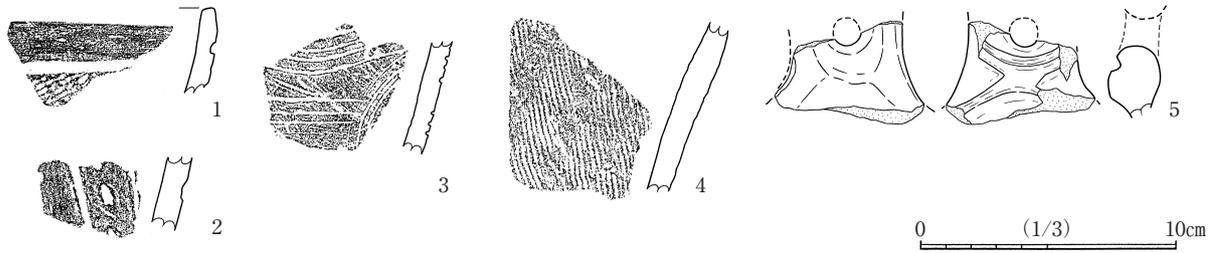
710号土坑 (2)



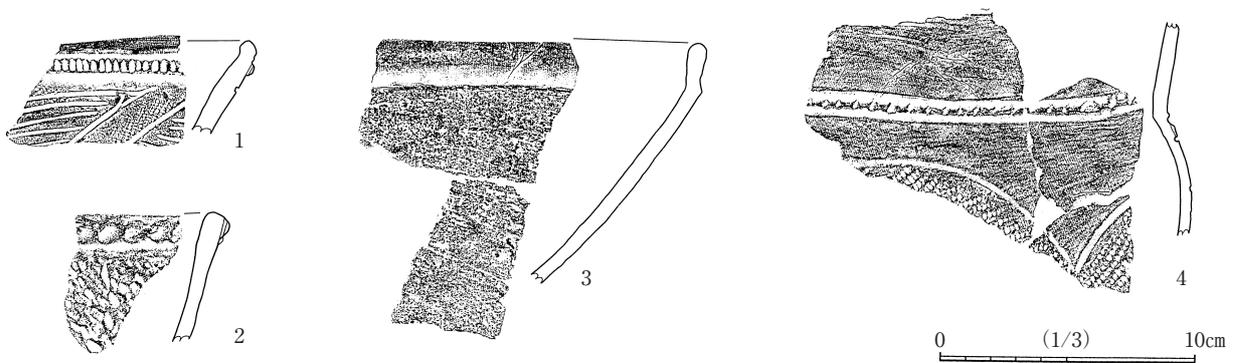
711号土坑



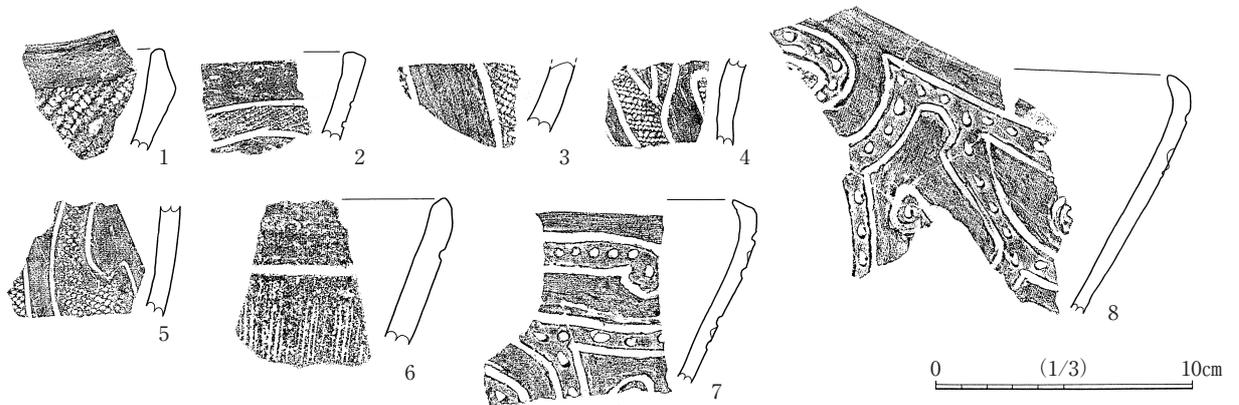
712号土坑



713号土坑

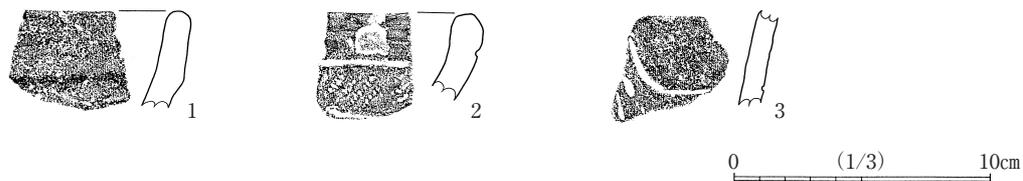


714号土坑

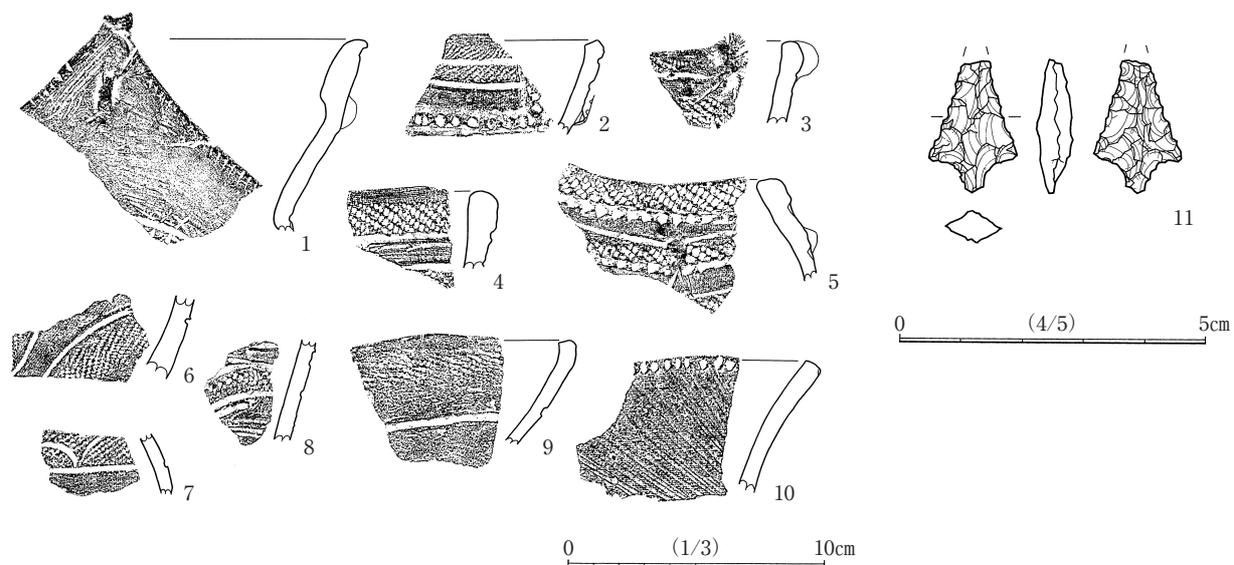


第220图 土坑出土遺物 (4)

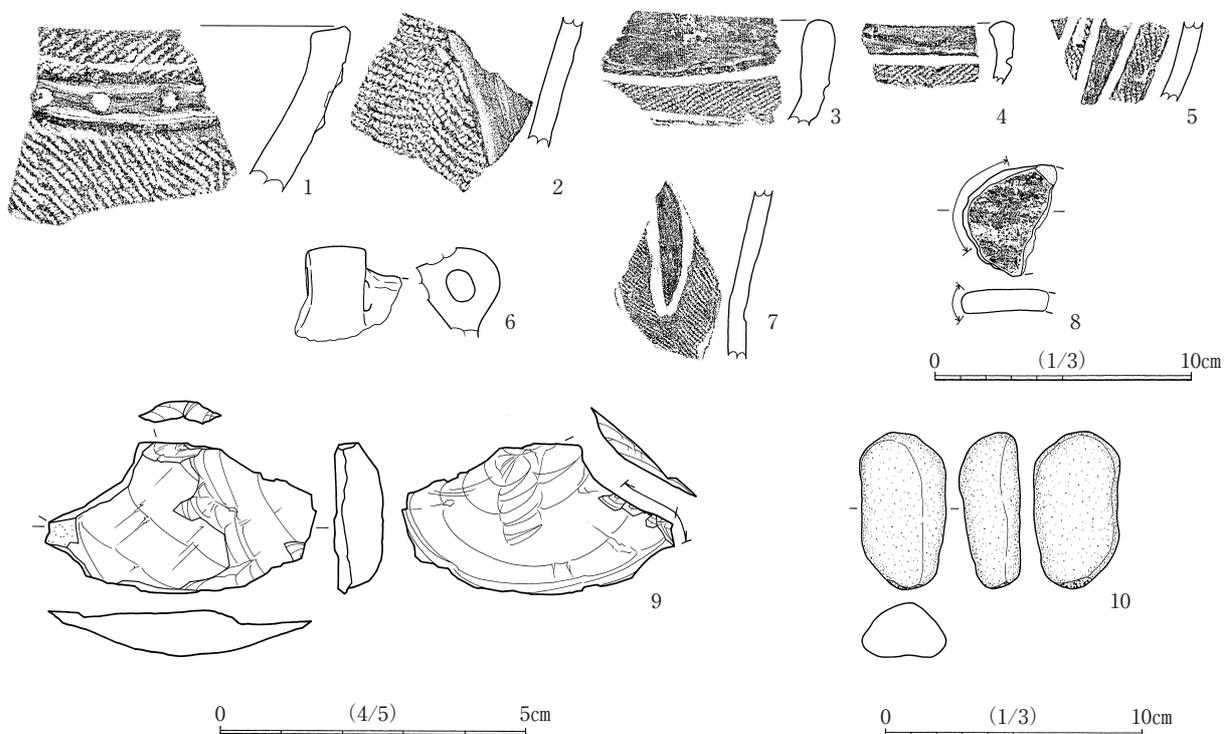
715号土坑



716号土坑

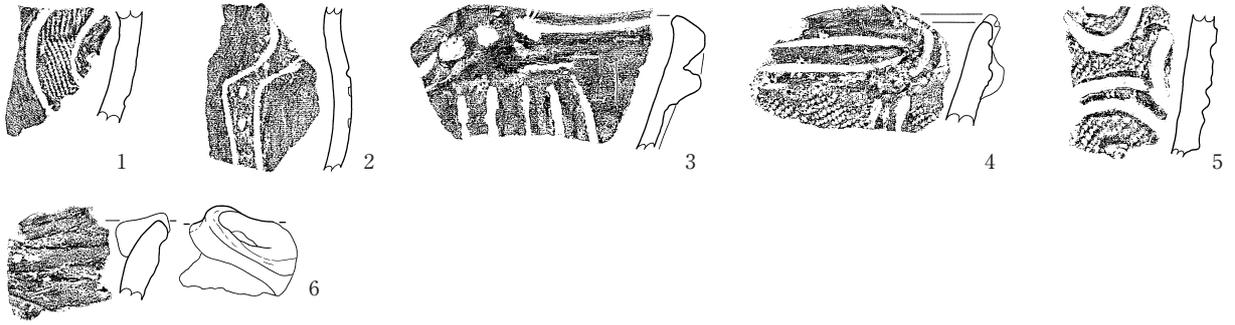


717号土坑

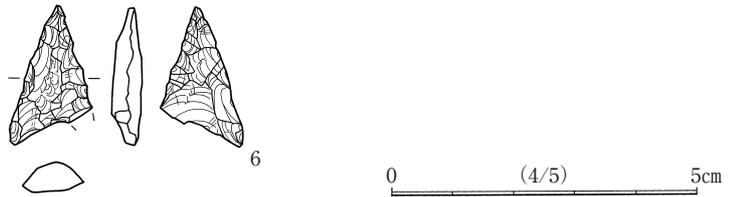
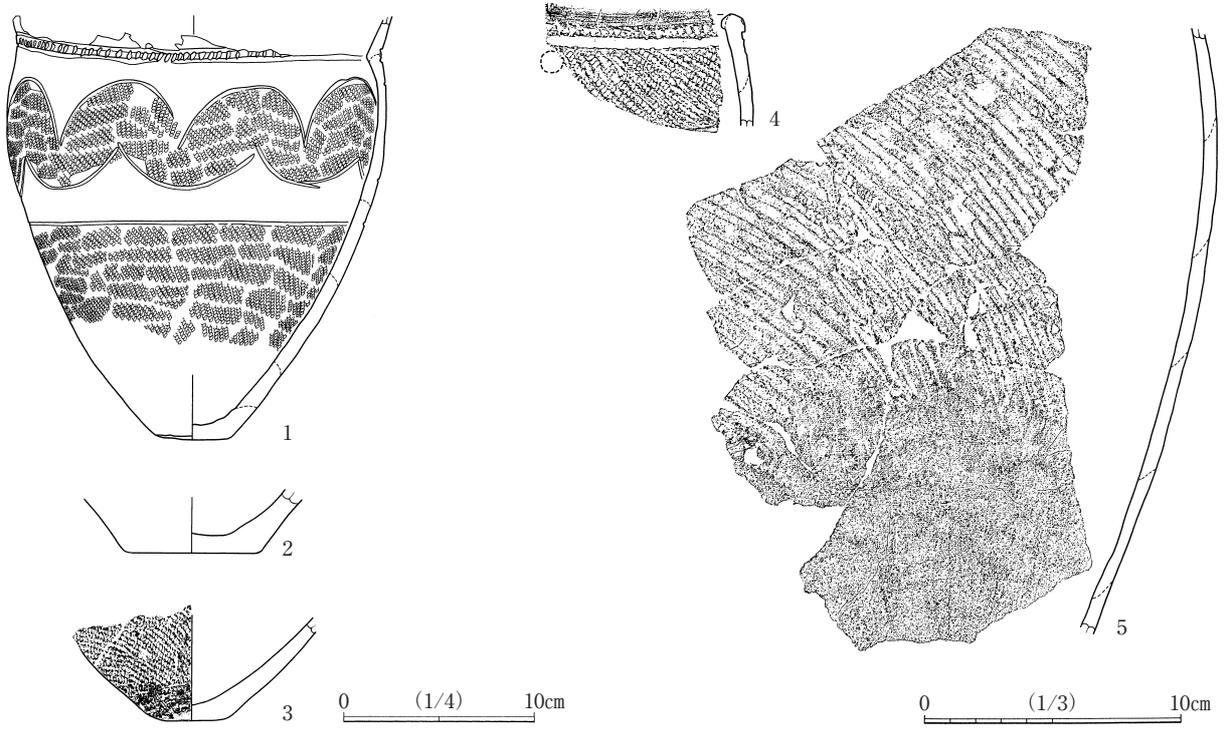


第221图 土坑出土遺物 (5)

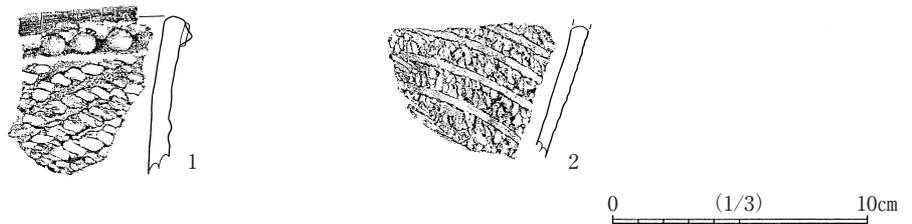
718号土坑



729号土坑

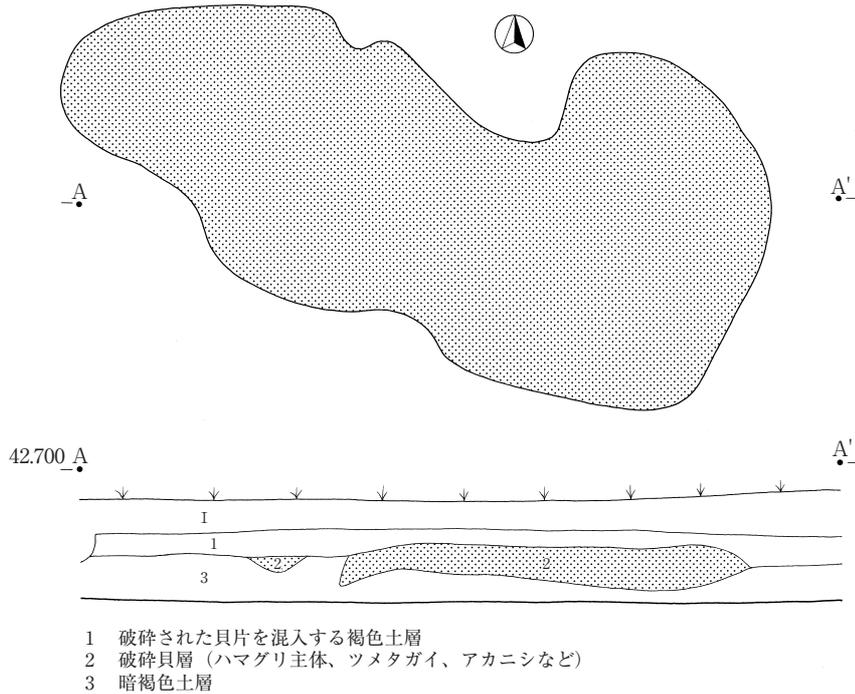


742号土坑

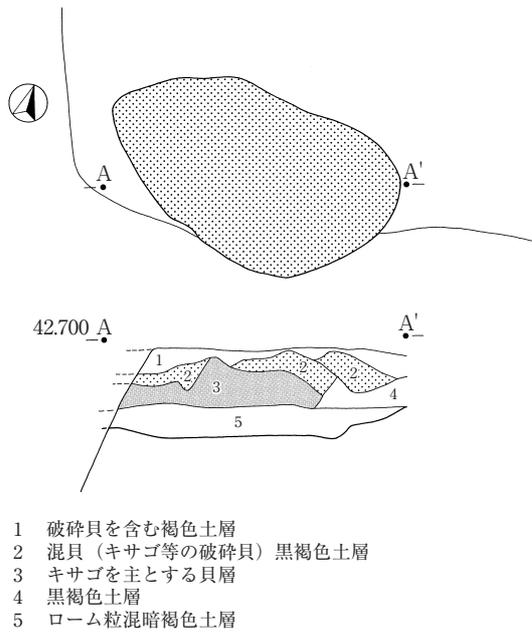


第222图 土坑出土遺物 (6)

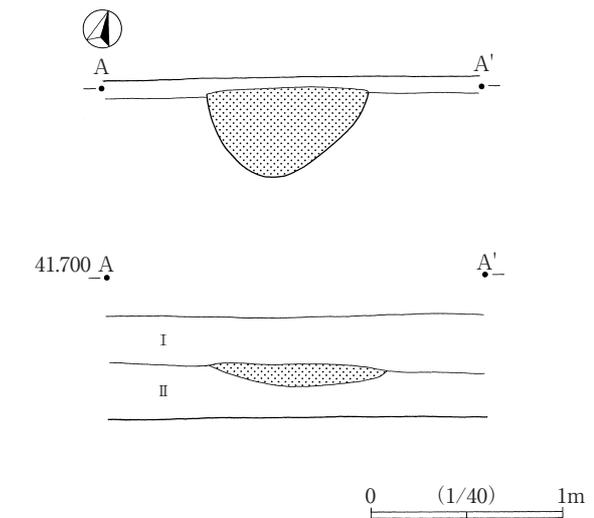
SS5-24貝層



SS5-42貝層



SS5-14貝層



第223図 SS5区検出地点貝層

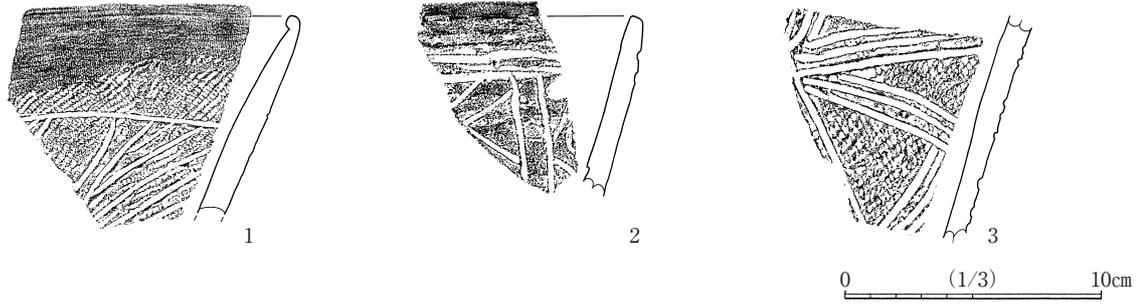
4 地点貝層

貝層についてはシリーズⅢに記載する予定であるが、小規模な地点貝層については今回報告することとした。具体的には2次調査のSS5区で検出された3カ所の地点貝層について扱う。

SS5-24貝層 (第223~225図、図版71・72)

60号住居跡西側で検出された、やや規模の大きな地点貝層である。東西約3.8m、南北約2.2m、最大厚約30cmを測る。ハマグリやツメタガイ、アカニシなどの破碎貝を主とする貝層である。

SS5-42貝層

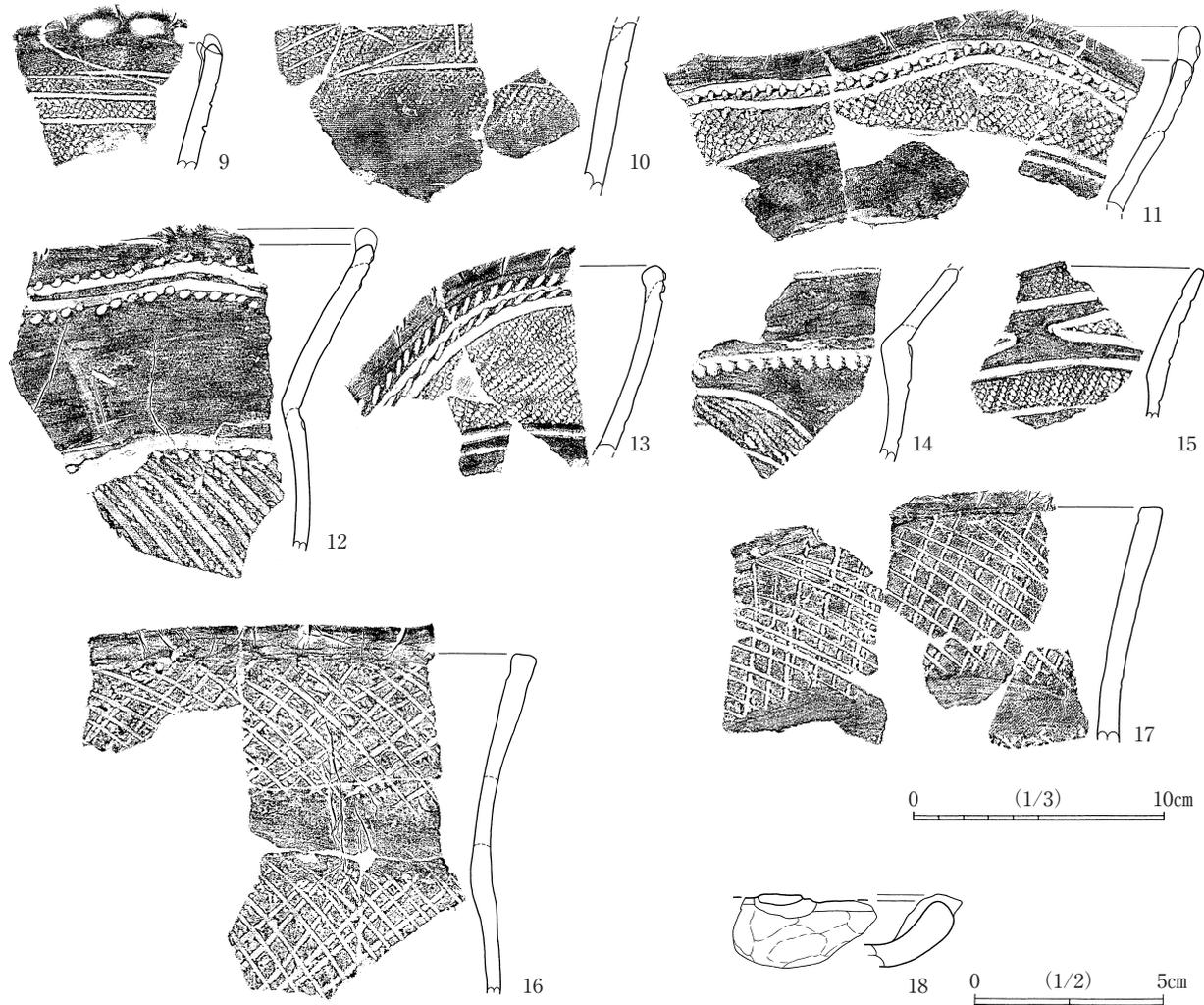


SS5-24貝層 (1)



第224図 SS5区検出地点貝層出土遺物 (1)

SS5-24貝層 (2)



第225図 SS5区検出地点貝層出土遺物 (2)

遺物は多かった。1は概報に掲載されたものであるが、口縁部と胴部の接合関係に誤りがあった。今回の図が正しいものである。4の浅鉢は平面形が三角形気味である。6は台と判断したもの。上側に縦位の条線、下側に横位の沈線を配する。7~10は堀之内2式の同一個体で、混入であろう。18は手捏のミニチュア土器である。

SS5-42貝層 (第223~224図、図版71)

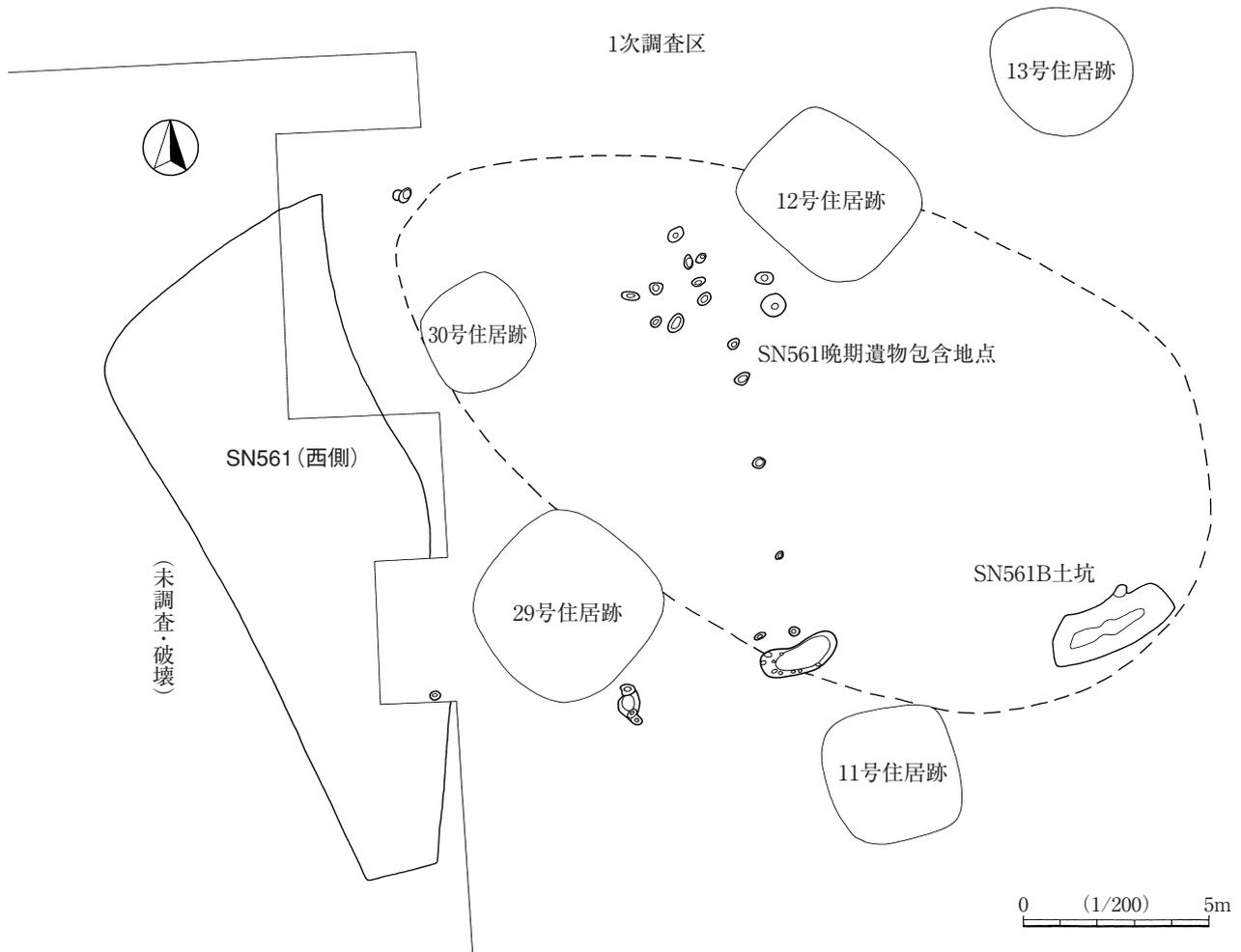
SS5区西端で検出されたもので、削平される寸前であったところをかりうじて調査したものである。東西約1.6m、南北約1m、最大厚は30cm程度である。中心部はキサゴを主とした純貝層となっており、その上にキサゴが混入する混貝土層が堆積していた。

出土遺物は少ない。1・2は堀之内2式の深鉢口縁で、貝層の時期を示すものであろう。

SS5-14貝層 (第223図)

SS5区北端部で検出された小規模な貝層で、現場の図面は確認できなかった。今回の図面は調査直後に作成された版下を基に、再作図したものである。検出範囲では、東西約80cm、南北約60cm、最大厚10cm程度である。土層注記等はなかったため、貝種を含め内容は不明である。

遺物は出土せず、時期も不明である。



第226図 SN561晚期遺物包含地点（西側）

5 晚期遺物包含層

SN561晚期遺物包含地点（西側）（第226～236図、図版72～75）

第1章で少し述べたが、第1次調査の際に貝塚中央部では、晩期の遺物を多量に包含する地点が南北2カ所検出された。そのうち北側に位置していたのがSN561と呼ばれた地点で、ここからは晩期中葉の前浦式を中心とする多量の土器が出土したほか、4体の埋葬人骨や75個以上の土偶が出土し、当時の状況を考える上で重要な資料を提供した。貝塚中央部は1次調査後の不幸な経過によりほとんどが未調査のまま削平されてしまったが、この遺構はかろうじて西側約60㎡が三角形に取り残されており、鷹野光行氏と大貫静夫氏が遺物の回収を行っている。これらの遺物はまだ国分寺台地区の整理作業の見通しが立っていなかった1991年に、鷹野氏によって資料紹介されている（鷹野 1991）。

今回の報告に当たって遺物を再度見直した結果、鷹野氏の了解を得た上でこの報告をそのまま引用させていただくことにした。

挿図の原版はかなり褪色が進んでいたため、拓本はそのまま使用することとして断面実測図は再トレースした。また、今回の整理作業中に新たに接合したり、赤彩が観察されたりしたものは再実測している。図の番号は当報告書の通し番号としたほか、遺物番号も全体で通し番号としている。従って文中の図番号、遺物番号もそれにあわせて変更していることをあらかじめ了解願いたい。

〔(前略) 採集された土器の時期は隣接するSN561に見られたものと類似し、若干の後期前半・中



第227图 SN561 (西侧) 出土土器 (1)

葉、少量の後期後半と晩期初頭の土器、そして大量の晩期中葉の土器、そして晩期後半が少しある。

第227図1～3は後期前半の土器で、1は称名寺1式、2・3は堀之内1式である。第227図4～18には後期中葉各時期のものがある。第227図19～25・30・31は安行1式、第227図26～29・31～42は安行2式である。

第228図46以降に晩期の土器を示した。46～52が安行3a式である。47は縄紋が施されていない。48はもう少し新しい段階かもしれない。

第228図53～85、第229図86～109は安行3b式期の土器である。第228図53・54は姥山Ⅱ式の波状口縁の波頂部の小波片、56の浅鉢には釣針形沈線紋が見られる。58～60は広口の壺形である。62・63は細密沈線紋の土器である。64～76も条線紋が器面をおおう姥山Ⅱ式の砲弾形の深鉢である。74はいくらか新しいのだろうか。77～85・第229図86～109は姥山Ⅲ式とも呼ばれるものである。筆者は姥山Ⅲ式という段階の設定については否定的（鷹野 1988）だが、ここでは便宜上この名を用いて説明しておく。77は小型の波状口縁の深鉢であるが無紋である。78～80は波状口縁の深鉢で、姥山Ⅱ式から縄紋を取り去ったもの、82・85・第229図86・90では口縁部の形態や内側の沈線などに前浦式との類似点がかがえる。第229図86では破片で全容がかならずしも明らかではないが、紋様の点でも前浦式との関連が強く、縄紋が付け加えられれば前浦1式ということができよう。第229図87の浅鉢は安行3b式で口縁部からたれさがる2本一組の弧線紋が特徴的で、口唇部には2個1対の突起が大きいものと小さいものが交互に4つずつ貼りつけられている。赤茶色で内面はよくみがかれている。底部を欠くが口縁部は全周している。この土器は以前安行3b式土器についてふれたときにとりあげた（鷹野 1988 p.66第11図3）。94～104は通常2段に重なる杵状紋のある砲弾型の器形の深鉢である。105は2本の沈線と斜めの線が見えるが、斜めの線は、大きな「の」字状紋の一部かもしれない。107は粗い斜めの線が何本かあるが晩期の後半のものかもしれない。

110～113・第230図115～117は安行3c式である。安行3c式を3分した試みに照らしてみる（鷹野 1990）と、110は古段階、111・113は中段階、114・第230図115・116は新段階、となるだろうか。

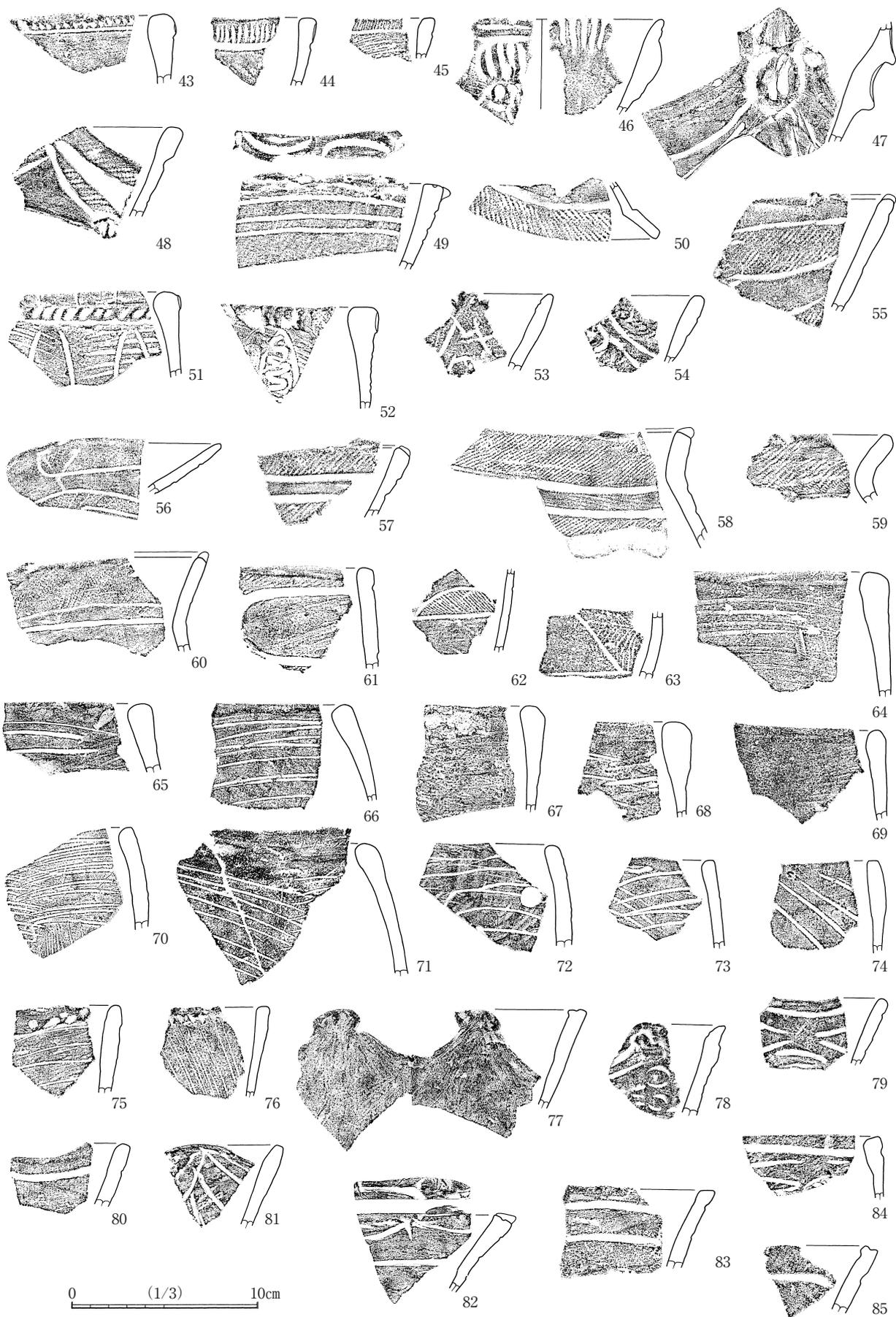
第230図118は縄紋がないのでここに置いてしまったが、前浦Ⅱ式としたほうが良い。

第230図119～124・126・132は安行3d式の土器で119と120は同一個体かもしれない。132は壺型で、上に凹み列のある縦の凸帯がつけられている。大洞A式に近いことが考えられる。125・127～130は安行3c式または3d式の胴部である（編者注：125は当初は別個体としてそれぞれ掲載されていたが、今回接合したため番号を統合した）。

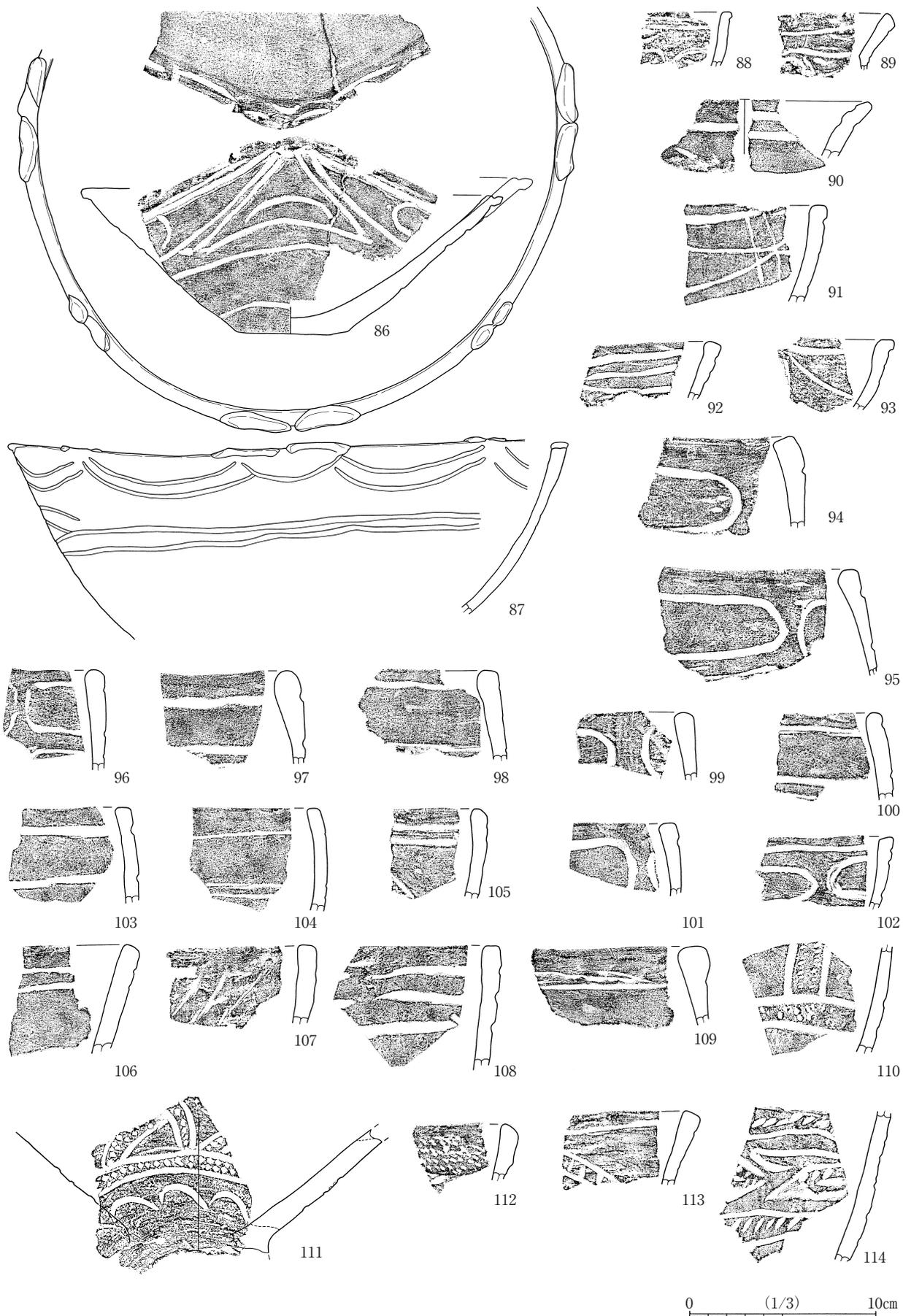
第230図132・133は細密沈線ならぬ「細粗沈線」が充填した紋様の土器である。これが3c式期であることは前に指摘した（鷹野 1988 p.69）。

第230図134～147は前浦Ⅰ式土器である。139と140は同一個体。141には無節の縄紋が施される。147は台付土器の台の部分で縄紋を施した上から沈線を彫り込んで右向きの「の」字状紋を作りだす。

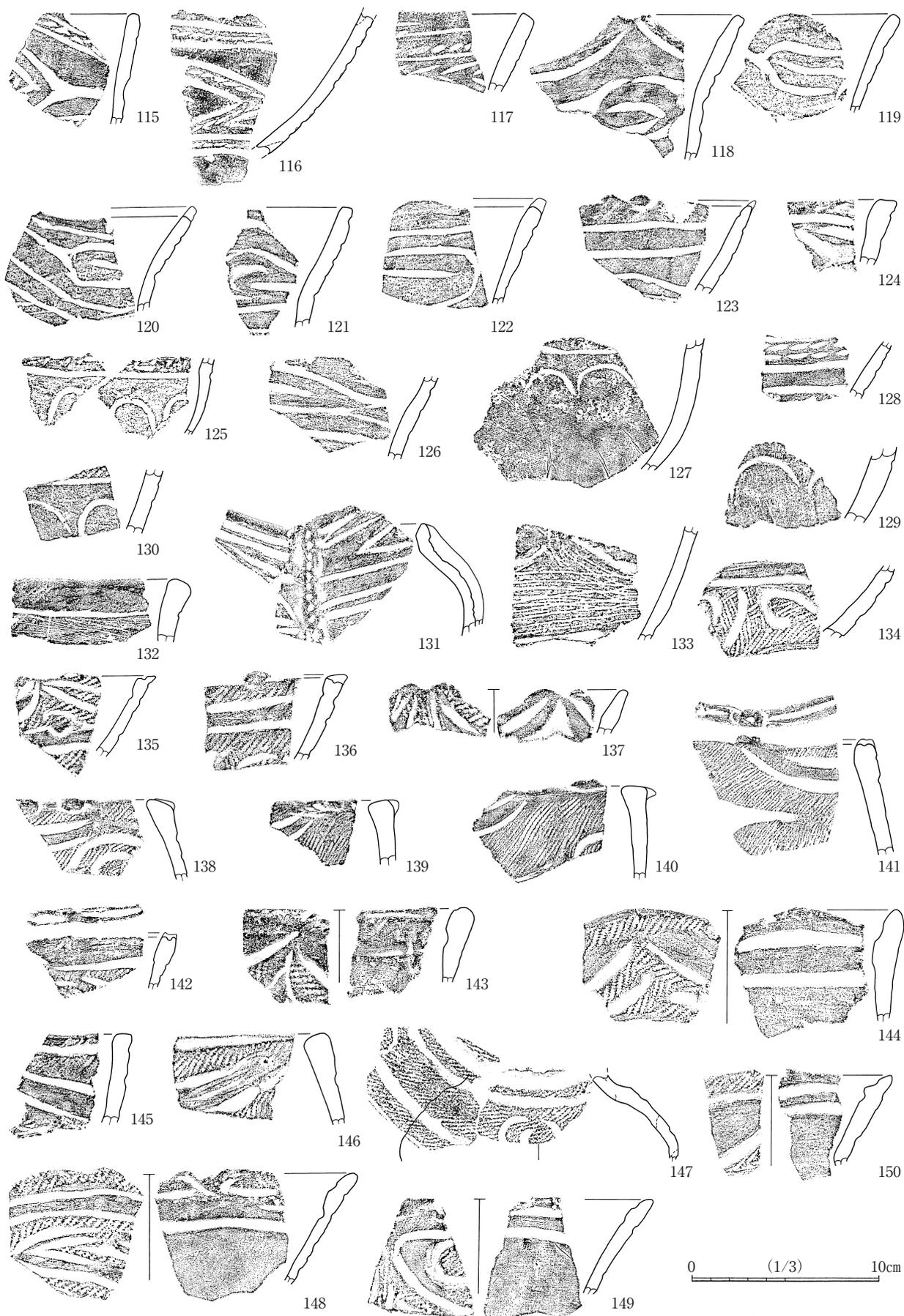
第230図148～150・第231図151～163・第232図164・165・188～191は前浦Ⅱ式で、第232図166～187も大半が前浦Ⅱ式であろう。第230図148～150、第231図151～153、155・156の浅鉢では太い縄紋の帯で囲んだ舟形の区画の中に「の」字状紋が作られている。152と153には下半部にも「の」字状紋がついている。154は平行する縄紋の帯の間にわたって「の」字状紋があるものである。159～163は胴部



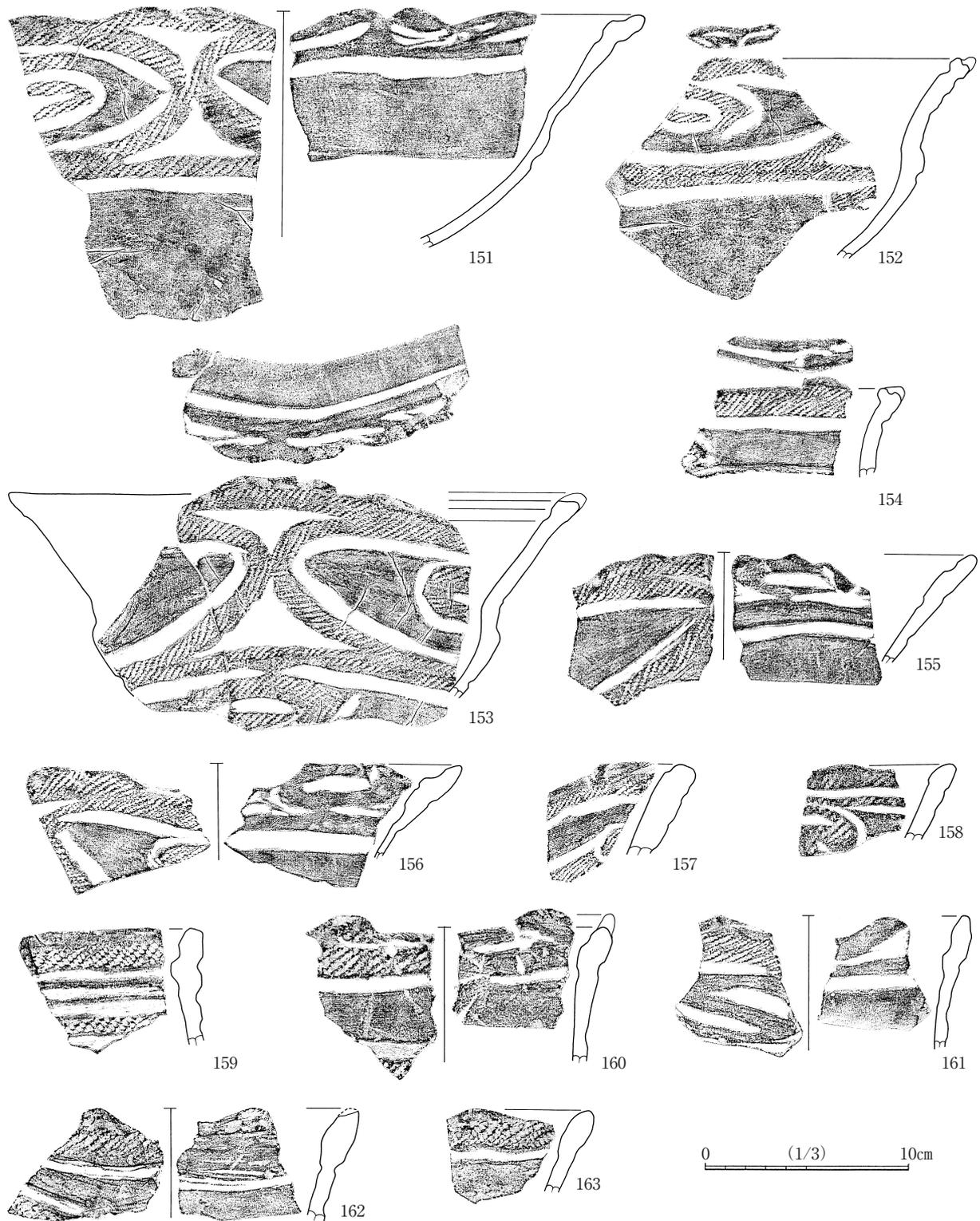
第228图 SN561 (西侧) 出土土器 (2)



第229图 SN561 (西侧) 出土土器 (3)

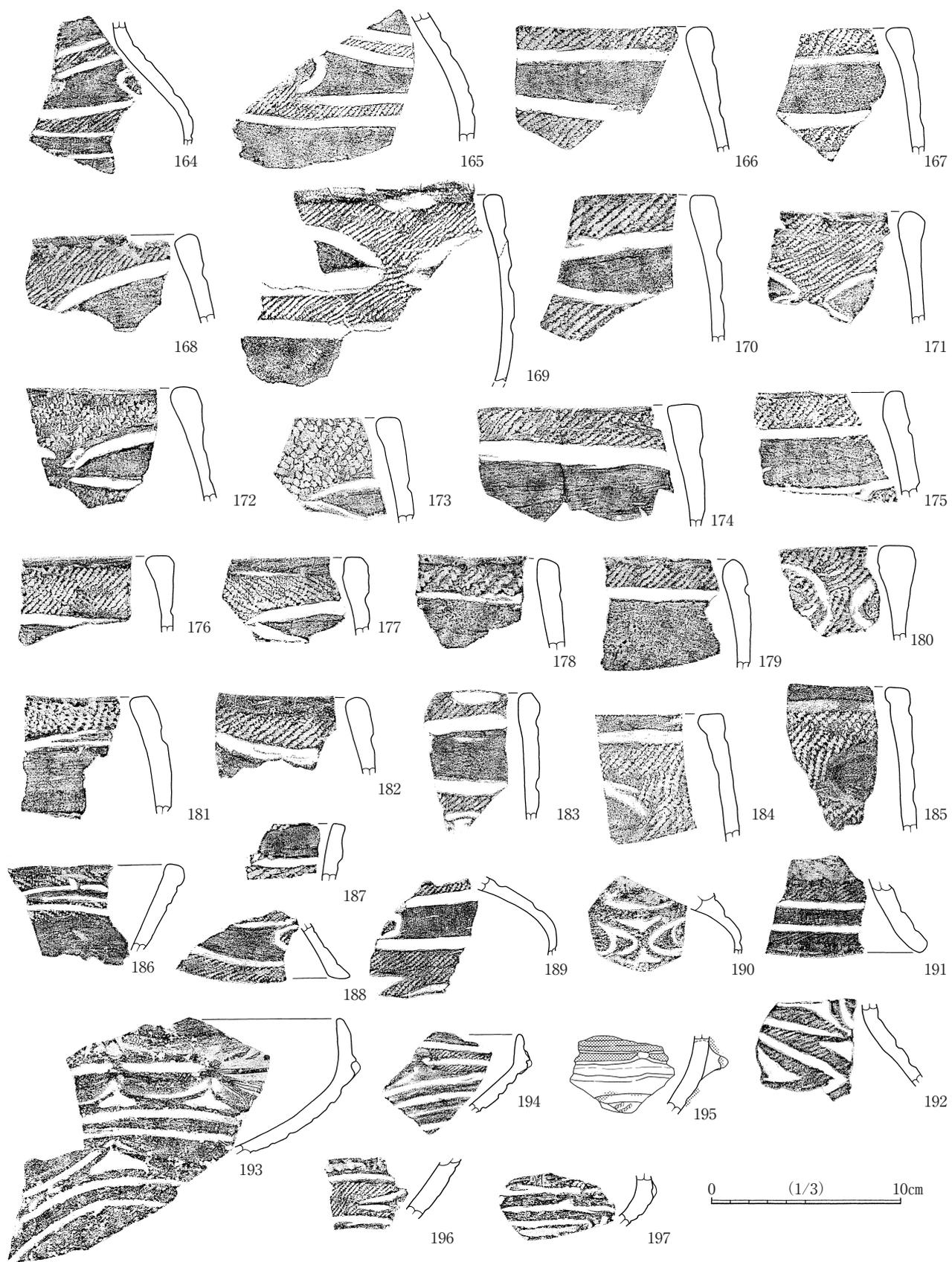


第230图 SN561 (西侧) 出土土器 (4)

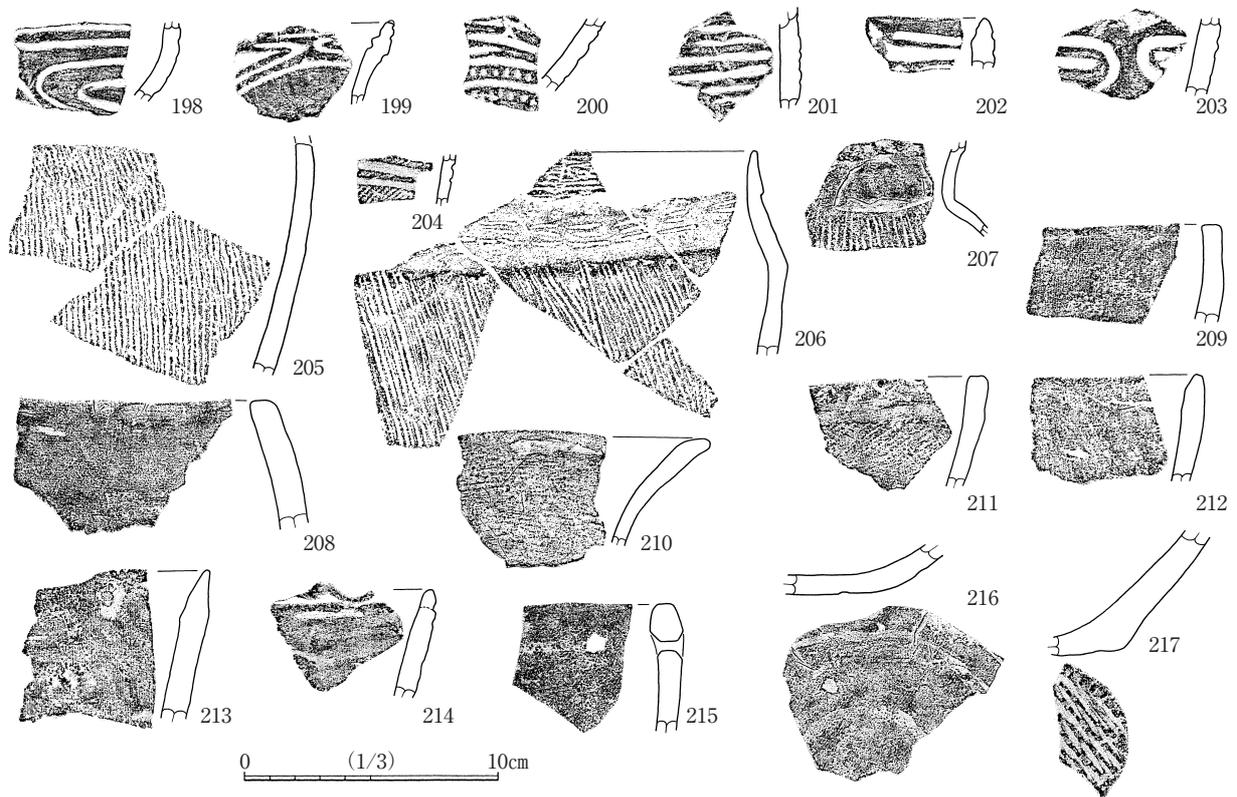


第231図 SN561（西側）出土土器（5）

半ばで少しくびれ、その下が張り出す形の深鉢、第232図164・165は壺の肩の部分、188～191は台付土器の台の部分である。第232図166～181・183～185の舟形杵状紋のある粗製土器については、いくつかのバラエティのあることは以前に触れた（鷹野 1978）が、そのバラエティと前浦Ⅰ式・Ⅱ式との対応関係はまだ明らかでない。しかし166～174のように太い沈線で大きな舟形杵状紋を作るという典型的な形は新しいほうに属するものと考えられる。162は2本一組の弧線が口縁部から下向きに連なる



第232図 SN561 (西側) 出土土器 (6)



第233図 SN561（西側）出土土器（7）

ものである。

第232図193～197は杉田Ⅱ式の浅鉢である。

第233図198～204は晩期終末期の土器片で、199～202が大洞A式、198・203・304がA'式である。205～207はこの頃に伴う粗製土器で、205と207には撚糸紋、206には条痕紋がある。208～215は無紋の粗製土器で晩期半ばのものが多い。

すでに述べたように、これらの土器は第1次調査の際のSN561とした晩期の遺物包含地区のものの時期と変わらない。SN561については、米田氏の説明（米田 1989）にあるとおり、4体の人骨のほか多量の土偶の破片が検出されたが、この踏査の際にはそれらはみつけれられていない。（以下略）

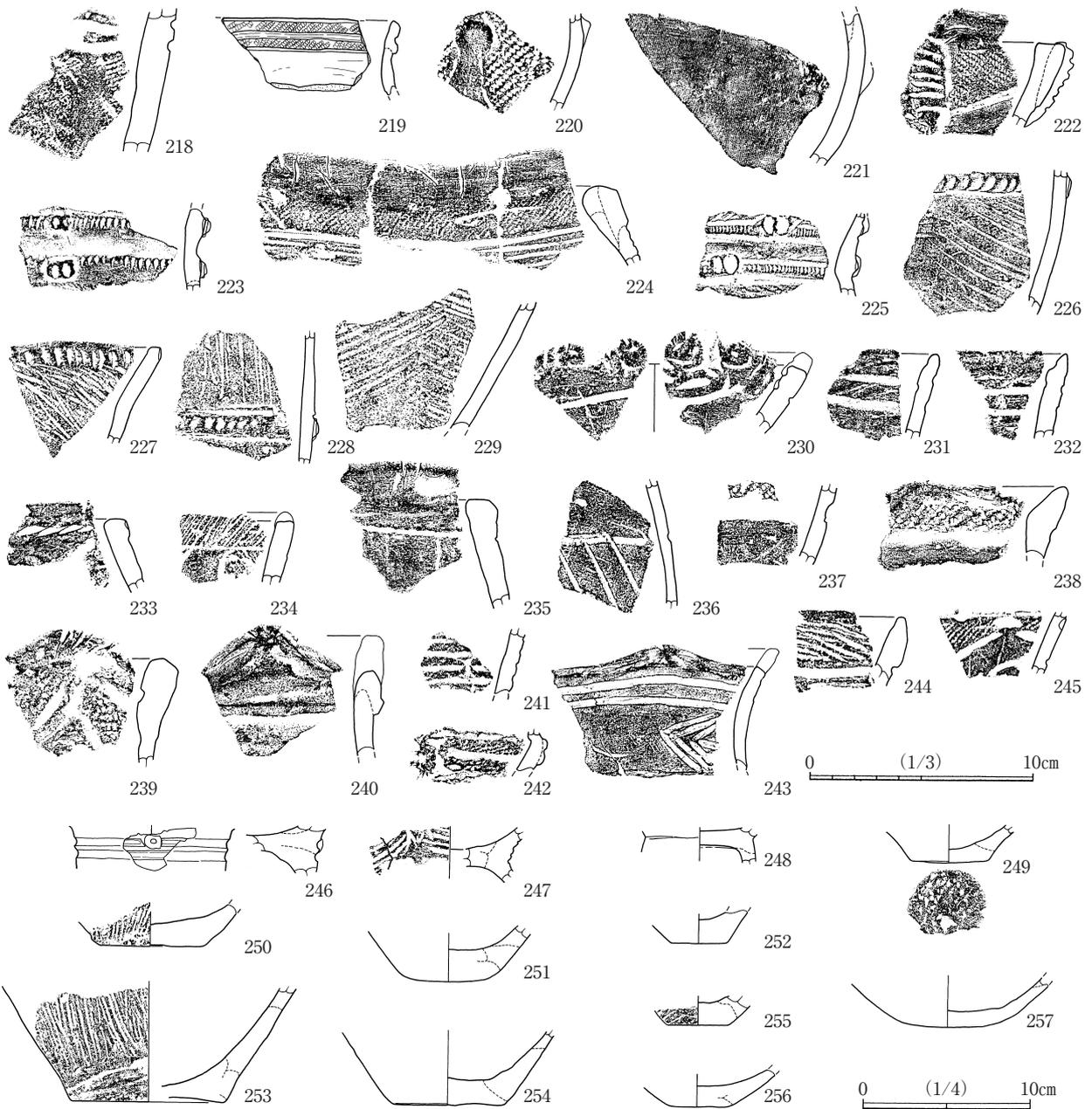
これらの資料のうち、2004年12月現在所在が確認できないものは以下の通り。

第228図45・85、第230図124、第232図187・191、第233図200・209・210

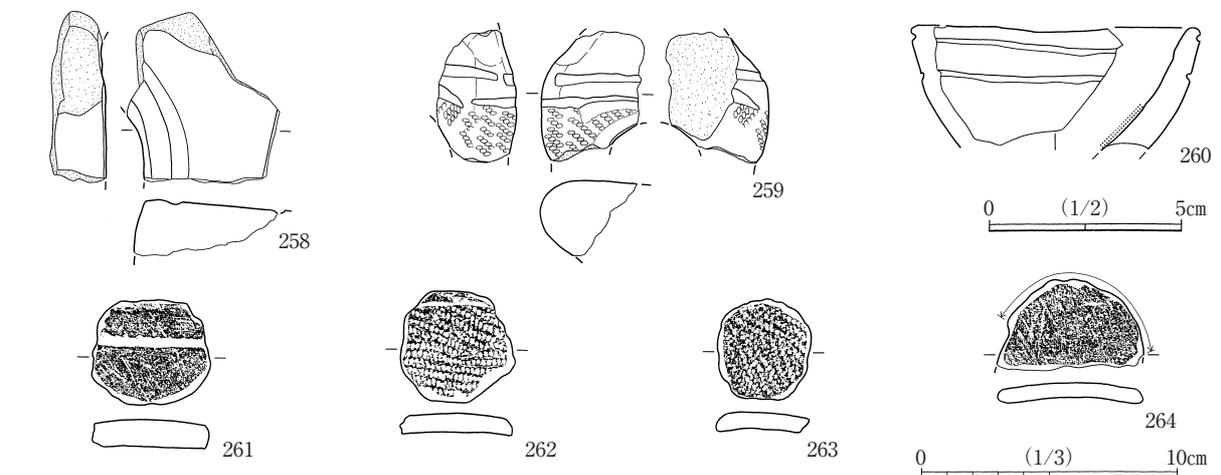
第234～236図はそれ以外の遺物で、補足的に選別した。土器の時期は既発表のものとほぼ同一である。237～239は前浦式、240～242は大洞A式である。243は荒海2式の壺形土器であろう。244は口唇直下に撚糸文が施される。245はやや変形しているが、荒海4式であろう。253は縦位の条痕が施される深鉢の底部である。

土製品では土偶の小破片やミニチュア土器、土製円盤が出土している。いずれも小破片であるため見過ごされたのであろう。260は口縁に沿って沈線が2条巡るミニチュア土器で、内面に赤彩が施される。

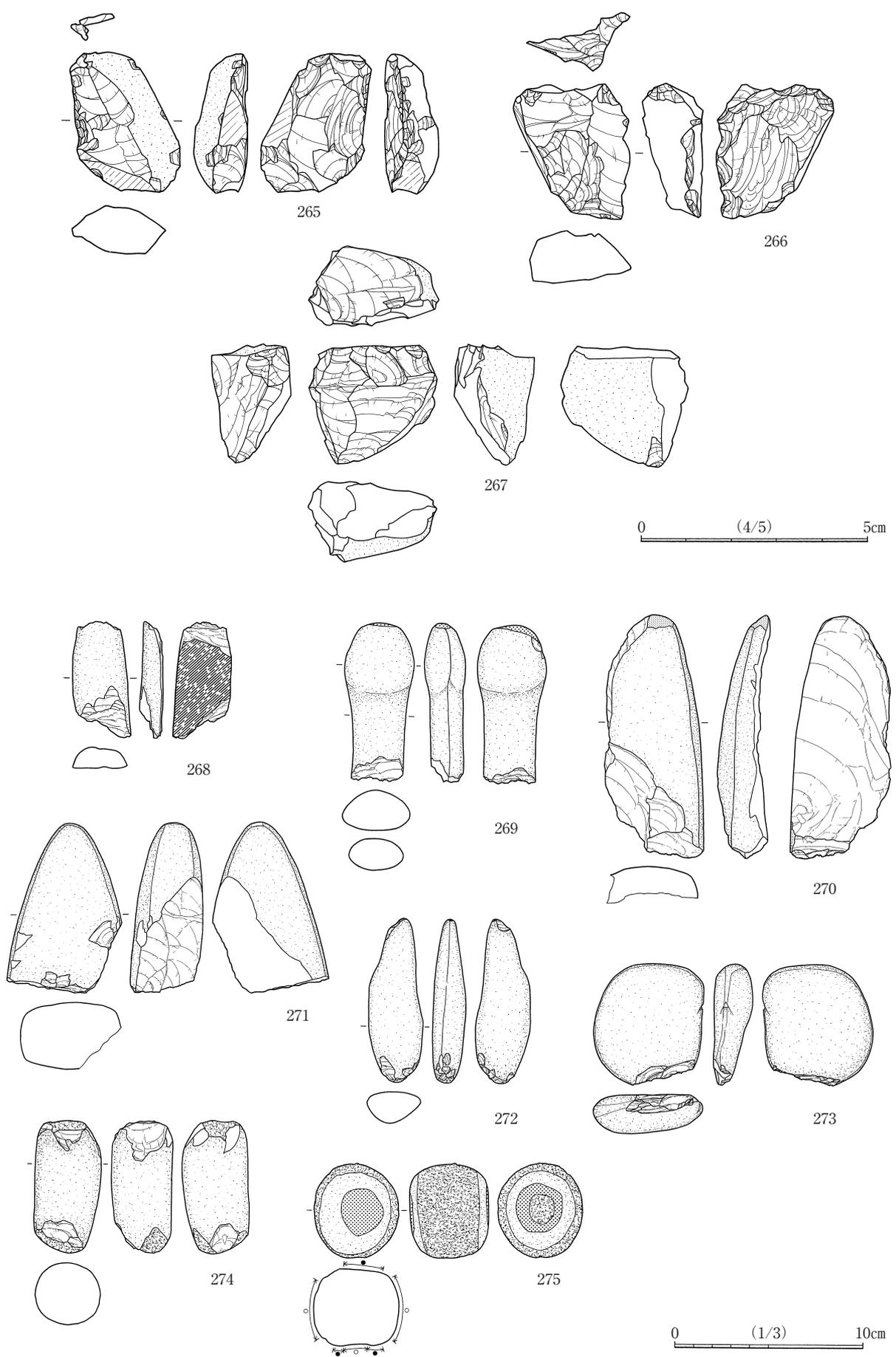
石器類は、剥片石器は少なく磨製石斧、石剣などを中心とする。268は石剣の破片で背面は節理割れである。269は、先端部以外は明白な研磨痕は観察されないが、形状から加工されたものとみなした。270・271は磨製石斧である。274は上下から敲打が加えられているが、石棒の可能性もある。



第234图 SN561 (西側) 出土土器 (8)



第235图 SN561 (西側) 出土土製品



第236图 SN561 (西側) 出土石器

第3節 埋葬

1 埋葬人骨

第4次及び7次調査の面状貝層付近から、縄文人の埋葬骨が15体出土している。第4表に一覧を示す。既報告で1号から59号まで57体（35・36号が欠番）の人骨が記載されており、今回報告分を合わせると西広貝塚から出土した縄文人埋葬骨は72体となる。取り上げ時の9号・11号は縄文時代の埋葬骨とは認められず欠番とした。このほか、面状貝層から散乱骨が多数出土しており、その概要のみを記載するが、これらについては、形質学的な分析の成果とともにシリーズⅢに掲載する。なお、遺体の総合的な分析を聖マリアンナ医科大学平田和明氏・長岡朋人氏に、歯牙の観察・計測を渡辺新氏に依頼し、すでに成果を受け取っている。今回の記載に当たって、年齢・性別等の概要を引用するが、本報告はシリーズⅡであって変更の可能性があることを明記しておく。

(1) 埋葬遺体

ここでは、出土した人骨の概要と出土状況について記載する。

60号人骨（第239・242・243図、図版11・68・77）

5-1・2・7グリッドに跨る位置から、20歳代の女性のほぼ全身の骨が出土している。Ⅲ層から出土しており、掘り込みは確認できなかった。骨の位置関係は乱れていて、葬位も不明であるが、寛骨と大腿骨の位置がほぼ解剖学的自然位を保っているとみられるので、埋葬遺体が後に攪乱を受けたものと判断した。右寛骨の寛骨臼と右大腿骨の骨頭が近接しており、左寛骨と左大腿骨の近位側も近接している。そのほかの部位は散乱しており、劣化の状態と部位に重複がないことから同一個体の可能性が高い。下顎骨、上腕骨、尺骨は破片が単独で出土しているのに対して、腰椎6個と肋骨2本は意図的に集積したようにもみえる。全体に骨の保存状態は悪く、古い破損の痕や長管骨の骨端のイヌ型の咬み痕が著しい。埋葬後に地表に露出して傷んだことを物語る。寛骨に隣接してイヌの埋葬遺体が存在する。2個体あり（1・2号埋葬犬）、いずれも概ね自然位を保っている。60号人骨は、埋葬された後にイヌの埋葬に伴って攪乱を受けたと考えられる。

第242図2の深鉢はこの人骨の下半身付近から出土したもので、人骨に伴うかどうかは不明。堀之内1式でも新しい様相を示す。第243図8は浅鉢の破片である。

61号人骨（第239図、図版11）

57号住居跡に隣接した5-9グリッドのⅢ層レベルから、62号人骨と並んで出土している。掘り込みは確認されていない。南東側を向いた仰臥ないし側臥屈葬を呈す。61号は20歳代の女性、62号は30歳前後の女性であり、葬法と遺体の方向が一致している。このことからみれば、壮年期の女性2体が合葬、あるいはどちらかが追葬された可能性が高い。また、61号の頭部右側に位置する埋設土器から出土した74号人骨（新生児骨）も、女性遺体と関わりがあった可能性がある。頭骨・上肢骨・下肢骨の一部などは自然な位置関係を保っているが、遺体の中央付近は欠損や乱れが目立つ。埋葬後に攪乱を受けたものと見られる。

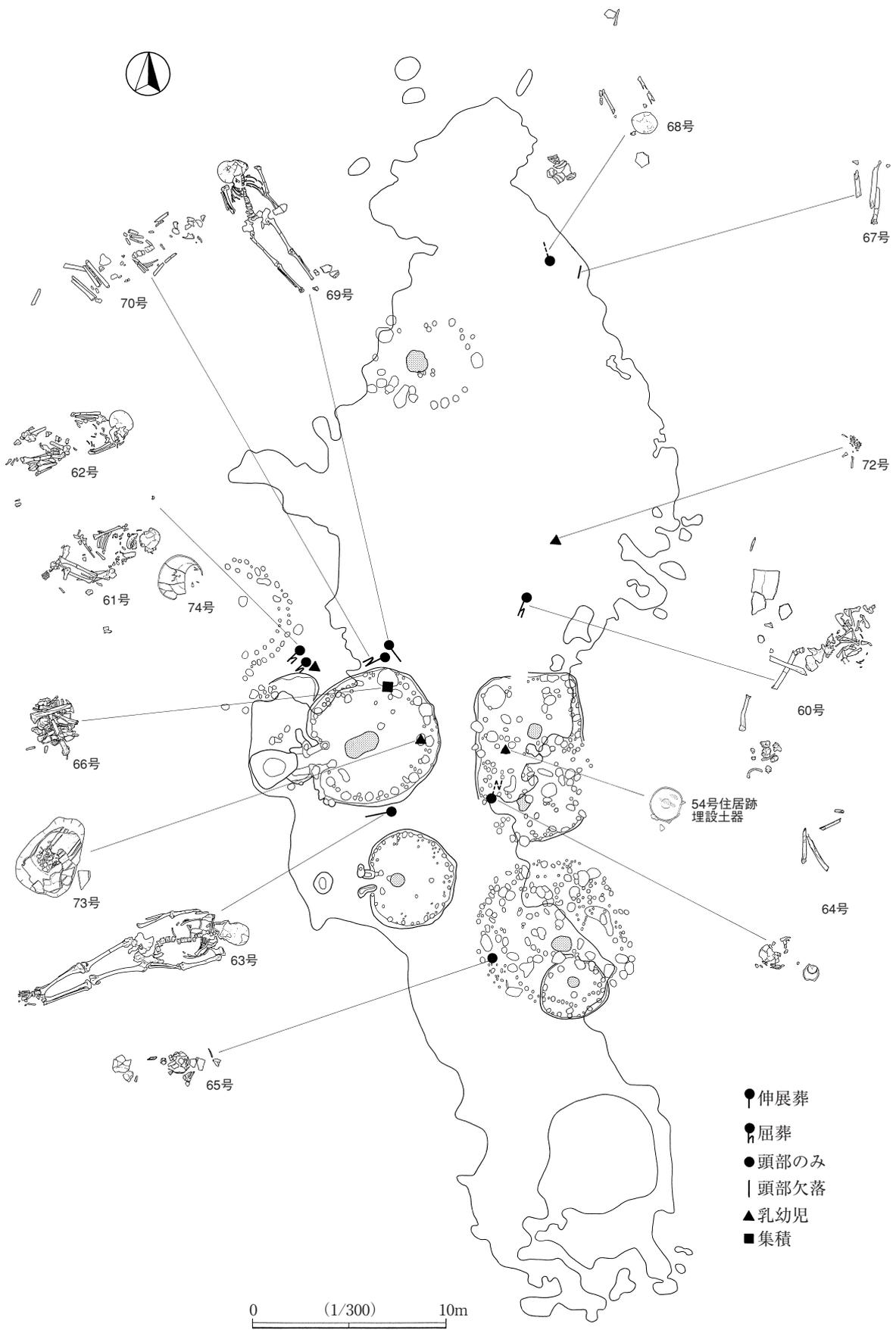
なお、整理作業中に61号と62号の骨が混じってしまい、主要な部位はそれぞれの個体に特定できたが、特定の困難な部位は識別しないまま保管している。

62号人骨（第239図、図版11）

57号住居跡に隣接した5-9グリッドのⅢ層レベルから、61号人骨と並んで出土している。掘り込



第237図 埋葬人骨配置



第238図 7次調査区埋葬人骨配置

みは確認されていない。30歳前後の女性である。南東側を向いた仰臥ないし側臥屈葬を呈す。葬法と遺体の方向が一致しており、61号との強い関係を感じさせる。掘り込みは確認できなかった。

頭骨・右上腕骨・下肢・肋骨の一部などが自然位を保っており、埋葬後に遺体の中央付近が攪乱されたものとみられる。

63号人骨（第239・243図、図版11・77）

57号住居の南側に接した5-18グリッドから出土した30歳代の男性遺体である。今回報告するなかで最も保存状態がよく、全身の骨が遺存している。仰臥伸展葬である。掘り込みは確認できなかったが、頭蓋がやや起き上がっているのは墓壙の形状によるものであろうか。推定身長は161.2cmあり、大腿骨の粗線が発達した比較的体格の良い男性である。

第243図9が図示できる唯一の資料である。朝顔形の器形を呈する堀之内1式の深鉢である。

64号人骨（第239・242・243図、図版11・76・77）

58号住居跡の上部、5-17グリッドのⅢ層レベルから出土した遺体である。遺存部位は、頭骨の一部と左右の大腿骨のみであるが、位置関係から埋葬遺体の可能性が高いと判断した。骨の状態はきわめて悪く、攪乱や腐朽により大半が失われたものであろう。なお、頭部付近から出土した深鉢土器底部は、墓壙に伴っていた可能性は低く、埋葬との関係は不明である。

第242図6は図中に記録されていた土器の底部である。無文であるが堀之内式の形状を呈している。第243図10は小形の鉢もしくは浅鉢で、堀之内2式と思われる。11は加曾利B式の粗製深鉢片である。

65号人骨（第240・242・243図、図版11・76・77）

56号住居跡の西側に隣接する8-02グリッドから出土している。10歳前後の小児骨である。現地での観察によると、56号住居跡の廃絶後、住居内貝層の形成前に土坑が掘り込まれ埋葬されたとされているが、整理作業の段階では、土坑の存在や、住居・貝層との新旧関係を確認することはできなかった。骨の保存状態は悪く、頭蓋と歯のみが遺存している。土坑の存在が正しければ、何らかの経緯で頭蓋のみが改葬された可能性があり、埋葬骨として取り上げた。しかし、積極的に埋葬と判断する材料は乏しく、土器との関係も不明とせざるを得ない。

第242図7、第243図12~15は付近から出土した土器であるが、出土状況図から見るとおりかなり散乱した状況であり、人骨に伴う可能性は低い。時期はいずれも堀之内1式であり、56号住居跡と大きな時間差はないと判断される。

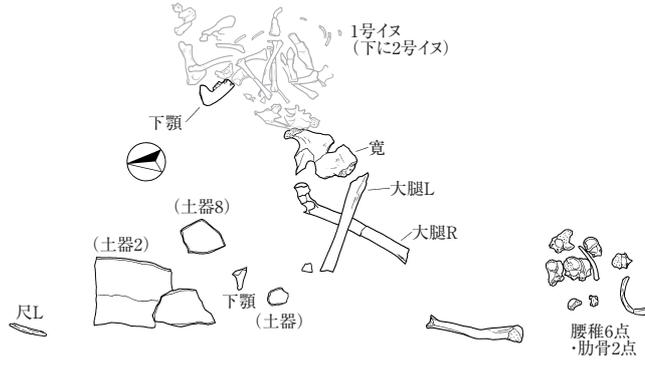
66号人骨（第239図、図版11）

57号住居跡の調査中に、覆土2層の上面で骨を検出した。30歳代前半の男性人骨である。現地の観察では土坑を伴うとされている。ほぼ全身骨が遺存しており、残りも良いが、各部位は自然な位置関係を完全に失っている。関節部で繋がった状態のものもみられないので、1次埋葬後、軟部が失われるだけの時間が経ってから改葬が行われたものとみられる。骨の分布の外形は四角く、四肢骨の一部は井桁状に組み上げられているようにも見える。

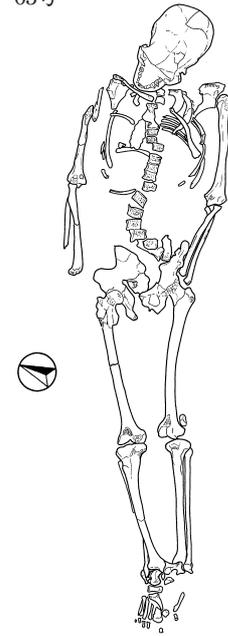
67号人骨（第239図、図版11・12）

2-06グリッドから出土したきわめて残りの悪い人骨である。左右の大腿骨はいずれも南に遠位側がある。右脛骨は近位・遠位の方向が不明である。脛骨の骨端は資料中に存在せず、脛骨の北側にあ

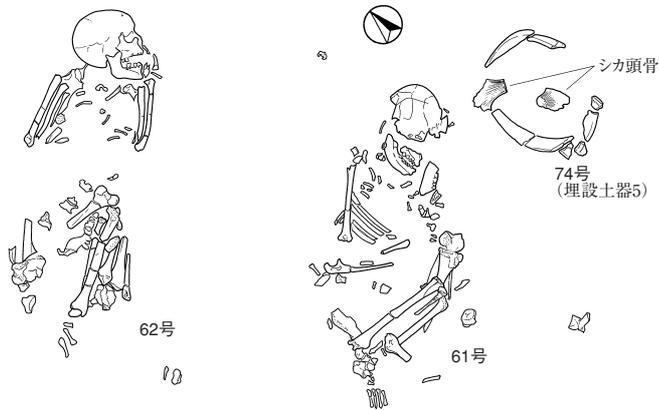
60号



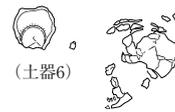
63号



61・62・74号



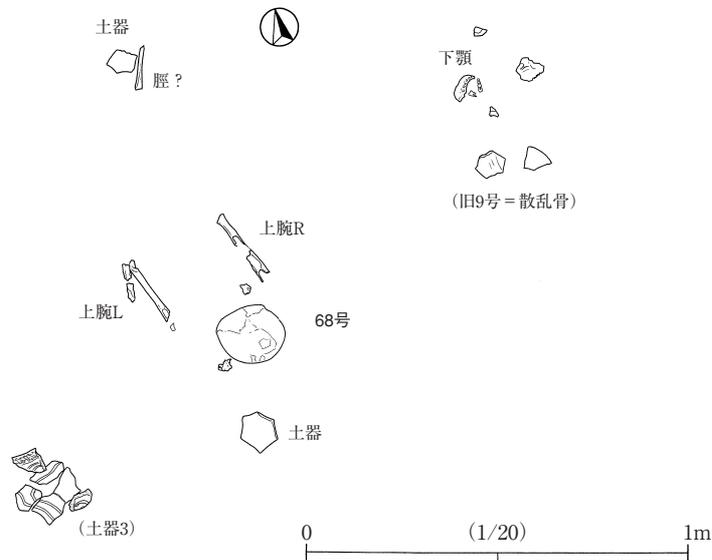
64号



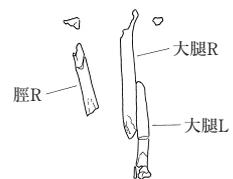
66号



67・68号



67号



第239図 埋葬人骨出土状況 (1)

るのは右踵骨のようである。図示された以外に、寛骨片、左右距骨がある。下肢骨の位置関係から膝を左側に向けた仰臥ないし側臥屈葬を想定できる。

68号人骨（第239・242・243図、図版11・12・77）

2-06グリッドから出土したきわめて残りの悪い人骨である。頭骨と四肢骨破片があり、図面と写真の判読も加えると、頭蓋骨・下顎骨・左右上腕骨・脛骨？が遺存していたようである。頭蓋と上腕部の位置関係が自然であり、左右の上腕骨の位置関係からみて、仰臥の姿勢をとる一次埋葬であると判断した。20歳前後の成人骨で性別は不明である。

出土状況図には土器に遺物番号が付いていなかったが、頭から50cmほど西側から出土している土器の文様から、第242図3であろうと推定した。この土器には2-6Ⅲ層SH84・85という注記があったが、現場の記録にはSH83までしか残されていなかった。そこで、SH84以降の番号が付いている土器が出土状況図に記された土器であろうと推測して、第243図16~20を抽出した。あくまでこれは整理担当者の推測であることをお断りしておく。第242図3は接合しない破片3点からなるもので、器形は図上復元である。堀之内1式でも古風な様相を示す。第243図16~20はいずれも小片で、流れ込みの可能性が高い。20は加曾利B式の浅鉢であろう。

69号人骨（第240図、図版12）

5-08グリッドから出土した全身骨格である。6~8歳の小児骨と推定されており、性別は不明である。保存状態は良好で、仰臥伸展葬である。頭骨が不自然に横を向いているのは、埋葬後に動いたものであろうか。

70号人骨（第240・242図、図版12・76）

5-08グリッドから出土したほぼ全身が残る20歳前後の男性人骨である。右を向いた仰臥ないし側臥屈葬である。破損が著しく欠損部も多いが、骨自体の保存状態は比較的良好であり、とくに顎骨は完存する。埋葬後に傷んだ可能性が高い。

第242図4は人骨とともに取り上げられたとされる土器であるが、出土位置は不明で遺物番号もない。また、約8m離れた2-23・24グリッドから出土した土器と接合しており、埋葬に関わるものか疑わしい。器形は器高に比べ口径が大きく、頸部で強く屈曲して胴部がふくらみながら小さな底部へ集束していく鉢形とでもいうべき形状を呈し、胴部に幅の狭い横位の文様帯を持つ。堀之内1式でも新しい段階のものであろう。

71号人骨

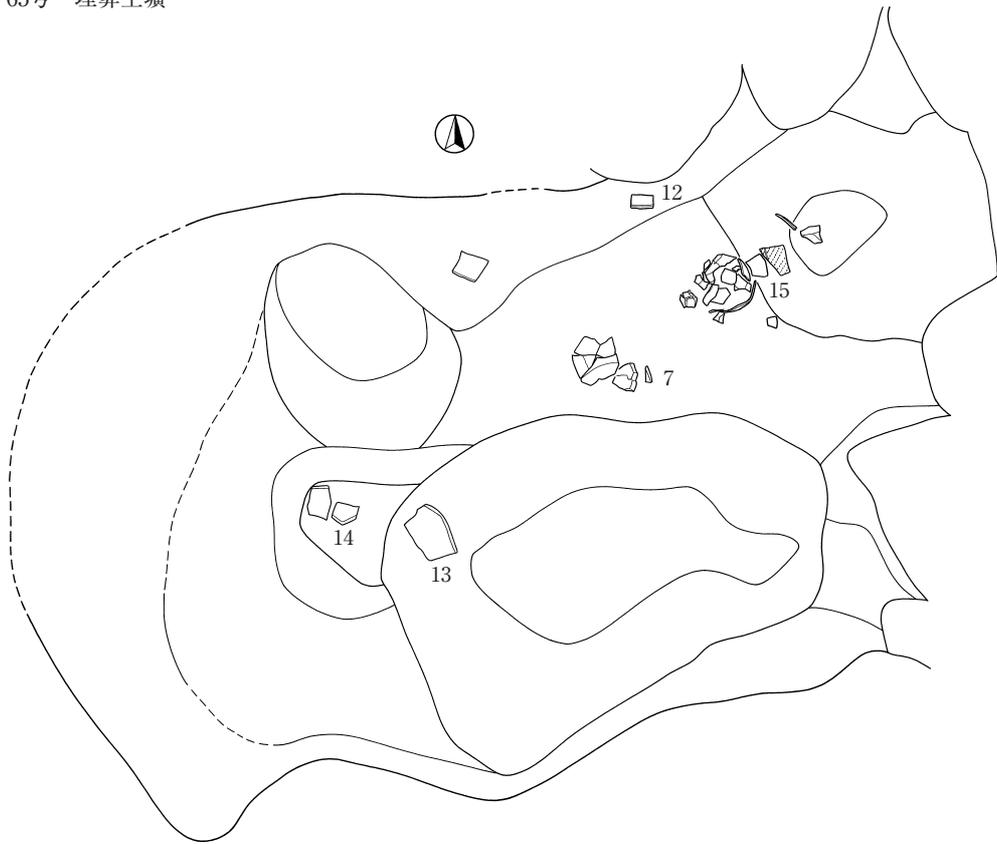
2-10グリッドから出土したもので、調査時は埋葬と認識されていなかったらしく図面記録を欠くが、写真により大腿骨と脛骨が並んで出土したことが確認できる。その位置関係からみて、屈葬位で埋葬されたものと考えられる。骨の状態はきわめて悪く、ほとんどが腐朽してしまったものであろう。

72号人骨（第240図、図版12）

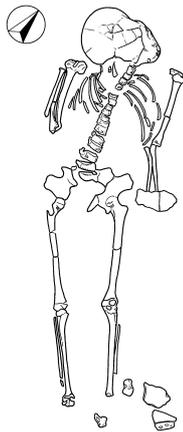
2-21グリッドのⅢ層上面レベルから出土した出生前後の新生児骨である。掘り込みや埋設土器を伴わないが、いくつかの部位がまとまっており、埋葬されたものと考えられる。

73号人骨（第241・242図、図版13・21）

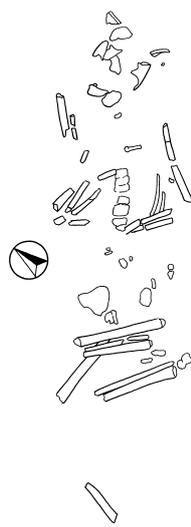
57号住居跡奥壁寄りの埋設土器内から出土した。保存状態は良好で、土器に覆われていなかった足の指以外の全身骨が遺存している。土器の上部が潰れたことによって高い位置にあった頭骨・大腿骨



69号



70号

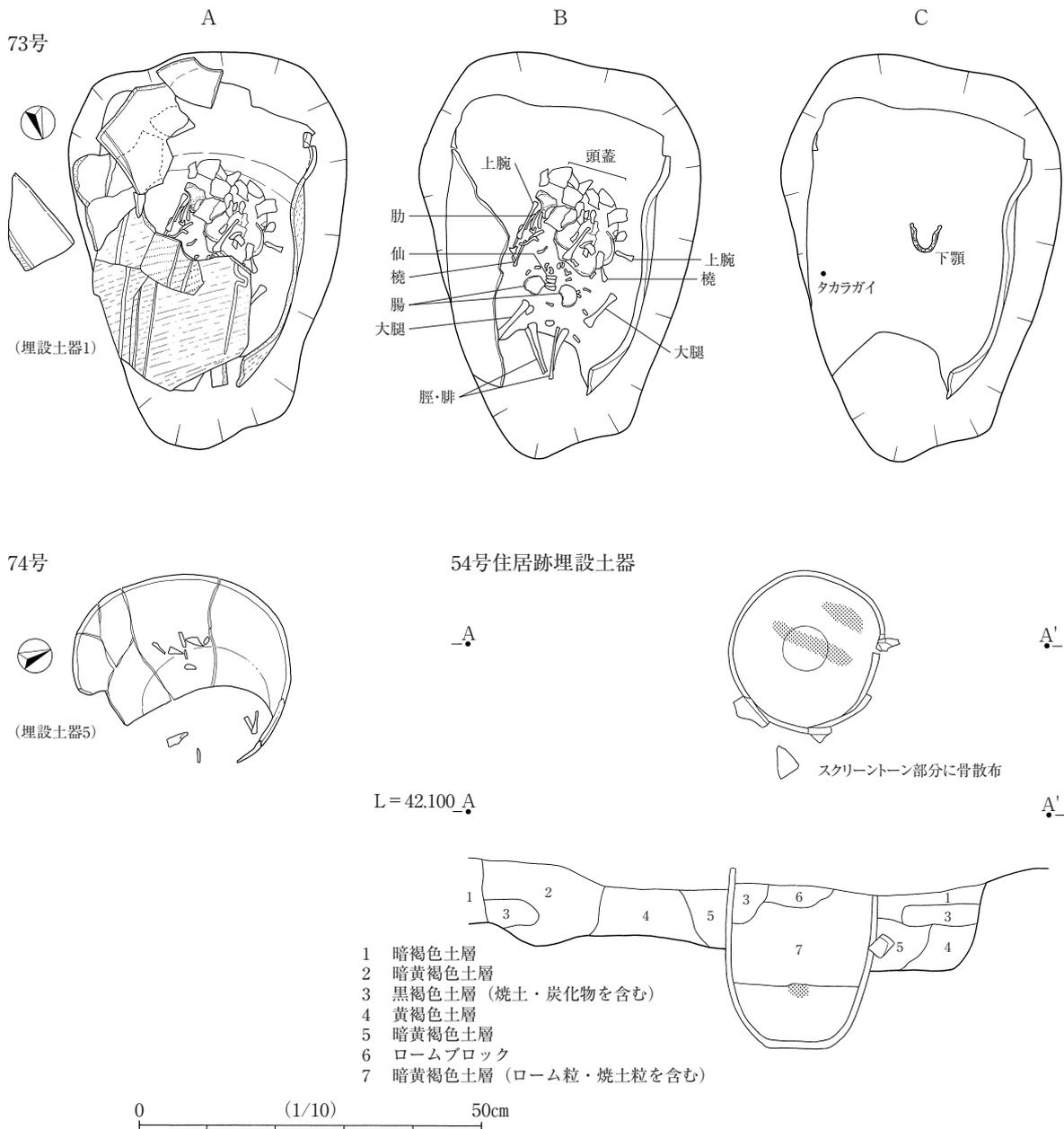


72号



0 (1/20) 1m

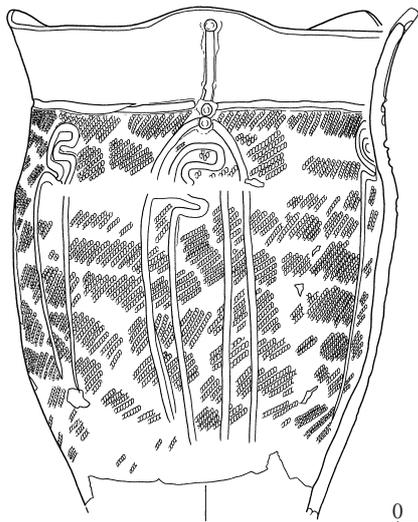
第240图 埋葬人骨出土状况 (2)



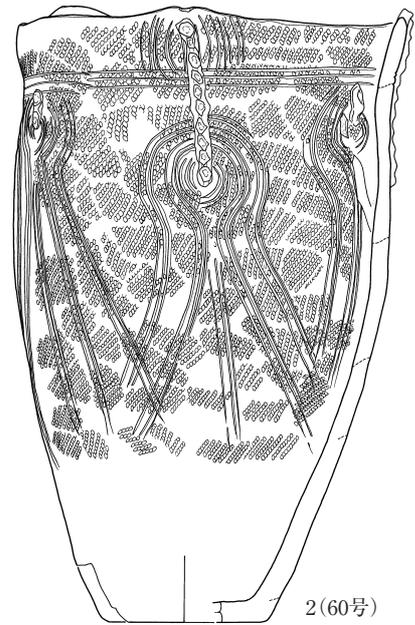
第241図 埋葬人骨出土状況 (3)

等がやや動いているものの、ほぼ自然な位置関係を保っている。姿勢は仰臥座位である。上体は丸まっており、膝は軽く曲げて立っていたものと推定される。図面 (第241図 B) によって左右腸骨の間に仙骨があり、左右の脛骨と腓骨が揃っていることがわかる。上半身はほとんどが頭蓋骨の破片の下にあってわかりにくいだが、鎖骨・肩甲骨・左右の上肢骨・体幹骨が揃っており、下顎は最下部に落ちこんでいた (同図 C)。特筆すべきは、タカラガイが共伴していたことである。殻長18.2mmの小形のタカラガイの外唇部1/4を残すように加工されている。埋設土器中に偶然入り込む可能性は低いものと考えられ、乳児の埋葬に伴って副葬されたものとしてよいであろう。用途など不明な点の多いタカラガイの性格を示す貴重な例である。なお、この点についてはすでに公表されており、タカラガイを含めた貝製品について考察が行われている (忍澤 1993)。

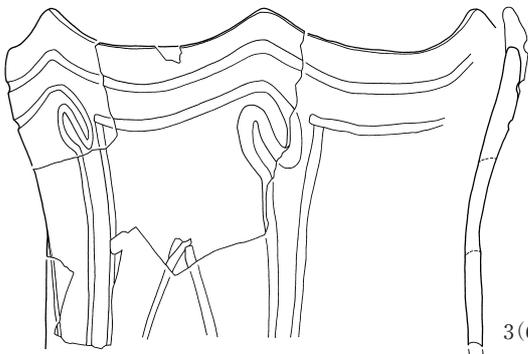
第242図 1はこの人骨の埋納土器棺に使われたもので、残存器高40cmを越える大形の深鉢である。



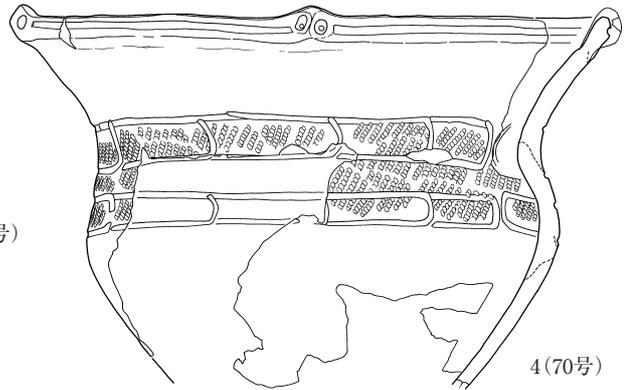
1(73号、第48図1の再掲載)



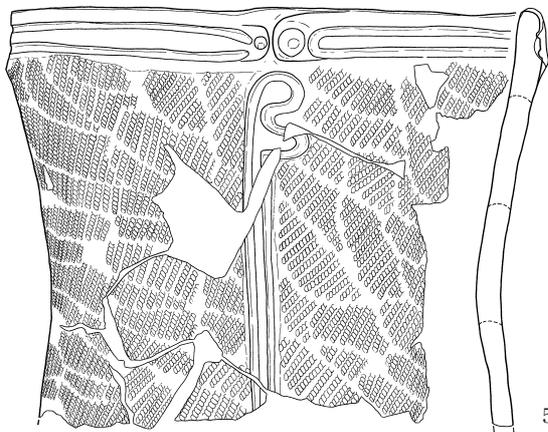
2(60号)



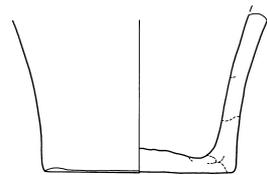
3(68号)



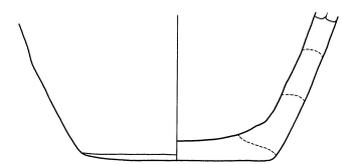
4(70号)



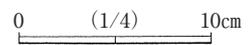
5(74号)



6(64号)



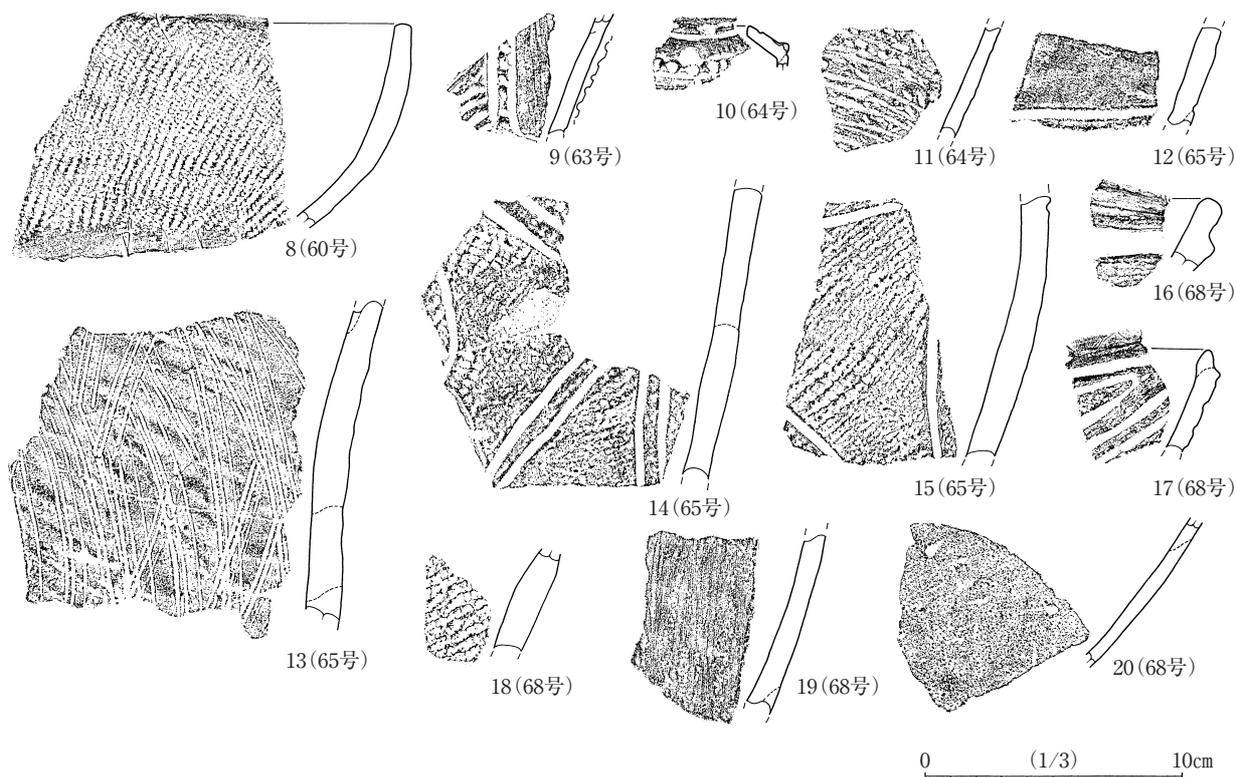
7(65号)



第242図 埋葬人骨共伴遺物 (1)

74号人骨 (第239・241・242図、図版12・76)

61号人骨の頭部に隣接して出土した埋設土器に入っていたもので、出生前後の新生児の頭蓋片と四肢骨片がある。保存状態は悪い。大半は腐朽してしまい、堅固な部位のみが遺存したものと推定される。貝殻が少ない状況は73号新生児も同様であったが、73号では上部に土器が覆っていたことにより、物理的な力や雨水の影響が少なかったものと考えられる。埋設土器はやや傾斜して埋まっており、土器の上部ではシカの左右の角座部分が出土した。



第243図 埋葬人骨共伴遺物 (2)

第242図5は埋納に使われた土器である。堀之内1式である。

53号住居跡埋設土器内の骨 (第241図)

埋設土器中からきわめて残りの悪い骨片が出土した。種・部位同定は不可能であるが、状況からみると新生児ないし幼児を埋葬した可能性が高い。人骨とする決め手にかけるため、通しNoはつけなかった。

埋納土器については、残念ながら現場の図面には遺物番号はなく、写真も外面が写されているものはなかったため特定ができなかった。

(2) 散乱人骨及び時代不明の人骨

縄文時代の埋葬骨と判断した資料以外を一括する。大半は、獣骨の分類が進んだ段階で人骨と判断されたものである。遊離歯の出土数をみると、歯種不明も合わせて縄文人が115個、縄文人以外と判断されるものが10個であった。

なお、「9号人骨」は2-06グリッドのⅢ層から頭蓋、下顎の一部と長管骨片のみが遺存していたもので、埋葬状態を想定できないため散乱骨とした。「11号人骨」は2-07グリッドのⅡ層から頭蓋の破片のみが出土しているもので、黒かびが著しく、他の人骨と劣化の状況が異なっているため時代不明とした。そのほか、現代のものとみられる手の指骨が複数出土している。

2 獣骨埋葬・埋納遺構

1次調査の際は、その可能性は示唆されたものの、明確な埋葬状態で検出された獣骨は検出されていない。今回報告する2次～7次調査からは、イヌ・タヌキ・イノシシが埋葬された遺構が検出された。その内訳は、イヌ6地点(7個体)、イノシシ1地点(1個体)、タヌキ1地点(1個体)の計8地点(9個体)である。埋葬の時期は、いずれも堀之内から加曽利B式期にかけてのものと考えら

第4表 出土埋葬人骨一覧

個体No.	旧No.	遺構	掘込み・層位	時期	葬位	年齢	性別	備考	頭	上肢	体幹	下肢	遺存状況	共伴遺物
60号	01号	7次貝層, 5G-02	Ⅲ層	堀之内1?	埋葬後攪乱	20~30歳	女性	埋葬後, イヌ2体埋葬により破壊。	△	△	△	△	やや悪。咬跡攪乱顕著	埋葬イヌ2
61号	02号	7次貝層, 5G-09	Ⅲ層	堀之内1?	側・屈	20歳代	女性	03号に近接	○	○	△	○	悪	
62号	03号	7次貝層, 5G-09	Ⅲ層	堀之内1?	仰・屈	30歳前後	女	02号に近接	○	○	△	○	やや悪	
63号	04号	7次貝層, 5G-18		堀之内1	仰・伸	30歳代	男		○	○	○	○	最も良	
64号	05号	7次貝層, 5G-17	Ⅲ層	堀之内2?	側?・屈	40歳以上	不明	608住	△	×	×	△	ごく悪	
65号	06号	土坑, 7次貝層, 8G-02	土坑	堀之内1?	頭蓋のみ	10歳前後	不明	606住廃絶後, 貝層形成以前, 墓塚あり	△	×	×	×	悪	
66号	07号	土坑, 605住内, 7次貝層	土坑, 2層直上	堀之内1	集積埋葬	30歳代前半	男性	改葬された全身骨	△	△	△	○	良	
67号	08号	7次貝層, 2G-06	3層	不明	仰臥 or 側臥。埋葬?	不明	不明	下肢骨のみ, 骨の位置関係から埋葬か	×	×	×	△	ごく悪	
68号	10号	7次貝層, 2G-06	3層	堀之内1?	埋葬?	20歳前後	不明	頭蓋全体の破片と部位不明の四肢骨片	○	×	×	×	ごく悪	
69号	12号	7次貝層, 5G-08		不明	仰・伸	6~8歳	不明		○	○	○	○	良	
70号	13号	7次貝層, 5G-08		堀之内1?	仰・屈	20歳前後	男		△	△	△	○	悪	堀之内1式土器大破片
71号	2G-01	7次貝層, 2G-01		不明	?・屈	不明	不明	下肢骨のみ, 骨の位置関係から埋葬か	×	×	×	△	ごく悪	
72号	新生児1号	7次貝層, 2G-21	Ⅲ上面	不明	不明	出生前後	不明	複数部位の四肢骨片	×	×	×	×	やや悪	
73号	新生児2号	605住内小穴, 7次貝層	小穴内埋設土器	堀之内1	仰・座位	出生前後	不明		○	○	○	○	良	タカラガイ
74号	新生児3号	605住内小穴, 7次貝層	小穴内埋設土器	堀之内1	不明	出生前後	不明	保存悪く, 頭蓋と四肢骨片のみ	△	×	×	△	悪	

れる。貝層中に埋葬されるものが主体となるが、土坑を利用して埋葬されるものも認められる。埋葬遺構の分布は、西側の斜面貝層部にイヌ2体が位置し、これ以外はすべて東側の台地平坦部貝層に位置する。台地平坦部貝層とその周辺には埋葬人骨も多数検出されており、すでに埋葬されていた人骨を切って埋められるものも認められた。なお、ここでは57号住居跡において検出されたイノシシ頭蓋骨の観察結果もあわせて報告する。これら埋葬に関わる獣骨の計測データについては、付属のCD-ROMに収めているので参照されたい。

(1) イヌ埋葬遺構

1号埋葬犬 (第245図、図版13・133)

4次調査区、S6-46グリッドKLセクション13層に位置し、一部は直下の14B層からも出土している。図面からは上半身骨格のみが検出されたようになっているが、同一グリッドで隣接するMNセクション中から下半身部分がまとまって出土していることから、本来は全身骨格が解剖学的位置を保った状態であったものと推定される。上半身部分の出土状況からは、四肢を曲げ、身体を丸めて、左側面を上にして埋葬されたものと考えられる。身体は北西を向けられている。

両下顎の第3後臼歯の萌出と四肢骨端部の癒合は完了するが、各歯の咬耗は弱く、相対的に若齢の

個体と思われる。陰茎骨は検出されておらず、性別はメスと考えられる。各部位の計測値は、他の埋葬犬に比べて小型で、若齢なこともあるが、縄文犬のメスとしては顎骨・四肢骨ともに華奢な個体である。一方、下顎骨咬筋窩は深く、縄文犬的要素が認められる。

長谷部分類の小に相当する。山内の方法^(注1)による推定体高は36cm弱である。

2号埋葬犬（第245図、図版13・134・135）

4次調査区のS8-05グリッドに位置する。やや散乱が見られるが、ほぼ全身骨格が解剖学的位置を保った状態で検出された。出土状況からは、四肢を曲げ、身体をやや丸めて、左側面を上にして埋葬されたものと考えられる。身体は北を向くが、頭部は折り返されて南に向けられている。

鼻骨凹陷深は浅く、縄文犬的面影をよく見る。陰茎骨は検出されていない。頭頂骨間の外矢状稜は中央で合わさらず頭頂上で分岐するなど、形質的にはメスの特徴が認められるが、体高からはオスの範疇に入るため、性別はオスと推定しておく。右上顎第1切歯は失欠歯するが歯槽は閉鎖しており、生体時に何らかの事由により損傷を受けたものと思われる。また、肋骨近位部には骨増殖が認められ、生体時に骨折・治癒していたことが考えられる。

長谷部分類の中小に相当する。山内の方法による推定体高は41cm強である。

3号埋葬犬（第245図、図版13・136）

7次調査区の5-01グリッドに位置する。1号埋葬人骨を壊して埋葬される。4号犬の真上に覆い被さるようにして検出された。やや散乱が見られるが、ほぼ全身骨格が解剖学的位置を保った状態で検出された。出土状況からは、四肢を曲げ、身体を丸めて、右側面を上にして埋葬されたものと考えられる。身体は南西を向くが、頭部は折り返されて北に向けられている。

調査時に2体が埋葬されているという認識が無かったために、図面作成から取り上げまで、区別されることなく行われている。検出された各部位の帰属先の振り分けは、出土位置と計測値の検討から行ったが、椎骨・指趾骨・肋骨破片などの細かな骨については、いずれに帰属するものか明確に把握できないものがある。

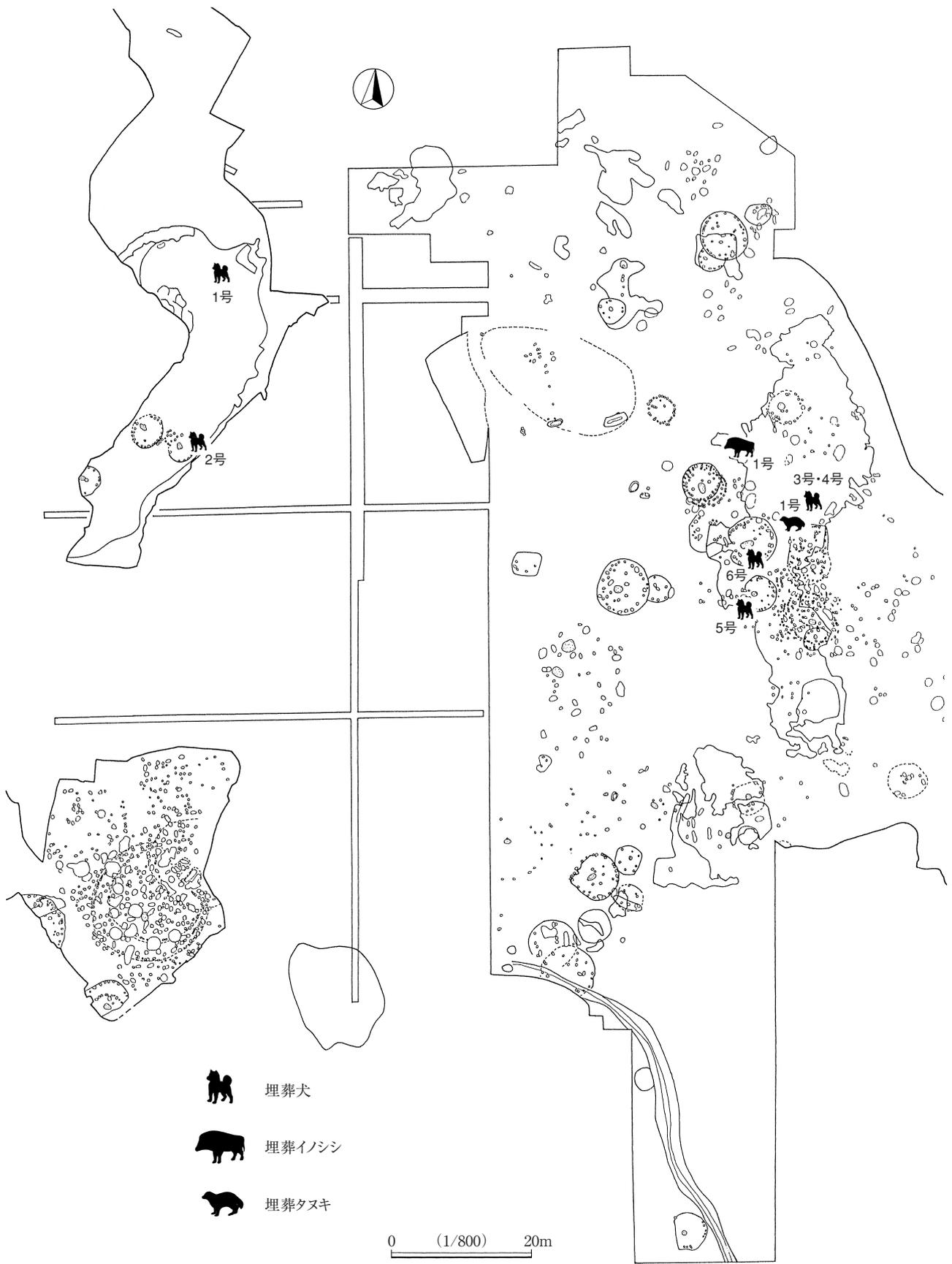
頭蓋骨は形を復元することが不可能であった。上顎歯は切歯から前臼歯にかけて激しい損傷を受けている。左右の第2と左の第3以外の切歯は、すべて欠歯後に歯槽部が閉鎖している。左右の犬歯も欠歯しており、右の歯槽部は完全に閉鎖し、左も閉鎖途中である。左上顎第1後臼歯の前突起も破損し、歯槽部は閉鎖する。また、第4前臼歯から第1後臼歯にかけての歯槽部は変形し、頬側はえぐれている。第4前臼歯遠心側から第2後臼歯は著しく咬耗が進むが、切歯から前臼歯にかけて損傷を受けていることに起因する可能性も考えられる。

左下顎犬歯は近心側歯冠部に損傷が認められるが、損傷部は平滑に磨耗しており、これも生体時に受けたものと考えられる。また、左下顎犬歯と第3前臼歯の間には、閉鎖した歯槽部に第2前臼歯の近心側歯根部の残欠と思われる隆起が認められる。一方、下顎第1後臼歯は、右側がより咬耗が進行している。下顎骨咬筋窩深は深く、縄文犬的要素が認められる。

仙骨の下からは陰茎骨が検出されるが、3号・4号のいずれに帰属するものか明確でない。しかし、下顎骨咬筋窩が深いこと、各四肢骨の計測値から、性別はオスの可能性が考えられる。

長谷部分類の中小に相当する。山内の方法による推定体高は40cm前後である。

4号埋葬犬（第245図、図版13・137・138）



第244図 埋葬獣骨配置

7次調査区の5-01グリッドに位置する。1号埋葬人骨を壊して埋葬される。3号犬の真下から検出された。調査時に2体が埋葬されているという認識が無かったために、出土状況を示す図面・写真類が残されておらず、詳細は不明である。ただし、各部位には平面図の「No○の下」からの出土と記載されていたため、おおむねの出土位置は確認することが可能であった。出土状況からは、3号犬と同様の方向に向けられ、右側面を上にして埋葬されたものと考えられる。各部位の出土位置の検討からは、ほぼ全身骨格が解剖学的位置を保っていたようである。検出された各部位の帰属先の振り分けは、出土位置と計測値の検討から行ったが、椎骨・指趾骨・肋骨破片などの細かな骨については、3号・4号埋葬犬のいずれに帰属するものか明確に把握できないものがある。

頭蓋骨は形を復元することが不可能であった。左側の上顎切歯はすべて激しい損傷を受けており、欠歯後に歯槽部が閉鎖している。また、両側の上顎第1前臼歯も欠損しており、歯根部がわずかに残存する。左下顎第1前臼歯部には歯根部の残欠が認められる。また第2・第4前臼歯間隙は広く開くことから、第3前臼歯も生前に欠歯もしくは失歯したものと考えられる。右下顎第1・2前臼歯も欠歯もしくは失歯で、第1前臼歯の閉鎖した歯槽部には歯根部の残欠と思われる隆起が認められる。

前述のとおり、3号埋葬犬仙骨下から出土した陰茎骨がいずれに帰属するものか明確でないが、下顎骨咬筋窩の深さや各四肢骨の計測値はオス犬の平均に近いことから、性別はオスと考えられる。

長谷部分類の中小に相当する。山内の方法による推定体高は41cm強である。

5号埋葬犬（第245図、図版13・139）

7次調査区の5-23グリッドに位置する。各部位の出土位置の検討からは、ほぼ全身骨格が残存するが、やや散乱した状態を示している。しかし、寛骨と大腿骨、上・下顎骨など一部の部位では接合状態を保ったまま出土していることから、もともとは埋葬状態にあったものがある時点で攪乱を受けたものと判断した。他の埋葬犬に比べ、全ての骨がやや小柄で華奢な印象である。両下顎の第3後臼歯の萌出と四肢骨端部の癒合は完了するが、四肢骨の緻密質部分はやや薄く弱い。陰茎骨が検出されないことや四肢骨の計測値から、性別はメスの可能性が考えられる。

両下顎骨には歯周疾患の痕跡が認められる。右側の第3前臼歯から第3後臼歯部分と、左側の第1後臼歯遠心から第2後臼歯近心部分には、頬側面歯槽骨の骨吸収が認められ、歯根部が露出した状態となっている。四肢骨の観察からは、比較的若齢の個体と考えられることから、骨吸収の原因が加齢変化によるものとは考えにくい。何らかの原因により、細菌感染等を引き起こしたことによるのだろうか。特に右下顎歯槽骨の骨吸収は著しく進行しており、硬いものを噛み砕いたり、裂いたりすることは困難であったと思われる。一方、上顎骨には特に変形は認められない。

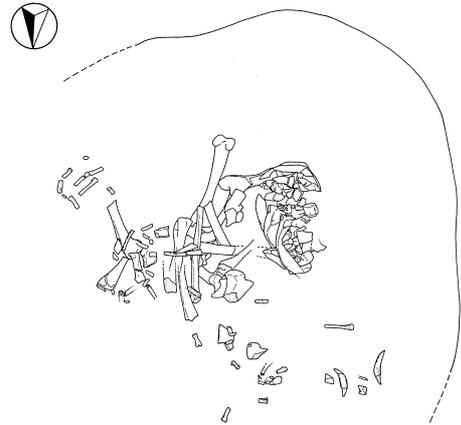
長谷部分類の小に相当する。比較的若齢によるためなのか、あるいは歯牙疾患による栄養不足等も影響しているのであろうか。山内の方法による推定体高は37cm強である。

6号埋葬犬（第245図、図版13・140）

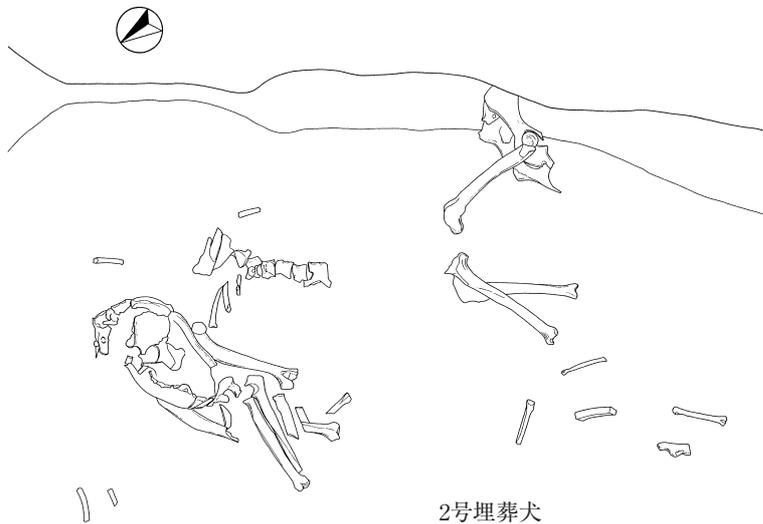
7次調査区の5-18グリッドに位置する。ほぼ全身骨格が、解剖学的位置を保った状態で検出された。出土状況からは、四肢を曲げ、身体を強く丸めて、左側面を上にして埋葬されたものと考えられる。身体は南方向に向けられている。四肢骨はやや短く華奢である。6号埋葬犬として取り上げられていた左肩甲骨は右側に比べて著しく小型で、同定の結果タヌキと判明した。埋葬犬の下に堆積する貝層から偶然取り上げられたものと考えられる。また、右下顎犬歯も2点検出されているが、このう



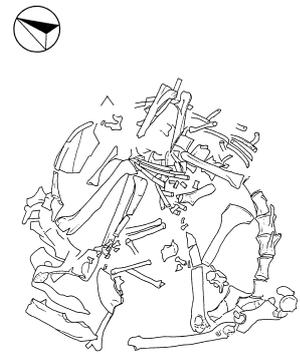
1号埋葬犬



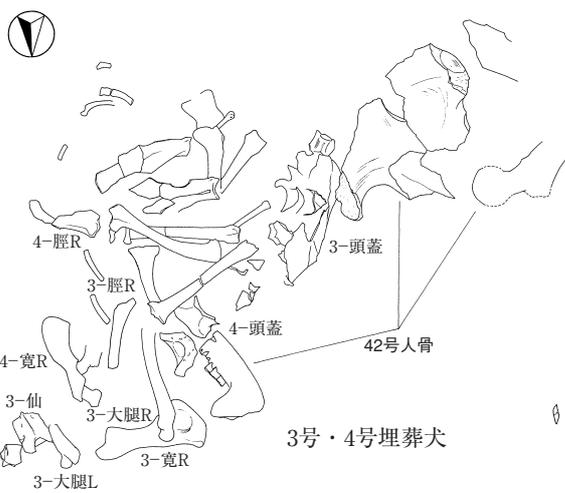
5号埋葬犬



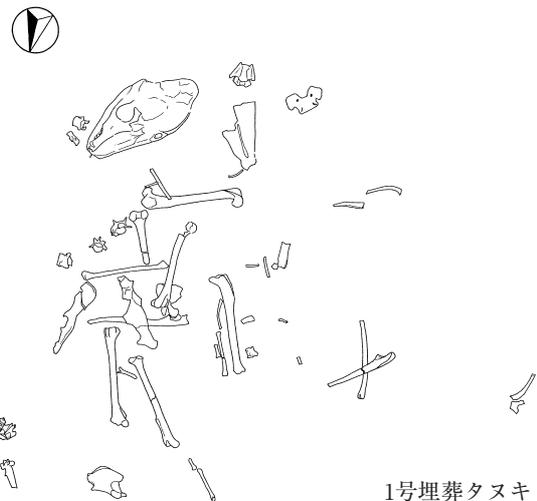
2号埋葬犬



6号埋葬犬



3号・4号埋葬犬



1号埋葬タヌキ

0 (1/8) 20cm

※7号埋葬犬・1号埋葬イノシシは図面なし

第245図 埋葬獣骨出土状況

ち1点はアナグマで、やはり周辺の貝層から取り上げられたものであろう。陰茎骨は検出されていない。頭頂骨間の外矢状稜は隆起せず線状であるなど、頭骨頭頂の形質にはメスの特徴が認められる。四肢骨の計測値も大きく、性別はオスの可能性もあるが、ここではメスと推定しておく。

犬歯は上顎に比べて下顎の咬耗が著しく進行するが、これは下顎犬歯咬頭が生体時に破損を受けたことによるものと考えられる。咬頭はなめらかにすり減っており、破損後も活動を続けていたものと思われる。右下顎骨には5号埋葬犬以上に著しい歯周疾患の痕跡が認められる。第3前臼歯から第2ないし第3後臼歯部分には頬側面歯槽骨の骨吸収が認められ、露呈した歯根部で第1後臼歯がようやく植立した状態となっている。左下顎骨は大きく破損する。第2後臼歯は歯頸線付近まで咬耗が及ぶ。一部の胸椎と腰椎には棘突起にゆがみや変形が認められ、肋骨の破片には骨増殖が確認された。

長谷部分類の中小に相当する。山内の方法による推定体高は39cm強である。

7号埋葬犬（図版141）

7次調査区の4-13グリッドに位置し、729号土坑がこれにあたる。純貝層中からの出土であるが、調査時に散乱骨として採取されているため、出土状況を示す図面・写真ともに残されていない。しかし、イヌ遺体分類作業の進捗に伴い、本遺構から骨格が比較的揃った状態で出土していることが判明したため、これらが全て同一個体に由来し、本来は埋葬された個体であった可能性が高いものと判断した。遺構の規模等は前述の通りであるが、各部位骨は、土坑覆土最上層から出土していることから、本遺構がイヌの埋葬を目的として構築されたものではないと考えられる。

頭蓋骨は頭頂部を欠くが、前頭骨後眼窩突起からの稜線が冠状縫合上で合わさり、外矢状稜に延びていることが推測されることから、陰茎骨は確認されなかったが、性別はオスの可能性が考えられる。四肢骨は頑丈で大きく、上腕骨の三角筋粗面も良く発達する。

長谷部分類の中小に相当する。破損により四肢骨の全長が計測不能なため、山内の方法による体高推定は不可能であるが、残存部位の計測値からは41cm強の個体と考えられる。

(2) イノシシ埋葬遺構

1号埋葬イノシシ（図版143）

7次調査区の2-24グリッドに位置し、718号土坑がこれにあたる。調査当初、埋葬と認識されなかったため、出土状況図面・写真ともに残されていないが、金子浩昌氏の指摘によりイノシシの埋葬が確認されたものである。ほぼ全身骨格が揃って出土していることから、埋葬されたものと見て間違いないであろう。遺構の規模等は前述の通りである。調査者によれば土坑下層からの検出とされるが、遺構の深さが確認面から2.51mを測ること、土層注記によれば下層には魚骨・獣骨が多く含まれることから、本遺構がイノシシの埋葬を目的として構築されたものではないと考えられる。

脊柱では保存の良好な標本を頸椎・胸椎にみたが、すべてを回収することはできなかったようである。土中からの回収の難しさを感じさせる。肋骨も保存良好な標本があり、多くはそうした状況であったのだろう。頭蓋骨はほぼ完存するが、上顎骨と鼻骨左側、後頭骨が外れた。脳頭蓋に比べて鼻骨・上顎骨が小さいことは幼体頭骨の特徴であるが、イノシシにもよく見ることができる。下顎骨は右側を失うが、左側はほぼ完存する。第4乳臼歯は第2咬頭まで萌出し、出産後間もない個体と思われる。四肢骨のうちの主要骨は回収されている。すでに成体時の形態を見ることができ、上腕骨遠位端の滑車上部には穿孔が認められる。手根・足根骨・指骨も多くが失われている。四肢骨を伸ばすよ

うな姿勢であったために見落とされた可能性が高い。

(3) タヌキ埋葬遺構

1号埋葬タヌキ (第245図、図版13・142)

7次調査区の5-7グリッドに位置し、53号住居跡北西隅に隣接する。骨格にはわずかに散乱が認められるが、全身骨格が揃って出土していること、おおむね解剖学的骨格位置を保持して出土していることから、遺棄されたものではなく埋葬されたものと判断される。出土状況からは、頭部を体側に曲げ、四肢を曲げた姿勢で、左側面を上にして埋葬したものと考えられる。埋葬後、遺体を覆う土砂の崩れとともに原位置から移動したようであるが、肩甲骨や寛骨の位置などは体軸の方向を示し、南に向けられていたものと考えられる。陰茎骨が出土することから、性別はオスである。

脛骨と癒合している左腓骨中間部と、第2ないし第5基節骨の近位寄りには骨増殖と思われる異常が認められた。頭骨は、右上方からの土圧により脳頭蓋が破損するが、鼻骨・上顎骨の破損は少ない。下顎骨は完存する。上顎・下顎ともに咬耗は進行しており、犬歯にまで及ぶ。咬耗は臼歯で著しく、上下の第1・第2後臼歯は咬面の平坦化した部分が広い。これほど激しい咬耗も類例が少ないのではないだろうか。四肢骨・顎骨・歯牙のサイズは中等大である。

(4) イノシシ頭蓋骨埋納遺構

1号埋納イノシシ (第46・47図、図版3・144)

7次調査区の5-08・09・13・14・15・18・19グリッドに位置する57号住居跡において検出された。57号住居跡の規模等は前述の通りである。出土位置は住居のほぼ中央付近にあたり、床面直上に堆積する貝層上から検出された。頭蓋骨には大きな破損は認められず、頭頂部を上にした正位置で、置かれたような状態で出土している。この頭蓋骨の出土が確実に意図された行為によるものかどうかを証明することは難しいが、同一層から赤色顔料の付着する二枚貝類、アワビ類の破片が出土するなど、特殊な様相を示していることから、何らかの儀礼に関わる可能性が高いと判断した。なお、前述のように、この住居からはタカラガイの副葬された幼児骨(73号人骨)や集積人骨(66号人骨)も検出されている。このようなイノシシ頭骨の出土事例は、市内では草刈貝塚(中期)で確認されているほか^(註2)、福島県いわき市大畑貝塚などでも検出されている。

上方に湾曲する犬歯を持ち、性別はオスである。第3後臼歯の萌出が完了する成獣で、第1咬頭のエナメル質には穿孔が認められる。頭頂部項稜には破損が見られるが、項筋切断時に破壊されたものと考えられる。また、頬骨と側頭骨頬骨突起の外縁が削られたように失われるが、側頭筋と咬筋を切断して、下顎骨を外す際に破損したものと思われる。このほか、左右径静脈突起の破損、右側頭骨・後頭骨に認められる亀裂などは、捕獲・解体時に付けられた痕跡と考えられる。

注

1 山内忠平 1958「犬における骨長より体高の推定法」『鹿児島大学農学部学術報告』第7号 p.125-131

2 田井知二 1982「千葉急行線内草刈貝塚で発見されたイノシシ頭骨と焼土堆積遺構について」『研究連絡誌第6号』財団法人千葉県文化財センター

第5表 第1号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
1一部	後頭顆	R	c	
1一部	頬骨	L	c	
1一部	前頭骨	L	fr.	
1一部	上顎犬歯	L	c	
1一部	切歯骨	L-R	c	L[I1I2I3] R[I1I2I3]
1	下顎骨	L	c	[(I1) (I2) (I3) C - (P2) P3P4M1M2M3]
1	第1下顎切歯	L	c	
1	第1下顎切歯	R	c	
1	第2下顎切歯	R	c	
1	第3下顎切歯	R	c	
2	下顎骨	R	c	[C(P1) (P2) (P3) P4M1M2(M3)]
2	腰椎	-	c	
3	第4頸椎	-	c	
4	肩甲骨	R	p~s	
5	上腕骨	R	c	資料所在不明
6	橈骨	R	c	近位端破損
7	尺骨	R	c	
8				資料所在不明
9				資料所在不明
10	第6頸椎		c	
11	橈骨	L	c	
12	尺骨	L	c	遠位端破損
13	第4中手骨	R	c	
14	第3中手骨	L	c	
15	第4中手骨	R	c	
16	第5中足骨	L	p	
17	肋骨	?	fr.	
18	上腕骨	L	c	資料所在不明
19				資料所在不明
20	第7頸椎		c	
21				資料所在不明
22	第5中手骨	L	c	
23				資料所在不明
24				資料所在不明
25	第2中手骨	L	c	
26	第1中手骨	L	c	
27	基節骨	?	c	
28	第3手根骨	L	c	
29	肋骨	L	p	近位端
30				資料所在不明
31				資料所在不明
32	胸椎	fr.		
33				資料所在不明 19の下
34	種子骨	?	c	19~33周辺一括
34	種子骨	?	c	19~33周辺一括
34	種子骨	?	c	19~33周辺一括
34	種子骨	?	c	19~33周辺一括
34	種子骨	?	c	19~33周辺一括
34	第2中足骨	L	c	19~33周辺一括
34	第3足根骨	R	c	19~33周辺一括
34	第4手根骨	L	c	19~33周辺一括
34	末節骨	?	c	19~33周辺一括
35				資料所在不明 その他の犬骨一括
36				資料所在不明 犬骨に伴うと思われる骨一括
1	踵骨	L	c	S6-46-KL-14B
1	第3頸椎		c	S6-46-KL-14B
1	第5頸椎		c	S6-46-KL-14B
1	距骨	L	c	S6-46-MN-C
1	脛骨	L	c	S6-46-MN-C
1	胸椎		c	S6-46-MN-16B
1	腰椎		c	S6-46-MN-16B
1	仙骨	fr.		S6-46-MN-C
1	寛骨	R	p	S6-46-MN-C 腸骨~寛骨白
1	大腿骨	R	c	S6-46-MN-C 近位端破損
1	大腿骨	L	s~d	S6-46-MN-C
1	胸椎		c	S6-46-MN-C
1	尾椎		c	S6-46-MN-C
1	脛骨	R	c	S6-46-MN-C

第6表 第2号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
1	踵骨	R	c	
2	第4中足骨	R	c	
3	第3中足骨	L	c	
4	第5中足骨	R	c	
7	第2中手骨	L	c	
10	脛骨	L	c	
11	脛骨	R	c	
11・27	腓骨	L	s~d	
12	第3足根骨	L	c	
13	大腿骨	L	c	
14	腰椎	-	c	
15	寛骨	L	p	腸骨~寛骨白
16	仙骨	-	c	
17	寛骨	R	c	恥骨破損
18	大腿骨	R	c	
19	腰椎	-	c	
20	胸椎	-	c	
20	胸椎	-	c	
20	胸椎	-	c	椎体
20	胸椎	-	c	椎体
20	胸椎	-	c	椎体
21	肋骨	?	s	
22	肋骨	?	s	
23	肋骨	?	s	
24	肋骨	?	s	
25	肋骨	?	s	
26	橈骨	L	p・d	中間部破損
27	尺骨	R	c	遠位端一部破損
27	橈骨	R	c	
28	肋骨	L	s	骨折痕跡?
29	肋骨	?	s	
30・40	上腕骨	R	c	近位端一部破損
31	肋骨	L	s	
32	肋骨	?	s	
33	胸骨	-	c	
34	肋骨	?	s	
35	肋骨	?	s	
36	胸骨	-	c	
37	肩甲骨	L	p	
38	肋骨	L	s	
39	肋骨	R	p	
39	胸骨	-	c	
-	環椎	-	c	
-	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
-	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
-	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
-	距骨	R	c	
-	軸椎	-	c	
-	膝蓋骨	R	c	
-	尺側手根骨	L	c	
-	上腕骨	L	c	近位端一部破損
-	第3頸椎	-	c	
-	第5中手骨	L	c	
-	第5中足骨	L	c	
-	中手・中足骨	?	d	
-	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
-	尾椎	-	c	
-	尾椎	-	c	
-	尾椎	-	c	棒状
-	尾椎	-	c	棒状
-	肋骨	L	p	
-	肋骨	R	p	
-	肋骨	?	fr.	中間部破片多数
-	下顎骨	R	c	[I1I2I3C - P2P3P4M1M2] 下顎枝破損
-	下顎骨	L	c	[I1I2I3C - P2P3P4M1M2(M3)] 下顎枝破損
-				L[I1I2I3C P1P2P3P4(M1)(M2)]
-	頭蓋骨	-	c	R[-I2I3C - P2P3P4M1M2] 口蓋部破損

第7表 第3号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
1				ヒト下顎骨
2	環椎		c	頭骨と位置離れる
3	大腿骨	R	c	
4北	寛骨	L	d	坐骨
4北	尺側手根骨	R	c	
4北	第1手根骨	L	c	
4北	腓骨	L	d	
4	寛骨	R	c	恥骨欠・寛骨白破損
5下	陰茎骨		c	3号イヌ大腿骨・仙骨下から検出
5下	尾椎		c	
5下	尾椎		c	
5	大腿骨	L	c	遠位端破損
6	仙骨		c	
7	腰椎		c	
10	大腿骨?			資料所在不明
11北	肋骨	?	fr.	
11	肋骨	?	fr.	
12下	第5中手骨	L	c	
12	脛骨	R	c	
14	脛骨	L	c	
15	上腕骨	R	c	
18下	尺骨	R	c	遠位端破損
18	橈骨	R	c	
19	第3中手骨	R	c	
20	肩甲骨	R	p	
21下	肋骨	L	p	
21下	肋骨	L	p	
21西	第1胸椎		c	
21西	第3頸椎		c	
21西	第7頸椎		c	
21	肩甲骨	L	c	
22	上腕骨	L	p	
23下	尺骨	L	c	遠位端破損
23下	肋骨	L	p	
23	橈骨	L	c	
24	第5頸椎		c	
25	第2中手骨	R	c	
26	基節骨	?	c	
26	肋骨	R	s	
27	第4頸椎		c	
27	切歯骨・上顎骨	L/R	c	L[- (I2) I3 - - (P2) P3 P4 M1 M2] M1類側破損・齒槽閉鎖 R[- I2 - - - P2 (P3) P4 M1 M2] M1類側破損・齒槽開放
27	前頭骨・頰骨突起	L	c	
27	側頭骨・後頭骨	L	fr.	岩様骨・鼓室部残存
	底部・後頭顱			
27	下顎骨	L	c	[/// C - - P3 P4 M1 (M2) -]
27	下顎骨	R	c	[/I2 / CP1 P2 P3 P4 M1 (M2) -]
27	軸椎		c	
27	第2中手骨	L	c	
27	第2中足骨	R	c	
27	第3中足骨	R	c	
27	第4中足骨	R	c	
27	第5中足骨	R	c	
27	基節骨	?	c	
27	中節骨	?	c	
27	中節骨	?	c	
27	中節骨	?	c	
27	中節骨	?	c	
27	末節骨	?	c	
27	第3足根骨	L	c	
27	?	?	fr.	
27	肋骨	R	p	
27	種子骨	?	c	
27	種子骨	?	c	

第8表 第4号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
4下	仙骨		c	
5下	寛骨	L	p	腸骨
8下	腰椎		c	
8下	腰椎		c	
8下	肋骨	?	fr.	
8	寛骨	R	p・d	腸骨・坐骨
9	大腿骨	R	c	遠位端破損
12下	胸骨		c	
12下	胸椎		c	
12下	尺骨	R	c	遠位端破損
12下	上腕骨	R	c	
12下	肋骨	R	p	骨折痕跡?
13下	下顎骨	L	c	[C (P1) P2 - P4 M1 M2 (M3)] [C - - P3 P4 M1 M2 (M3)]
13下	下顎骨	R	c	下顎枝破損
13下	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
13下	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
13下	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
13下	踵骨	R	c	
13下	踵骨	L	c	
13下	距骨	R	c	
13下	距骨	L	c	
13下	脛骨	L	c	近位端一部破損
13下	第2中足骨	L	c	
13下	第2中足骨	R	c	
13下	第3足根骨	R	c	
13下	第3中手骨	L	c	
13下	第3中足骨	R	c	
13下	第3中足骨	L	c	
13下	第4足根骨	R	c	
13下	第4中足骨	R	c	
13下	第4中手骨	R	c	
13下	第5中手骨	R	c	
13下	大腿骨	L	c	
13下	中心足根骨	R	c	
13下	中心足根骨	L	c	
13下	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
13下	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
13下	腓骨	L	p~s	遠位端破損
13下	腓骨	R	p~s	遠位端破損
13下	末節骨	?	c	
13下	末節骨	?	c	
13	切歯骨・上顎骨	L/R	c	L[- - - C - - P3 P4 M1M2] R[I1 I2 I3 C]
13	側頭骨	L	c	岩様骨残存
13	側頭骨・頰骨	R	c	[P3 P4 M1 M2] 岩様骨・鼓室部残存
	側頭骨・頰骨突起			
	側頭骨・後頭顱			
13	前頭骨	-	c	
14下	胸椎		c	
14下	底舌骨		c	
14下	肋骨	?	fr.	
15下	第2中手骨	L	c	
15下	肋骨	L	p	
16	脛骨	R	c	8下と接合
17	×			資料所在不明
18下	環椎		c	
18下	肩甲骨	R	p	
18下	橈骨	L	c	12/15/18の下
20下	尺骨	L	c	
21下	上腕骨	L	c	
23下	肩甲骨	L	p~s	
23下	橈骨	R	p~s	
27	第4頸椎		c	
27	第5頸椎		c	
27	第6頸椎		c	

第9表 第3・4号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
5下	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
5下	胸骨		c	
5下	底舌骨		c	
5下	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
5下	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
5下	胸骨		c	
5下	底舌骨		c	
5下	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
5下	肋骨	R	p	
6下	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
20下	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
20下	胸骨		fr.	
20下	肋骨	R	p	
21下	胸椎		fr.	
21下	胸椎		fr.	
21下	肩甲骨	R	d	
21下	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
23下	末節骨	?	c	
27下	手根・足根骨	?	fr.	手根骨?
27下	肋骨	R	p	

第10表 第5号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
1	頸椎		c	椎体 位置不明
2	椎骨		fr.	
3	?		fr.	
4				46で取り上げ
5				46で取り上げ
6				43で取り上げ
7	中手・中足骨	?	s	
7	中手・中足骨	?	d	
7	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
7	基節骨	?	d	Ⅲ/Ⅳ
7	種子骨	?	c	
8	胸椎		c	
9	肋骨	?	s	
10	胸椎		c	
10	前頭骨頬骨突起	L	fr.	46と接合
11	?		fr.	
12				資料所在不明
13	踵骨	R	c	
14	第5中足骨	L	p	
14	肋骨	?	fr.	
15				36で取り上げ
16				37で取り上げ
17	上腕骨	L	p	42と接合不能
18	胸椎		c	
18	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
19	中手・中足骨		s~d	
20	上腕骨	R	p	36と接合不能
21	副手根骨	L	c	
22	中手・中足骨	?	d	
22	中手・中足骨	?	d	
23	?	?	fr.	
24	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
25	下顎犬歯	R	c	46と接合
26	上顎犬歯	R	c	
27	?		fr.	
28	肋骨	?	fr.	
29	中手・中足骨	?	d	
30				資料所在不明
31	脛骨	R	s	
32	第4頸椎		c	
33	胸椎		c	
34	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
35	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
36	上腕骨	R	s~d	20と接合不能
37	橈骨	R	c	近位端一部破損
38	軸椎		c	
39	大腿骨	L	p	
40	胸骨			資料破損
41	脛骨	L	s~d	44と接合不能
42	上腕骨	L	s~d	17と接合不能
43	上顎骨	R	fr.	[P3 P4 M1 M2]
44	脛骨	L	p	41と接合不能
45	大腿骨	L	d	
46	下顎骨	L	c	[C P1 - P3 P4 M1 M2 M3] M1・M2間の下顎骨頬側面変形
46	下顎骨	R	c	[C () - P3 P4 M1 M2 M3] P3~M3間の下顎骨頬側面変形
46	上顎骨	L	fr.	[P3 P4 M1 M2]
46	上顎第1前臼歯	R	c	
46	頬骨	L	c	
46	岩臼骨	L	c	
46	岩臼骨	R	c	
46	後頭骨底部		c	
46	下顎第2切歯	L	c	
46	下顎第3切歯	L	c	
46	腰椎		c	
46	腰椎		c	
46	後頭骨		fr.	接合不能
46	前頭骨頬骨突起	L	fr.	10と接合
47	下顎第1切歯	L	c	
47	下顎第2切歯	R	c	
47	大腿骨	R	c	遠位部破損
48	肩甲骨	L	p~s	関節下結節の形状不整?
48	肋骨	?	fr.	
49	寛骨	L	c	腸骨・寛骨臼・坐骨
49	寛骨	R	c	腸骨・寛骨臼・坐骨
一括	基節骨	?	p	Ⅲ/Ⅳ
一括	肋骨	?	fr.	
その他	上顎犬歯	L	c	46と接合
その他	上顎第2切歯	L	c	
その他	前頭骨頬骨突起	R	c	
その他	尺骨		p~s	
その他	橈骨	L	p	
その他	第2中足骨	L	c	
その他	第3中足骨	L	p	
その他	頸椎		c	椎体 位置不明
その他	胸椎		c	
その他	胸椎		c	
その他	胸椎		c	
その他	胸椎		c	
その他	胸骨		c	
その他	胸骨		c	
その他	腰椎		c	

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
その他	腰椎		c	
その他	腰椎		c	
その他	腰椎		c	
その他	腰椎		c	
その他	腰椎		c	
その他	仙骨		c	
その他	尾椎		c	
その他	尾椎		c	
その他	尾椎		c	
その他	尾椎		c	
その他	尾椎		c	
その他	尾椎		c	
その他	尾椎		c	棒状
その他	膝蓋骨	L	c	
その他	膝蓋骨	R	c	
その他	肋骨	L	p	
その他	肋骨	L	p	
その他	肋骨	L	p	
その他	肋骨	R	p	
その他	肋骨	R	p	
その他	肋骨	?	fr.	
その他	副手根骨	R	c	

第11表 第6号埋葬犬出土部位一覧

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
1	寛骨	L	p	腸骨~寛骨臼
2	腰椎		c	
2	腰椎		c	
2	腰椎		c	
2	腰椎		c	棘突起ゆがみ
2	腰椎		fr.	椎体
3	肋骨	?	fr.	
4	橈骨	L	s~d	
5	尺骨	L	p~s	
6	上腕骨	L	s~d	
7	脛骨	R	c	腓骨遠位部付着
8	踵骨	L	c	
9	寛骨	R	p	腸骨
10	第7頸椎		c	
11	大腿骨	R	c	
12	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
12	末節骨	?	c	
13	胸椎		c	
14	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
14	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
14	種子骨	?	c	
14	副手根骨	R	c	
15	第2中足骨	L	c	
15	第3中足骨	L	c	
15	第3中手骨	R	c	
15	第2中手骨	R	c	
15	第5中足骨	L	c	
16	橈骨	R	d	
16	尺骨	R	d	
16	上顎第2後臼歯	R	c	
16	尺側手根骨	R	c	
16	橈側手根骨	R	fr.	
16	第4手根骨	R	c	
16	種子骨	?	c	
16	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
16	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
16	基節骨	?	d	Ⅲ/Ⅳ
16	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
16	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
16	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
16	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
16	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
16	末節骨	?	c	
16	末節骨	?	c	
16	中手・中足骨	?	d	
17	大腿骨	L	c	遠位端破損
18	下顎骨	L	fr.	[M1 M2 (M3)]
19	脛骨	L	c	腓骨遠位部付着
20	下顎骨	R	fr.	[P2 - - M1] P3~の下顎骨頬側面変形
21	頭蓋骨		fr.	頭頂骨・側頭骨・岩臼骨・鼓室部・頭蓋骨底部
21	尾椎		c	
21	尾椎		fr.	
21	末節骨	?	c	
22	肋骨	L	fr.	骨増殖
22	肋骨	L	fr.	
22	肋骨	L	fr.	
22	肋骨	L	fr.	
22	肋骨	L	fr.	
23	胸椎		c	棘突起変形・骨折痕か?
23	胸椎		c	棘突起変形
23	胸椎		c	
24	基節骨	?	c	I
24	基節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
24	基節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
24	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
24	中節骨	?	c	Ⅱ/Ⅴ
24	中節骨	?	c	Ⅲ/Ⅳ
24	胸骨		c	
24	胸骨		c	
24	胸骨		c	

第11表 続き

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
24	胸骨		fr.	
24	種子骨	?	c	
24	副手根骨	L	c	
24	第3手根骨	L	c	
24	尺側手根骨	L	c	
24	肋骨	R	fr.	
24	?		fr.	
25	肋骨	L	fr.	
25	肋骨	R	fr.	
25	肋骨	R	fr.	
25	肋骨	R	fr.	
26	膝蓋骨	L	c	
27	尺骨	R	p~s	
28	橈骨	R	c	遠位端破損
29	上腕骨	R	s~d	
30	肋骨	R	c	
31	肋骨	?	fr.	
32	肋骨	?	fr.	
33	胸椎		c	
34	肋骨	L	c	
35	頸椎		fr.	
35	胸椎		c	
35	肩甲骨	R	fr.	
36	環椎		c	
36	軸椎		c	
36	第3頸椎		c	
37	胸骨		c	
37	胸骨		c	
37	胸椎		c	
37	胸椎		fr.	椎体
38	肋骨	R	fr.	
38	肋骨	R	fr.	
39	肩甲骨	L	p	タヌキ
-	橈骨	L	p	
-	寛骨	R	d	坐骨
-	距骨	L	c	
-	距骨	R	c	
-	踵骨	R	c	
-	尾椎		c	
-	尾椎		c	
-	尾椎		c	
-	尾椎		c	
-	尾椎		c	
-	尾椎		fr.	
-	尾椎		fr.	
-	尾椎		fr.	
-	肋骨	L	fr.	
-	肋骨	R	fr.	
-	胸椎		fr.	椎体
-	胸椎		c	
-	胸椎		fr.	椎体
-	基節骨	?	c	II/V
-	基節骨	?	c	II/V
-	基節骨	?	c	II/V
-	基節骨	?	c	II/V
-	基節骨	?	c	III/IV
-	基節骨	?	c	III/IV
-	中節骨	?	c	II/V
-	末節骨	?	c	III/IV
-	末節骨	?	c	III/IV
-	末節骨	?	c	II/V
-	第5中手骨	R	p	
-	第3中手骨	L	c	
-	第4中手骨	R	c	
-	第4中手骨	L	p~s	
-	第4中手骨	L	c	
-	第2中足骨	R	c	
-	第3中足骨	R	c	近位端破損
-	第4中足骨	R	p	
-	第5中足骨	R	p	
-	中手・中足骨	?	d	
-	中心足根骨	L	c	
-	第2足根骨	L	c	
-	第3足根骨	L	c	
-	第4足根骨	L	c	
-	第3足根骨	R	c	
-	第4足根骨	R	c	
-	腓骨	R	p	
-	前頭骨	L	fr.	前頭骨頰骨突起
-	前頭骨	R	fr.	前頭骨頰骨突起
-	頰骨	L	fr.	頰骨弓
-	下顎第2切歯	L	c	
-	上顎犬歯	L	c	
-	上顎犬歯	R	c	
-	下顎犬歯	L	c	
-	下顎骨	L	fr.	[P2]
-	基節骨	?	c	I
-	仙骨?		fr.	
-	肩甲骨	L	fr.	39のタヌキとは別個体
-	下顎犬歯	R	c	アナグマ
-	上顎骨	R	fr.	[(P1) -]
-	上顎骨	L	fr.	[P3P4(M1)]
-	上顎第1後臼歯	R	c	

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
-	頰骨	R	fr.	頰骨弓
-	上顎第2切歯	R	c	

第12表 第7号埋葬犬出土部位一覽

遺物番号	同定部位	L/R	遺存度	備考
I	基節骨	?	c	III/IV
I	基節骨	?	c	III/IV
I	基節骨	?	c	III/IV
I	基節骨	?	c	III/IV
I	基節骨	?	c	III/IV
I	基節骨	?	c	II/V
I	基節骨	?	c	II/V
I	基節骨	?	c	II/V
I	基節骨	?	c	II/V
I	基節骨	?	c	II/V
I	基節骨	?	c	II/V
I	第1中手骨	L	c	
I	第2中手骨	R	p~s	
I	第2中足骨	R	p	
I	第3中手骨	R	c	
I	第3中足骨	R	c	
I	第3中足骨	L	p~s	
I	第4中手骨	R	c	
I	第4中足骨	R	c	
I	第5中手骨	R	c	
I	中手・中足骨	?	d	
I	中手・中足骨	?	d	
I	中手・中足骨	?	s~d	
I	中手・中足骨	?	s~d	
I	中節骨	?	c	III/IV
I	中節骨	?	c	II/V
I	中節骨	?	c	II/V
I	中節骨	?	c	II/V
I	腓骨	R	p	
I	胸骨	-	c	
I	副手根骨	R	c	
I	副手根骨	L	c	
I	末節骨	?	c	
I	末節骨	?	c	
I	肩甲骨	L	p	
I	橈骨	R	p	
I	胸椎	-	c	
I	胸椎	-	c	
I	胸椎	-	fr.	
I	胸椎	-	fr.	
I	胸椎	-	fr.	
I	胸椎	-	fr.	
I	環椎	-	fr.	
I	軸椎	-	c	
I	第4頸椎	-	c	
I	第5頸椎	-	c	
I	第7頸椎	-	fr.	
7	橈骨	L	s~d	
1層その1	大腿骨	L	s~d	
1層その1	大腿骨	R	d	
1層その2	上顎犬歯	L	c	
1層その2	上顎犬歯	R	c	
1層その2	上顎骨	L	fr.	[P3 P4 M1 M2]
1層その2	上顎第1後臼歯	R	c	
1層その2	上顎第1切歯	L	c	
1層その2	上顎第2切歯	L	c	
1層その2	上顎骨	R	fr.	[(P2)]
1層その2	頭蓋骨	L	fr.	側頭骨・頰骨弓・後頭骨・後頭顆・岩様骨
1層その2	頭蓋骨	R	fr.	側頭骨・後頭骨・後頭顆・岩様骨
1層その2	頰骨	R	c	
その3	胸骨	-	c	
その3	胸椎	-	fr.	
その3	中節骨	?	c	II/V
その3	頭蓋骨	-	c	前頭骨
その3	肋骨	?	fr.	
-	基節骨	?	c	III/IV
-	基節骨	?	c	II/V
-	基節骨	?	c	II/V
-	上腕骨	R	c	近位端破損
-	第1中手骨	R	c	
-	第2中手骨	L	c	
-	第3足根骨	L	c	

第4節 グリッド出土遺物

今回報告するグリッド出土遺物は、貝層を伴わない第2次、第3次、第6次を対象とする。第4次、第5次、第7次は貝層が多くを占めるため、次回に報告する。

1 第2次調査区（第246～255図、図版77～81）

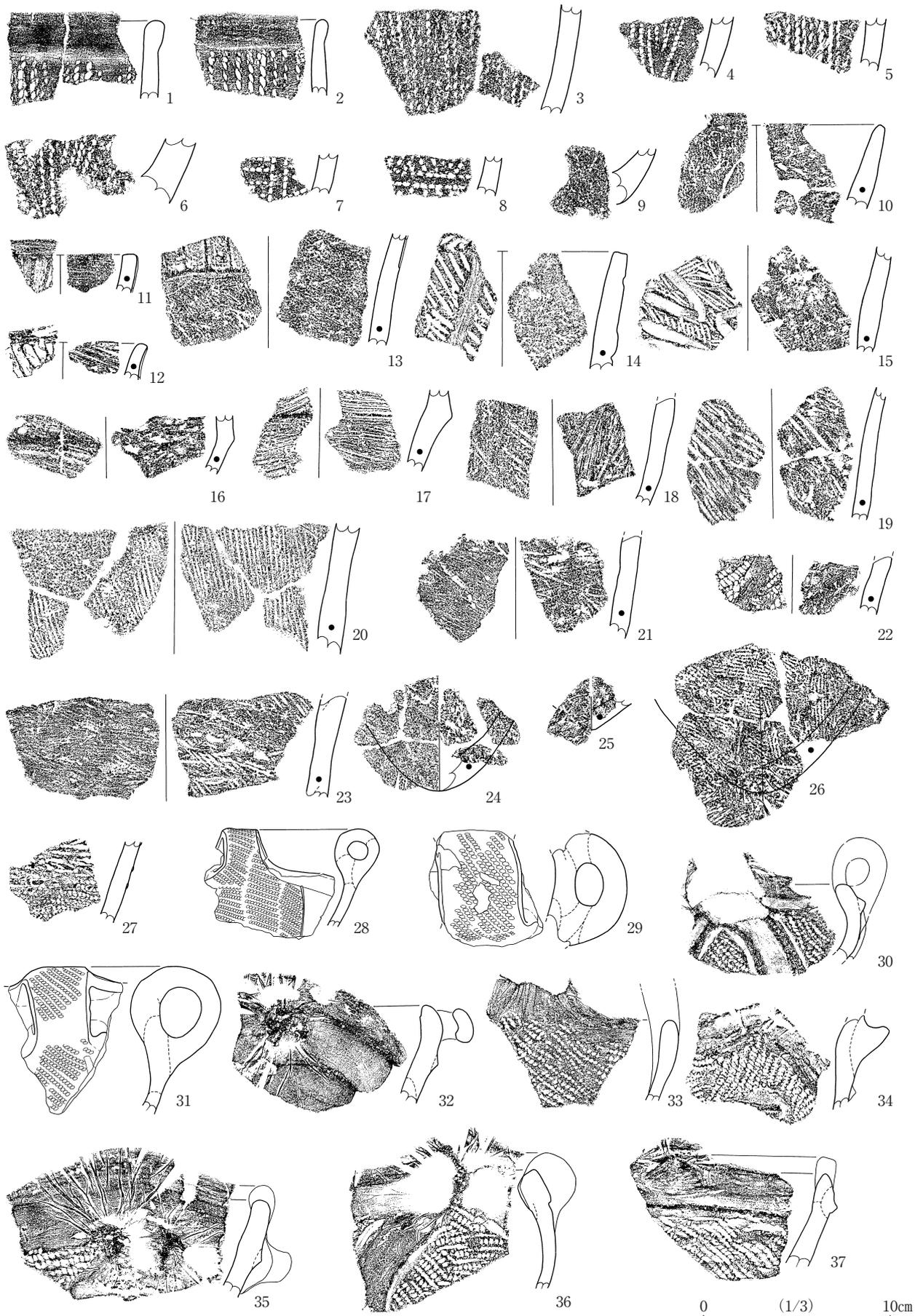
第2次調査区のうち、SS1とSS3は先述したとおり遺構に準じるものと考えて掲載したので、ここではSS5区出土遺物を掲載する。SS5区は馬蹄形貝層の南東端にあたり、縄文時代の遺構は住居跡1軒（60号）、地点貝層3カ所、土坑1基などが検出されているが、主体は弥生時代～古代の遺構となっている。遺物はほとんどグリッド一括で取り上げられているが、SS5-26を中心とした一角には60号住居跡が位置しており、この周辺のグリッドから出土した後期中～後葉の遺物は住居跡に伴うものとして先に掲載した（第88～94図）。ここではそれ以外の遺物を掲載する。

遺物のほとんどはグリッド一括で採り上げられており、原位置の復元は困難である。グリッド別出土遺物重量分布図を第351～355図に示した。

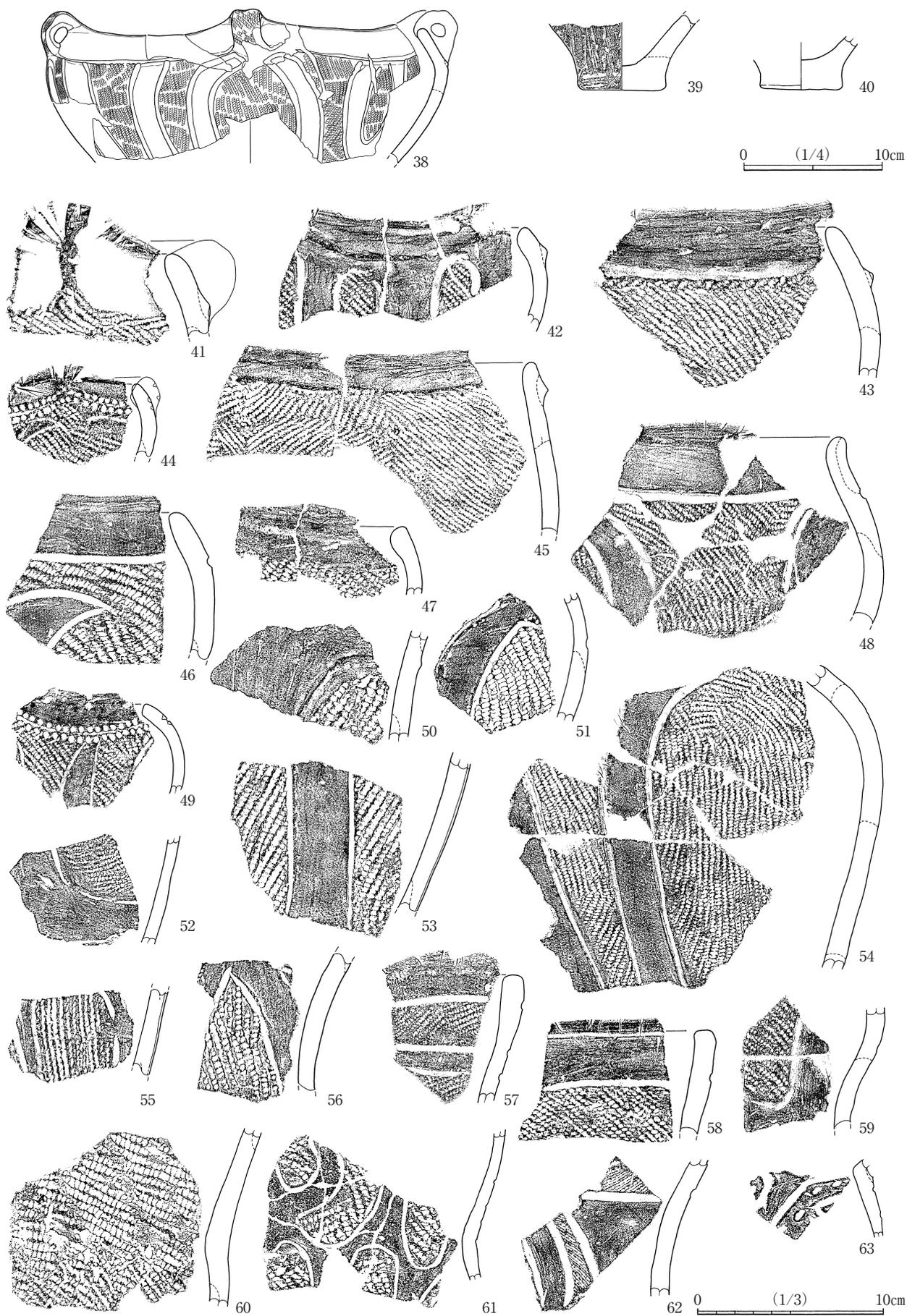
1～27は西広貝塚の主体となる遺構群に先行する時期の遺物である。1～9は撚糸文期に属する。いずれも末葉にあたる花輪台式及びそれに平行する時期を中心とする。10～26は条痕文期に属する。11～15は野島式である。他は確定できないが後葉を中心としたものであろう。23は外面に縄文、内面に条痕が施されるもので、条痕文期でも末葉に位置づけられる。27は縄文地紋にキザミのある浮線文が貼り付けられるもので、諸磯b式に相当する。

28からは西広貝塚の主体となる遺構群と同時期の遺物である。28～63は中期末～後期初頭に属するものである。30・33は把手が欠損しているもの。39・40は形状や焼成などからこの時期とみなした。64～118は堀之内式を中心としたものである。64は器高40cmを越える大形の深鉢であるが、グリッド一括扱いであった。67のうち上半分はSS1-14と注記されていたが、現場の図面によるとSS1-14から遺物はほとんど出土せず、下半分はSS5-14と注記されていたため、誤注記であると判断したものである。84は口縁正面側に小突起があったと考えられる。85～118は破片資料で、堀之内1式でも新しい段階から堀之内2式が主体となる。119～166は後期中葉から後葉に属する。124は三角形の波状口縁の波頂部である。125は弧線文の深鉢口縁であるが、口唇上から内側にかけて瘤が貼り付けられている。129はすでに述べたとおり、60号住居跡と同じグリッドから出土したものである。133は概報に掲載された遺物で、SS5-05グリッド出土であるためここに掲載したが、60号住居跡出土資料と強い関連をもつ遺物である。134はSS1区出土資料と接合した。152は口唇直下の紐線が剥落したものの。164は箱形の浅鉢で、角の部分が肥厚し縄文が施文される。167～184は晩期の遺物である。SS5区では晩期の遺物は少なかった。184は折り返し口縁をもつ無文の深鉢で、晩期後葉に位置づけられる。

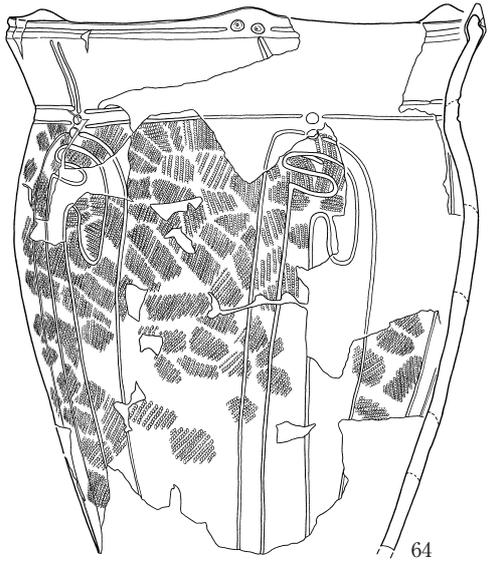
第253図は土製品である。185は山形土偶の頭部。顔面に二本の隆帯を貼付け、沈線で眼と鼻をつくり出す。耳部分は切込みが入る。各部の表現は雑である。胴との接続部分の剥離面が平坦である。186は小形の土偶である。頭部までの推定復元長は6cmほどであるが、作りは丁寧である。下腹部にイチジク状の貼付けを施す妊娠表現がみられる。187は脚部。平行沈線内に刺突を施す。晩期。188は脚部。189は焼成粘土塊であり、正面と思われる面には刺突を5カ所施す。一見無造作な作りにみえるが、それぞれの刺突は2回ずつ施されることから、顔面を意識して造作しているようにもみてとれる。裏面中央には比較的きれいな回転穿孔を施す。



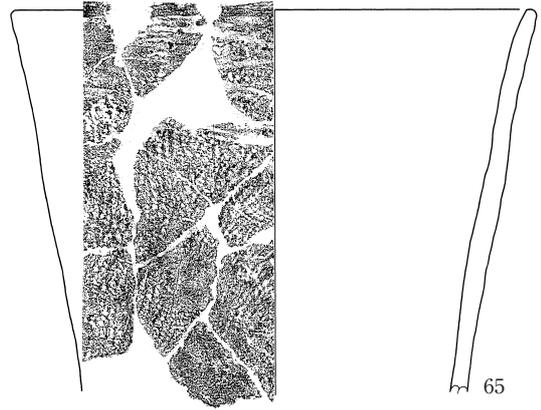
第246図 SS5区グリッド出土土器 (1)



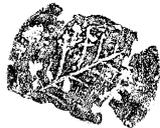
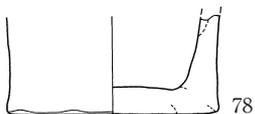
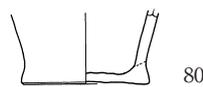
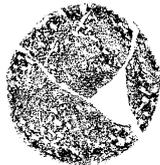
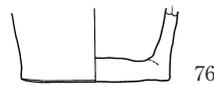
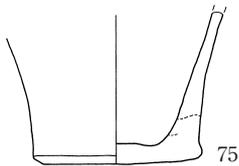
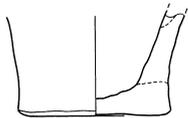
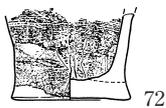
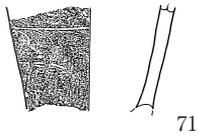
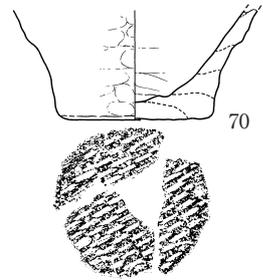
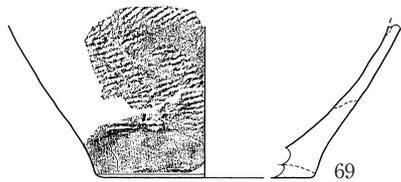
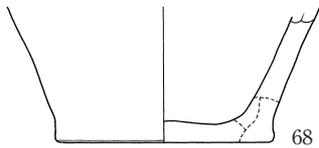
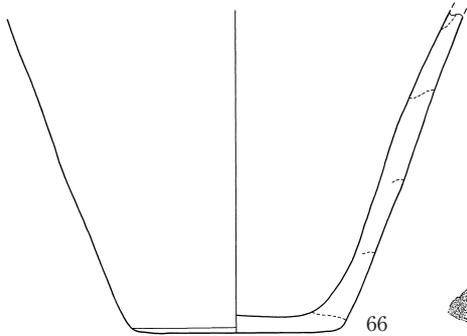
第247図 SS5区グリッド出土土器 (2)



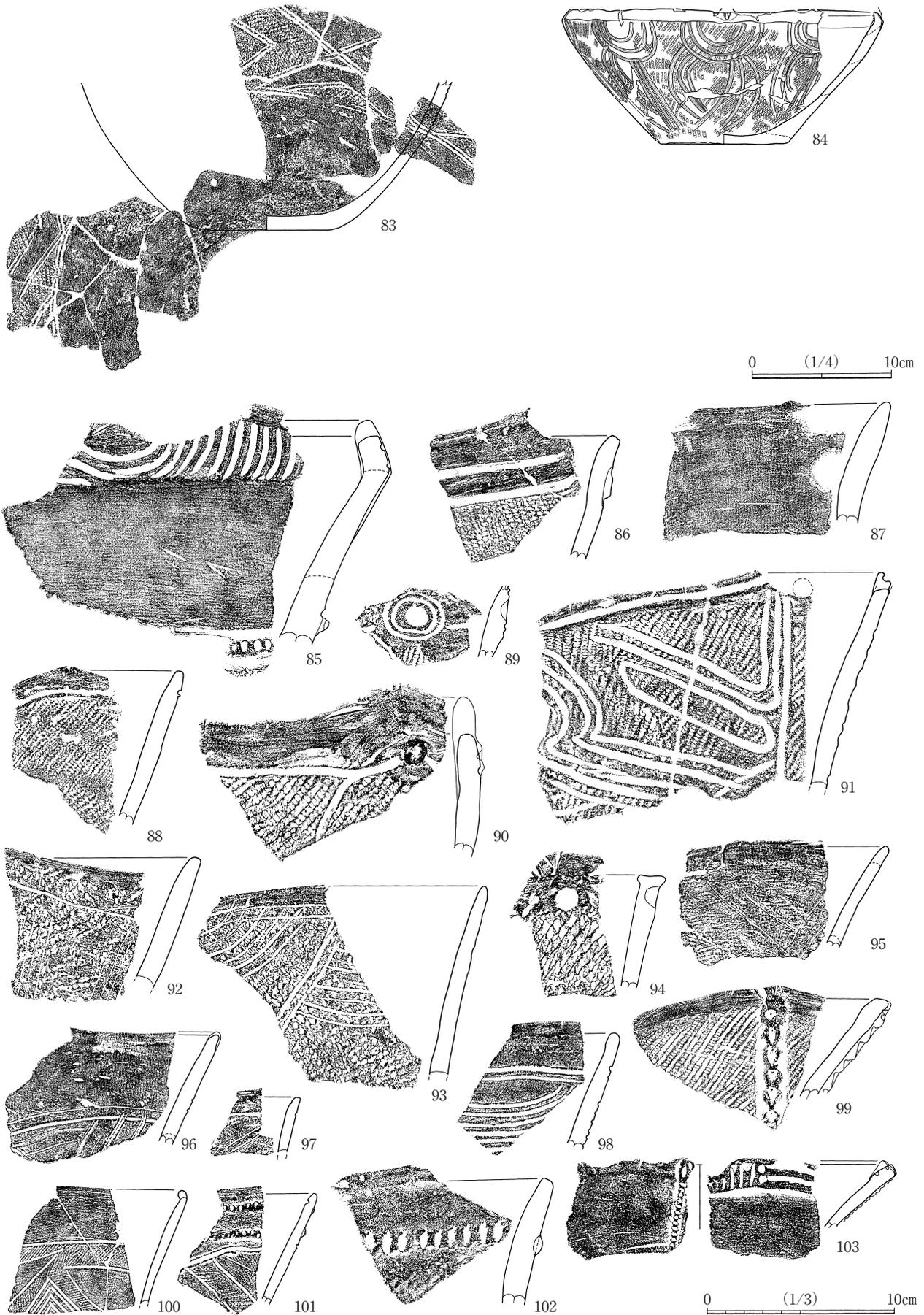
0 (1/6) 10cm



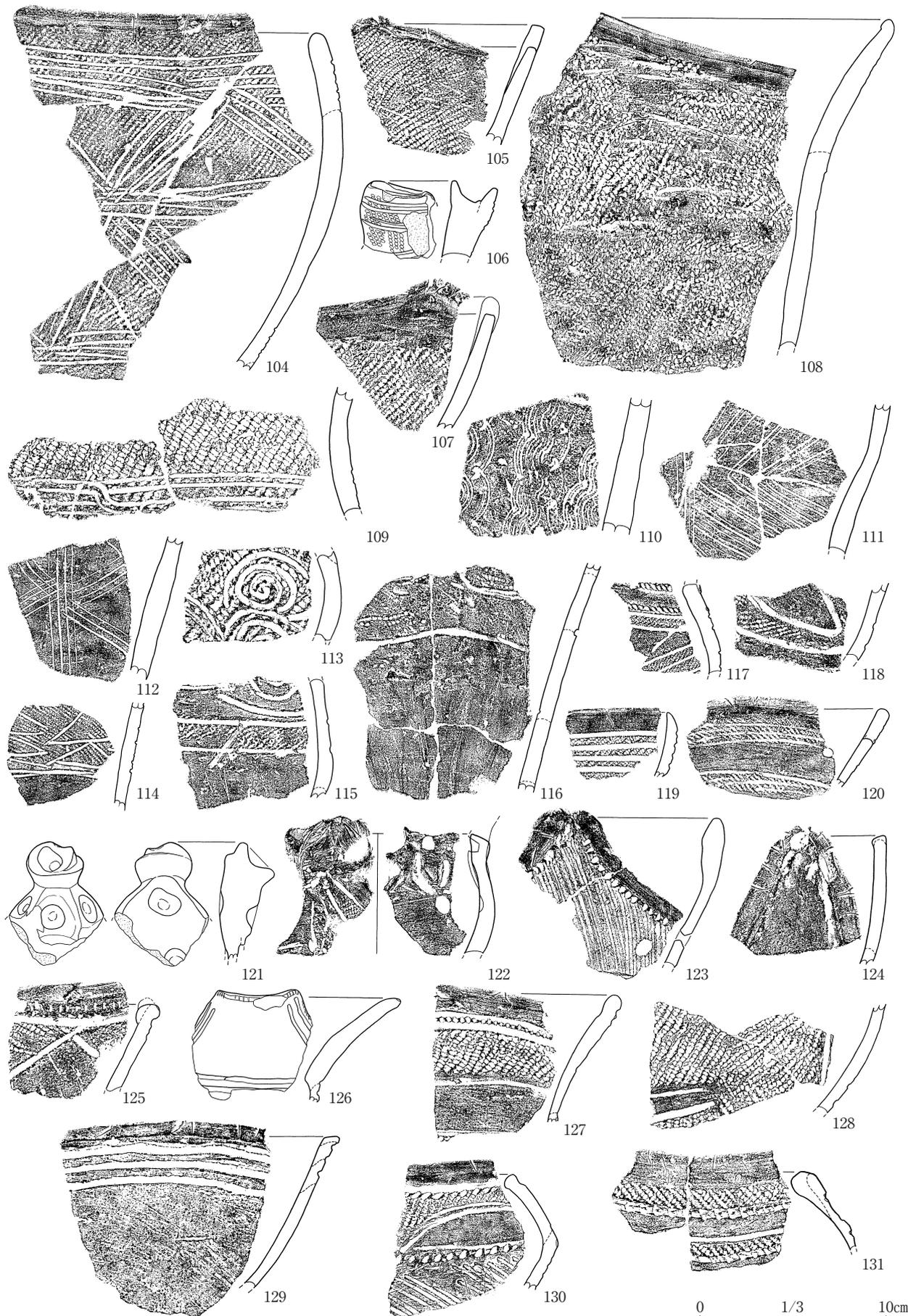
0 (1/4) 10cm



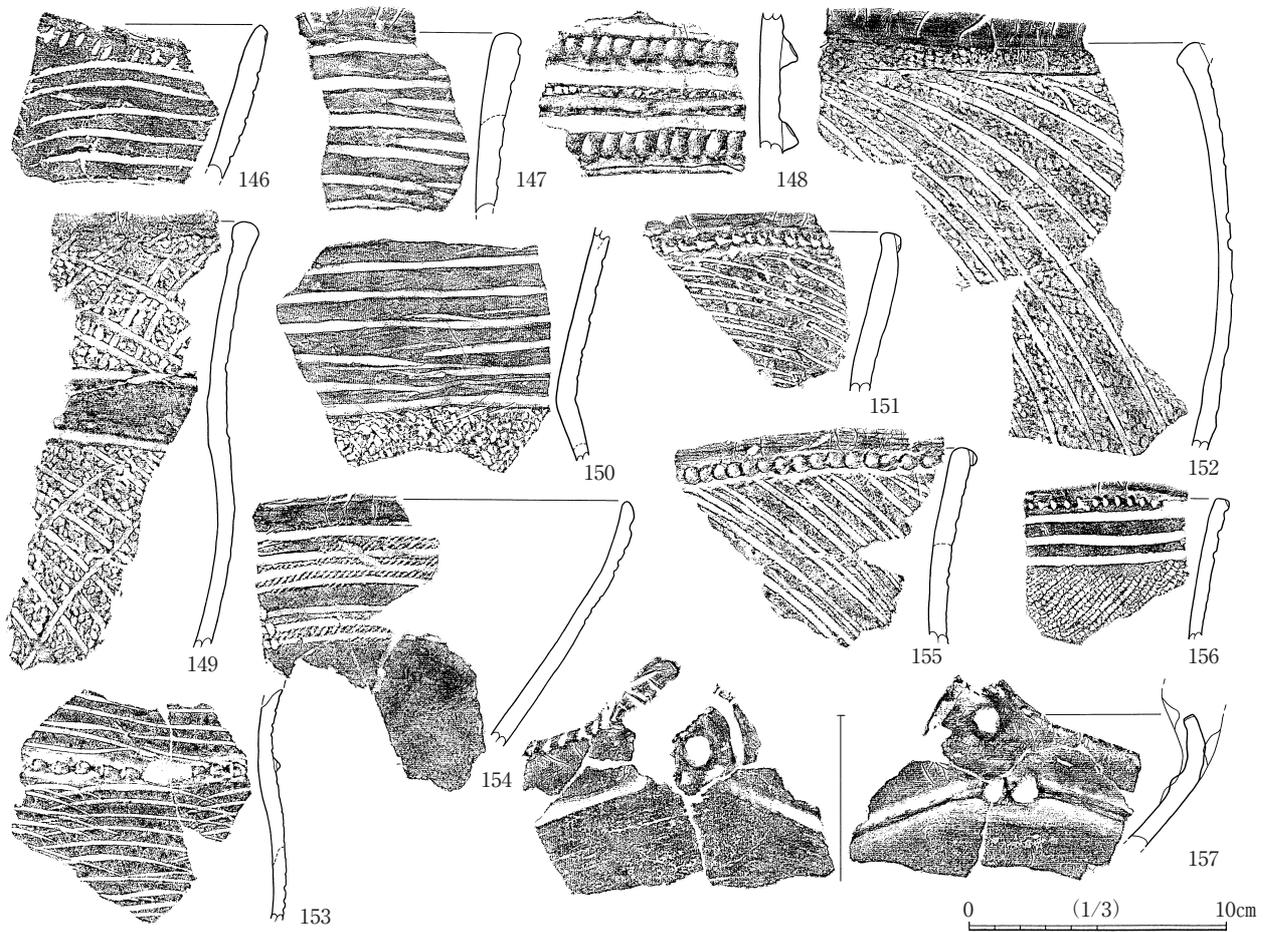
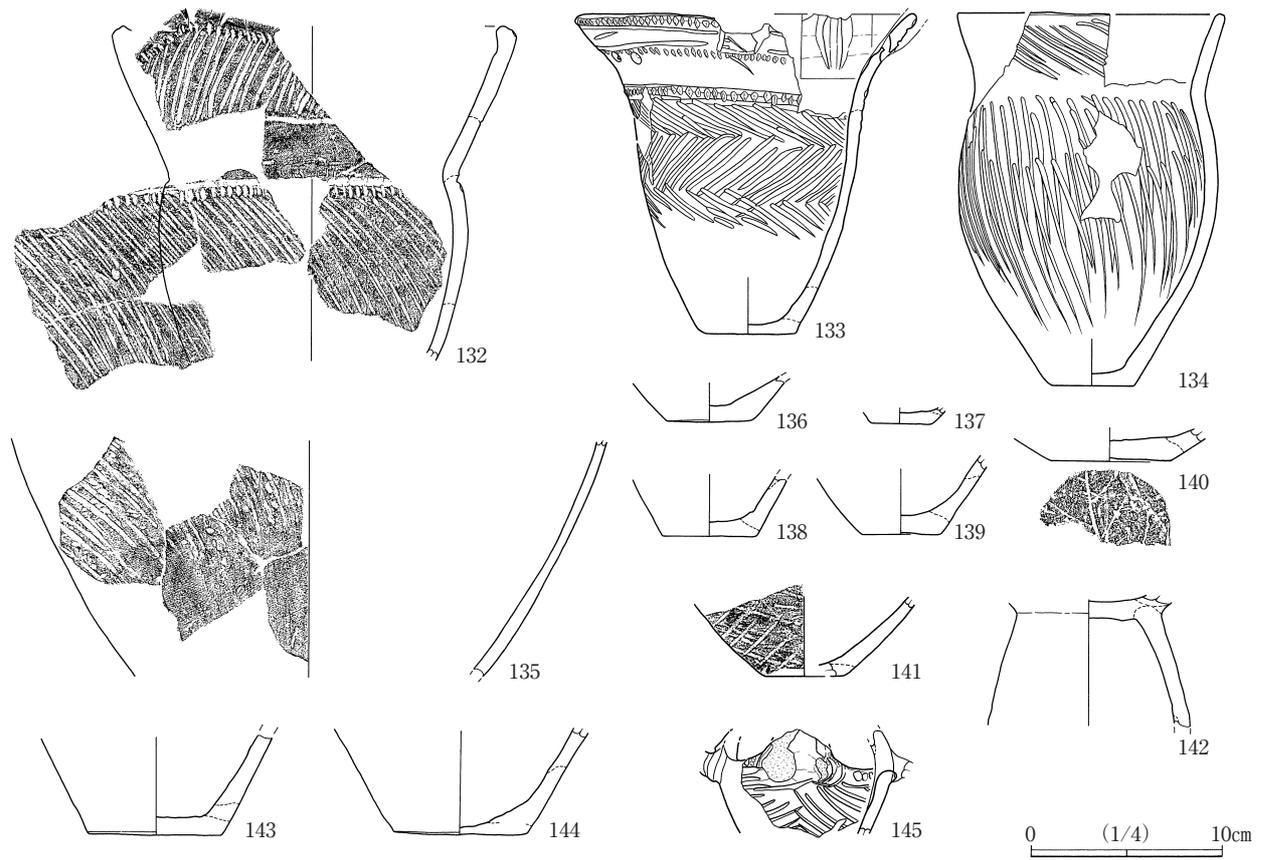
第248図 SS5区グリッド出土土器 (3)



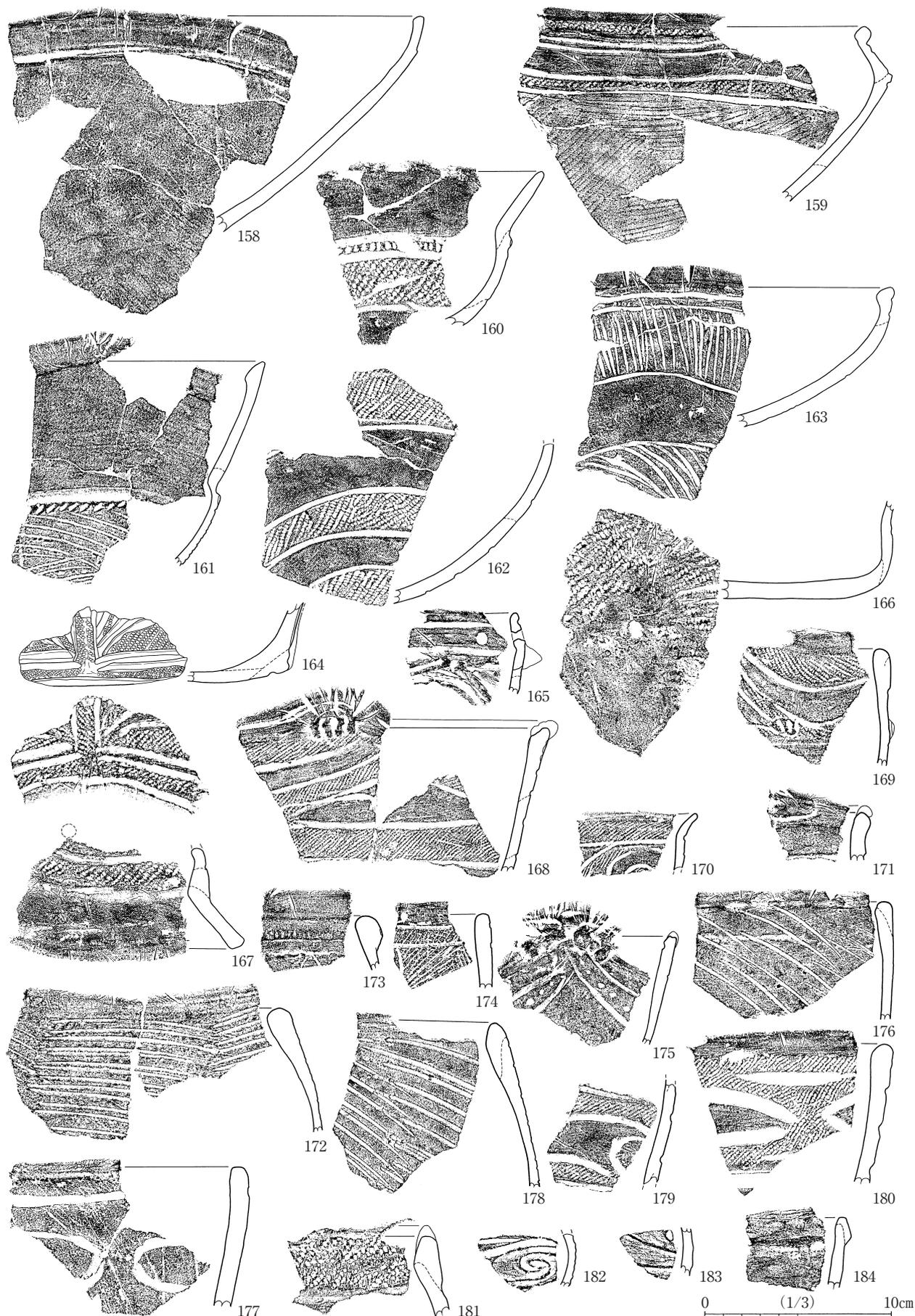
第249図 SS5区グリッド出土土器 (4)



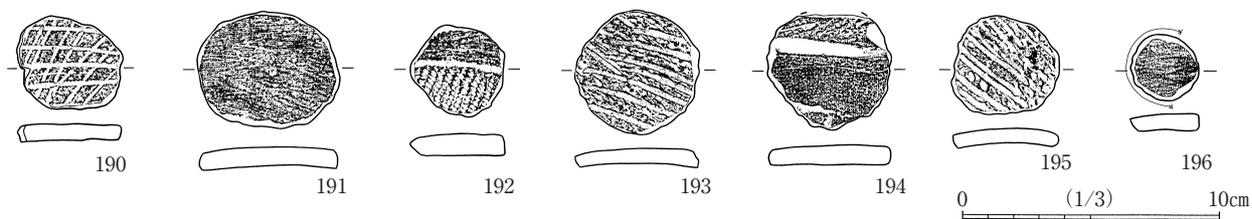
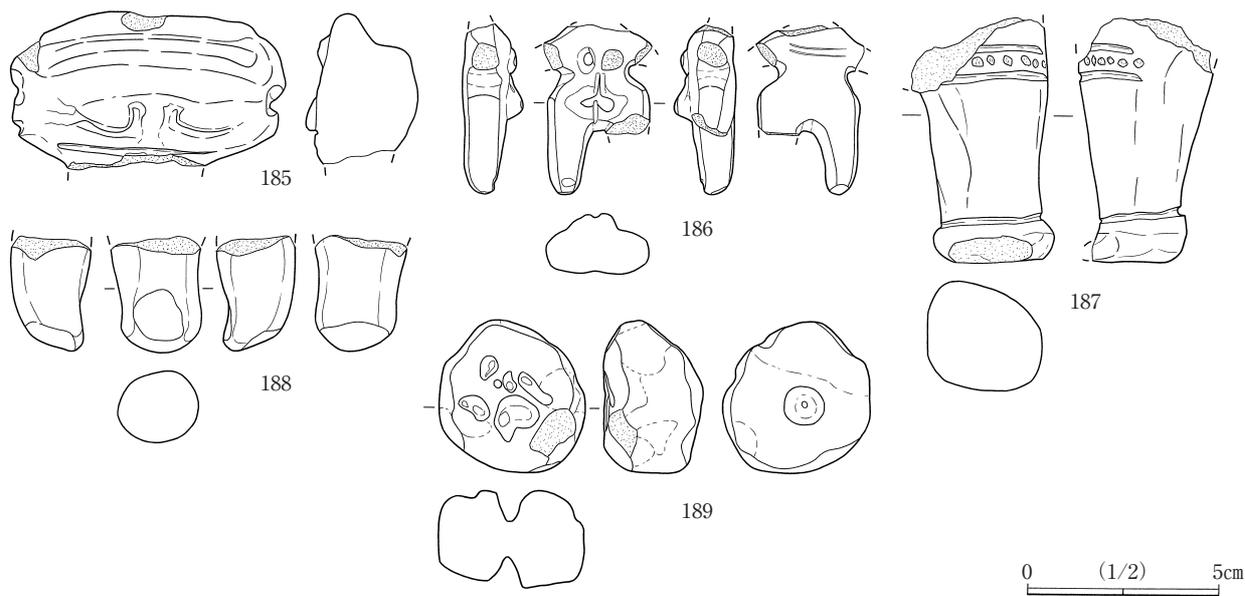
第250図 SS5区グリッド出土土器 (5)



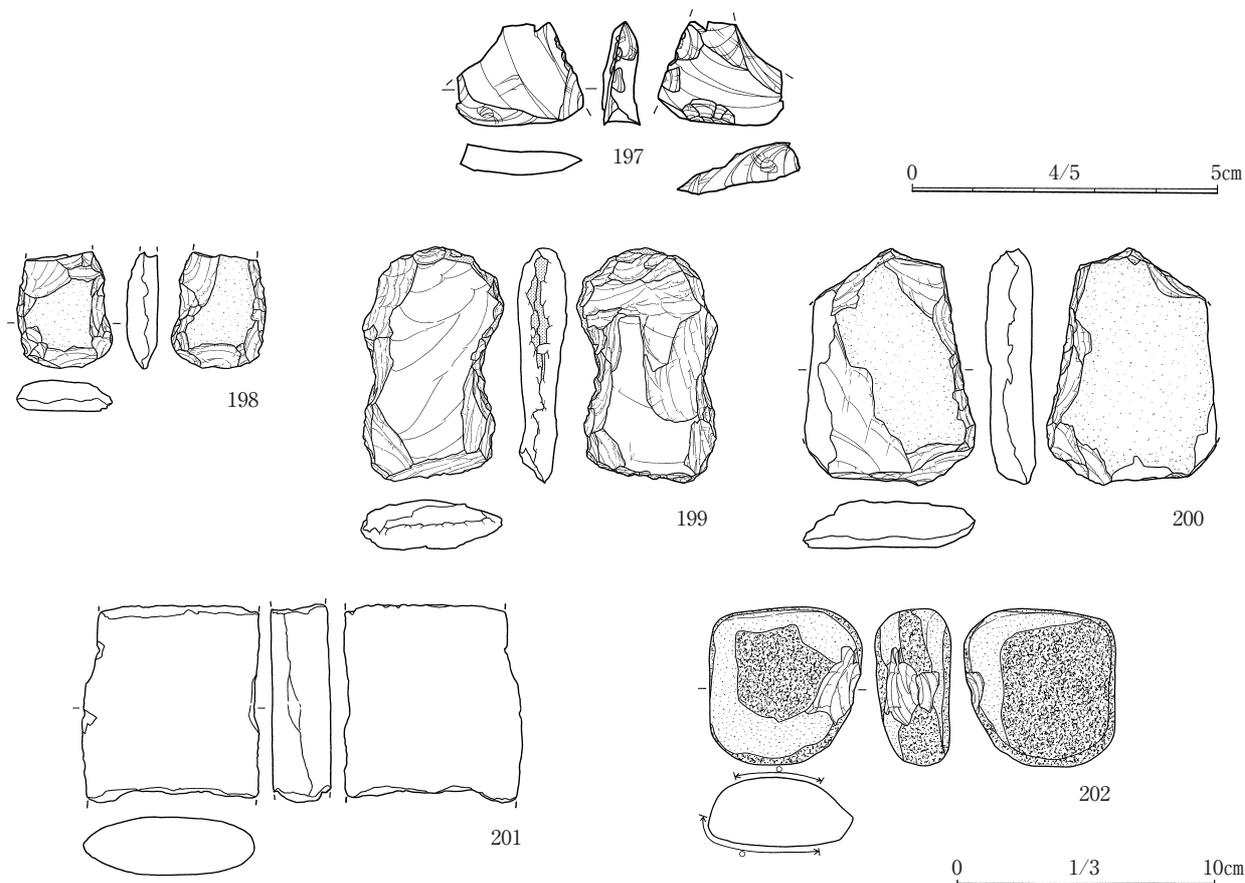
第251図 SS5区グリッド出土土器 (6)



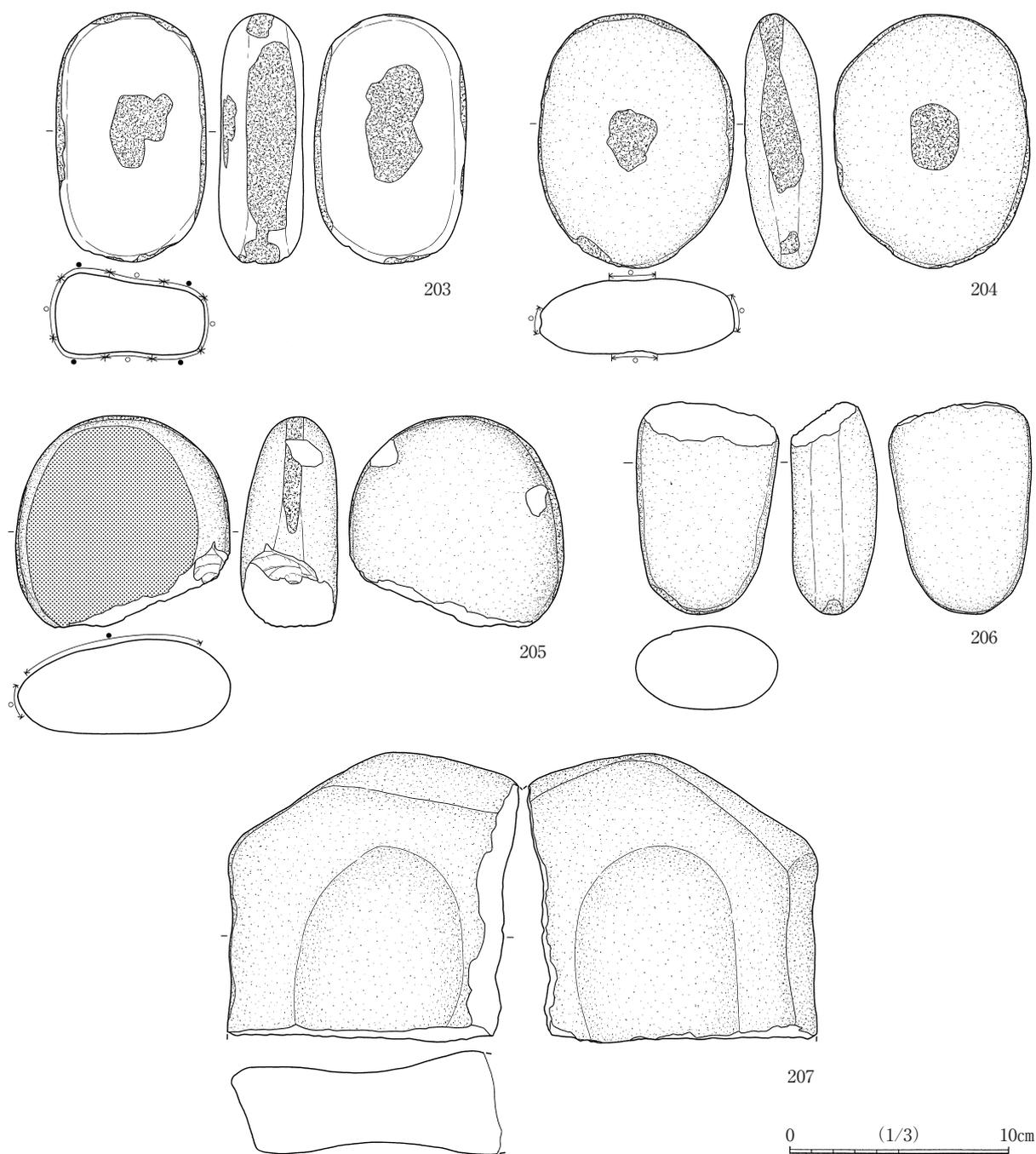
第252図 SS5区グリッド出土土器 (7)



第253図 SS5区グリッド出土土製品



第254図 SS5区グリッド出土石器 (1)

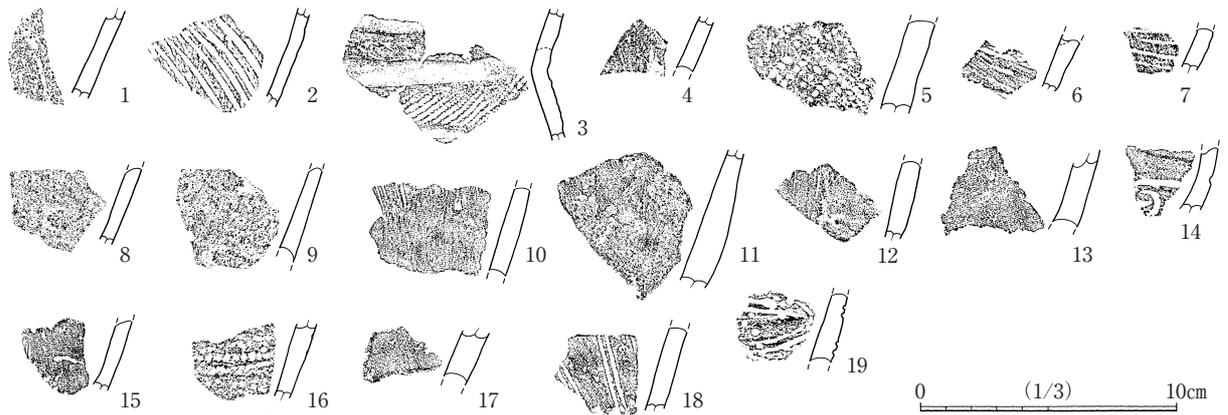


第255図 SS5区グリッド出土石器 (2)

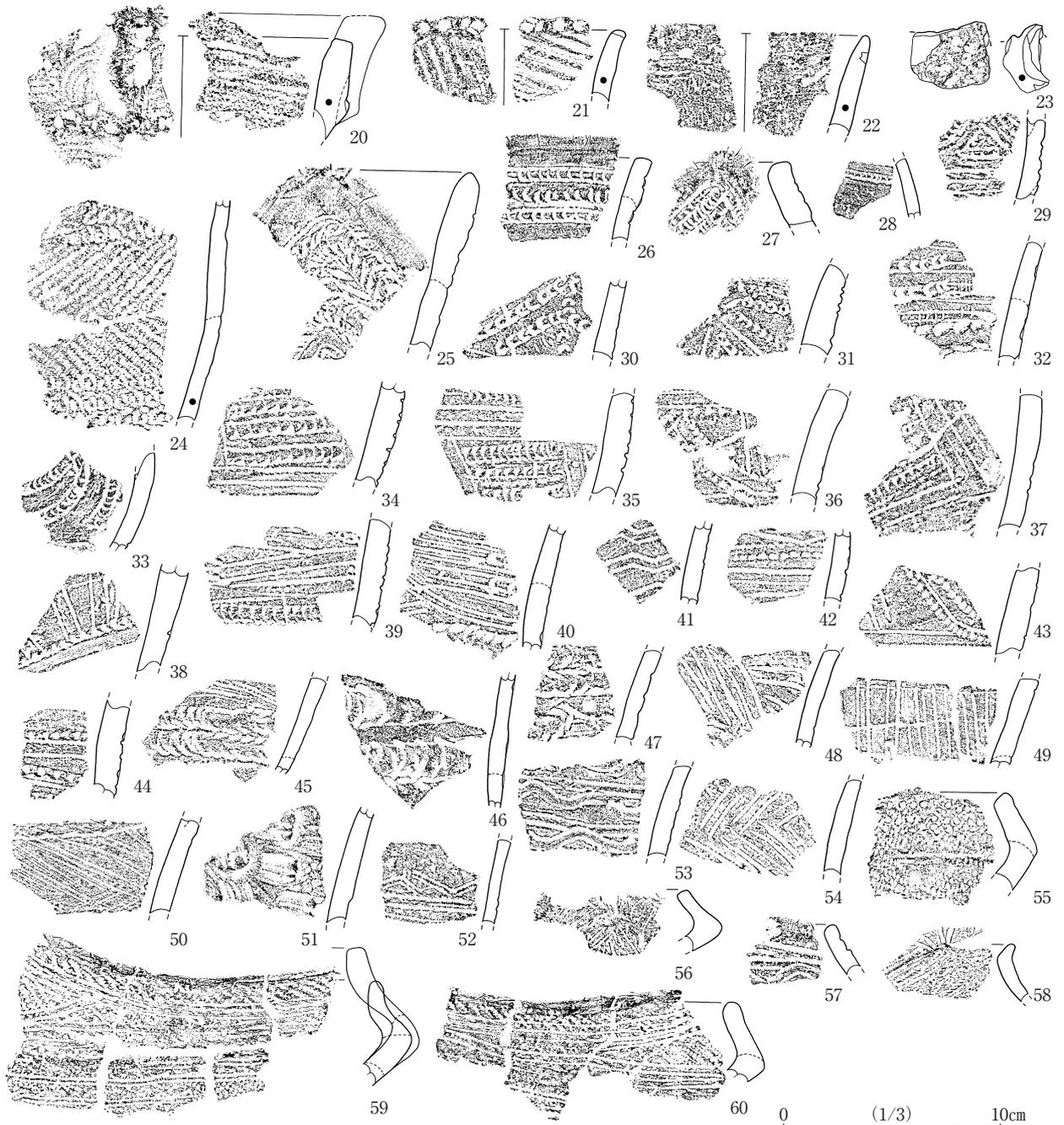
石器は少なかった。198～200は打製石斧である。201は断面紡錘形を呈するもので、石剣の破片とも砥石とも考えられる。207は表裏それぞれに浅いくぼみが残るもので、石皿と考えられる。

2 第3次調査区 (第256～292図、図版81～95)

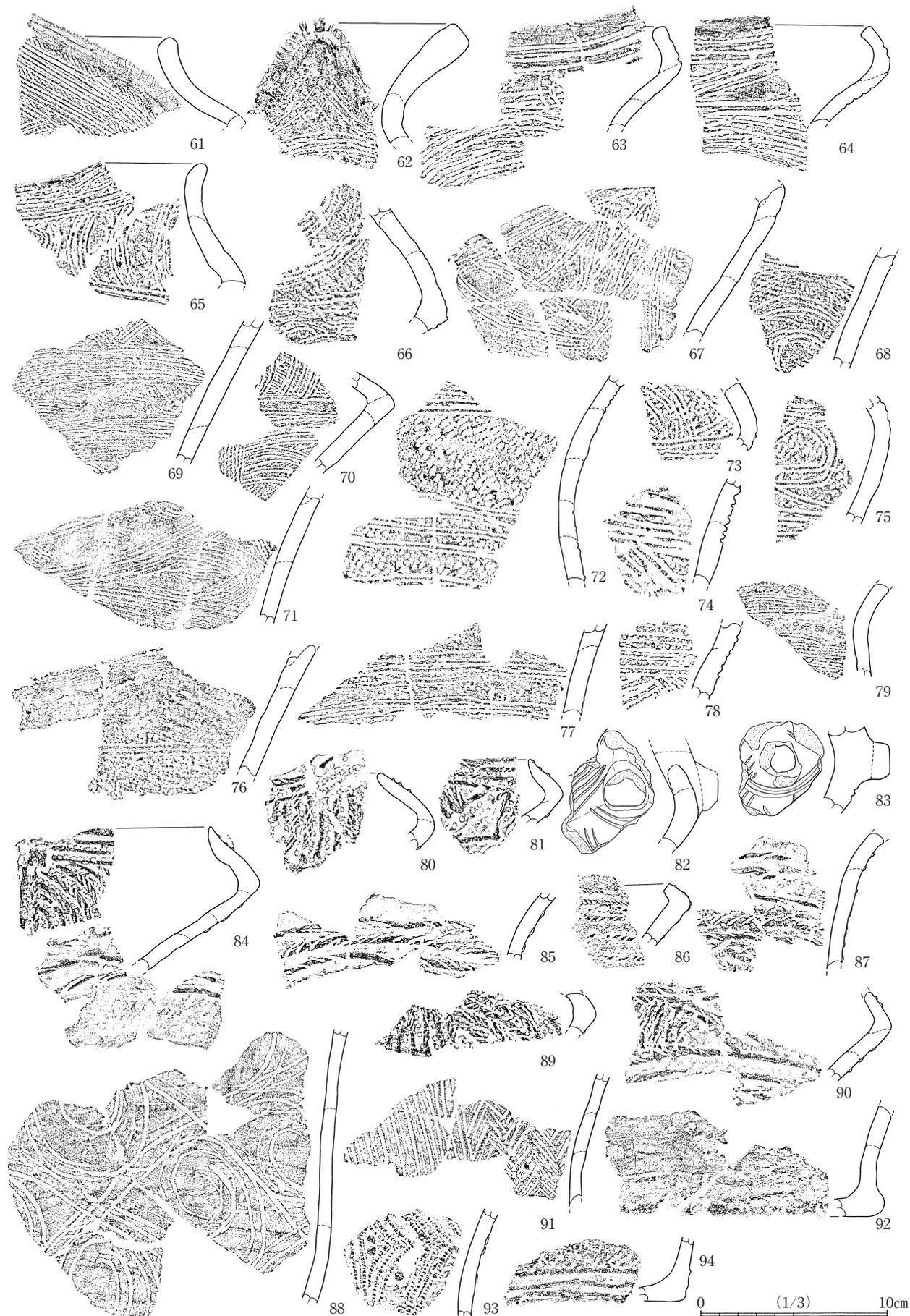
第3次調査区は、第4章で述べるが中・近世の建物跡が主体となっている。縄文時代の遺構は陥穴が4基検出された程度で極めて希薄といわざるを得ないが、遺物はテンバコ約100箱と、かなり多量であった。遺物の状態も全体に大形であまりローリングを受けておらず、かなりプライマリーな状況を保っていたと思われる。確認面上では認識できない遺構の存在が想定されるが、現状では復元するのは難しい。



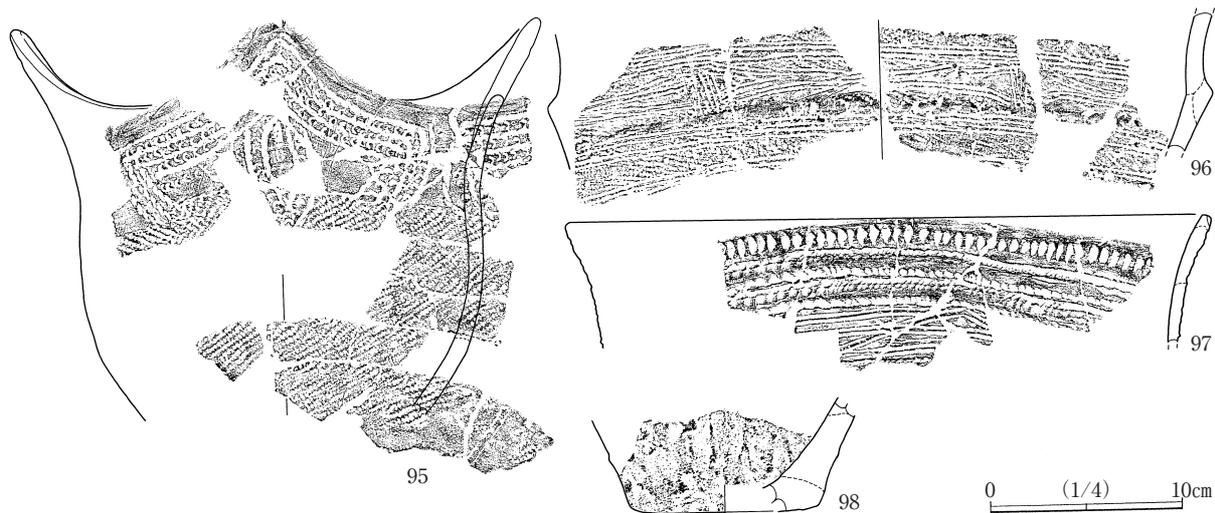
第256図 3次調査区ピット出土土器



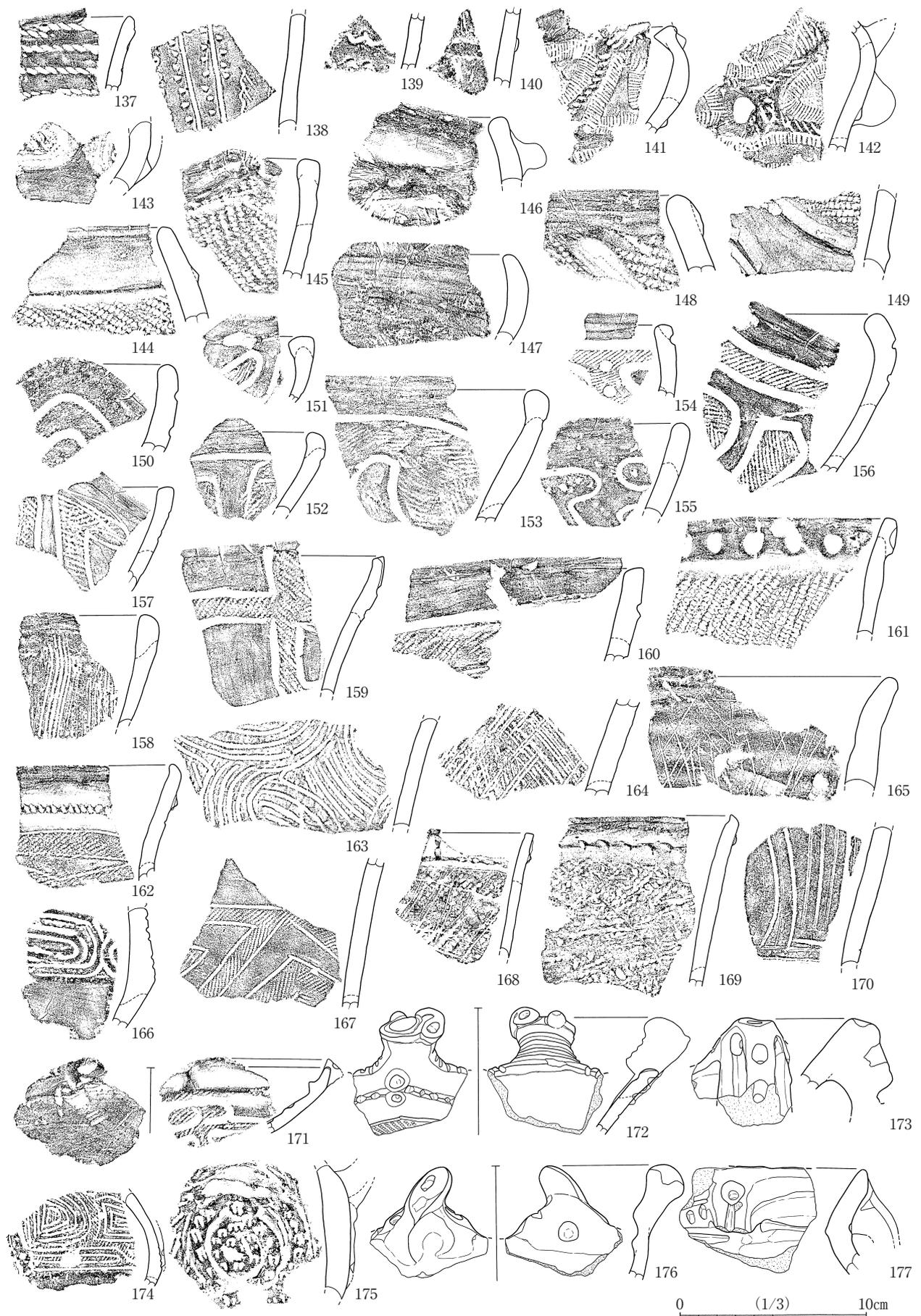
第257図 3次調査区グリッド出土土器 (1)



第258図 3次調査区グリッド出土土器(2)



第259図 3次調査区グリッド出土土器(3)



第260図 3次調査区グリッド出土土器(4)